

八幡達は異世界にて奮
闘する。

もよぶ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

グリムガルのな世界に強制召喚された八幡達を思いついたので書いてみます。

似て非なる世界なのでご容赦を。

時期は13巻終了後のプロムが終了した後小町達が入学したあたりを想定しています。

八幡は結局答え出せず、ずるずると関係を引きずっている状態です。

異世界ですが八幡が無双やらHACHIMAN状態にはならない展開です。

どっちかって言うとZAIMOKUZAです。

残酷な描写はありますが八幡達は誰も死にません。

大まかなストーリーは異世界に行つて戻つてくるまでの話になります。

アンチヘイトは無い方向で書きました。特定のキャラを叩くようなことはしていません。

目次

プロローグ

1

第一話

5

第二話

19

第三話

25

第四話

36

第五話

45

第六話

52

第七話

59

第八話

68

第九話

73

第十話

78

第十一話

84

第十二話

93

第十三話

104

第十四話

119

第十五話

130

第十六話

140

第十七話

146

第十八話

156

第十九話

161

第二十話

169

第二十一話

175

第二十二話

182

第二十三話

190

第二十四話

204

第三十七話	第三十六話	第三十五話	第三十四話	第三十三話	第三十二話	第三十一話	第三十話	第二十九話	第二十八話	第二十七話	第二十六話	第二十五話
324	313	301	294	284	277	268	262	255	243	233	219	212

第五十話	第四十九話	第四十八話	第四十七話	第四十六話	第四十五話	第四十四話	第四十三話	第四十二話	第四十一話	第四十話	第三十九話	第三十八話
460	447	440	430	422	412	401	390	377	368	361	353	334

第五十一話	465
第五十二話	472
第五十三話	479
第五十四話	493
第五十五話	503
第五十六話	512
第五十七話	516
第五十八話	523
第五十九話	530
第六十話（最終話）	537

プロローグ

「いやあーヒツギイー!!! 気持ち悪いよー! もういやあー!!!」

由比ヶ浜が抱きついてきて泣きじやくる

「おいー由比ヶ浜抱きつくなー!」

「もういやあ．．．パパあママあ．．．グスツ」

この状況、普段ならいい匂いだとか当たってるだの柔らかいだの思ってしまったところだが今現在そんなことを思っている暇はない。

なにしろ目の前には．．．

「ヒギー!!!」

突如目の前のオーガの腹を食い破って出現したその生物は、大人の背丈ほどある醜悪な形をした芋虫のようなモンスターだった。

それがこちらを襲おうと威嚇しているのだ。

本当に見てるだけで気持ちが悪い、由比ヶ浜が悲鳴をあげるのも納得だ。

因みに地獄先生ぬーべー14巻の寄生虫の回にでてくるとそっくりな形をしている。

「由比ヶ浜さん！比企谷くん下がりなさい！」

先程まで背後にいたゴブリンの首を跳ねていた雪ノ下が剣を構え前に出てこようにしていた。

「雪ノ下！お前が下がれ！無理をするな！肩で息しているじゃないか！」

「そうです！私に任せてください！」

背後から矢が比企谷の頬をかすり、モンスターの方角に飛んでいく。

「一色！前に人がいるときは弓を使うなどあれほど言っただろ！顔をかすつたぞ！」

「うう、先輩・・・ごめんなさい」

「八幡！大丈夫？今回復するからね！ヒール！」

戸塚が駆け寄ってきて回復魔法を唱えるが

「戸塚、うれしがかすり傷程度で魔法を使わなくていいんだ・・・」

「八幡が怪我してるなんて心配だから」

「気持ちだけでいいんだ、とりあえず目の前の奴を片付けなさい」と

「又ツツツ！八幡！我を忘れていまいか！このような芋虫モドキなぞこの剣豪將軍にかかればチョロいものよ！くらえ！ブラッディナイトメアスラッシュアアアアア」

大剣を振りかざした材木座がモンスターに飛びかかる

「おい！材木座マテ！ああクソ！雪ノ下！由比ヶ浜！伏せろ！」

そう叫んだが遅かった。

ベチャア!!!

材木座の渾身の一撃を食らったモンスターは破裂し紫色の体液と内蔵が回りに飛び散る

「うわああああ!、ビツギイイイ!いやああああ!」

モンスターの近くにいた比企谷と由比ヶ浜はもろにそれらを被ってしまった為由比ヶ浜は以上に泣き叫ぶ。

ここは日本ではない、むしろ地球ではないし違う次元なのかもしれない、異形のモンスターが徘徊するいわゆる異世界というところだ。

由比ヶ浜が泣き叫ぶのも当然だ、一ヶ月前までただの高校生、訓練を受けたとはいえモンスター退治を始めてから一週間ぐらいしかたっていない、突然見たこともない異形の怪物と戦えと言われてすぐに順応できる現代人がいるだろうか?

居るはず無い・・・と置いていたのだ、つい最近までは。

自分ほどではないにしろモンスターの体液を被った雪ノ下は

「汚れてしまったわ、臭いがかかないといいのだけれど」

と剣を振って血糊を飛ばすその様はいっぱしの剣士といった感じだ、それに先ほど数匹いたゴブリンの首を一刀のもとに跳ねていたのだ。

あんたお嬢様じゃなかったっけ？

「大きい芋虫だね、材木座くんは怪我してない？」

そういつつ杖でモンスタ―だったものをつつく戸塚もなんだかずれてる感じだし

「結衣先輩ばかりずるいです！」

一色に至っては何をいつているかわからず論外

「さしものモンスタ―も我の一撃には耐えられなかったと見えるな！さてこのモンスタ―の中に確か・・・」

と嬉々として芋虫の内蔵に手を突っ込む材木座に至っては日本にいたときよりもすごく生き生きしている、元々この世界の住人だったの？

「由比ヶ浜、終わったぞ」

由比ヶ浜は抱きついたまま泣いているようだ、これが正しい反応というものだろう、モンスタ―の内蔵から何かを取り出している材木座、それを見て喜んでる雪ノ下や戸塚を見るとどうやら今回の依頼は達成したようだ。

「先輩！結衣先輩！今回のクエスト終了ですよ！さっさと帰りましょう！」

一色はそういうテキパキと撤収の準備を始める。

「なんでこんなことになっちゃったんだろ・・・」

まだ震えている由比ヶ浜の頭を撫でながら比企谷はこれまでのことを思い出す。

第一話

ここ最近日本のあちこちで家電や機械類の盗難事件が相次いで起きていた。

侵入の形跡が無く、物だけが忽然と姿を消してしまふ為、警察も犯人につながる手がかりが得られずいまだ解決の糸口すら見つからない状態であった

また同時にその家電や機械類の近くにいた人まで消えるということもちらほら起き始めており、有益な情報には懸賞金までかけられる事態になっていた。

そんなある日の総武高校奉仕部、今日は雪ノ下陽乃と城廻めぐりが訪れていた。

二人は奉仕部の面々とひとしきり会話？を楽しんでその場を後にする。

「じゃあ私たちはこれで、これからはるさんと遊びに行くんだよ、比企谷くんもどうかかな？」

「遠慮しときます」

「あーめぐり振られちゃったね、んじやあ比企谷くん、雪乃ちゃんをおねがいね、あんまり甘やかさないようね」

「姉さん！」

「わーこわーい、んじやあねー」

陽乃とめぐりが出て行く、まるで台風一過のようだった。

「ふー、あの人の相手は疲れるな」

「ごめんなさい、姉がまたあなた達に迷惑をかけてしまつて」

「気にしなくていいよゆきのん、あたしは楽しかつたし！」

「そう言つてもらえると助かるわ」

「ゆきのーん」

「由比ヶ浜さん、近いわ」

また由比ヶ浜が雪ノ下の抱きつくているな、百合百合も大概にしてほしいですねと思ふ比企谷。

何気に窓辺に立つ、ちょうど陽乃とめぐりが校舎から出てきて陽乃の車に乗つているところだった。

「あの人の間に免許を・・・しかもあの車は外車か？」

「ええ、しかも新車よ？今度あなたを助手席に乗せてドライブしたいと言つていたわ、良かったわね」

「げ、勘弁してくれよ、あの人と一緒にいたら車酔いどころの騒ぎじゃなくなるぞ」

窓から既に陽乃とめぐりが乗つた車をぼーっとみていると突然車の周りの空間がゆがんで見える

「ん？なんだあれ？おい雪ノ下、お前んところの車変な装備でもつけてるのか？」

「何を言い出したかと思えば、ただの車よ、外車だからって僻みは良くないわ」

そうはいいつつ一緒に窓の外を覗く雪ノ下と由比ヶ浜

「あれ？なんかゆがんでない？ヒツキーあれなに？」

「ちよつとヤバい感じがするな、俺行ってくる」

そういうと比企谷は部室を飛び出したが、車の前まで来たとき一瞬目の前がまぶしく光ったかと思うと目の前で車は乗っている人ごと忽然と姿を消してしまったのだった。

一ヶ月後、未だ消えてしまった陽乃とめぐりは見つかつてはいなかった。

「なあ雪ノ下、いつまでも落ち込んでいても仕方ないだろ」

「……」

「部長がこんな調子じゃ依頼者逃げちまうぞ？」

「……」

「あーもう！あんなことがあったからと言ってお前の姉さんが死んだりしたわけじゃないだろ！あんな変な消え方したんだからきつと異世界とかどつかの国にワープでもしたんだって！あの人ならどこにいても天下取ってそのうち戻ってくるだろ、だから気にするなよ」

「・・・姉さんは私の家族なのよ・・・それが目の前で突然消えるなんて・・・」

「だから・・・わかった！雪ノ下！確か部室の備品買うとか言つてたよな？今日行くぞ！」
「え？」

「だから気分転換だつつうの！いくぞ！」

「・・・そうね、比企谷くんのお友達をそろそろ買い足さないと比企谷くんがかわいそうですものね」

　　ようやく顔を上げ微笑む雪ノ下

「ようやく調子が戻ったようので結構だが、お前の所の一族はいちいち人を貶さないといけない病気にでもかかっているの？」

　　そう言い出ようとする比企谷をそれまで黙つて聞いてた由比ヶ浜が呼び止める。

「あ、ヒツキー・・・今日パセラにハニトー・・・」

「あれ？それって今日だっけ？まあ雪ノ下がこんな調子だからな、一緒に行くか？」

「・・・んーんいいや！ゆきのんを元気づけてあげて！」

「まかせろ、んじやあ雪ノ下・・・」

　　と比企谷が出る準備をしようとしたところで部室の扉がガラツと開く

「我参上！はっちまーん迎えに来たぞ！」

　　そこに現れたのは材木座と戸塚

「八幡、今日材木座くんと一緒にゲームセンターに遊びに行く約束じゃなかったっけ？」
「え？マジで？今日だっけ？明日じゃなかったっけ？」

「何をいうか八幡、今日は水曜日であらう！」

「中二、今日は火曜日だよ……」

「ほら見る、全くお前は……」

「二人ともその辺にしなさい、とりあえずノックは聞こえなかったけど一応お客様だからお茶を出すわ、ノックは聞こえなかったのだけれど」

そう言うとき雪ノ下は材木座を睨みつけ紅茶を淹れる茶菓子を準備をし始めた。

材木座は例によつて視線を全く合わせずどつか向いている。

「ごめんね邪魔しちゃったみたいで」

戸塚が謝罪する。

後ろで材木座も一緒に頭を下げる。

「戸塚は悪くない、悪いのは全て後ろのでかいのだ、なあ材木座」

「ごふう、わ、我は悪くないぞ！せ、世間が悪いのだよ」

「中二が悪いよ！せっかくヒツキーがゆきのん誘つて……」

「いいのよ、由比ヶ浜さん、買い物は今度一人で行くからいいわ」

「うー、ヒツキー！絶対ゆきのんの買い物に付き合つてあげてね！約束だよ！」

「お、おう……」

「リア充め爆発すればいいのに」

ぼそぼそと文句を言いながら茶菓子をむさぼり食う材木座に

「全くおまえは……あとそれ以上食うな、他の人も分もあるんだから」

材木座の手からお菓子を奪い取つてるところへ扉をノックする音が聞こえる

「どうぞ」

今度は小町と段ボールを持った川崎大志がやってきた

「じゃじゃーん、小町参上ですー!」

「どもつす、あ、お兄さん久しぶりつす!」

「お、小町、今日はどうしたんだ?あとそのアイテムキャリアーは段ボール置いたら消

えろ」

「アイテムキャリアーって俺のことつすか?ひどいつす、これ平塚先生がここに持つて

行けと言われて持つてきたんす、一緒に食べようと言われてるんつす!」

「またあの先生は……一体何を持つてきたんだ?」

トラブルの種じゃないだろうなと中を覗いてみると

「お菓子だな……スルメとかのつまみみたいのものもあるな」

「いったいどうしたのかしら……平塚先生は他に何か言っていなかったかしら?」

「たしか商店街の福引きで当てたとか言ってたつす！」

「一人では食べきれないからこちらにもちこんだのね……」

「そうだな……一緒に食べる相手がいないからだろうな」

残念そうな表情で顔を見合わせる比企谷と雪ノ下を見て由比ヶ浜が声を上げる

「ゆきのんとヒツキーばかりなんか知っててずるい！」

「ずるいつておまえ……考えればわかるだろう……」

とりあえず皆で箱の中のお菓子を物色していると

「諸君！元氣かね！」

今度はノックもせずに平塚先生が入ってくる

「先生、毎度いつてますがノックをしてください」

「細かい話はよいだろう！お菓子を持ってきたのだ！福引きで当てたのだよ！私にも運が向いてきたようだ！皆で食べようじゃないか！」

「今年の運はそれで全部使いきったんじゃないですかね？大丈夫ですか？婚活とか婚活とか？」

ウキウキな顔をしてお菓子を漁る平塚先生を見て若干不安になる比企谷、雪ノ下はそんな先生を見てため息をつきつつ紅茶を準備する。

またノックの音が聞こえ今度は川崎が入ってくる。

「あのー大志はここにきてない？つていたいた、あんた！今日は買い物当番だったでしよー！」

「げ、ねーちゃん見つかつたか」

「全くあんたは・・・」

飽きれ顔の川崎に平塚先生がお菓子を勧める。

「まあまあ川崎！お前もこれ食つていいぞ！なんなら家に持つて帰つてもいい！たくさんあるからな！」

「本当ですか！京華はこれが好きだったかな？」

相変わらずのシスコンぶりを発揮しながら嬉々としてお菓子を物色する川崎

そしてそれらを完全無視してひたすらうまい棒だけを両手に持ちむさぼり食つてる材木座をそろそろ止めないといけないかなと腰を上げたところまたノックの音がして今度は三浦と葉山グループが入ってくる

「結衣ー迎えに来たよー！」

「え？優美子どしたの？」

「ちよつと結衣！今日あーし達とカラオケ行く約束してたつしよ」

「え？今日だった？」

「ほら優美子、やっぱり違つただろ？だから言つただろ」

「隼人はだまつているし！」

「まあまあ優美子、なんかみんな食べてるみたいだね、俺たちももらつていいかな？」

「ああいいぜ、たくさんあるから好きなのとつていいぞ」

「おい比企谷、それは私のだろう：：まあいいか！みんな食べ！若者は食わないとな！」
「許可が出たみたいだね、ほら優美子、これ食べて落ち着きなよ」

そういつてスルメを進める葉山、戸部達も適当なお菓子をむしゃむしゃと食べ始めたあたりで今度は一色が部室に乱入してくる。

「先輩！大変なんですうー」

「比企谷すまないな、会長を止められなかった」

入ってきたのは生徒会長の一色いろはと副会長の本牧、書記の藤沢

「一色、もう何も手伝わんぞ、おまえの力で何とかしろ」

材木座からうまい棒を奪い取りながら比企谷は答える。

「ほら会長言わんこつちやない、比企谷も忙しそうだし俺たちでなんとかしましょう」

「えー先輩！うまい棒食べてるだけじゃないですか！今度学校代表でスピーチをしないといけなくなつたから一緒に原稿考えてくれるつて言つてたじゃないですか！」

「比企谷くんまた勝手にそんなことを・・・」

「ヒツキーいろはちゃんに甘すぎ」

雪ノ下と由比ヶ浜に睨まれる比企谷

「マテ、誤解だそんな約束した覚えが……あ、もしかしてこの間の昼飯の時か？戸塚の練習風景見るのに集中してたからなに言ってたか覚えてねえ」

その発言に雪ノ下はこめかみに手を当てながら

「はあー仕方ないわ、本当はダメなのだけれど手伝つてあげるから感謝しなさい」

と雪ノ下は比企谷を自分と由比ヶ浜の間に座るように指示する

「比企谷くんこちらに来なさい、遺憾ながら私と由比ヶ浜さんも手伝うから」

「本当ですか！だから雪乃先輩は大好きです！」

そういうと一色は比企谷の正面へ

「わ、お兄ちゃん両手と正面に花だね！小町的にポイント高いよ！」

「比企谷はリア充だな」

「うむ八幡はまごうことなきリア充であるな」

「やっぱ八幡にはかなわないよ」

「ヒキタニくんばねえわー」

「それな」

「だな」

「おまえらしい加減に！「比企谷くん？」はいすみません」

結局皆がにやにやしている中雪ノ下に指導されながら原稿を考える比企谷、雪ノ下は指導しながら新しく来た人の分まで紅茶を淹れる、どんどんなくなる紙コップを見ながら

「比企谷くん大変、あなたのお友だちがもう底をつきそう・・・」

「なんでおまえはそう物を俺の友達にしたがるんだよ、そして何故悲しい目をする」

「ぷっ、ヒキタニくん紙コップが友達なの？面白いね、あ！写真撮ってあげよつか？」

「素晴らしいながらスマホを取り出す海老名、しかし一向に撮影をしようとしなない。」

「あれ？スマホ壊れた？うわ、反応しないー」

海老名のスマホが全く反応しないようだ、由比ヶ浜が代わりにと自分のスマホを渡すが同じく反応がない

「あれれ？ねえヒツキーあたしのスマホも壊れちゃった」

「俺に言うなよ」

「そういつて比企谷も自分のスマホを出すが真っ暗なまま反応しない」

「げ、俺のもかよ」

それを皮切りに皆自分の携帯やスマホを確認するが全員同じく動かなくなっているようだった。

「いったい何が起きているのかしら」

雪ノ下が不安そうな顔をしたとき唐突に気分が悪くなる

「なんだかめまいがするわ」

「俺もだ」

「ヒツキー、なんかぐるぐるする、気持ち悪い」

おいまじかよと比企谷が回りを見ると皆下を向いて具合の悪そうな顔をしている

「酸欠か？だれか窓を・・・」

葉山がそういつて窓の方を向くがそのまま固まってしまふ

窓の外はいつの間にか真っ暗になっていた、夜になったわけではなく真っ黒な紙を貼り付けているような感じの暗闇だ

「なにこれ？」

三浦は窓を開けようとするがびくともしない

「なんかヤバイぞ、ドア開けてくれ！」

気分が悪い為か片膝をついた葉山が怒鳴り、扉の近くにいた材木座が開けようとするがびくともしない

「開かぬ、閉じ込められた？」

そう騒いでる間にも気分はどんどん悪くなる、何か体が流れ込んでくるような感触がする。

しばらくすると唐突に頭痛とめまいが解ける、が同時に教室内に轟音と衝撃が走り天井が割れる

「お前ら机の下に入れ！」

比企谷はそういうと長机の下に隠れる

「ヒツキー、怖いよう」

由比ヶ浜は比企谷の腕にぎゅっと抱きつく、反対側は雪ノ下が無言で腕に抱きついて
いる。

「先輩！」

一色が正面から首にしがみついてきた。

「小町は？小町！」

比企谷が怒鳴ると

「おにいちゃ「今いくからな！」」

そういうと比企谷は三人を振りほどこうとする、小町の元に行かないと思っていると

「比企谷！小町は任せろ！」

見ると川崎がこちらをにらみながら大志と小町の頭を抱えている

「んなわけいくか！小町！」

比企谷はなんとか小町の方へ行こうとしたが、三人が抱き着いているのと教室の振動

が激しくなり身動きがとれなくなる。

衝撃と轟音は止まらず電灯が落ちてくる

「きゃあー！」

誰かの悲鳴が聞こえる

窓ガラスは全部砕け一瞬落下するような感覚に陥る

教室の振動はさらに激しくなり完全に身動きがとれない

「くそっ！三人とも捕まってる！」

比企谷はそういつて三人を抱き止めている腕に力を入れる

しばらくすると

ドガン！！！！

という音と衝撃とともに一気に静かになる

教室内は壁は崩れ天井は半壊しており青空が見える、床も大きな亀裂があり地面が見える、音も衝撃も無くなり静かになった。

「いったい何がどうなったんだ？」

皆動けないでいる仲、しばらくして比企谷が顔をあげるとガラスが全部無くなった窓からはどこかの森のような景色が広がっていた。

第二話

「ここはどこなんだ？」

周囲を見るとどこかの森に教室ごと移動したように見える。

「みんな無事か！怪我をしたものはいないか！」

平塚先生が皆のところを周り声をかける

「とりあえずこっちは無事ですが」

比企谷は答える、葉山達は三浦と海老名を庇つていようだ。川崎は大志と小町を抱えており、本牧は言わずもがな

「雪ノ下、由比ヶ浜、大丈夫か？」

「ヒツキー、怖かったよー」

由比ヶ浜は涙目で強く抱き締めてくる

「比企谷くん、私は大丈夫よ」

雪ノ下はそのままの体制で気丈にふるまうが若干体が震えてるようだ

「雪ノ下、無理するな、二人とも落ち着くまでそのままでいろ」

「先輩、私のことは無視ですか？」

体の下から声がする

「減らず口が叩けるなら大丈夫だろ」

「嫌です。しばらくこのままでいさせてください」

比企谷は起き上がり座り直すが左腕には雪ノ下右腕には由比ヶ浜正面からは一色がそれぞれ抱きついてるためそのまま動けない。

「小町！無事か？」

「こっちは大丈夫だからあんたはそいつらの面倒をみてな」

ちよつと怖いですよ川崎さん、こちらをあまり睨まないでいただきたいものですな。

そのままの状態で回りを見渡すと一人足りないのに気がつく

「おい材木座はどこだ？」

戸塚も顔をあげ

「あれ？そういうえげさつき異世界がどうの魔法がどうのって言ってたような、ゴメン僕怖くてずつと下向いてたからわからない」

すまなさそうな表情をする戸塚

「あいつまさか一人で行ったんじゃない」

そう思っているの外から声が聞こえてくる

「ステータスオープン！あれ？ステータス表示！、ううむこれでもないか」

「あいつ何やってんだ？」

「ふむ、異世界に召喚されたのかもしれんからな、お約束というものだな！」

そういいながら平塚先生も外に出ていった。

「はー虚構と現実が区別つかなくなってるのはこのことだな」

「ヒツキーあたし達中二の小説の中に入っちゃったの？」

「んなわけあるか、あいつのパクリにパクったプロットとも呼べない未完成の代物の中に入ったら絶望しかないだろ、それよりそろそろ離れてくれないか？」

「・・・うん」

「そうね・・・」

「嫌です」

「だーもう！おまえらしい加減にしてくれ！、俺も外に出て状況確認してくるからちよつと離れろ！」

そろそろ八幡の八幡が大変なことなっちゃう！たつまえに立たないと！

と3人を無理矢理引き剥がそうとするが

「君はそのままでもいい、俺が外を見てくるから三人を頼む」

葉山がいつの間にか近くにあった。

「おい待てよ、俺も行く」

「だから君は三人を・・・」

「お前の所はどうなんだ？」

「俺の所は戸部たちがいるから大丈夫だ」

いや大丈夫じゃないだろ、あーしさんが不安そうにこっち見てるじゃねえか、あんな表情見たことないぞ

「ともかく俺も行く、知らんところだから見に行く人は多い方がいいだろ」

無理やり三人を引きはがし立つ

「おまえら、俺も男なんだから勘弁してくれよ・・・」

3人から上目使いで見つめられるので恥ずかしさもあつてそのまま外に出ることにした。

外に出てみるとそこにはどう見ても現代人とは思えない剣と鎧で武装した人たちと、身分が高そうな男が材木座と平塚先生の前に立っていた。

気が付いたら葉山が平塚先生の所へ駆け寄っていた。

こういう時の奴の行動力は早い、俺も後に続く

「先生！大丈夫ですか！その人達は誰なんです？」

「冒険者の方とここから一帯を納めている領主様だそうだ、どうやらここはお前らの好きなファンタジーの世界みたいだぞ」

「そうだぞ八幡！ここは異世界！我らは異世界に召喚されたのだ！現代知識で無双！ハーレム！我は本物の剣豪將軍に！」

言葉が通じるのか？それより自分たちの常識は通じるのかとか、これからこの人達に殺されたり売られたりするんじゃないかとか、不安にはならないのか？

気丈に振る舞ってはいるが不安そうな表情の平塚先生の脇で小躍りしている材木座を見ながら比企谷は思った。

「こんにちは、我々はあなたの方を探しに来たのです」

冒険者の一団のリーダーっぽい人が丁寧な言葉で話しかけてきた。

どうやら言葉は通じるようだし一応俺たちの常識に当てはまる人たちっぽい、しかも顔が東洋人というか日本人みたいだ。

でもなんで言葉が通じるんだ？

「探しに来たというと？」

平塚先生は怪訝な顔で聞き返す。

その表情で察したのかリーダーっぽい人がなだめるように話しかける。

「そんなに警戒しなくても結構です。私は吉原といえます。我々も同じ境遇の日本人です。実はあなた方が出現したのは我々の方でも感知しました」

驚き目を見開く平塚先生、葉山も驚いている、俺もびつくりだ。

今度は身分の高そうな男が話しかけてきた。

「まあ驚かれるのも無理はないですな、詳しい話や自己紹介は私の館で話しましょう、他にもお仲間はいるのかな？」

「はい、まだあそこの中に・・・」

「では連れてきてもらえませんか？一応馬車を用意してある。あとは彼らが案内するのでね、私は先に帰らせてもらうよ」

領主と呼ばれた男はそういうと冒険者たちに館に案内するように指示して先に帰って行った。

第三話

街へつくと皆は領主の館へと案内される

「領主様は気さくな方ですので緊張しなくても結構ですよ、さつき見た人もいると思うけど現場に向くほど好奇心旺盛な人でね、では我々は先にあなた方のことを報告してきますので」

そういうとあとはその場にいたメイドに任せて吉原たちは館の奥へと消えて行った。

そのまま皆は大広間のようなところに案内され領主が出るまで椅子に座り待つように指示されるが

「八幡！我本物のメイドさんみたの初めてであるぞ！」

「やべーあれが本物のメイドさんかーすげーわやべーわー」

「お前らどこにいてもその調子なんだな・・・」

この二人のマイペースっぷりには比企谷も葉山も呆れ顔

しかし女子たちは皆一樣に不安な様子

「お兄ちゃん大丈夫だよな？ 私たち突然殺されたりしないよね？」

「わざわざ自分の家で殺すようなことはしないだろ・・・」

と口では言うが、右も左もわからないこの状況、果たして吉原という男たちもどこまで信用しているのかわからず。

もしかしたら自分たちは奴隷として売り飛ばされたりするのでは無いだろうかそう思ったら自分はどうなっても妹だけは守り通さなければと一抹の不安を覚える比企谷だった。

暫くすると先ほど見た身分の高そうな男が部屋に入ってきた。

「ふーむ、これで全員かね？今回はずいぶん多いんだな、しかも女子供ばかりか．．．あー席を立たなくとも良い、楽にしていとかまわん」

そう男は言う、ゴホンと咳払いをして

「みなさんようこそ、私はこの辺境方面の領主のアダムという、以後お見知りおきを、といつても皆来たくて来たのではないことは知っている、緊張しなくても良い、別に君たちをどうこうするつもりは無い」

そう言うのとニコツとした笑いを皆に向ける、本当に大分気さくな人なようだ。

その発言で少し緊張がほぐれたのか平塚先生が手を上げる

「いろいろお聞きしたいことがありますますがよろしいでしょうか？」

「ふむ、まず君たちの境遇を説明してからでも遅くは無いであろう」

領主のアダムはそう言うと言明を始めた。

何故かはわからないがある日突然この地に異世界の物が出現するようになったとのことだった。

きこりの男が出現現場に居合わせ館に届けたのが発見の発端とのこと、初めは小さい物ばかりで見なかったことにして埋めたりしてたが大きい物もやってくるようになり処分に困るようになった、しかも人まで出現するようになった段階でこれはまずいと思い、国王に報告したが辺境の地ということもあり未だにほったらかしにされてる状態。

「今王都周辺の国にはモンスターが大量に集まってきて大変なんだと、んで実害がでないことは後回しにされててな、一応対策考えるけどそれまでそつちでなんとかしとけとさ、物だけなら放置しておくが、さすがに人をそのままにしておくわけにもいかなからな」

王都といっても役所らしく丸投げ体質なのはどこも変わらないらしい、しかしこの領主大変人がいい模様

「ここは王都から遥かに離れた辺境の土地だからな、どつかが攻めてくるような重要なところでも無し、後回しにされても仕方がない面もある。ここは人口はそこそこあるが名産品も無い、未開の土地に面しているから冒険者連中が他より多い程度、君たちが出現するようになってちよつとは退屈がしのげる、まあそんな土地だ」

辺境？ここって王都からも見捨てられてるんじゃないのか？

ともかく奴隷に落とされたり殺されたりすることは無さそうだが・・・俺は不安になり小町と顔を見合わせる。

吉原が声をあげる

「まーみなさんが不安がるのも当然ですが、説明しておかなければならないことがあります」

「なんででしょうか？」

「皆さん変に思われませんか？何故こちらの領主様とお話しできるのか、あとその辺に書いてある文字読めますよね？」

確かにそうだった、この領主明らかに日本人ではないが言葉が通じるし、部屋にある調度品とかにかかれてる文字も日本語ではないがちゃんと読める。

冷静になって考えてみるとおかしいことだ。

「それについても私から説明した方がいいな」

領主が声をあげる

「ここに来る直前に、気分が悪くなったはずだ、こちらの魔法の一つに自分たちの言語を無理矢理他人の脳に刷り込ませるといふのがある、短時間で習得させるためかなり危険で膨大な魔力を必要としてな、本来は未開の土地を侵略する際言葉が通じない原住民等に使うて拷問させるような術だ、一つ間違えると脳みそが弾ける」

「弾ける!?!」

全員が驚愕する

「うむ、しかしながら安心してほしい、今まで来た人の中に脳みそが弾けて死んだ人はいないし後遺症があるような人もいないようだ、よほどうまくやっているのだろうが一体何の目的でやっているのか見当がつかん」

「我々の世界の道具や知識を使って何かをしようとする連中がいるのではないのでしょうか?」

平塚先生がそう発言する。

実際異世界物とかのラノベにありそうなシチュエーションだ。

召喚され戦わされて世界を救う。

王道ではあるが、召喚する方が正義とは限らない。

邪な考えを持ったものが異世界の強力な力を手にしたら?

昔のアニメにダンバインってのがあったが、初めに召喚されたのは敵側だったはずだ。主人公達は途中で離脱したが残ったショットウエポンは自分の知識で強力な兵器を開発しまくってた気がする。

「何者かが君たちの世界の知識や力を得る為にやっている? つじつまはあうかもしれないがそれならば私のいるような辺境の地に捨てるように物や人を送るわけは無からう

？武器になりそうな物はないしそもそも全部動かん、今まで来た人に動かせないか試してもらったが全部だめだった。」

そうアダムは言うのとメイドになにかを持ってこさせる。

「例えばこれ、時計か？文字盤と針がついてるようだが」

平塚先生に所謂目覚まし時計を渡す。

「これは我々の世界では目覚まし時計というのですが」

そう言うのと電池が入ってるふたを開けてぎよつとする。

乾電池はものの見事に破裂していた。

「私はこういうのに詳しくないが・・・比企谷」

「なんで俺なんすか？」

と嫌そうな顔をするが仕方がないと平塚先生のところへ行き中を確認する。

「あーこれだめっすね、完全に使えないっすね」

と一目見て言った後

「そういえば」

と携帯を取り出す。

「俺たちがここに来る前に携帯使えなくなりましたよね？」

「あーそういえば、そうだったな」

「多分召喚の反動かなんかでバッテリーが全部お釈迦になっちゃうんじゃないですか？」
「ふむ、吉原くん達も同じようなこと言っていたな、動かなければ全部ガラクタ、なんだから残念だ」

そう言うのと苦笑いをして質問は無いかと皆に問いかける領主

「我々はこれからどういう扱いになるのでしょうか？」

平塚先生が聞く

「さつさと帰りたいだろうが、目処が全くつかないのでな、まあ君たちは吉原くん達みたく冒険者になつてもらうしかないな」

「冒険者ですか・・・」

「ただ飯食わせてやれるほど財政に余裕は無いのでね。知らない土地だし不安になるのもわかるが、今まで来た連中は全員読み書き計算ができるし勤勉だということと街での評判は結構高い、安心して仕事を任せられるとな、モンスター討伐が主な仕事だから他にも色々あるから食うには困らんと思うよ？」

モンスターと聞いて約一名以外一気に暗くなる、当然だろう、現代日本に住んでいた俺たちただの高校生に怪物を殺せと言っているのだ。野良犬程度と戦ったことすらない現代つ子にそんなことができるわけがない、唯一喜んでるのは例によって剣豪將軍
そんな様子を見て吉原が言葉を繋ぐ

「実は、どうも召喚時の影響なのか、体力とかの能力が飛躍的にアップするみたいなんだよね、しかも何故か魔力も使えるというおまけ付き、少し訓練するだけで結構強くなれるんだな」

自分は魔法は苦手なのだがと吉原は手のひらを上に向け何事かつぶやく

「ボツ」

手のひらに炎が立ち上がった。

「まあ適正とかあるみたいだけど僕は魔法は苦手だね、今はこれが精いっぱいってところかな？ここは冒険者が多いから訓練所つてのがある、そこで一ヶ月ほど教えてもらえればいっぱいしの冒険者になれるよ」

「マジで！レベルはどのくらい上がるのだ？レベルマックスまで訓練所にいることは可能なのだろうか？」

材木座がここぞとばかり喜びの声を上げるが

「うーんゲームじゃないからね、そこはその人の素質次第かなあ……ああそう言えば君ステータスとか叫んでた子か、気持ちわかるし他にも君みたいに考えてる人はいたけどそういうの無いんだよね、普通に実力勝負だよ」

「え……マジ……レベルとかないの？」

苦笑いをする吉原に対しがっかりした表情をする材木座

いや俺も少しは期待してたんだけどな。

弱いモンスター数千匹倒せばレベルMAXとかやっぱり非現実的ですよね。

「その魔法というのはどういう所まで使えるのだ？例えば怪我とかは治せるのか？」

平塚先生興味深々だ

色々説明をしていたが某有名RPGでいうところの復活系の魔法は使えないが他の攻撃や回復補助魔法に似たようなのはあるらしい、死んだらおしまいなんだそうだ。

あと体の一部が切り取られたらくつつけるのは医者でないと無理とのこと。

そして今のところ召喚されてきた人たちには死者は出てないとのことだった。

「そういえばこの間来た女性はすごかったな、一ヶ月で剣と魔法はおろかあらゆる戦闘職を覚えちゃってたなあ、一緒にいたおさげの女の子はプリースト職をあっという間にきわめてたっけ、近くにいるだけで癒されるとか・・・」

「もしかしてその人は雪ノ下陽乃と城廻めぐりという名前ではなかったかしら！教えて！陽乃は、姉さんは今どこにいるの！」

雪ノ下は食い気味に吉原に詰め寄る。

「ま、まあ落ち着いて、あなたは妹さんなのかい？あの陽乃って人すごいね、魔法を行使しつつモンスターを切り裂く姿はヴァルキリーとか呼ばれたよ、でも残念ながらここにはいない、元の世界に帰る方法を探すと言ってめぐりさんと旅立って行ったよ」

「・・・そう、ここにはいないのね、でもよかった、生きていたのね・・・」

雪ノ下はその場にへたり込んで泣き出してしまった。

「ま、まあ何はともあれまず、住むところだろう、町はずれに冒険者用の宿舎がいくつかある、吉原君達もその一つをねぐらにしてみらっている、ただ宿舎と言っても廃屋を簡単に改装したものだからね、君たち全員が入れるところはないから分かれて住むことになるな、元々廃屋だったから好きにして構わんよ、本来はそこそこの家賃はもらうんだけど、事情が事情だから格安にしておく、案内は吉原君がしてくれ、あーあと何か困ったことがあったら何でも言ってくれ、金銭的なこと以外なら相談に乗るぞ、んじや後はよろしく」

泣いてる女の子の扱い方は苦手なのか領主は一気にそう捲し立てると奥に引っ込んでいった。

うあーでたよ、好きな人同士班を作って、ボツチの俺はこういう時どうすればいいんでしょう、そうか戸塚がいたな、戸塚と小町とだけ一緒居ればいいや。

比企谷はそう思うと

「なあ戸塚、俺と一緒に・・・」

そう言おうとしたところで

「八幡！無論我は一緒だよな！」

巨体がぐいっと肩を掴んでくる

え？マジデ？まあそうだな、こいつが葉山とかと一緒になるわけないしな、んじやあ戸塚と材木座と小町と4人で・・・

「八幡！僕一緒にいてもいいかな？」

「無論だ戸塚！むしろ戸塚だけでいい！一緒にこの世界を旅しよう！」

「えー八幡、我は？」

「そーいやいたな、だとおまえは馬小屋、俺と戸塚はベッドだ、これで完璧だな」

「酷いよはちまーん」

「なにはともあれ一回見てみないと何とも言えんからな、ベッドが少ない場合は仕方がない」

その時は戸塚とダブルベッドだな、とニヤニヤしながら廃屋まで吉原の案内で皆でぞろぞろと歩いていく

第四話

歩いてる途中小町に話かけられた

「おにいちゃん、大事な話があるんだけど」

「大事な話ってなんだ？」

「これからみんな別れて住むんだよね、そうすると多分これからの行動も別れた人同士バラバラになっちゃうよね」

「ああそうだろうな、大丈夫だお前にはお兄ちゃんがついてるからな、安心しろ」

「そう言い胸を張る比企谷へ小町が絶望的な言葉を投げかける

「小町はお兄ちゃんと別行動と取ろうと思うのです」

その言葉にうろたえる

「え？なんで？あ！あいつか、材木座か、あいついると確かに身の危険を感じるよな、うんあいつは追い出すから・・・」

「違います、ここに来る直前、教室がすごく揺れたときお兄ちゃんは雪乃さん達ほっぴいで小町の所に来ようとしたでしょ？」

「当たり前だろ、俺にとって小町が一番大事だからな」

「その言葉は小町的にポイント高いけど、雪乃さんたちはどうするつもりだったの」

「いや、それは・・・あいつらだったら大丈夫だろ・・・」

「お兄ちゃん、もし雪乃さんたちと小町がモンスターに襲われていたとして誰を先に助ける？」

「そりゃ小町だろ」

「それが冗談じゃないところがポイント高くて低いよ・・・お兄ちゃんは多分盲目的に小町のこと助けようとするでしょ、小町が比較的に安全で雪乃さんたちが殺される寸前だったとしても」

「・・・」

「これからどんなことが起きるかわからないけど、ひよつとすると小町のせいでお兄ちゃんと行動している人が死ぬかもしれない、ううん、多分死んじゃうと思う。そうなら小町後悔してもしきれないよ」

「・・・んじやどうすんだよ・・・」

「沙希さんと一緒に行動するよ」

「沙希？川崎か！大志も一緒だろ！ダメだ！絶対だめだ！」

「さつきちよつと話したんだよね、沙希さん先生と行動するって、先生も一緒なら安心でしょ。」

「平塚先生と？うーん先生と一緒にならあいつも小町に手を出したりは・・・うーん」

「お兄ちゃんはそのいう発想しかできないからキモイと言われんだよ・・・大志くんはそんな人じゃないよ・・・」

「男は狼だから安心ならん！」

「それはお兄ちゃんも含まれてるじゃん、いい機会だから妹離れしないと！小町は沙希さんと一緒に行くから、じゃーねー」

「おい小町い」

ボー然となる比企谷だったがそうこうしてる間一行は宿舎が並ぶところに到着する。

「ここだ、まあいくつかあるから好きに使っていいからね、僕たちが住んでるのはあつち、用があつたら呼んでくれてかまわないよ、それとこれは当座の資金、領主様に感謝しといてね」

吉原が全員に渡した袋には銀貨が数十枚入っていた。

「この金銭感覚が分からないと思うけど、金銀銅貨があつて、金貨は10万円ぐらい、銀貨は5000円、あとは銅貨は100円ぐらいなイメージもってもらえばいいよ、実際は物価が全然違うからこれだけあれば何もなくても一ヶ月は暮らせる、その間訓練に集中してほしいってことなんだけどね」

あの人金銭的なこと以外はといつつちゃんと考えてるんだな、適当そうに見えてい

い人なのかもしれない。

小町が離れたシヨックから少し立ち直った比企谷は後ろにいる二人に声をかける

「さて、戸塚、材木座どこにしようか」

「私としては炊事場が整ってる方がいいのだけれど」

「あたしはやっぱお風呂があるほうがいいな」

「部屋がきちんと区切られてるかは大事ですよ！プライバシーは大事ですし寝ているところを襲われても……って先輩なんでこつち見てるんです？もしかして一緒に部屋がいいとか？そういうのはきちんと手順を踏んでからにしてくださいごめんなさい」

「いや、そうじゃなくてなんでお前たちがいるの？」

「あら？私は部長よ？部活の時間にこんなところに来たのだから一緒に行動するのは当然じゃなくて？それとあなたが戸塚くんにかがわしいことをしないか見張る必要があるじゃない？」

「……全くお前は、由比ヶ浜、一色、お前らは葉山のところに行かなくていいのか？」

「え……ヒツキー私一緒にいちやダメ？」

「ダメも何も、俺のところより葉山のところの方が安心だろ」

「嫌、あたしゆきのんとヒツキーと一緒にいる！今の状況よくわかんないけどきつとゆきのんとヒツキーとなら何とかできると思うもん！それヒツキーといた方が安心でき

る・・・かな・・・?」

「そうですよ!先輩!私も先輩から離れませんからね!ちゃんと戻って原稿書いてもらうんですから!」

「お前らは・・・何とかって言われてもなあ」

今の状況何とかしろと言われてもなんともしようがない。

葉山辺りならどうにかできるんだろうか?

頭をガリガリとかきながら

「できないだろうなあ」

とボソツと呟く

「どうしたのかしら比企谷くん?それより目ぼしいところを見つけたと材木座くんが呼びに来たので皆行ってしまったわ、私達も行きましょう?」

いつの間にか誰もいなくなり雪ノ下と二人取り残されている。

「なんでお前は一緒にいかなかったんだよ」

「だってあなたを残してしまうと、また一人で変なこと始めるでしょう?だからこーやってしつかり見ておく必要があるのよ」

「そりやずいぶんと過保護で」

「不安なのよ・・・今度はあなたが本当に死んでしまうかも知れないもの」

肩がくっつくぐらい近づいた雪ノ下がボソツと呟く。

密着度が半端無い、こういう場合手でも繋いであげた方が良いでしょうか？

でも拒否られたら辛いな、そう思っているよ

「せんぱーい何してるんですかー遅いですよー」

雪ノ下がパツと離れる。

「ごめんなさい一色さん、この男がまたなにかを企みそうだったので見張っていたのよ」
変わり身早すぎだろ、さっきまで別人みたいになっていたのに

「はーやれやれ一色、雪ノ下は極度の方向音痴だからちゃんと案内しろよ」

「ちよつと、あなた！」

雪ノ下が真っ赤になってこちらをにらむ

「本当のことだろう、大体・・・」

「ハイハイ、そこまでですよ、こっちですから付いてきてくださいねー」

宿舎につくが荷物なんてないので部屋割りを決めるぐらい、風呂はあるようだったが当然薪で暖めるタイプ、ひたすらめんどくさそうだ、吉原さんの話では街に銭湯があるらしい、当分はそっちのお世話になった方がいいだろう、ここは元々風呂に入る文化がなかったので召喚されてきた人達で作ったそうだ。それなんてテルマエ・ロマエだよ。

炊事場はいいとしっかりした作りだ。

部屋には簡素なベッドが並んでいる。一応男女別にはしたがプライバシーもへったくれもない。

雨風しのげるだけでとりあえず感謝しないといけないだろう、一色は不満のようだが俺は戸塚と一緒に寝起きできるということ大満足だ。

ところで材木座はイビキとかは大丈夫だろうな？

あいつゴーゴー言いながら寝てるイメージがあるんだが。

葉山や平塚先生のところにも顔を出してみたが、どこもあまり変わらない作りだった。

宿舎と言ってるぐらいだから全部同じように改装したのかもしれない。

「小町、本当に別でいいのか？」

平塚先生たちの宿舎に入った際に小町に聞く

「ウーン、それよりも」

小町は俺の後ろにいた雪ノ下達に近づき

「皆さんお兄ちゃんをお願いしますね！」

深々と頭を下げる

「ふむ、我に全て「小町さん、大丈夫、比企谷くんは私達がしつかり見ているから、放置しておくともンスターと間違われて他の冒険者に捕まったりすると事ですものね」

材木座が無駄な啖呵を切ろうとしてたので雪ノ下が阻止してくれたようだ。

でももう少し俺に優しくしてくれてもいいんですよ？

「お兄ちゃん、雪ノ下さん達を悲しませるようなことは絶対にしないでね。それだけ守ってくればきつとお兄ちゃんは大丈夫だよ」

小町が真剣にこちらを見つめてくる。

悲しませるようなことはことつてなんだよと反論したかったが、思い当たる節が多過ぎて結局何も言えなかった。

その日は街で買い物をしたり訓練所を覗いたり情報収集をして一日が過ぎた。

材木座は千葉にいたときとはまるで別人のようにいろんな人とコミュニケーションとりまくっていた。

「あいつにしては理想の世界だからなあ」

「どうかしたのかしら」

「ん？材木座が張り切りすぎててな」

「そういえば彼の小説もこういう世界を題材にしたものがあつたわね、彼はもしかして帰れるとしても帰りたくないって言いそうね」

ふと材木座の学校での立ち位置を思い出す。

あいつは体がでかいからどこにいつても目立つしあの口調だ、それ故にいじられたり

何かというと嘲笑の対象となっているのは知っている。

そんなところにあいつは帰りたいがるだろうか？

加えて自分もカースト底辺ということとは自負している。

でもこの世界にはマツカンがない、有れば俺も帰りたくなるかもしれない。

「そうだよなあ、そうかも知れんなあ・・・」

「私は帰りたいわ、私が戦うべき世界はここではないはずだから、きっと姉さんも同じよ」

第五話

夜になり冒険者ご用達の酒場に集まり今後の相談をすることにした。

「ここは酒場と謳っているがいわゆる食堂に近い物がある。

「訓練所つてのは剣や槍を扱うファイターと弓を使うハンター、魔法攻撃メインのメイジと回復メインのプリースト、罨解除やら偵察奇襲なんかが得意なシーフ、あと素手で戦う格闘とかあるみたいだな、あと特殊なのがいくつか」

「本当にそんなゲームみたいな職業を一ヶ月ぐらいで習得できるのかな？」

戸塚は不安げだ、いや全員不安げだ。

唯一材木座だけは元気だった。

「やはり我は大剣等の両手剣使いであろうか？うーむ二刀流もいいな、黒い装備にしてリアル黒の剣士というのはどうであろうか？、八幡どちらがいいと思う？」

「知るか、好きな方でいいんじゃないやね？とところで職業には適正があると吉原さん言っていたよな」

「そうなのだよ！八幡！」

またまた材木座が声をあげる

「魔法については実際に出してみれば分かるとのことだ！我も魔法訓練所のところで色々聞いて試したが平均レベルだったから普通に肉弾戦向きとか言われたぞ！」

確かにこいつは訓練所にずんずん入って行って中でなんか話をしてたな。

しかしそれ体格を見て言われたんじゃないですかね？

でかい体格のメイジってあんま見ない気もするが

「それはどうやって出せばいいの？僕もやってみたいんだけど」

戸塚は興味津々だ

「うむ、吉原殿もやっておったであろう、手をこうやって炎出ろ見たいに集中して念じる
といいそうだ」

全員でやってみると以外と全員そこそこ大きい炎が出てくる。

俺のは材木座と同じぐらい、クソ！こいつと同じとは！

戸塚と雪ノ下は結構大きく同じぐらい、一色も俺と同じぐらいだった。

お揃いですねと言われたが、それって材木座ともお揃いってことだからな？

そして一名問題児がいた

「わ、わ、ちよつとヒツキーこれどうやって消すの？このままじゃ天井が燃えちゃうよ
！」

「うおう、由比ヶ浜こっちに向けるな！早く消せ！」

由比ヶ浜の炎がでかすぎる、炎というよりは火柱だ

「消えろと念じるだけでよい！はよう消すのだ！」

バケツの水をもった店員が走ってくる。

「ウーン、消えろ！」

由比ヶ浜が力を込めて言うとうと火柱はあつという間に消えた。

この後店主に怒られたのは言うまでもない。

宿舎に帰って一息着いてると葉山がやって来た。

「比企谷くん、雪ノ下さんちよつといいか」

「何かしら？」

葉山はやけに真剣な様子、雪ノ下は不安げに聞き返す

「これからのことで相談があつてね、来てくれないか」

そういうと葉山は比企谷の腕を引つ張り外に連れ出した。

ちよつと待ちなさいと雪ノ下が不安げな表情で追いかける。

だからそういう表情をするなよ。俺まで不安になるだろうが。

「リーダーの君達をつれてきたのは他でもない、今後についてだ」

と葉山は宿舎から少し離れた広場で話をする。

ちよっと待て、リーダーってなんだよ。

「おい葉山、俺はリーダーなんてなった覚えがないんだが、雪ノ下もだ」

「比企谷、今はそういうのはいい、雪ノ下さん、異論はないね？」

いつものことなかな葉山らしくはない、強引に話を進めようとしている。

「……無いわ、話を続けなさい」

雪ノ下までなんだよもう。

「俺はみんなで元の世界に帰りたいと思っている、全員そうだと思っていたんだが、様子がおかしいのが何人かいるので君たちはどうかと思つてね」

「様子がおかしいってどういうことだ？」

「材木座くんみたいだと言えば分かるかな」

異世界に来てから水を得た魚のように生き生きとしてるもんな、色々有益な情報を収集したり別人のようでもある。

「よく見てるな、確かにあいつはラノベ好きだからこういう世界に憧れたんだろ、でもこの世界に来て喜びまくってるのはあいつぐらいじゃないか？」

「それが、平塚先生もなんだかおかしいんだよ。あと本牧も理由は知らないがうかれてる感じだった」

平塚先生はアニメ好きだからこういう世界に憧れてたふしもある、もしかしてこつち

の世界ではワンちゃんあると思ってるのかもしれない、結婚的な意味で。

でも本牧は何でだ？あざとい会長様に振り回されることなくなったからだろうか？

「それでそれがどうした？」

「さつきも言ったが俺はみんなで元の世界に帰りたいと思ってる。うちのメンバーもそれに同意してくれている。だから冒険者になつて帰る方法を探そうと思う。そこで問題になるのは……」

葉山が言葉濁す、ああ言いたいことはわかった。でもそれはあまりに人を信用してなさすぎだろう。みんなの葉山じゃなかったのか？

「お前の言いたいことは帰りたくない連中がお前の妨害をするのではということか？」

「そうだ、そこで君たちだよ、もしかしたら君たちもそうじゃないかと思つてね」

「違つてたら説得するとかか？生憎俺たちは帰りたい派だ、材木座は知らんが」

「……本当にそうか？雪ノ下さんもか？」

「愚問ね、話は終わりかしら？今日買ってきたものの整理しないといけないからそろそろ宿舎に戻らせてもらえるかしら？」

「ここで暮らせば色々なしがらみとかと無縁になる。しかも生活手段も一応確保されている。平塚先生に早く帰る為の協力の相談に行つたら何て言つたと思う？」

「なんだよ・・・」

「焦らずゆっくり探そう、ここには面倒な上司もないし責任を押し付け合うようなルールもない、それにここだと昔から考えてた妄想が実現できそうだし、だってさ、帰りたい人の言葉に聞こえるかい？」

それにと葉山は言葉を続ける

「君たちは色々なしがらみで縛られてる、いやいたといつていいな。元の世界に帰るとまた縛られることになる。本当に帰りたいか？そこだけ確認しておきたくてね。」

明らかに雪ノ下の表情が変わる。

こいつはいつもそうだ、いろんななしがらみやこうあるべきという態度を強いられていく、姉の陽乃さんはそれらを受け入れ仮面を作ったが、こいつにはそれができなかった。

今回のプロムの一件もそうだ。

一応成功はしたが、雪ノ下のこれからについてはまだまだ藪の中といった方がいいくらいだ。

俺はどうだろうか・・・本当に帰りたいんだろうか・・・

「・・・ともかく俺たちは帰る、みんなで元の世界に無事に帰るのを目標にする。協力してくれるのは構わないが、邪魔はしないでくれ」

俺たちの様子を見て葉山は踵を返すと自分の宿舎に戻っていった。

ふと雪ノ下があのととき由比ヶ浜のお願いを聞いてくれといったことを思い出した。あのととき結局俺はうやむやにしてしまい答えを出せなかった。

二人は苦笑いしながら俺らしいと言ってくれた。

でもここに永住するとなったら雪ノ下と由比ヶ浜はなんと言うのだろうか？

家のことや将来がここでは全く関係なくなってしまうのだ。

俺も答えを出さないといけない。

俺たちは無言で宿舎に帰った。

第六話

次の日から俺たちは、各々訓練所に行きそれぞれの戦闘訓練を受けることになる。材木座は大剣使いのファイター選んだ。

まあ順当だろう、戸塚はブリースト、癒しを振り撒く戸塚にびったりだと思う。

由比ヶ浜はメイジ、暴発とかしいかちよつと心配ではある。

一色はハンター、何でも恋の狩人がどうたら言ってたがどうでもいい。

雪ノ下は迷っていたが手始めに由比ヶ浜と魔法を覚えるとか。

訓練に関しては複数受けてもいいことになっているのだがよほど物覚えがよくないとかかなり時間がかかるとかであまり推奨されていないそうだ。

覚える暇があつたら実戦で稼いだ方が効率がいいということがある。

複数訓練を受ける予定の雪ノ下や簡単に習得した陽乃さんは別格なのだろう。

さすが氷の女王と魔王の風格だ。

んで俺はというと、満場一致でシーフを選ばされた。

ちよつと不満だったが初日に

「君の隠密スキルは凄いな、天性のものだよ」

と教官に誉められた、いや全く嬉しくないんですが。

それでも奇襲の方法やら罠のかけ方解除のしかたサバイバル技術等シーフというよりはレンジャーのような感じだ、この世界ではそういう一人で隠密行動をする技術者のことを総じてシーフと言っているのかもしれない。

晩飯の時毎日何をしたかの報告をし合うのだが、材木座が鬱陶しすぎる。

「そこで教官が下ろした太刀を我がこう受け流しこのように返して」

とまあ延々と指導されたことを嬉々として話している。いつの間にか女子連中とも普通に話せるようになっていた。こっちの進歩の方が凄いな。

由比ヶ浜は他の人とは違う特別訓練を受けているそうだ。

恐らく魔法の制御が効かないのかもしれない、適正見たときの火柱はすさまじいものだったからな。

他のグループの奴等はどうと

意外なことに葉山はプリーストのところにいるらしい、戸塚の話によると、聖騎士を目指すつもりなんだそう。味方の回復と剣と盾を操る技術が必要だとかで相当難しいらしい。

ただ聖騎士になるにはプリーストクラスを会得してから王都まで行ってそこで再度訓練を受ける必要があるとか。

三浦は魔法を取得中だそうだ。

炎の魔法に才能があるとか、海老名さんは葉山と同じくプリーストのとき、回復二人にするつもりか？生き残るには確実だが火力的にどうなんだろ？

戸部と大和はファイターを選んだそうだが筋がよいらしくたちどころにトツプクラスの腕前になっているとか。

大岡は不本意ながら俺と同じ盗賊、あいつはすばしっこく他の連中と同様成績は良い。

トツプカースト連中はどこ行ってもトツプかよ、チートか！

平塚先生と川崎は格闘、大志の奴はメイジだと、本当はファイターにしたかったが川崎から後衛で援護してるときつく言われたんだそうだ。

さすがブラコンだな。

本牧はファイターで藤沢はプリースト、まあ堅実か、肝心の小町はとうとなんと俺と同じシーフだ。

訓練中　　ずつと小町を見ていたら訓練に集中しろと小町に殴られた。

「今度は私もファイターの訓練を受けてみようと思うの」

雪ノ下はものの一週間で魔法の使い方をマスターしていた。

「お前無理して肉弾戦する必要ないぞ」

「あら、私一通り武道は学んでいるのよ？ 剣道柔道合気道薙刀弓道書道茶道華道合わせ
て10段はいくわ」

ふふんと胸を張る、また無い胸を張られましてもねと思つてたらこちらをギツと睨み
付けられた。

雪ノ下さん、心を読むのマジ勘弁。

「合わせてとか全部初段とかその程度じゃねえかつて最後の方は武道じゃねえだろ」

その意見をフンと無視すると

「私魔法を覚えて思つたのよ、敵は燃やしたり凍らせるよりこの手でぶつた斬りたいと
ね！」

グツと拳を握つて力説する雪ノ下、なんかキャラ変わつてませんか？

「元の世界ではちよっかいかけてくる人や嫌らしい目で見てくる人なんて大勢いたわ、
でもそういう人たちに直接的なこととはできない、手を出した方が負けですもの。だから
私は口で徹底的に相手を追い詰めることを学んだのよ。さつきは合わせて10段なん
て言つたけど武道なんて実際は個人の価値をあげるためのものよ。でもこの世界は
違うわ、目の前の敵は実力で切り捨てていいんですもの」

そうだ、こいつはいつもまっすぐで敵対する相手には正面からぶつかつていった。

だから戦うために言い方はどんどんきつくなり、態度も相手を威嚇するような物へと

変化していったんだ。

由比ヶ浜は戦わず相手と同化する道を選んだし一色は態度を作り異性をコントロールして味方にしていった。

俺は戦わない、戦う前に俺が放棄することにより戦い自体をなくしてきた。

元の世界の連中も皆ゴブリンをはじめとするモンスターの様なものだ、しかも敵かどうかも分かりにくく絶対に手出しせずに戦いを乗り切らないといけない。

元の世界での戦いかたはとても難しい。そうやって工夫出来ずその難しさ故戦いに馴染めない者たちは貶められる。

戸塚のように回りと馴染める奴はいいだろう、材木座のように尖りすぎて悪い方向で目立つ奴はどうにもならない。

でもここでのモンスターという分かりやすい敵は、手段を問わず相手の息の根を止めればいい、非常にシンプルで分かりやすい。

「まあいいんじゃないの？でも由比ヶ浜はいいのかよ？」

「うーん、本当はゆきのんと一緒に訓練できればいいと思ってたけど、あたしはあたしのやれることをやるよー！」

「ありがとう由比ヶ浜さん」

「その分今のうちゆきのん成分を補充するよ！ゆきのーん」

「由比ヶ浜さん近いわ」

「またも百合百合ですか、俺は慣れていますが材木座と戸塚には刺激が強いんでは無いでしょうか、と見てみると案の定顔を赤らめてる二人、これからこれが標準だから今のうちに慣れておこうぜ？」

「雪乃先輩、ファイターの訓練に飽きたら私のところにも来てくださいいね？」

「一色も百合空間に混じったので雪ノ下はサンドイッチ状態、俺も混じっていいですかね？」

「と思つたら雪ノ下が睨み付けてきた。」

「なんで俺の思考こいつに駄々漏れなの？」

「そんなこんなで一ヶ月の訓練生活が経つ。」

「結局雪ノ下は片手剣を使い補助魔法を使う魔法剣士のスタイル落ち着いた。」

「身体能力が向上したはずなのに何故か体力がないのはいつも通りなので補助魔法で身体強化や相手の弱体化を狙うのは妥当な選択と言えよう。」

「メインアタッカーはロングソードの材木座、ブロードソードの雪ノ下、戸塚は回復と杖での攻撃で前衛支援、後方は弓の一色と魔法攻撃の由比ヶ浜と役割を分担することにしました。」

「んでヒツキーのポジションはっ？」

「俺はなぜかリーダーにされてたからな、当然ながら「女子に戦わせて自分は後ろから指示しかしないと腰抜けな発言したら叩き切るわよ」勿論前衛でバリバリお前らに指示しながら戦うに決まってるだろ」

「八幡、尻にしかれておるな」

「八幡、僕たち頑張るからね！」

うん、戸塚、お前のためになら頑張れる、後ろのでかいのは後で覚えておけ。

第七話

訓練を一通り終えた俺たちは実戦へと赴く、金を稼ぐにはモンスターの牙や爪、骨等を持ち帰り換金所で換金する。

他には冒険者ギルドに掲示されてる依頼をこなすと報酬がもらえる。

依頼は多岐にわたり、モンスターに関するものから清掃業務、アルバイト等もある。

この中ではモンスター討伐が一番簡単だ、モンスターの牙や爪には魔力が含まれており色んなアイテムや日用品の材料になる。

強いモンスターの物ほど強力な魔力が含まれているので高く買い取ってもらえるシステムになっている。

出来高制である為自分たちのペースで出来るのが一番のメリットだ。

やはり帰る方法を探るにはモンスターを倒しながら別な街へと移動して情報を集める方がいいだろうと思う。

陽乃さんもそう思いこの街を出たのかもしれない。

「よし、まずは戦ってみないことにはな、いきなり死んだり大怪我したら洒落にならないから慎重にいくぞ」

まず最弱と言われるゴブリン討伐を目標にする。

最近増えており、田畑荒らされ家畜も食われたりしているようだ。

民家が襲われたなんて話もあるそうでこの辺では駆け出しやあまり実力がない冒険者達の飯の種になっているようだ。

ただこいつらは一匹は弱いが集団になると厄介で。

こいつらに負けると男は殺され女は・・・

考えたくもないので慣れるまでは単体のところを狙う方がいいだろう。

「ともかく単体でいるところを狙うか」

俺が先頭に立ち偵察しながら森を進む。

しばらく進むと一匹で川辺を歩いてるゴブリンを発見した。

「いたぞ、まず俺が奇襲かけるから、由比ヶ浜は魔法で援護してくれ、やつがひるんだら、材木座と雪ノ下で攻撃、戸塚はいつでも回復できるように待機、一色はあいつが距離をとったら弓で仕留められるよういつでも狙いをつけてくれ」

「うーん、ヒッキーほんとにやるの?」

不安げな由比ヶ浜

「訓練の時も練習でやっただろー!よし、いくぞ!」

と俺はゴブリンの前に飛び出し切りかかる

「グギャ？」

ゴブリンは後ろに飛び退いて戦闘体制をとる

「ファイアボール！」

由比ヶ浜の手から炎がゴブリンに襲いかかるが炎のサイズが異様にでかいヤバいと感じた俺は飛び退いて地面に伏せる

「ギャー！」

顔を上げるとそこにはただの消し炭しかなかった。

あれ？ゴブリンは？

「あ、燃えちゃった」

「あ、じゃないだろ、訓練所でいっただんなんな練習してたんだ？」

毎日聞いていた話では一人で練習させられてたとか言っていた、由比ヶ浜のことだから制御が上手くいってないのかと思ってたのだが。

「なんかあたしだけ特別訓練が必要とかですつと一人で練習させられてたから他の人の強さとかがわからないんだ、訓練所の先生は魔力が多すぎて溢れてきているから意識して押さえて使うといいつて言った」

こいつ普通にやると強すぎなのか、アホの子なのに、恐らく強すぎるので別で指導した方がいいと判断されたのかも、もしかしたら天性の才能がすごいのかも。

総武高校に受かったのもそういうのがあったからなんて余計なことを考えてしまう。

「由比ヶ浜、魔力は無限じゃないそうだから。もつと押さえて使ってくれないか？」

「うーんそれ先生にも言われたけど、押さえすぎたりしたら倒しきれなかったモンスターにヒツキーがやられて大怪我しちゃったらあたし嫌だもん」

「・・・そう考えてくれるのは嬉しいけどよ、肝心なときに魔力がなくなりましたじゃ困るだろ。それこそ悲惨な状態になる、それにそうならないようにみんながいるんだからよ」

「・・・そうだね、ごめんヒツキー」

「比企谷くん由比ヶ浜さんをあまり攻めないでくれるかしら？初陣なのだから失敗するのは仕方無いのではありませんか？それにあなたは傷一つ無いのでしょうか？」

「そうです！誰も怪我もしなかったんですからそこを喜ぶべきでは？」

雪ノ下と一色から怒られてしまった。

確かに訓練でモンスターを実際に倒したが教官指導のもとやったので俺たちだけでやるのは今回が初めてだ。

「ま、そうだな、色々試して安全で効率のよいやり方探していくか」

それより由比ヶ浜の表情が暗いのが気になるが。

「由比ヶ浜どうした？」

「うん、訓練の時もモンスターを倒したけどさ、やっぱこういうの慣れないよ、なんかやだな」

「すまんが嫌でもやらなきゃならん、やらないと飯が食えないからな、それにゴブリンとかに襲われた冒険者の話は聞いているだろう？ やらなきゃこつちが悲惨な目に遭う」

由比ヶ浜の性格は知っている。

ただ無理にでも慣れてもらわないといけない。

「うん、ごめんなさい、ヒツキー、あたし頑張るからね！」

「謝るな、それより材木座と戸塚は？」

辺りを見回すと消し炭を材木座が漁っている、戸塚は興味深そうにそれを眺めていた。

「八幡よ！ どうやら爪や牙や骨の類いは無事なようだ！」

意気揚々と換金できそうな部位を取り出して袋に詰め込んでいる。

「これぐらいでよかろう！ では八幡よ！ これからどうする？」

「まあ実際にどんぐらいで売れるかわからんからな、一度買い取り所まで持っていくか」
持っていくと買い取ってくれたがあまりいい額とは言えなかった。

「やっぱゴブリン程度ではこんなものか、新しい武器一つ買えないではないか！ やはり」
「（こはドラゴンを・・・）」

「アホか、俺達は常にノーセーブで残機0でコンテニュー出来ねえんだよ、堅実にいくぞ」

「やはり人生はクソゲーであるな！」

その日また単独や二匹程度で行動しているゴブリンを見つけては討伐を繰り返した。

みんなそこそこ活躍してくれた、材木座の大雑把な剣の振り方に対し雪ノ下は鋭くまさに一撃必殺、気がつくどゴブリンの首が中を舞っている始末だ。

身体強化魔法を併用し常人ならざる速度と力で一瞬で片をつけていた、ただやっぱり長時間の戦闘には向いてはいないようだ。材木座はもう少し頑張ろうな。

戸塚の杖での攻撃は一撃が重いし的確に急所を叩いている。

怪我をしたらすぐ見つけ手早く回復する、判断の早さはさすが元運動部だな。

一色の方はまだまだといったところだ。

一応矢は当たるんだがね。

肝心の俺はというと有効な決定打がないこともあつて陽動や奇襲で攪乱がメインだ。懐に飛び込んで一撃と格好良くやりたいが、まだその域ではないの辛いところ。

それでも一週間なんとか討伐を繰り返した。

「……いらいらでギルドから正式依頼を受けて見ようかと思うんだが」

ギルドからの依頼達成の報酬はピンキリだが、普通にモンスター討伐するよりは稼ぎ

がいい場合もある。

特に反対もなかったのでギルドの依頼が貼られている掲示板を皆で見に行くことにした。

「八幡よ！これなんかはどうであろう！」

「何々？森の奥の沼にバジリスクが増えすぎて困ってます？これってあれだろ、石化してくるやつだろ、みんなで仲良く石像にとか嫌だぞ」

いや待てよ、雪ノ下なら石化されたらそれこそ芸術になるのでは？

飾っているんな角度から眺めるといいかもしれない、主に下から。

と余計なことを考えていたら

「比企谷くんあなたなにか酷いこと考えていないかしら？」

雪ノ下さん勝手に思考を読まないでほしいですな。

「ヒツキーこれなんかどうかな？」

「倉庫整理か、いやこれ報酬低すぎだろ。普通にモンスター討伐した方がいいだろ、それに討伐関係の方が報酬は高いぞ」

「だってこういうのだと誰も怪我したり死んだりすることもないし・・・」

由比ヶ浜は討伐の時もあまり積極的ではなかった、モンスターといえども相手を殺すということに抵抗があるのだろう。

ただ、それらを避けて生活するにはここでは難しい。

「すまんが討伐関係で探すから」

そう言つて見てみると

「先輩！これなんかどうです？」

「何々？オーガ討伐？オーガつて結構ヤバいのだろ、しかもこの辺りにはいないはずでは？」

「良く見てください！このオーガは発見されたときは厄介な寄生虫に寄生されてるとか
でかなり衰弱していたそうですよ！討伐したら報酬はもちろんオーガの死体は好きに
していいつてあります！それにその寄生虫の内蔵の特殊な部位を持ち帰ると報酬上乘
せだそうです！これはやるしかないですよ！」

「そうね、恐らくその寄生虫のせいで弱つてるのでしよう、それにオーガの爪や牙はかな
り高額で買い取ってくれるのではないかしら？これは美味しいわね」

雪ノ下のお墨付きが出たか

「んじゃそれにするか、でもなんで寄生虫に寄生されてるつてわかつたんだ？」

窓口で色々聞いてみたが行つてみればわかるそうだ。

結構楽チンかもと希望的観測を持ちオーガ討伐へと俺たちは繰り出した。

そしてターゲットのオーガはあっさりと見つかった。

見つかつたのだが、厄介な寄生虫に寄生されてるといふ意味がわかつた。時折歩いているオーガの体のあちこちを突き破つて芋虫のようなものが顔を出しては引つ込めてゐるのだ。

オーガ自体もフラフラしており一目でまともな状態では無いことがわかる。

ゴブリンが数匹オーガの後を付けており多分オーガが倒れたら身ぐるみ剥ぐつもりなのだろう。

「うわあヒツキーあれ倒すの？」

由比ヶ浜は嫌そうだ。

「ん、ん、ま、まあそうだな、ちよつとアレだな」

皆を見ると材木座以外は嫌そうな顔をしている。

「よし、速攻で倒すぞ、由比ヶ浜、俺と前に出てあいつの頭吹っ飛ばせ、上手くいけばそれで終わりだ、失敗してもやり直す隙はあるみたいだしな、他はゴブリンを頼む」

そうして俺と由比ヶ浜はオーガの前に飛び出したのだが・・・

オーガの腹が突然膨れたかと思うと一気に腹が裂け奴が出てきたのだ。

「いやあー！」

由比ヶ浜の叫び声がこだまする。

そして現在に戻る。

第八話

「寄生虫の体液で、デロデロになっている由比ヶ浜の頭を撫でながらブーツとしていると雪ノ下がやってきた。」

「その、由比ヶ浜さんは大丈夫なのかしら？」

「ああ、怪我はしてないがメンタルが限界みたいだ。今日はさっさと帰ろう」

比企谷達は早々に撤収することにした。

報酬とオーガの爪や牙や骨、寄生虫の内蔵等全部合わせると結構な額になったので、風呂に入った後宿舎に戻り由比ヶ浜を寝かせるとこれからのことについて相談することにした。

とりあえず結構な量の報酬を得たのと由比ヶ浜のメンタルの問題もあり、しばらく休みを取ることにした。

「やはり休日は重要だよな」

「あなたは目を離すとすぐ休もうとするじゃない……」

「おいおい、これでも頑張ってる方だぞ、この世界に来て八幡超頑張ってるじゃん。」

まあ学校では隙あらばサボって帰ろうとしてましたけどね、でもここだと帰る場所に

は雪ノ下さんがいるからサボれないじゃないですかー、ヤダー。

「フム、休むのはよいアイディアだ！戦士にも休息は必要なり！生き急ぐ必要もなからうて！」

と材木座がうざったく叫ぶ、声を押さえろよ、由比ヶ浜が起きちやうだろ。

「そうだね、ところで生き急ぐといえは葉山くんたちは今どの辺にいらっしゃる？」

戸塚が心配そうな顔をする。

葉山たちは訓練を終えると俺たちへの挨拶も早々にもらったお金をすべて装備と旅の支度金に変え王都へ向けて出発したのだ。

やつのことだから早く聖騎士になってみんなを導く役に収まり、元の世界へ帰る方法を見つけたいのだろう。

「王都まで結構あるそうだけど、それよりあいつら野宿とか大丈夫なのか？」

「サッカー部でキャンプとかやってみましたしその時も葉山先輩主導してやってみましたから多分大丈夫ですよ！」

と一色はいうが管理された世界でのキャンプと死と隣り合わせの世界でのキャンプではまるで違うのではないだろうか。

でもあいつらはあいつらだ、俺がどうこう考えても仕方がない

「・・・そうだな、あいつらなら大丈夫だろ、それよりも俺たちの今後だ、さしあたって

金の使い道だな」

材木座は強い武器を欲しがったが、俺たちのレベルで強力な武器を持つていても使いこなせないので却下。

かといって防具関連もまだ新品同様なのでそれも却下。

結局貯金に回そうかという話になったが、雪ノ下が異議を唱える。

「貯金もいいのだけど比企谷くん、あなたがこの世界の食事に満足かしら？」

確かにこここの世界の食事はあまり美味しいとは言えない、現代社会の味に慣れきった俺たちには少々厳しいと思っていた。

それは仕方がないことだと皆諦めてはいたが、微量ではあるが醤油らしきものや味噌らしきものを召喚された人たちがなんとか作り上げているらしい。

しかし作るにはかなりの金がかかる、また塩はどうか流通してるものの胡椒等の香料は高額でなかなか手に入らない。

雪ノ下はそれが不満のようだ。

今までは訓練期間もそうだったが討伐終了後は雪ノ下がダウンしていることと、討伐でいっぱいだったのでこの世界の食料事情を調べる余裕が無く、ほとんど自炊をしてこなかったというのもある、それに食堂の食事は格安でとりあえず食べるだけなら何とかなっていた。

「そうだな、正直うんざりしているところはあ、味は単調でただ食うためだけに存在しているものばかりだ、それに米や味噌汁が食いたい、あとマツカンがないのが辛い」

「その味覚を破壊する飲み物ですらここでの価値は下手すると金貨一枚に相当する可能性があるわね。それに調味料が手にはいれれば少なくともあなた方を満足させられるものは作れると思うわ、このお金でなんとかならないかしら」

雪ノ下の料理の腕前はプロ級だ、店に出せるレベルといっても過言ではない、お菓子に關しても同等だが、この世界にはそれを実現する材料をどうやれば入手できるかわからない。

そして米がそもそもこの辺りでは栽培していないのでかなり遠くから取り寄せる必要がありその費用がとんでもない。

「出来るんだったら吉原さん達がどうかしてそうなもんだがな」

實際風呂やトイレや簡易な水道等はどうにか実現している。

ただ食べ物に關してはレベルが圧倒的に低い。

「まあアレじゃね？俺たちの当面の目標は食生活の向上にするか？」

不味い食い物ではやる気もでないしな。

それに一応元の世界に戻るといふ最終目標はあるが、未だに何をどうしていいかわからないし、遠出するほど俺たちは強くはない。

何か直近で出来そうな目標があった方がいいだろう。

「そうね、丁度お休みすることですし街で色々情報や材料を集めましょう」

雪ノ下がそう言うが一名不満げな者がいる。

「食も大事であるが、我々の能力の向上に勤めるのが急務では無いだろうか？」

劍豪將軍こと材木座だ。

「生き急ぐ必要がないと言ったのはお前だろ。それも大事だがまず食い物の方どうにかしようぜ」

「・・・確かにそうであるが、我はそういうのは門外漢なのでな、すまぬが我だけ別行動でもよいか？」

こいつにしては珍しく強気な発言ではある。

確かにこの中では一番女子力？が低そうだしな。

「わかった、いいぜ、その代わり夕方にはちゃんと戻ってこいよ。勝手に遠出されたらこっちも心配だしな」

「是非もない、スマヌな」

次の日から材木座だけ別行動を取ることになる。

比企谷たちは街に出て食材を調べることにした。

第九話

街を歩いて食材関係を見てみるが野菜は普通に売っているようだ、形状も俺たちが知っているのと大差がない、ただ肉と魚はよくわからん、豚肉とか牛肉とかではない、それっぽいモンスターを家畜化している模様、魚に至っては魚というものに属しているということがわかるレベルの生き物が売られている、しかもどれもでかい。

どれも捌く必要があつたり肉はでかい塊だつたりで難易度が高そうだ。

「雪ノ下、あれ捌けるか？」

「出来ないことはないと思うのだけど、毎日やれと言われたら無理ね」

冷蔵庫とかあればいいんだがと思つたが、そういうのは魔法でどうにしているんだろうか？

色々歩き回っていると平塚先生と出会う。

皆この世界に来てから制服はしまいこんでここの人たちが一般的に着ている服に着替えてるわけだがこの人はその上から相変わらず白衣を着ている。

そのファッションセンスはどうかと思うんですがね。

「おお、比企谷！久しぶりだなあ」

この人は相変わらずだ、しかし今の時間この人は何をやっているんだろうか？

川崎達は？

「先生こんなところでなにやってるんすか？」

「ん？ああ私は今必殺技の練習をしておつてな、かめはめ波がもうすぐ完成しそうなのだよ、それで格闘の教官と練習の打ち合わせをるところなのだ」

かめはめ波？マジかよすげえな、ちよつと見てみたい気もするが、というか打ち合わせ？んなもん訓練所ですればいいだろ？この人なにいつてるんだ？

そう思っていると後ろから声がする。

「静！すまん待たせてしまったようだ！ん？その人たちはだれだ？」

振り返ると剥げた頭、ものすごい髭、体は熊のような筋肉ムキムキの『ザ・漢』といった男がやってきた。

「教官殿！大丈夫だ、私も今来たところだな、こいつらは以前言っていた私の教え子達だ」

「ほほう、この子らが例の…なるほど確かに一癖二癖ありそうな面構えだな！ガツハツハ」

平塚先生俺たちのことをいつもいつたいたいなんと説明してるんだろうか、ずいぶんと失

敬なことを言ってるみたいだが・・・雪ノ下は平塚先生を睨み付けてるようだが、実際俺たちはいいい子かと言われると疑問が出るしな、戸塚は別だが。

平塚先生が俺たちのことをマツチヨな男に話をしてるようだ、教官と言ったので恐らく格闘の訓練教官なのだろうか？

と思つて先生をボーッと見ていると表情がずいぶんと違う、なんかすごく嬉しそうと
うか優しい顔つきとかあれはもしかすると・・・

「先生、その人は？」

「うむ！この人は格闘訓練所の教官でな！私がやってみたい必殺技を色々提案したところ実現に協力してくれるとのことできょうやって個人的にいろいろ話をさせてもらったのだよ！」

と平塚先生はその男を紹介する。

「静は魔力の関係かもしれないが一撃がものすごく重くてな、それにセンスもすごくいい、訓練期間中はトップクラスだったし技の開発にも積極的なのだよ、実際に静が開発したシエルブリットという技は魔力をわざと暴発させて殴る力を飛躍的にアップさせ、ものすごく破壊力を実現しててな、岩石なんて一撃で粉碎するレベルだ、それに驚くことにもう教える立場になっていてな、臨時教官として活躍してもらっているのだよ、本当に素晴らしい女性だ」

教官と呼ばれた男は興奮気味に捲し立てる。

「教官殿、ちよつと持ち上げすぎですよ？」

「いやいや、静のことを褒めるにはこれだけの言葉ではまだ足りんよ」

え？ 衝撃のファーストブリットを再現してるのこの人？ なにそのシエルブリットの静は

それより二人でそう言い合ってる空間はなんかアレだ、これはアレなやつだ。

「ねえヒツキー、あたし達もしかしてお邪魔？」

「・・・そうだな、俺たちは退散した方が良さそうだ」

俺たちは軽く挨拶をして引き返すことにした。

「かめはめ波が完成したら披露するから是非見に来たまえ！」

そう平塚先生は最後に言っていたがその披露してもしかして宴が付くものになるんじゃないですかね？

比企谷は引き返しながら思う、平塚先生は元の世界で相手に恵まれなかったが、現状は見ての通りだ、もしかしなくても葉山のいう通り平塚先生は帰るつもりがないと考えるべきか？

歩きながら考えるとパン屋の前に出た。

「比企谷くんパンはあるのだから私たちにも作れるのではないかしら？ パン焼き釜が問

題と思うのだけれど見せてもらって似たような物を作るのはどうかしら？」

確かにそうだ、1から色々やるのは大変だ、真似すれば手っ取り早いしなにしろ道具や環境さえ揃えばこつちには料理スキルマックスの雪ノ下がいる。

俺はパン屋の扉を開けた。

「いらっしやいませー！およよ？おにいちゃん、どったのこんなところで？」

何故かそこには小町が店番をしていた。

第十話

「それは俺の台詞だ、小町、なぜお前がここにいる？」

「んーバイト？」

いやそうじゃなくてなんでここで働いているのかってことなんだが・・・

「小町さん！パン焼きがあがったつす！つてあ！お兄さんじゃないつすか！久しぶりつすー！」

奥から大志が顔を出す。

「なんで奴がここにいる？お兄ちゃん許しませんよ？」

「大志くんもここでバイトしてるんだけど？」

いやそうじゃなくてなんで奴もここにるのかということなんだが

アワアワやっている俺を見かねてか由比ヶ浜が前に出る。

「やつはろー小町ちゃん！」

「あ！結衣さんやはつろーです！」

「小町ちゃん、小町ちゃんのところはモンスターをやっつけるとかしないの？」

「んーそれがですねえ」

小町のチームは訓練終了後も平塚先生が訓練所に入り浸るようになり、戦力が揃わなくなった為川崎沙希のブラコンが発動、大志は討伐に出ることが許されず、ギルドで討伐以外の依頼を受けている状態。結局人手不足の店のバイトをすることになったそう
だ。

川崎はというと俺たちが何時も行っている食堂とは別の結構離れたところの食堂でウエイトレスをやっているとのこと、バーテンの経験もあるから重宝されてるとか、そして小町達はそので夕食をとっているそう
だ。

どうりで最近全く会わなかったわけだ。

「まあ俺としても小町が怪我するのは嫌だしな」

大志と一緒になのは気に食わんが背に腹は代えられん、それに小町一人だと何かあったら大変だしな

「大志！貴様は小町のことを命に変えても守ることを命令する！」

「当然っす！小町さんのことは任せてくださいっす！」

もし小町に何かあったらこいつを八つ裂きにしてやる、あれ？でもそうするとブラコンの姉に俺が八つ裂きにされるのでは？

「いやーお兄ちゃんのブラコンが少し無くなったみたいで小町的にポイント少しだけ高くなったかな？」

「そのポイントはどこで使えればってのはまあおいといてだ、本牧はどうしてるんだ？」
「本牧さんですか？・・・鍛冶屋にバイトに行ってますが・・・」

「どうしたの小町ちゃん？」

「いけばわかると思いますよ・・・」

鍛冶屋の場所を聞いた俺たちは本牧達の様子を見に行くことにする。

雪ノ下は釜の状態や材料を詳しく見たいとのことでパン屋に残り、戸塚も手伝うとのことで一緒に残ってもらった。

物陰からこっそり鍛冶屋を覗くと本牧が店主と話をしているようだった。

しばらくすると店主は奥に引っこ込み藤沢が出てきたのだが

「なんかやけに近いなあ の二人」

「書記ちゃん副会長と楽しそうに話してますね」

「このまま見ててもらちが明かん、話を聞きに行くか」

物陰から店の方に向かう

「あれ、比企谷じゃんかどうした？」

「あ、ああ近くを通りかかったらお前が見えたんでな、ここでバイトしてるのか？」

「ああ、藤沢とここで働かせてもらっている。筋がいいって誉められたよ」

そうやって藤沢の肩を抱く本牧、え？なにやっぱそういう関係なの？

「副会長は書記ちゃんとか付き合ってるんですか？」

俺が何を言おうか迷っていると一色が聞きやがった。

そういうデリケートなことはもっとオブラートに包んで聞きましようよ。

「ああ、そうだよ、秘密にしていたんだがこつちの世界では隠す必要がなくなつたんだな」

「隠す必要つてどういう意味だ？別に生徒会は恋愛禁止ではないだろう？」

「そうですよ！知つてたら応援しましたよ！」

「実はな……」

と本牧が話す内容は少々えぐいものだった。

何でも藤沢はストーカーかきされてたそうだが、しかも同学年のやつにだ。

本牧は誰がストーカーか気がついて先生や藤沢の両親に話したそうだが、そいつは藤沢の両親の知り合いの息子だったそうで、全く問題視されず、逆になぜ人の息子をストーカー呼ばわりするのかと逆に怒られたらしい。

そのうちそのストーカーは藤沢の家に堂々と上がり込むようになり藤沢も限界に来てたそうだが。

本牧と付き合ってるのを大っぴらにされると厄介なことになりそうだったので生徒会活動を隠れ蓑に付き合ってたということらしい。

「ここにいる間は少なくともストーカーに悩まされることもないしな」

そういう本牧はスツキリした顔をしていた。

「本牧くんお客さんかねえ？」

奥から店主が出てきた。

「いえ、こいつらは俺達と一緒にこの世界に来た連中でした」

本牧が俺たちのことを店主に紹介している。

「ほう君たちは本牧くんのお知り合いかね？ちよつとお願いがあるんだけどねえ」

と店主が俺たちへ向き直ると

「俺には跡継ぎがいなくてねえ、このまま閉めるより本牧くんに跡を継いでもらいたいんだよねえ、彼は頭もいいし覚えも早いし、何より賢い嫁もセットで付いている、こんないい条件の弟子はいないよ、君たちからもお願いしてもらえんかねえ？」

店主はやけに真剣だ。

本牧も藤沢も照れたり苦笑いしているが・・・

「いや、その、そういうのは当人の問題なので・・・すみませんが急いでいるので失礼します」

俺はそういうとその場から立ち去る。

ちよつとまっつとか聞こえたが早歩きで立ち去った。

「ちよつと先輩！何逃げてるんですか！」

「そうだよヒツキー！」

「あいつ、この世界に残るつもりだ」

だから小町は言いにくそうだったのか

「・・・そうですね、副会長も書記ちゃんもなんだか幸せそうでしたし」

「ヒツキーどうする？」

あんな理由だったらやはり戻りたくは無いかもかもしれない。

「まあいいんじゃない？本当に帰れるかどうかかわからんだ、手に職つけるのも一つの手
だろ」

俺達はパン屋まで戻るがその間皆終始無言状態だった。

第十一話

パン屋では雪ノ下が店主と話をしていた。

何でも製法を少し変えて味の向上を図るとか、店主もよく了解したな。

「本当に君達は凄いな、よその世界というのは君たちみたいなのは人ばかりなのかね？」

領主のアダムさんも言っていたが召喚されてきた人たちの評判は元々良い、おかげで店主の信頼も得られやすく儲かるかもとやけに興奮ぎみだ。

サンプルで作ったパンを試食すると今までのパンとは雲泥の差だ、雪ノ下さんなにか変なもの混ぜてませんか？

「いや本当に素晴らしい！あんたら家に正式に雇いたいんだがどうかね！」

店主は大喜びだが丁重にお断りした。

代わりに小町と大志待遇をあげてもらうこととパンの材料を融通してもらおうようお願いして俺達は店を出ることにした。

「さて次はどうするか」

「香辛料をどこで入手するかかしら？」

街をあちこち歩き回り情報を集める。

どうか香辛料の類いを扱っているところを見つけたがやはり高い。

原因はやはり運送費の関係だ。

「この辺で栽培するか手軽に大量に輸送できる手段があればな」

中世の頃も胡椒と金は同じ重さで取引されたというからな、香辛料マジ偉大

「その辺はおいおい考えることにしましょう、パン屋さんから塩と砂糖を入手することに成功出来たのだから」

「砂糖はあるんだよな、よくわからんな」

「菓子パンなんかも作れるかしら？少しは食生活に彩りが出そうね」

雪ノ下は嬉しそうだ。

「卵や乳製品も入手可能みたいだし、菓子類には困らんかもしれんぞ」

「焼き菓子なんかできるわね」

焼き菓子と聞いて由比ヶ浜ががぜんやる気を出す。

「本当！ヒツキーあたしクツキー練習したんだよ！ねえゆきのん、クツキー作ろうよ！」

「あ、ああそうだな、うん、由比ヶ浜、材料は貴重だから掃いて捨てるほど材料がたまつたらやろうな」

「ヒツキー酷い！」

プリプリとお怒りになっている由比ヶ浜には悪いが消し炭量産するほど余裕はない

からな

「それより雪ノ下、戸塚、釜は出来そうか？」

「理屈は分かったし全く同じものは難しいけどできないことはないと思うよ」

「レンガとかの建築資材なら安価で手に入りそうね、領主様に相談したらどうかしら？」

「金以外のことなら相談に乗ってくれるとか言つてたしな」

俺達は雪ノ下が焼いたパンを領主のアダムさん元に持っていき釜を作りたいと相談したところ

「うまつ、なにこれ？え？釜がほしい？釜があればいくらでも作れるつて？マジで？」

なんかすぐくフレンドリーに接してきてパンや焼き菓子などを定期的に作るという条件で釜をただで作ってもらえることになった。

ついでにに香辛料について聞いてみたが

「あーそれは私にも無理なのだよ、祝い事とかにしか使えん、むしろ君たちなにか良いアイデアあるかね？」

逆に聞かれてしまう始末、やはり輸送手段がないとどうしようもないらしい

ともかく宿舎の隣に小屋を作りそのなかに釜を作ってもらえることになった。

そしてその晩川崎沙希とはしばらくご無沙汰だったということもあり晩飯を川崎沙希のバイトしている食堂でとろうということになった。

パン屋に顔を出した際ちょうど小町達も晩飯の時間だということで一緒に食堂へと向かう。

「サキサキ、やつはろー」

「あ……」

店に入って早々川崎を発見したが見られてはいけないうところを見られてしまったといった顔つきになって奥に引つ込んでしまった。

「ちよつと待つててくださいいね、小町が行つて呼んできます！」

と小町も奥へ姿を消す。

席についてしばらくしたら川崎と小町がやつてきた

「……店長が休憩していいって」

「この店長いい人ですね！小町が行つて仲間ですのでもたまには一緒に食事したいので休憩取らせてくださいって言ったら即OKしてくれましたよ！」

川崎は慥然とした態度、そんなに俺たちと顔を合わせたくなかつたのか？

「まあ、一緒に食うぐらいいいだろ何かおすすめるあるか？」

川崎は本日のおすすめと書いてあるボードを指差す

「んじゃそれにするか」

注文するが川崎はずつと無言状態

「あー俺たち来ちゃ悪かったか？」

無言で首を振る

「姉ちゃん、もしかしてお兄さん達に合わせる顔がないとか考えてる？」

「大志、そりやどういう意味だ？あと俺をお兄さんと呼ぶな、はたき殺すぞ」

「大志、余計なことというんじゃないよ」

川崎が大志を睨みつける

「比企谷くんあなたが余計なことを言うことややこしくなるから黙ってくれるかしら？それと川崎さん？何か悩みがあるのであれば相談にのるわ、もしかして生活費の問題かしら？それなら小町さんと大志くんの待遇を上げるようパン屋さんに伝えたので・・・」

と雪ノ下が説明しようとしたが

「違う！そういうのじゃない！違うんだ！」

頭を抱えてしまう川崎を見て大志が言う

「姉ちゃんは元の世界に帰りたくないんだそうです。このままここで生活したいってだから元の世界に帰る方法を考えてるお兄さん達や葉山先輩達に合わせる顔が無いって考えてるんつすよ」

「大志！」

川崎が立ち上がり怒鳴る

「おい待て、落ち着け、一体何があつたんだ？」

「そうだよサキサキ、落ち着こうよ」

比企谷と由比ヶ浜が川崎をなだめる

「姉ちゃんも家族にとつて自分が重荷だと思つてるんつす、深夜バイトの一件もそうでしたし、自分がいればバイトしようがなんだろうが親は自分にお金を使わざるを得ない、でもいなくなれば全部京華の為に使われます。それに一応生命保険もかけてあつたんで……それが生きて戻つてしまうと……と考えてるんつす」

「そんな……」

雪ノ下達は一気に暗い顔つきになる。

「あたしだって帰つて京華に会いたいさ、でもあつちの世界じゃ生きるのに必要なお金を稼ぐのは今のあたしには難しいし家族にとつてあたしの存在は大きな負担だよ、でもここなら家族に迷惑をかけることは無いし、生きて行く分なら稼ぐのはそれほど難しくない、モンスター討伐だつてこの間一人でやってみたらゴブリン数匹程度なら全部一撃で倒せたし……」

下を向いて絞り出すような声で川崎が言うと比企谷はめんどくさそうに話しかける。

「あーいいんじゃないね？」

その答えに川崎はびつくりした表情をする。

「まー帰れる方法を考えてはいるが正直俺たちも今を生きるので精いっぱいなんだよな、葉山達はどうかしらんが、それに帰れるかどうか本当のところはわからんしな、どうするかは帰れるとわかったら考えようぜ、本牧なんかは手に職付けようとしてるしいんじやね？」

「そつか・・・比企谷・・・ありがと・・・」

川崎は下を向いたままやはり絞り出すようにお礼をする。

「それとなあ、ゴブリン数匹いるのに一人でやったのか？おまえスカラシップの件まだ懲りてないようだな？」

「・・・どういう意味？」

「お前に欠けてるのは情報収集能力とボツチの俺が言うのもなんだが誰かに相談したり協力を要請する能力だな、おまえゴブリンに囲まれた冒険者の末路聞いたことないだら？」

「一番弱い奴だから誰にでも倒せるってしか聞いてない・・・」

あちやーとした顔をする比企谷、雪ノ下たちもこれはまずいと言った表情になる、格闘教官は脳筋つぽかったから大雑把にしか説明してなかった可能性もある。

そもそも格闘訓練所には女性が少ないからかもしれない。

「小町、大志、お前らは聞いてるよな？特に小町は俺と一緒だったからな、川崎に・・・」

こう、オブラートに包んで優しく説明してあげなさい」

「小町にお任せ！」

「頼んだ、川崎、あとできちんと聞いとけ、俺の口からはこれ以上言えん、あー料理が来たな、早速食べるか」

宿舎に戻った川崎が大志と小町から詳しい話を聞いた際に真っ青になり、二度と一人でゴ布林狩りしようと思わなくなったとのことだった。

その後何だかんだで釜は2、3日で完成、結局なんだかやけに本格的なものが出来上がったしまったが雪ノ下や一色が大喜びしてるから良しとしよう。

これで旨いパンやお菓子が食えるからな。

試しにパンを焼いてみたがこれが旨い。

二度と外食する気が起きなくなってしまうレベルなのだが
「以外と材料費が高くてつくな」

「そうね、食堂の食事は安いものね」

材料費が以外に高くつく

「パン屋で商売しても面白いとは思うのだけれど・・・」

「うーん店を開いてしまうと討伐出来なくなってしまうし・・・」

一応俺たちには帰るといふ目標もあるのだ。

若干揺らいではいるが

「まあその辺は後で考えようよ！それよりいっぱい作って吉原さん達にも上げたらどうかかな？」

「由比ヶ浜にしてはいい提案だ、雪ノ下、練習がてらパンたくさん作ろうぜ、お菓子関係も作ってみよう」

「どういう意味だし！」

そういうわけでパンや焼き菓子などを量産して吉原さんやご近所さんに配ることにしたので、無論大好評だった。

由比ヶ浜に試しにやらせてみたら本当にそこそこ食えるレベルになっていた。

雪ノ下や一色には遠く及ばないがとりあえず食えるレベルにはなっていた。

恐らく余計な材料を入れる余裕がないからなのかもしれないが、桃缶とか

しかしやはり現代日本と比べて圧倒的に手間はかかる、色々相談した結果自炊関係は材料費の問題や加工が大変なので雪ノ下の体力も考えて出来るときにやろうということになった。

第十二話

別行動していた材木座は一人でギルドに行き、他の冒険者に一時的に仲間に入れてもらい討伐に参加させてもらったりしていたそうだ。

他には個人で請け負えるようなボディーガード等、本当に同一人物かと思えるレベルだ。

本人曰く、剣を持っていると勇気が湧いて積極的になれるんだそうだ。

気持ちは何となくわかる、実際イキがった奴が学校にナイフを持ち込んで没収されるなんてたまにあつたしな。

でもただのロングソードをエクスカリバーだの約束された勝利の剣だの言うのはどうかと思うぞ。

あと乱れ雪月花とか虎牙破斬とか言いながら剣を振り回すのは危ないので止めろ。

二週間ほど休みにしていた俺達はまた討伐を開始する。

材木座のレベルは著しく向上しておりちゃんと攻撃は当たるようになっていく上にゴブリン程度なら一撃で胴体を真つ二つ出来るようになっていた。

時折技名を叫びながら斬り付けるわけだが唐突に弧月斬とか言いながら剣を振り回

すのはやめてほしい、血が飛び散って雪ノ下が不機嫌になるからな。

刃物で切り付けながら回復魔法を唱えれば痛みだけ与えることが可能ではないかと戸塚に相談していたぐらいだ。

超怖いです雪ノ下さん。

しかしながら討伐は順調に進み、熊や狼タイプのモンスターも討伐出来るようになってきた。

ただ材木座は休日になっても一人で行動することが多くなっていた。

遅くなる前に戻ってくるし、相変わらずいつもの調子なので特に気にすることもなかったのだが。

2ヶ月ほど経ち、早めに帰った時は自炊をし、ギルドの依頼もたまにこなして余ったお金は貯金、週に1日以上は休みにしてと生活サイクルが安定してきた頃だった。

「葉山達が帰ってくるって?」

「そうなんです! パンを持っていったときアダムさんから聞きました! 聖騎士になって結構活躍しているそうですよ!」

一色が嬉々として情報を伝えに来た。

「何か帰れる情報を掴んだんだろうか?」

「故郷に錦を飾るとかそういうのじゃないですかねー? 聖騎士ってなるのが難しいって

話ですし、葉山先輩って義理堅い人ですしね」

まあこの街は実際この世界に来て一番始めにお世話になったところだし、故郷と
言ってもいいぐらいだしな。

「あたし達で料理をつくつてもてなしたらどうかかな？」

「そうだな、あいつら相当頑張ってるし、帰れる方法をまともに探しているしな」

「比企谷くん、一応私たちも帰れる方法を探すという目標があったと思うのだけれど」

俺達の場合は毎日の討伐で手一杯だしその手の情報もいまいち集まっていけない、やみ
くもに遠出しても自殺行為なので足踏み状態が現状なのだ。

「まあ何か情報掴んでるか聞いてみようぜ」

帰ってきた葉山達に食事を振る待う為にダメもとでアダムさんに話をしたら館の宴
会場とキッチンとお手伝いのメイドさんを貸し出してくれた。

ずいぶんと太っ腹だとおもったら、雪ノ下のパンやら料理が目的だった模様。

雪ノ下は調味料が少ないこの世界でなんとかやりくりしてその辺より旨い料理に仕
上げていたのだ。

アダムさんは雪ノ下に専属料理人にならないかという申し出をすっぱり断られて、た
いそう残念そうな顔になっていたが。

宴会は大にぎわいとなった。

俺たちの他に吉原さん達も呼んだからだ。

雪ノ下はメイドさんたちに指示を出してどンドン料理を作らせていた、でも味は雪ノ下が作るより若干落ちてる気がするのが謎だ、同じように作ってるのにな。

帰ってきた葉山達はずいぶんと高そうな上級者っぽい装備になっていた。

それこそゲームとかに出てくる聖騎士そのものの格好だ。

王都で国王から直々の依頼をこなした際にもらったとのこと。

なんでも国王に元の世界に帰るための情報が何かないかと聞くため謁見しに行った際、ちようど遠出していた王女がオーク達に襲われたと情報が入った為、謁見中の葉山達がそのままオーク討伐隊に組み込まれて色々あった末に寸でのところで王女を救出したとか、なにその出来すぎた話は？寸での所ってアレか？くっころって奴か？

他にも西の山に発生したワイバーンを討伐したとか、古戦場から唐突に湧いてきたスケルトン達を葬り直してやったとか、モンスターが異常に集まっているところを叩いた時は王様から一部隊を貸し出されそれを指揮しながら殲滅したとか。

材木座がものすごく羨ましそうにしてたが、悪いが今の俺たちには無理だからな？

なんかどっかのRPGのお使いイベントみたいなのをこなしているように聞こえて非現実感半端なかったが、葉山や三浦達の顔つきを見るとベテランの冒険者と言った風貌に変化している気がした。

ちなみに三浦の格好は三角帽子をかぶったザ・魔法使いといった格好だ、そのうち箒に乗って飛んで行ったりしませんよね？

戸部は相変わらずベイベーといつも調子、こいつは槍を使った攻撃を得意としているようで、なんかを宿している的感觉の凄そうな槍を王様からもらったとか、材木座が物欲しそうに見ていたので試しに触らせると一緒に外に出ていったみたいだ、しばらくすると外から無双三段とか流星衝とか聞こえる、王様からもらったものをおもちゃにするなよ、つか戸部もやベイベーわとか言って笑ってる模様、あいつらいつの間にも仲良くなったの？

大和は材木座と同じ大剣使い、こいつも持っていたら殺してでも奪い取るというコマンドが出そうな剣をもらったそうだ。

でもこいつは今一なに考えてるのかわからん、大岡もなんかもらったそうだが相変わらず童貞感丸出しで女子に話しかけてるので簡単にあしらわれているようだ。

海老名さんはプリーストだが回復魔法の他に補助魔法も使うんだとか、完全にパーティの補助担当をこなしてるようだ。

この人の格好は某RPGの白魔導師とそっくりな格好をしているからコスプレにしか見えない、本人もそのつもりなのかもしれない。しかも相変わらず葉山に俺のそばにいくように進言している模様。

ハチハヤハヤハチとかブツブツ言ってるんだが、この人この世界の人達に新しい扉を開かせたりしてないだろうな？

「せっかく大活躍して帰って来てもらっても寝るところがあればじゃあな」

宴会は終わり、何故か二人だけの状況にされ宿舎に戻ることにした。

歩きながら葉山と話すはめになったんだがこれ仕組まれてないよね？

「俺たち王都にいるときははずっと宿屋暮らしだったからね、ここが第二の故郷みたいなもんだから逆に落ち着くよ」

「悪いがお前らの宿舎は手入れもなにもしてないぞ」

「まあいいさ、それより平塚先生たちはどうだい？帰る気はありそうかい？」

「平塚先生は無いだろうな、必殺技の研究に余念がないし理想の相手見つけちゃまっている、今日の宴会の様子見ただろう？教官の惚気話ばかりだ。小町の話によると宿舎に帰らない日も有るそうだしな」

あの人毎日が楽しくて仕方ないようだ。

「そーいやかめはめ波の完成披露会に行つたがとんでもない目にあつたんだよな」

「かめはめ波か、それはちよつと興味あるな」

葉山といえども男子である、興味がないわけがない

「ホントに手から火とも水ともなんとも言えない光線が出て標的を吹っ飛ばしていたん

だが、例のアニメと違って出した瞬間先生の周りに衝撃波がでて周囲の人全員吹っ飛ばすでな、俺たちも危うく吹っ飛ばされるところだった」

「ビームみたいなものかな？しかも周りも巻き込むのか、恐ろしいな」

「光線の本体も魔力ともなんとも言えないものらしい、光線の周囲の物まで吹っ飛ばされるんだよ、先生大喜びだった」

ついでにとファースト、セカンド、ラストブリットを見せてもらったが、本当に岩石を素手で粉々にしていた。

原作同様三連撃で使うようだが、一発で十分だろ。

次は霸王翔哮拳を開発するかとか言っていて教官と楽しげに会話していたしな。

何でも武器を持った奴が相手なら霸王翔吼拳を使わざるを得ないだろう？

だと、今のあなたには要りませんよね？

「どのみち前にお前が懸念していた帰る邪魔をするってのは無いだろうから安心しろ、あと川崎も本牧も藤沢も帰れると言っても拒絶するだろうな、一応理由聞くか？」

「聞いたところで俺がどうにかできる問題なのか？」

「さあ？お前なら悪化させるかもな」

「手厳しいね、んじや聞かないよ、その時になったら本人たちに判断させようか」

「そうだな」

「君たちは？」

「・・・そうだな、ところで何か情報は掴んだか？」

「今更か？さっきの場で君も誰も聞かなかったから本当は帰りたくないのかなと思っただけだ」

「あの場の雰囲気ではじめな話できるかよ、俺だつてたまには空気を読む」

「君が空気を読むとは恐れ入ったね、んじゃ一緒に帰るのを期待してもいいってことか？」

「それは・・・どうだろうか」

その答えに葉山は一瞬渋い顔をするがすぐ元に戻り

「・・・まあいいさ、少しだけだけど手に入れたよ、国王に貸しを作ったから色々資料見せてもらったり話を聞かせてもらったからね」

葉山の情報によると先代の王の時代、国王命令で物体の転送の研究をしていた魔導師がいたそうだが国王が崩御した際に魔導師が失踪、葬儀や城内の体制変更のゴタゴタの中で、研究資料が紛失したり担当が異動になったりして研究施設がどこにあるかも分からなくなっているとのことだった。

「その研究内容は戦争の際の兵站を地図を媒体にした魔法を使いあちこちに転送させるというものだったらしい、つまり術者は転送する場所とされる場所どちらにいらなくても

いいってわけだ、なんか俺たちがここに来た状況と似ている気がしないか？恐らくそれが関係してるんじゃないのかと思ってね、これは比企谷にも伝えた方がいいかと思つたのが今回帰ってきた理由の一つだよ」

「誰かがどこかで異世界の俺たちを辺境の地へ転送したつてか？でも地図を見ながらなんだろ？こつちの世界に俺たちの世界の地図なんて無いだろ」

「確かにね、しかも研究されていたのは数十年以上前だとき、誰かがその転送のやり方を発見したとしても今の状況はつじつまが合わない」

確かにその通りだ、目的があるのならこちらに召喚されてきた人たちになんらかのアクシヨンがあつてもいいはず、初めに聞いた領主の話でも面倒事として処理されてるみたいだし……

考えを巡らせるがよくわからん

「まあ、調べて行けば目的もわかるんじゃないか？ところで今日の料理は大分美味しかったね」

「当然だ、雪ノ下と一色が頑張ってくれたからな」

「そうか……パン焼き釜も作ってもらったんだろ？君たちはこれからどうするんだ？」「そうだな、お前見たいに思い切つた行動するほど俺達は強くねえからな、どうしたらいいか正直分からん」

「それはこつちも同じさ、勢いで聖騎士になつて情報は得たがどうしていいか分からない状態だからな、手始めに陽乃さんでも探してみるよ。あの人なら何か掴んでるかも知れないからね」

陽乃さんは王都でも有名で、どの辺に行つたかはおおよそ検討はついているのと。と。

「あの人はどこでも目立つんだな」

「ヴアルキリー陽乃と女神めぐりのコンビはどここの酒場でも有名だよ」

「おまえ酒場つて酒飲んでんのか？」

「こつちの世界じゃ年齢制限とかあつてないような物さ、大体さっきの宴会場にもあつて皆飲んでただろ？ たしなむ程度なら問題ないし情報を集めたいなら酒場が一番だよ、俺も国王の依頼を受けたつてことで少しは有名だからどこに行つても誰かしらは話しかけてくるしな」

え？ お酒なんてあつたの？

何でだれも教えてくれないの？ 俺ジュースという名の果物のしぼり汁しか飲んでないんだけど。

「そ、そうか、リア充はどこ行つてもリア充だな」

「なりたくてなつてゐるわけでも無いんだけどね、君たちが羨ましいよ」

「何のことやらわからんな、それより陽乃さん見つけたら雪ノ下が心配してるとて伝えてくれ」

「ああ、任せてくれ」

俺たちはそれぞれの宿舎に戻り寝ることにした。

第十三話

宿舎に戻るがなかなか寝付けな、しばらくすると騒がしくなった。皆戻つて来たようだ。

材木座は酒が入つてフラフラになつており戸塚が引つ張るように連れてきていた。

「我は材木座義輝……太古に作られし最高の力なり……我は力であり、生命にあらず……弱き生命体よ、きえされ！」

酔つぱらつてゐる材木座がなんかアホなこと言つてゐる、戸塚に迷惑をかけるな、バニシユデスで消滅させるぞ。

「すまんな戸塚、アホの面倒見てもらつて」

「いいよ、僕も楽しかつたし、久々におもいつきり楽しんだよ、八幡はどうだつた？」

戸塚も酒が入つてゐるのか？ なんだか顔が赤い、ヤバいすごく色っぽい。

「ああ、そ、そうだな、戸塚も酔つてゐるみたいだしもう寝た方がいいんじゃないか？」

「うん、そうさせてもらうよ、八幡おやすみ」

戸塚の色気にくらくら来たので炊事場で水飲んで落ち着くことにした。

炊事場に降りるともう皆寝たのか宿舎の中は静かになっていた。

瓶に入っている水を飲み椅子に座つて一息入れると月明かりに照らされた外を眺めながら考える

「これからどうしようか・・・」

葉山達は元の世界へ戻るための情報を得るためどんどん先へ行こうとしている、反対に平塚先生や川崎たちはこの世界に残る理由が出来てしまっている。

俺はどうしたらいいんだろうか？いや、どうしたいんだろうか？

ふと先ほどの葉山との会話を思い出しあることを思いつく、でも実現は難しそうだなとすぐさま考えを否定してぼーっとしていた。

「比企谷くん？」

唐突に名前を呼ばれて振り返ると雪ノ下が立っていた。

「こんなところで一人でどうしたのかしら？とうとう闇の眷属にでも目覚めたのかしら？そうなると早々に首を跳ねないといけないわね」

ニコニコしながら隣に座ってきた。

「おまえの口から闇の眷属という言葉が効けるとはちよつと前までは思いもしなかったぞ」

「あら？本当にいるらしいじゃない？近寄りたくはない存在だと三浦さんが言ってたわよ？そう言えばあなたは元の世界でもそんなことを言ってたのだったかしら？名も無

き神谷くん」

と雪ノ下はくすくすと笑う

「まだ覚えていたのかよ、俺の黒歴史を掘り返すな、それよりお前アルコール入ってるな？ さっさと寝ろよ」

ナチュラルに隣に座ってくる辺り相当酔って無いですかね？

「いただいたのは少しだけ、でも眠れなくて、これからのことを考えると」

雪ノ下はうつむいてしまった

「葉山君達は遠くに行つてまで色々調べてくれているわ、でも私たちは毎日を生きるのに精いっぱいよ、今日あたりためて思い知つたのよ」

「あいつらはあいつらだ、俺たちは俺たちのペースでやればいい」

「不安なのよ、この世界に飲み込まれそうで、平塚先生達のように」

「別に飲み込まれてもいいんじゃないかね？」

「え？」

「そもそも帰れるかどうかは不確定すぎる、さつき葉山に聞いた話だが・・・」

先ほど葉山が得た情報の話をする

「そんな感じであいつも調べてはくれているが結局何もわかってないのが現状だ、全部無駄になるかもしれん」

「そんなことは無いと思うわ、きつと方法はあるはずよ、やはり私たちも王都に向かいましょう、そして情報を集めて……」

興奮気味にまくしたてる雪ノ下、焦っているのは目に見えてわかる

「落ち着け雪ノ下、さつきも言っただろ、俺たちのペースでだな」

「落ち着けるわけないじゃない！このままじゃいつかきつと誰かがモンスターに殺されてしまうわ、ゴブリン達に鬨り者にされてしまうかもしれない、それは明日かもしれないのよ！もう嫌よ……」

雪ノ下は下を向き震えている、泣いているようだった。

気丈にふるまってはいるが雪ノ下も所詮はただの女の子だ、アルコールが入って精神的につらくなっているとさつきが爆発したのかもしれない。

その状況に何もできないでいるとさつきよぎった考えがまた浮かんできた、出来るだろうか？いやこいつと今いるメンバーとならできるかもしれない。

「なあ雪ノ下、俺たちのペースってのも悪くないと思うんだが」

「今言ったでしょう！それでは」

「ちよつとだまれ、皆起きちやうだろ」

話が進まないのて手で雪ノ下の口をふさぐ、なんかいけないう事しているような気がしてちよつと興奮したのは内緒だ

「いいか、情報を集めるには戦うのが必ず必要なわけではない、ここまではわかるな？」
雪ノ下はコクコクとうなづく

「さつき葉山と話したんだがあいつの情報源は国王のどこか酒場だそうだ、酒場に情報が集まるからあいつらも酒をたしなむとかなんとか言つてた」

雪ノ下の口から手を放して話を続ける

「だからよ、俺たちで酒場を作るってのはどうだ？酒がよくわからんってなら食堂だ、お前の料理は領主の奴も認めるぐらいの腕前だ、ともかく人が集まる場所を作る、宿屋も兼任してもいいな、酒場兼食堂兼宿屋だ、俺たちもそこに住む、平塚先生たちもだ、葉原さん達も住まわしたりして、異世界組皆で住めるようにしようぜ、後はそうだな、葉山達の部屋を特別に用意して帰る場所つくってやろうぜ、葉山達は王都じゃそこそこ有名らしいからな、あいつらが寝泊まりしてるってだけで人が来るかもしれん、要は葉山達を客引きパンダにするわけだ。人が集まれば情報も集まる、そうやって色んな情報を収集して異世界から来た人たちが皆でシェアしていけばいいだろ」

「・・・まったくあなたはいつも斜め上の解決策ばかり思いつくのね、葉山くん達を利用するなんてあなたらしいわ、でも開店資金はどうするのかしら？食材を卸すルートはどこに開店するの？」

「そこはまだ考えてない、資金は宝くじみたいなのと一発でかいのを当てるのかな

「い気もするし食材は狩りに出かけたたりすればなんとかなるか？」

「ふふふ、やつぱりそこまでは考えていなかったのね、でもその考え一口乗るわ」
「つい言ってしまったが本当にできるのだろうか？」

「とんでもないことを言ってしまったのではないだろうか？」

「あなたや由比ヶ浜さんには助けられてばかり・・・出会ってからずっとそう、ずっとあなたを助けてくれる、そうしてまたあなたに依存してしまう・・・本音を言えば宿舎を選ぶときあなたと一緒にならばと淡い期待をしていたのよ、良くないことよね」

「勘違いするな、俺にもかかわってくる問題だから解決策を考えているだけだ、それに今は非常事態だ、陽乃さんが言っていたことを気にするなら元の世界に帰ってからのしろ、今は一人でもうにか出来る状況じゃねえだろ。だから関係ないし今の俺にはお前が必要だ」

陽乃さんにさんざん共存症だのなんだの言われたが所詮は平和な世界での話。

この世界では共存だろうが共生だろうが生き延びた奴の勝ちだ。

帰るといふ目標がある以上それまではこいつ等と何としても生き残る必要がある。

さしあたって雪ノ下の料理スキル、こいつを活用していくしかない気がする。

これは俺たちにとって大きな武器だ。

気が付くと雪ノ下は目を大きく見開いてこちらを見ている

「私も・・・あなたがいなくなったら私はこの世界で自分を見失ってやみくもに進んでいて死んでいたかもしれない、比企谷くんあなたがいて本当に良かった。ありがとう」
微笑む雪ノ下といつの間にか正面から向き合う格好になっていた。

月明かりが雪ノ下の顔を照らす、はかなげなその顔に今にも吸い込まれそうな気がした。

二人とも無言で見つめ合うことになる。

いつの間にか二人は手を握り合っていた。

そのままお互いを引き寄せるように徐々に顔が近づくが唐突にそれは止められる。

「ちよつと中二押さないで！」

「材木先輩重いです！」

「良く見えぬだろうが！」

「僕も見たいんだけど」

振り返ると壁から頭だけだった4人がいた

「・・・いつからいたんだ？」

「ゆきのんが泣いていたあたりからかな？」

あーちよつと大声出して興奮気味にしゃべってたからな、それで起きちゃったかって今の見られてしまったということだよなあどう考えても。

雪ノ下は顔を真っ赤にしてうつむいていた。

「八幡よ、今先ほど何をしようとしていたかはさておいてだ我もそのアイディアに乗るぞ、ついでに弁当の宅配なんかもあるといいかもしれないな」

休もうと言ったのに一人で仕事を請け負ってたりしたこいつが真っ先に乗るってことが信じられないんだが、しかも新しいアイディアを提案してるし。

「僕も賛成だな、由比ヶ浜さんと一色さんはどうか？」

「賛成です」

「だとよ雪ノ下、俺たちの目標は酒場件食堂件宿屋をつくるってことでいいな？ 帰る情報はそので集める」

雪ノ下はうつむきながらコクコクとうなづく

「よし、目標も決まったし寝るか、んじやあお休み」

と寝ようとするが

「その前にヒツキー今ゆきのんに何しようとしてた？」

由比ヶ浜が怖い顔で睨んでくる、一色も一緒に睨んできている、え？ なんで俺睨まれてるの？

「全くりア充は度し難いものだな、なあ戸塚殿？」

と材木座はやれやれとしたオーバーアクションをとりつつ戸塚と一緒に部屋に戻つ

てしまった。

ちよつとマテ、俺だけ置いていくなよ。

「先輩、寝る前にちよつと話し合う必要がありそうですね?」

「そうだよヒツキー、ここは戦場みたいなどころなんだよ?」

なんですか? あなたの顔が戦場ですよホントつてか雪ノ下さんフォローは?

と由比ヶ浜と一色のよくわからない説教を受けながら雪ノ下を向くと顔は真っ赤でちよつとうれしそうな表情になっていた。

次の日、俺たちは葉山達の元へ向かい、今後の目標について話すことにした。

「そうか、君たちはそうするんだな、それでわざわざ話にきたつてことは俺に何か要求するつもりで来たんだろ?」

「さすが聖騎士葉山様、話が早いな、お前国王と親しいんだろう? コシヨウをはじめとする香辛料や米なんかを格安で入手したい、何とかしてくれないか?」

「それはいくらなんでも無茶苦茶だよ、価値は俺もよく知ってる、そもそも」

と葉山が拒否しようとしたが雪ノ下が畳み掛ける

「出来る出来ないを聞いているのではないわ、出来る方法を模索してと言っているのよ?」
雪ノ下さんブラック企業張りの無茶ぶりありますがどうぞごさいます。

「・・・わかったよ・・・実際のところ輸送の問題をクリアすればいいわけだしね。実は

ワイバーン退治に行った際に奴らの巢に卵が大量にあったのを発見してね。普通は食べるか破壊するかなんだけど優美子と姫菜が嫌がったから、持って帰って孵化させて調教すれば何かの役に立つかもと王様に渡しておいたんだよ。うまくいけば輸送手段に使えるかもしれないしな」

さすがみんなの葉山、グループの奴が嫌がることをしない、いつもは悪化するが今回はいい方向に繋がってるようだ。

でもたしかどつかのゲームみたいにドラゴンに乗った騎士様に寝とられる展開あったりしませんかね？

あれはサラマンダーだから大丈夫か。

そうして葉山達は陽乃さんが向かったと言われている東の領土と出発していった。

葉山達の人気は凄いもので滞在中は若い女性に声をかけられまくっていったようだ。

「学校や王都だけじゃなくてここでも人気沸騰中だな、さすがイケメン様だ」

実際葉山達を見送りにきた比企谷達の他にも見送りに来ている人が山のようにいたからだ

「あなたじゃいくら活躍しても話題にすら上らないかもしれないわね」

「まあな、ポッチが目立ってもいいことなんてないからな」

「そうね、あなたが有名になるとしたら賞金首とかかしら？ウフフ」

「おいおい、そうなると俺は毎日賞金稼ぎの追っかけを相手することになるのか？ 上げなどどこに行ってもキヤーキヤー言われちまうし不本意ながらワールドツアーしなきゃならなくなるな」

「そうしたら私はあなたとワールドツアーに参加しようかしら？ そしてあなたのマネージャーになって追っかけ達の順番をきちんと守らせるようにするわ」

「毎日毎日決闘か、たまには休ませろよな？」

「あら？ 休みの日には私の相手をしないといけないからあなたに休みは永遠に来ないのよ？」

と腰につけた剣の柄を握る、休日はこいつと戦闘訓練？ 休ませてくれない雪ノ下さんマジブラック

「お前は体力ないから俺の相手を一日中なんて勤まらんだろ結構俺激しいの知ってるだろ？」

俺はシーフだから戦闘時は激しく動くが雪ノ下は瞬発力の勝負だ、体力がないから立ち会ってもすぐ体力切れを起こすだろうしな。

と俺は反射的に答えたが雪ノ下はハツとしたような顔をした後真っ赤になって下を向いていた。

「全く、体力の無さを思い出したようだな、口でだったら1日相手してやってもいいぜ、

お前は口の方が激しいからな」

こいつは初対面の時から毒舌攻撃だからな、最近大分柔らかくなった気もするが気は抜けない、例えば今現在がそうだし。

と答えた後、あれ？なんか話が変わる風に変な風に運んでないかこれ？と感じる

雪ノ下を見ると

「バカっ」

と脇腹をこづいてくる。

後ろから強烈な視線を感じて振り替えると由比ヶ浜と一色がすごい顔で睨み付けていた。

「ヒツキー、激しいの知ってるだろとか口の方がとかって……まさか、その、しちやつたの？」

「雪乃先輩、一日中口で先輩の相手ってその……うわだめです。想像したら恥ずかしくなってきましたごめんなさい」

何でこいつら文句つけてるんだ？

「その、ごめんなさい……言い過ぎたわ」

雪ノ下が赤くなつて顔を手で押さえてしゃがみこんでしまった

「八幡、そういうのはちよつと早いんじゃないかなって僕は思うよ？」

おい戸塚何をいつてるんだ？

「全く後半のエロトックは置いてどこぞのボニーとクライドじゃあるまいし、懸賞金かけられたなら我も付き合つてやるから仲間にいれろ」

は？エロトックってなんだよとさっきの会話を思い出してみると・・・

「ヤバい、俺死んでもいい？なあ材木座その剣でこうスパツとやつてくれない？マジ死にたい」

やれやれとオーバーアクションをする材木座

「八幡よエロトックでセクハラするのは目標が達成してからじつくりやればよかろう？とりあえず金策だ、何か無いかのう？」

ナイス材木座、話題を切り替えるとはたまには役に立つな！

「中二の言う通りだね、ヒツキーあたしはいいよ？」

ナニがですかね由比ヶ浜さん

「先輩が望むならわたしも・・・」

一色さん俺はなにも望んでいませんよ？

「そうね、目標が達成した暁には・・・」

そうですねその暁には雪ノ下さんには沢山働いてもらいますからね

「八幡！セクハラはダメだよ！」

うん戸塚の言う通りだ。

「当たり前だ」

同性の戸塚にならセクハラしてもいいかな？

ダメだよな、守りたいこの笑顔セクハラダメゼツタイ

「話が進まぬのう、戯れ言はおいといてまずは金だ、どうする八幡」

なんとこいつに諭される日がくるとはな

「屋台で雪ノ下のパンやら菓子やらを売ってもいいが小銭しか稼げんだろうし、かといってギルドのでかい依頼は正直難易度が高すぎる、前のオーガ退治みたくおいしいのはほとんど無いしな」

どこぞの火山にいるドラゴンを退治すると山のような財宝が手に入るとか噂で聞くレベルだがそもそもそんな巨大な生物を剣と魔法でどうにかできるんだろ？どっかのゲートくぐれる自衛隊のみなさんみたくRPGやミサイルでないと無理だろ。

「例えば何か珍しい物を売ったりとかできればいいんだがな」

「ふむ、ではこの剣豪將軍直々にラノベを書いて売ればよかろう、幸い印刷技術はあるようだし、それにここにはラノベが無いから、パクつてもわからん」

「アホか、お前のはラノベ以前の問題だ、内容より先に文章をどうにかしろ」

「ゴフウ」

その言葉に大分ダメージを受けたようで膝をつく材木座

「珍しい物と言えば僕達がここに来たとき教室ごと来たよね？あそこに何かあったりしないかな？」

その手があつたか、何しろ異世界の代物だからここではプラスチックの物ですら珍しいはずだ

「ナイスだ戸塚、俺の婿になってくれ、俺は専業主夫で頑張るから」

「んもう八幡は冗談ばかり」

と若干顔を赤らめる戸塚、ぐへへやっぱり戸塚はかわいい略してとつかわいいだな

「ヒッキーキモイ！」

「先輩って本当にダメですね、本当に気持ち悪いですごめんなさい」

由比ヶ浜と一色にダメだしをされる、雪ノ下に至つてはため息をついてコメントすらない状態

コメントが無い方が何気にダメージが大きいですよ雪ノ下さん？

「・・・まあとにかく行ってみようぜ？」

この世界に来た始まりの場所へと比企谷達は向かうことにした。

第十四話

「たしかこつちの方だったな？」

来たときのことを思い出し森の中へ入っていく

「木こりの人が来るぐらいだからそれほど深い場所じゃ無いと思うし、馬車もそれほど長時間乗ってなかったと思つたよ」

と戸塚が思い出しながら言う、あの時は不安と心配ばかりでそんなことを全く気にすることができなかった。

さすが戸塚だ冷静さと度胸を隠し持つていたようだ。

比企谷達が森の奥へと歩いていくとほどなくして木が途切れかなり広い場所に出る、正面は壁のような山肌が見える。

「ヒツキー、もしかしてあれじゃない？」

少し奥まつたところに場違いな建造物の残骸があつた。

ここに来たときは気がつかなかったが他にも車や冷蔵庫、テレビやどつかの工場で使っていたと思われる機械等があちこちに転がっておりまるで無秩序な産廃廃棄所のような様相を呈していた。

比企谷達は部室だったものの中を探索したりしたが目ぼしい物は何もなかった。

元々学校の施設だから金品なんてあるわけがないのだが、因みに段ボールに入ったお菓子類は既にアダムさんの腹の中である。

車も数台あった、吉原さん達が色々挑戦しようとしたのか一台はボディの大半やエンジンルームの部品が半分ぐらい無い。

陽乃さんの車も無傷の状態であつたがやはり役に立ちそうは無かつた。

「本牧くんを連れてきて使えそうな物を鑑定してもらえないかな？」

戸塚の提案には賛成だがここではまるで使えない者ばかりだ売れるものかな？

最もこの世界じゃ車なんて役立たずだし壊しても陽乃さんも大目に見てくれるんじゃないか。

戸塚と材木座とあれこれ相談していると後ろから悲鳴がきこえる

振り替えると放題されている冷蔵庫の前で女子三名が鼻を押さえていた。

「どうした？」

「先輩……臭いですう……」

一色さんそれじゃまるで俺が臭いみたいじゃないですか。

「ヒツキー、腐ってる……」

ガハマさんそれじゃまるで俺が腐ってるみたいじゃないですか、まあ目が腐っている

のは本当なんですけどね。

雪ノ下は少し離れた所でゲホゲホ言っている。

冷蔵庫を開けてみるとそこは腐海の森、独り暮らしで冷蔵庫の中身を腐らせたとたまにネットでみるがあそこまではならんだろう。

何か独自の生態系が活動してそうなカビと胞子の海だ。

速攻扉を閉める、何か漏れたり出てきてたりしないよね？

「うえっ、・・・これは放っておくとして、電気の代わりに魔力的なので冷やすことにはできないかな？」

冷蔵庫のようなものはこの世界にもあるが木箱に氷をぶちこんで冷やすという原始的なものだ。

冷蔵庫本体は巨大なクーラーボックスのようなものなので効率はいいはず。

「それができるかどうかは吉原さん達に聞いてみた方がよいのでは無いかしら？」

雪ノ下は色々剥がされてボロボロになった車を見る。

吉原さん達は既に色々試しているし俺たち学生と違って大人だ、専門的な知識を持っている人も居るかもしれない。

「結局売れそうなのは鉄とかかな、本牧連れてくるか」

電気や燃料がないと動かないものばかりな上に飾りやインテリアとして使えるよう

な物がない。

その後本牧と鍛冶屋の店主を連れてきて車とかを見てもらったが車のボディを切つて鎧が作れるかもといった程度、吉原さん達に聞くと冷蔵庫は魔力を使ってそれに使えるように出来るそうだが、魔力を豊富に扱える人が定期的にチャージする必要があるそうで手間がかかるそうだ。

うちには由比ヶ浜がいるから使えるがやはり売れるような代物ではなかった。

「結局ほとんど空振りだったな」

「いえ、冷蔵庫が使えるのは大きな前進よ」

とりあえず食材の長期保存が出来るようになった。

「開店資金どうスツかなあー」

悩みの種はまだつきない。

葉山達が出発して一ヶ月は経った、しかし冷蔵庫は手に入れたものの肝心の資金が手に入らず歯がゆい状態が続いてた。

「こいつのおかげで若干文明的な生活が出来るのは嬉しいが」

「そうね、食材を保存できるのは大きいわ、乳製品なんかは常温ではすぐ腐ってしまうもの、おかげでいろいろチャレンジ出来るわ」

「ウム、我もこの世界でピザが食えるとは思わなんだ」

「タバスコが無いのが残念かな？」

チーズを手に入れたので今日はなんと今雪ノ下と一色でピザに挑戦しているのだ。
「ゆきのん、火力はこんな感じかな？」

そして我らがガハマさんは有り余る魔力で釜の火力の調整をしているのだ。

薪がなくなるとも火力を簡単に調整出来てしまうので超便利。

毎度雪ノ下の料理補助をやっていたので、魔力の調整も上手くなっていき、水を一瞬で沸騰、そこから一瞬で凍らせ徐々に解凍、なんて芸当も出来るようになっていた。

本人曰くゆきのんへの愛の力だとか

ほどなくしてピザは焼き上がった

「ウーン自分で作つていてなんですけど今ひとつもの足りないですね」

一色の意見も最もだ。

「そうね、やはりタバスコやブラックペッパーが必要ね」

やっぱ香辛料だよなあそれよりトマトは減らしてほしかったんだが。

ともかく例によってアダムさんのところへ持っていくことにした。

この世界で宅配ピザは初めてじゃないだろうか？

「相変わらず君たちの料理は美味しいな」

ピザしサイズを一人で食べてご満悦である

「ところでお金は集まってるかね？」

一応酒場兼食堂兼宿屋については相談したが建物となると流石に金がいるとのこと、場所とかについては相談に乗るとは言ってくれているが

「まだまだですね」

「私としても君たちの料理が毎日食べられるようにしたいんだが」

「そんなときはきちんとお金頂きますけどね」

「君は随分とズバズバ言うね、あ！そういえば君たちに葉山君から手紙が来てたんだよ、忘れるとこだった」

と手紙を渡された

宿舎に帰って中を確認するとそこには厄介事が書いてあった。

要約すると、陽乃さんを追いかけ東の領土まで行ったら道中、東の領主一家の馬車とすれ違ったそうだ、何でもクーデターにあつて追い出されたと訴えてきた。

クーデターを企てたのは冒険者を騙った極悪な魔女らしい、初めは気が付かず仕事を求めていたので自分の館で働かせていたら、またたく間に館の人心を掌握洗脳し、相手が魔女と気がついたときには兵隊すらも言う事を聞かなくなり領内を勝手に荒らし始め住民を混乱に陥れ始め、民衆を煽動し追い出されてしまったそうだ。

葉山達は領主を連れて王都に戻り国王に報告、国王は軍を派遣したが向こうの兵隊の

士気は異常に高い上に、城塞都市である為守りも堅牢であり、全く制圧できないのと。と。

捕えた兵士の目はうつろで支離滅裂なことを言っている為おそらく全員洗脳されているといっても間違いない状態、その為ターゲットを館に絞り魔女の暗殺を計画、洗脳された館の人の妨害や人質を取ったり変装していることも想定し、館の人間は全員暗殺対象、もし暗殺に失敗した場合、予め配置していた魔法使い達によつて屋敷を瞬間的に全焼させ、ダメ押しで岩石の雨を降らせて屋敷ごと魔女を葬るといふ計画だそうだ。

それつて暗殺じゃなくてジエノサイドつて言うんではないだろうか？

問題は偵察に行つた者たちの報告から屋敷内に陽乃さんとめぐり先輩らしき人物を発見したと報告があつたことにある。

「んでその暗殺計画が始まる前に二人を救出と、そういう事ようだな、というかこの魔女つて陽乃さんじゃないだろうか？」

「うーん、でもヒツキーこれに兵士の人々が洗脳状態だつたーつてかいてあるじゃん？補助魔法でチャームつてのがあるけどさ、全員にかけるのは無理だよ、しかもずっとみたいじゃん？よほど魔力高い人でもそんなに持続なんて無理だよ、魔力の塊みたいなのがないと」

「なるほど、詳細は王都で相談しようつて書いてるな・・・」

「行こうよ八幡、難しそうだけど助けなきや」

「そうね、もし無謀と言われても私は行くわ、きつと姉さんは捕らえられてるのよ、反撃のチャンスを窺っているかもしれない、下手したら洗脳されてるかも・・・」

あの人が洗脳されて敵側とか怖いんですけど、勝てる未来が見えない。

「確かに心配だしな。よし、行くか!」

「平塚先生にも話してみようよ!協力者は多いほうがいいじゃん!」

「そうですね!みんなで行きましょう!みんなで渡れば怖くないですよ!」

まあ本当に救出作戦に参加するかどうかはともかく、葉山たち以外は王都には行ったことないし、一度行ってみるのもいいだろ。

という訳で平塚先生達に話を持っていったところ、皆作戦に参加する気満々だった。

俺たちは迎えの馬車に乗り王都へ目指すことにした。

王都に着き葉山たちのいる宿屋へ向かう。

「・・・みんな来たのか・・・先生も・・・」

葉山は大分驚いているようだ

「当然であろう!陽乃もめぐりも私の大事な教え子だ!」

堂々とそう言う平塚先生はとっても男らしい。

「では早速作戦の打ち合わせと行くか」

実のところこの救出作戦、国王からは反対されたそうさ。

しかし国王は葉山に借りがあり、王女の後押しもあつて渋々作戦を容認してくれたとのこと、ただし有名人とはいえ一介の冒険者である陽乃、めぐりの命より領地を乗っ取るほどの国の脅威である魔女の始末が最優先である為失敗したら後がないそうさ。

「勝負は一度だけか」

「そうさ、で作戦内容だが」

まず館へ潜入する救出チームと陽動チームに別れる。

東の領地は城塞都市である為陽動チームは城塞都市の正門から進行すると見せかけ注意を反らす。

国王からはなんとか1個中隊を貸してもらうことができたので盛大に正門突破をしようとしてると思わせ戦力を正門に集中させる。

その間救出チームが手薄になった館に潜入、二人を救出するという作戦だ。

「んでどう分かれるよ？」

「比企谷、君が救出チームの指揮を取ってくれ」

「なんでだよ、俺がそんな重要な役務まるわけ無いだろうが、大体魔女に鉢合わせしたらどうすんだ？」

「魔女は正門に引つ張り出すよ、攻城兵器で門を破壊にかかるからね、魔法障壁を張るた

め魔女は出てこざる得ない、前回攻めたときもそうだったらしい」

強力な障壁ほど術者が近くにいないと駄目なんだとか。

攻城兵器とやらは城壁を破壊するぐらいの物だから必ず門のそばで障壁を張る事になるそうだ。

「その隙に館を探索つてか、うまく行くもんなかな?」

「どの道これは俺では務まらない、君たちでない」と

と葉山は雪ノ下を見る

「・・・わかった、俺には選択肢は無いようだな」

「もしも魔女に鉢合わせしたらこれを地面に叩きつけて逃げろ」

と葉山は部隊にこぶしサイズの丸い玉を渡す

「なんだこれ?」

「『異世界の人が考案した誰でも使えるマヒや目潰しなんかの魔法やアイテムを凝縮して封じ込めた物』だそうだ。一言で言うとなスタングレネードって奴だな。効果を聞いたら全く同じらしい、ヤバイモンスターに遭遇したときとかに逃げるときに使う為に作ったとか、試作品だからこれしかない、だから簡単に使うなよ?」

「簡単に使えなかつたら本末転倒だろうが、まあ一応もらつとくわ」

という訳で救出チームは俺たちが、陽動チームは葉山、平塚先生達と分かれることに

なつた。

そして国王から出してもらつた一部隊を率いて俺たちは東の領地に向かつて進軍することになつた。

第十五話

東の領地の正門が見えるところで陣営を展開する。

門扉自体はかなり大きく数人でないと開け閉めは困難に見えた。

城壁の上には既に大量に兵が配置されこつちを攻撃する気満々だ。

「んで侵入ルートは？」

「以前偵察隊が使った下水道がある、そこを使えば館の裏手に出られるそうだ」

ウーン下水道？でもこの際文句をいってる場合ではない。

「侵入の合図はどうすんだ？」

「魔法障壁がはられてからだな、魔女が確実にこちらに来てると確認できる要素がそれしかない」

葉山は部隊に指示し釣り鐘をつく奴を巨大化させたような物を移動させている。

「ありやなんだ？」

「あれは破城槌というものね、あれを門にぶつけて破壊するのよ、近づかなくてはいけない分防御が大変だけど囮としては十分ね」

なるほど流石ユキペディアさん、てもまあ持つてきた物を見ると投石機とか先ほどの

破城槌みたいなのがまだある

「とにかく目立つような物を揃えたって訳か」

葉山が城に向かって投降するよう呼び掛けているが帰ってきた返答は矢の雨、葉山は盾でどうにか防いでいるようだが大丈夫なのか？

「おい、あれ大丈夫なの？」

「隼人があんなんで死ぬわけないし、あんなんパフォーマンスっしょ」

三浦は落ち着いた様子、マジばねえわ。

「第一部隊突撃！第二部隊攻撃開始！」

部隊長の命令で破城槌はゴロゴロと突撃を開始する。

と同時に投石機からの投石も開始される。

投石の初弾は命中、城壁ががらがらと崩れる。

「比企谷、突入の準備をしてくれ、そろそろ来るはずだ」

城壁にはさらに投石が命中する

破城槌が門の前に来て攻撃を開始した時だった

がーん

と大きな音がして投石が弾き返される

魔法障壁が張られたようだ。

「比企谷！」

「んじや行きますか」

俺達は下水道に向かって移動を開始する。

障壁が張られてしまったため、兵器は実質使用不能となったが攻撃の手は緩めないよ
うだ、投石は繰り返し返されているようで下水道の中にも障壁にガンガン弾き返される
振動が感じられる。

下水道の中は単純構造であり偵察隊が付けた目印で難なく館の下に到着した。

館を軽く外から調べる事にする。

なんかやつとシーフっぽいも事している気がするが気にしない、もどうやらぬけのか
らのようだな。

「随分と不用心だな」

「それだけ作戦が成功してると言う事であろう！では中にはいるか！」

意気揚々と正面玄関を開ける材木座、チヨまでよ！少しは用心しろよ！

ともあれ中に入ってみるとやつぱり誰もいないようだ。

人の気配がまるでない。

扉の前は大広間になっており二階へ続く大きい階段がある。

「随分と都合がいいのが気になるがともかく二人を探すぞ」

報告によると二階の奥の部屋に二人はいたそうだ。

その為俺、雪ノ下、由比ヶ浜が二階、一色、戸塚、材木座が念の為一階を探索するこ
とにした。

「探索が終わったらこの階段下に集まろうぜっておい！雪ノ下！待てよ！」

雪ノ下は駆け足で二階への奥の部屋まで走っていつてしまった。

焦る気持ちはわかるがここは敵陣のど真ん中、用心しましょうよ。

雪ノ下を追いかけ奥の部屋の扉を開けるとそこには陽乃さんが一人で椅子に座りお
茶を飲んでいた。

「姉さん！良かった・・・さあ早くここを出しましょう」

「お前急ぎ過ぎだろう・・・めぐり先輩はどこにいるんですか？」

陽乃さんは胸が強調されたドレスの様な物を着ている、ホントこの人は何を着ても似
合うな。

陽乃はカチャリとティーカップを置く

「やっぱ君達も来ていたんだ、隼人が活躍してるって噂で聞いてたからもしかしてと
思ってたけど」

「姉さん！積もる話は後からにしましょう！早くここから逃げないと！」

焦る雪ノ下

「それにしても雪乃ちゃんはやっぱ比企谷くんとガハマちゃんと一緒なんだ」

「こんな時にこの人は何を言っているんだ？」

「今そんな事言っている場合じゃないでしょう！早く逃げないと！それにめぐり先輩は何処ですか？」

「めぐりはここにはいないよ・・・」

「いない？どういう事だ？」

「陽乃はすくつと立ち上がり手を差し伸べてくる」

「比企谷くん、私を連れて行ってくれますよ？」

「その手を雪ノ下が握る」

「姉さん、今は冗談を言ってる場合ではないわ」

「そのまま歩き出すが一瞬陽乃の顔が嫌そうに歪んだのを由比ヶ浜は見逃さなかった。

「ヒッキーなんか陽乃さんおかしくない？」

「そうだな、いつもはウザいくらいに絡んでくるのにおとなしすぎる」

「確かに様子がおかしい、それになんでこの人は一人でここにいたんだ？」

「物凄く嫌な予感がする。」

「そのまま一階に降りると一色達が待っていた。」

「先輩！陽乃さん見つかったんですね！めぐり先輩は何処ですか？」

「下にもいなかっただか、ここにはいないそうだが・・・」

と陽乃の方を向くと陽乃は雪ノ下の手を強引に振りほどいているところだった。

「姉さん、どうしたの!？」

「ねえ比企谷くん、ここで私と一緒に暮さない?」

「何冗談言ってるんですか?」

やっぱり雰囲気異常だ。

「比企谷くんはガハマちゃんのことが大好き」

そう言いながら陽乃は比企谷へと近づく

「でも雪乃ちゃんの事はもつと好き」

囁くように言われてドキツとなる、なんでこの人はこんな時にこんな事を・・・

陽乃は比企谷の顎に手を差し伸べる

「私も比企谷くんの事は大好きよ、雪乃ちゃんには勿体無いもの、でもね今の雪乃ちゃんにあなたを渡したら雪乃ちゃんはあなたに溺れてしまう」

今の陽乃を一言で表すと妖艶である。

色気が物凄い。

「それではあなたの言う本物は手に入らない、だから私と一緒にここで暮らしましょう?」

「・・・ちよつと雪ノ下さん何言ってるんですか・・・」

ズイズイ近づくと陽乃にタジタジとなる比企谷

「雪ノ下さんなんてやめてよ、陽乃って呼んでくれないと意地悪しちゃうぞ」

とおどけたようにポーズを取るが、目が全く笑ってない。

どうかしていると思えない。

「どうしても雪乃ちゃんがいいの？大丈夫、ここの領主になれば重婚出来るのよ？比企谷くんが領主様、私と雪乃ちゃんとガハマちゃんと結婚出来るわ、そして私はあなた達が本物を手に入れられる様導いてあげる。でも私が正妻これだけは譲れないわよ？」

「姉さん！何を言っているの！もしかして洗脳されてるの?!」

「あら雪乃ちゃん、どうしても比企谷くんを渡したくないの？駄目よお姉さんの言う事を聞きなさい！今までずっとそうだったでしょ？今も全部比企谷くんの言いなりになっっているんですよ？」

かなり激しい口調ではあるが陽乃の顔は能面のように無表情だ。

「は、陽乃さん、俺が雪ノ下にお願しているのは一緒戦ってくれと言う事と、旨い料理を作ってくれと言う事だけだね。これってこの世界で生きていくには当然の要求でしょう、そしてこの世界で俺たちには目標が出来た。その目標には雪ノ下も由比ヶ浜も欠かせません。依存どうこうは帰ってからじっくり議論しませんか？」

本当にこんな時にこの人は何を言っているんだ？

さつきから雰囲気がおかしいがまさか本当に洗脳されているのか？

「なんで誰もお姉さんの言う事を聞いてくれないかな？ そんな君たちにはお仕置きが必要ね」

と言うと陽乃は手を上げると空中から刀身が真つ黒な刀を取り出した。

刀からは黒い靄のようなものが立ち上っている

「この刀はこの館の宝物庫にあつたの、一介の領主の癖に宝物庫なんて可笑しいでしょ？ この領主は私利私欲で好き放題やつてたから皆嫌になつてね。私が皆を焚き付けて追い出しちゃつたのよ。国王のところに泣きついた辺りで領民皆で内情バラして追い詰める予定だったのよ？ 国の助成金や国王への献上品すら懐に入れてたからね、これがその一つ、国王に証拠として提出する品を整理してたら見つけたのよ。この刀の名前知ってる？ 面白いことにムラマサって言うんだって！」

喋り終えると同時に陽乃は刀を振る、と衝撃波が比企谷達を襲う

「うわっ」

「キヤツ」

皆吹き飛ばされてしまった。

「だけどね、めんどくさくなくなっちゃって、綺麗な服を着て楽しく暮らした方がお得でしょ

？幸いこの刀のお陰で皆私の言うことに簡単に首を縦に振ってくれるの、元の世界の人たちなんて仮面被らないと言う事一つ聞いてくれない上に私の態度に勘違いするするバカが多くて面倒だったのよ、あ！比企谷くんは別よ？でもそうね、お仕置きはしないといけないから・・・比企谷の手足を全部切断してあげる。雪乃ちゃんもガハマちゃんもお揃いにしてあげるわ、それで私が全部お世話してあげるの、綺麗なドレスを毎日着せてあげる、もちろん夜の相手もしてあげるわ。でも安心して？雪乃ちゃんとガハマちゃんも相手できるように私が手伝ってあげるから」

恍惚とした表情の陽乃に皆は恐怖を覚える。

「やばいぞ八幡、きつとアレ妖刀、雪ノ下姉上殿は刀に乗っ取られてる」

吹っ飛ばされた材木座があたふたと駆けてきた。

「んなもんいくらファンタジーでもあんのか？モノに乗っ取られるとか」

「我一人でギルドの依頼こなしてた時に聞いたのだよ、鞘で呪いを封じているので抜いてしまうと呪いが飛び出し刀に魅入られてしまうんだとか」

呪いとか洗脳並みにやべーじゃねえか！どうすりゃいいんだよ！

「んでどうなっちゃうんだ？」

「欲望を増長させ思いの限りを尽くさせて所有者を破滅させるそうだ、んで破滅させたあと所有者の負の感情を吸収し抜け殻にした後次の人の手に渡るとか」

「それを破るにはどうしたらいいんだ？」

「知らぬが呪いを破るには呪いの媒体を破壊するのが古来からの方法だろう」

「そこは知らないのかよ・・・」

「それぐらいしか方法はあるまい！」

材木座は陽乃に向かって剣を構えた。

その時物凄い振動がして声が聞こえる

「はるさん大変！平塚先生が門の扉壊しちゃった！どうしよう」

あれ？この声もしかして？

「静ちゃんも来てたの？壊したってどう言うこと？魔法障壁張ってたんでしょ？人間に壊せるわけないでしょ！」

「それがなんとかぶりっとおおとか叫んで門の扉ごと吹き飛ばしちゃったの！」

「静ちゃんもなんで私の邪魔をするの！めぐり！戻ってきな！テレポート！」

陽乃がそう言うとしュンという音と共に城廻めぐりが姿を表した。

「はるさんもうやめようよ、こんな続かないよ・・・って比企谷くん達何でここに?!・・・
お願い！はるさんを止めて！」

第十六話

ちよつと戻つて正門前、ガンガン投石されては跳ね返される状態を見て平塚は思うところがあった。

「なあ葉山、これ本当に困になつてゐるのか？」

「障壁が張られてゐるのがその証拠ですが」

確かに実際に攻めるわけではない、その為平塚先生達は実質何もすることがないので手持ちぶたさなのだろう。

「私が行つて強力なのをお見舞いしてやろうか？ 投石だつて有限だろう」

確かに弾数には限りがある、切れてしまつたら比企谷達が大変な事になつてしまふだろう。

「先生とはいえ許可しかねますね、敵の真ん前に立つんですよ？ 大丈夫ですか？」

「武神流は一对多数がその真髄なのだよ。刮目して見るが良い」

そう言う和平塚先生は啞え煙草のまま白衣を翻し堂々と正門前に歩いていった。敵側としては何かの罠ではないかと疑うような光景だ。

丸腰の女性が一人で歩いてきているからだ。

様子を見るためなのか一本の矢が平塚先生を襲う、しかし

「北斗神拳奥義！二指真空把！」

矢はそのまま撃った者へと跳ね返された。

「撃つていいのは撃たれる覚悟のあるやつだけだ！」

さつき武神流って言ってなかったっけ？いつの間にか北斗神拳になってるのはどう
いうわけだ？

平塚先生のデタラメな強さに頭を抱える葉山

「先生ってあんなにかっこよかった？」

「先生ベーワパネーワ」

「それな」

「だな」

もうどうにでもなれと葉山は指示を出す

「先生！好きにしていただいて構いません！でも囿と言うことを忘れないでください
！」

その言葉にニヤリとする平塚先生

「囿として十分な活躍をするさ、でもアレを壊してしまっても構わんだろう？」

「先生、人の話を聞いてくれよ」

「またもや頭を抱える葉山だった。」

平塚先生は猛烈な速度でダツシユをする。

敵側の弓兵は矢を射かけるが全く当たらない上に走りながら矢を跳ね返してくるので弓を射かける者の戦意は喪失してしまう。

そのまま正門前に到着

「なるほど、魔法によって門本体がコーティングされてるようだな。確かにこれでは壊す事は不可能かもしれないが、甘いな」

そのまま平塚先生は門の前で息を整えると

「ウオオオオ！衝撃のファーストブリットオオオオ!!!」

背中から暴発した魔力が吹き出してくる

グオオオオオオン!!!

魔法障壁で覆われた巨大な門全体が波を打つ

「撃滅のおおおセカンドブリットオオオオ!!!」

ガアアアアアン!!!!

門全体が更に歪む

「抹殺のオオオオオ！ラストブリットオオオオ!!!」

バツガアアアアアン!!!!

門扉は壊れなかったが巨大な門扉自体が城壁から内側に吹っ飛ばされる

「やはり私は不可能を可能にする女だな！」

そう言うのとタバコをプツと吐き出す。

扉がなくなつた門には敵が殺到し始めていた。

「ああくそつ本当に壊しちゃつたよもう作戦がめっちゃめっちゃだ」

「隼人、こうなつたら行くしかないし」

「そうだな、そうするしかない、比企谷無事でいてくれよ！全軍前進！目標領主の館！」

葉山達も前進を開始する。

「フム、葉山達も来るか、ならば露払いをせねばなるまいな！」

平塚先生はニヤつとすると

「か弱い女性にワラワラと押し寄せてくるとは言語道断！……しかし実戦で使うのははじめてだな、教官殿にいい土産話ができそうだ」

中腰になると両手を後ろに下げ力を込める

「かくめくはくめく」

手の間に光の玉が出来、それがどんどん大きくなる

「あれは！ヤバイ！全軍停止！全軍停止！」

「どうされた？葉山殿？」

部隊長が葉山の元へ駆け寄る

「今からあの人放つ技は周りも巻き込むから近づくとまずい！今すぐ停止させてください！」

以前比企谷が言っていたのだ。

周囲の人も吹き飛んだと。

「・・・攻城兵器はいらなかったような気がしますな」

部隊長はそう言うと言伝令に行軍を止めるよう合図をする。

「ククク、いいぞ！氣力がみなぎってくる！」

光の玉はかなり巨大化していた。

「波あああああ！」

平塚先生がかめはめ波を放つ、離れていたはずの葉山にも強い衝撃が感じられた。

極太の光線は敵軍の兵士や建物を薙ぎ倒し弾き飛ばしながら城塞内を一直線に進み館への一歩道が出来上がった。

「さあ諸君！陽乃とめぐりの救出に向かうぞ！ついでに魔女をぶちのめしてこようか！」

平塚先生は意気揚々と敵陣の中へ突入する。

「我々も前進しますかな？」

呆れ顔の部隊長は葉山に聞く

「ああ、お願ひします」

平塚先生のでたらめさにもう何も言う気力が無くなった葉山はともかく無心で戦いつつ敵陣の中を館に向かって進むことにした。

第十七話

話は戻って館内

「はるさん！領主の人にお仕置きするだけって言ってたじゃない！もうこんな事やめようよ……」

「あのーもしかしなくても魔女って陽乃さんとめぐり先輩ですか？」

一色が恐る恐る聞く

「うん、この領主の人とっても酷い人だったからお仕置きしよってなって、私達有名人になってたからばれないように変装して領主の人に近づいたの、そして全部上手くいって、証拠品の整理したら突然はるさんが「やつぱやくめた」とか言い出しておかしくなっちゃたの、はるさん、本当にどうしちゃったの？」

「めぐり……めぐりも邪魔するんだ……ふーん……」

陽乃は刀をめぐりに向かって振り上げる

「めぐり先輩……」

俺は反射的に飛び出した。

ズバツ！

「があー！」

痛い、背中が物凄く痛い、この人マジで切ったよ。

ってかこの状況デジャブだな、なんだっけ？

比企谷が振り返ると雪ノ下と由比ヶ浜が悲痛な顔をして叫んでいた。

「比企谷くん!!」

「ヒツキー!!!いやあああ!!!」

雪ノ下と由比ヶ浜が駆け寄ろうとするが薄笑いを浮かべてる陽乃が前に立ちふさがった。

「どいてよ！ヒツキーのところに行かなきゃ！」

由比ヶ浜の手に風が巻き起こり

「ウインドショット!!」

「きゃあ!!!」

由比ヶ浜が超高圧の空気の塊で陽乃を吹き飛ばす。

由比ヶ浜が真っ先に比企谷の所へとたどり着いた

「ヒツキー死なないですよ・・・お願いだよ・・・」

「比企谷くん、死んだら許さないわよ、死んだりしたら殺してあげるから」

由比ヶ浜さん苦しいので抱きつかないでくれますか、後雪ノ下さん錯乱してませんか

?大丈夫ですか?

「ばっかこの程度で死ぬか、ちよつと切っただけだ」

「そっか、いや入学式の時も似たようなことあったな。」

あんときは雪ノ下が車に乗ってたんだけ、今回は乗っ取られた陽乃さんからか、姉揃って間接的に物理ダメージ与えてくるとか、どんだけ仲良しなんだよ。

「比企谷くんごめんさい、私の代わりに怪我させちゃって・・・今回復するからね」
めぐりが起き上がりヒールを唱え傷を癒やす。

「ともあれ陽乃さんの刀を破壊してみるぞ、それぐらいしかやりようがない」
傷が癒えたので早速作戦会議だ。

「それについては八幡、いい考えがある、雪ノ下殿より素早さを上げる魔法を我らに強くかけ、神速で刀を奪いにかかるのよ!我が囀になつて我の攻撃を防がせるから動けなくなつたその時八幡と雪ノ下殿で刀を奪えばいい」

「強くかけすぎると制御不能になるんじゃないやなかつたか?でも考えてる暇はないな、それで行く!由比ヶ浜と一色は援護してくれ」

雪ノ下は材木座、比企谷、自分と魔法を強くかけ速度を数十倍にあげる。

「いたたた、ガハマちゃん、ひどーい、私が比企谷くんを殺すわけ無いじゃん、ちよつとした冗談よ」

陽乃さんは起き上がり体勢を立て直し始めたようだが、まだ少しふらついてるようだ。

今がチャンスとばかりに材木座は魔法で強化された素早い動きで陽乃に襲いかかる

「天翔龍閃!!!」

無論名前だけがスピードは既に人を超えており、瞬間移動したようにも見える、某流浪人のそれ以上かもしれない。

材木座の剣が陽乃の頭上に振り下ろされる刹那

ガキーン!

陽乃は振り下ろされた剣を材木座の体ごと片手に持った刀で弾き返した。

「んなアホな……」

吹っ飛ばされた材木座は信じられないと言った顔をしていたが、陽乃に首を掴まれて片腕で持ち上げられる。

「が、ぐはあ、ぐるじい」

「君は本当にバカだね、雪乃ちゃんに使えるものが私に使えない分けられないでしょう？ 本当になんで君みたいなのが比企谷と一緒にいるの？ 全然ふさわしくないし目障りなだけだ」

陽乃の材木座を掴んでる手が光りだし発熱し始める。

「なんだっけ？そのあまかけるなんとかーってマンガ見たけどこういう技使う人もいたよね」

「ぐるじい、あぢぢあづい」

陽乃の倍はあろうかと言う体格の材木座がジタバタしているのに陽乃は地面に固定されてるかのごとく全く動かない

「紅蓮腕だっけ？」

と陽乃が言う。

ボン!!

爆発音と共に材木座は吹っ飛ばれる

「材木座！しつかり・・・おい！息できるか！意識はあるか！」

比企谷がうろたえるのも無理はない、材木座の顔は黒焦げになり焼けただれていたからだ。

カヒューカヒューという呼吸音が聞こえるのでとりあえずは生きてるらしい
「くそっ！いくらなんでもこれはないだろ！」

陽乃を睨み付けるが何にも感じていないようだ、むしろニコニコと笑っている

「今すぐヒールをかけ続ければとりあえずは死なないんじゃないかな？火傷は厄介だから結構時間かかるけどね、これでゆっくり比企谷くんと雪乃ちゃんとガハマちゃんとお

話できるね」

「は、はちまん、姉上殿、あ、あれはただ操られているだけ、われ、大丈夫」

「・・・材木座、分かっている、もうしやべるな」

比企谷は立ち上がり

「戸塚、めぐり先輩と一緒に材木座を引つ張って一階の奥の部屋で回復治療を頼む」

「うん」

「わかったよ八幡」

「一色、雪ノ下さんの狙いは俺たち三人だ、お前は外に出て葉山達にこの事を伝えて応援を要請してくれ、さっきの話だと正門を突破しているようだからこっから行った方が早い」

「分かりました、先輩、死なないでくださいね」

「雪ノ下と由比ヶ浜は俺と一緒に二階へ上がるぞ、材木座から雪ノ下さんを引き離す」

「うん」

「わかったわ」

「俺たちは階段を上がってこいつを投げる、そしたら皆行動に移ってくれ、閃光と爆音があるから絶対にこれを見るな、耳をふさいでおけ、それでもしばらくはなにも聞こえなくなるからな」

ここで使うしかないだろうな、と葉山から貰ったスタングレネード玉を出す。

まさか陽乃さんに使うはめになるとは、葉山も思わなかっただろうな。

「そつちの話は終わった？お姉さんとお話しよ？」

「話すことは特にはないですね！」

そう言うと同時に階段に向かって走り出す。

「あれれ？どこに行くのかな？」

陽乃さんはニヤニヤしながらゆっくりと歩いてくる。

「ねえ比企谷くん、いえ八幡、私と一緒になる？」

「すみませんがそういうのは間に合ってますんで！」

階段の途中で振り返りスタングレネード玉を陽乃に投げつけ即座に後ろを振り向き

耳を塞ぐ

「物を投げるなんて八幡酷ーい」

陽乃は玉を刀で切り付ける

バーン！！！！

爆音と閃光が走る

！
回りは煙幕で真つ白な上に耳はキーンという音でなにも聞こえない、ともかく二階へ

階段をかけ上がる。

雪ノ下も由比ヶ浜も何とか着いてきているようだ。

陽乃さんの方を見るとうずくまってる模様

流石に効いたらしい。

俺は二人の手をとると、そのまま奥の部屋へと駆け込んで扉を締める、まだ少しキーンという音は聞こえるが十分会話はできそうだ。

「雪ノ下、由比ヶ浜も大丈夫か？」

「私は大丈夫、由比ヶ浜さんは？」

「あたしも大丈夫、ヒツキーこれからどうするの？」

「一応作戦はあるがお前から以外に聞かれると説得が大変だからな」

「・・・まさかまたあなた自分を・・・」

「まず話を聞いてくれ」

とっておきの作戦内容を二人に話した。

「どうしてあなたはいつもそうなの・・・あなたのやり方嫌いだよ」

雪ノ下は悲痛な面持ちで絞り出すように答える。

「そうだよヒツキー、こういうのもうやらないって言ってたじゃん・・・人の気持ち考えよ・・・」

由比ヶ浜はすがり付くように願う。

また言われてしまった、あの竹林で起きたことをもう一度繰り返すのか？

違うな、今は状況が違う、あの時は一人で勝手に思い込み勝手に期待し勝手に絶望しただけだ。

少なくとも今は一人ではない。

「他にやりようがあるかもしれないけど、悪いが今は選んでられない、俺にはお前らがいる、きっちりやれば問題ない」

「でも・・・嫌だよ・・・私上手くできるか自信ないよ・・・」

「二つ間違えればあなたは死んでしまうのよ？嫌よ・・・」

雪ノ下も由比ヶ浜は納得しない

「これはお前らを信頼しているからやれる一度限りの作戦だ、俺はここまで一緒にやって来たお前らを信じる、それでも信じられないなら、俺が信じるお前を信じろ」

「はえ？どういう意味？あたしを信じるヒツキーを信じるあたしを信じろってこと？よくわかんない」

由比ヶ浜は若干混乱ぎみだ。

「はあー、由比ヶ浜さん、この男は私たちを煙に巻くつもりよ、いいわ乗ってあげる、でも失敗したらあのおかしくなってる姉さんのおもちやにされる前にあなたを殺して私

も死ぬわ」

「ゆきのんそれって……うんあたしもやるよ！どうなっても三人一緒だかんね！」

元ネタだとこの後死ぬんだっけ？材木座ならとやかく言いそうだが生憎あいつは治療中だ、ともかく説得は出来た。

「この作戦は一瞬の隙が命取りだ、だから合図代わりにお前らのことを名前で呼ぶ、名字でなく名前を呼ばれたら行動の合図だ、お前らも行動するとき俺を名前で呼べ、覚悟を決める、いいな？」

「え？ヒツキー……うんわかった！」

「由比ヶ浜さん！比企谷くん！姉さんがくるわ！」

扉から禍々しい気配を感じる

「……かなー八幡、さつきは酷かったかな？お姉さんちよつと怒ってるからね、まったくこそこそ隠れて何やってるの？もしかして最後だからって雪乃ちゃんとかガハマちゃん、の初めてをもらってたりして？ずるいぞーお姉さんも混ぜなさいい」

言い終わると同時に部屋の扉がバラバラに切り刻まれる。

部屋に魔王が入ってきた。

第十八話

陽乃さんの体からは黒いオーラのようなものが立ち昇っており体が少し浮いている、ドレスみたいな服も髪も下から風でも流れているのかふわつとしている。

冗談じゃなく本当に魔王になっちゃったよこの人は、本当にいけるのか？

比企谷の背中を冷たいものが流れ落ちる。

「あのー雪ノ下さん「陽乃」・・・陽乃さん、俺達の負けですわ、投降しますんで、でも手足切るのは勘弁してもらえませんか？」

心臓はバクバクだ

「・・・ふーん、今度はどういう作戦かな？負けたふりしてさつきみたいにガハマちゃん
の魔法でふつとぼす気かな？それとも隙をついて雪乃ちゃんが襲ってくるのかな？」

「ホントにもう負けですって、武器も捨てます。さつき話し合っただんですがどうしても
勝てそうにないから命乞いすることにしましたんですよ。由比ヶ浜、離れて座ってる。雪ノ
下も剣をしまつて後ろに下がれ、これでいいでしょう？二人とも離れてるんで仮にな
んかしてもあなたなら対処できるでしょう？」

俺は腰につけていたダガーとショートソードを投げ捨てる

「んで？八幡はどうするの？」

「俺たちの負けです。勝てないので好きにしてください、でも雪ノ下や由比ヶ浜や他の連中には手出ししないでもらえますか？土下座でも何でもしますんで」

「ウーン、どうしよっかな・・・あ！そうだ！お姉さんがファーストキスの相手になってあげる！もちろん八幡の他の初めても奪ってあげるわ、幸いベッドもそこにあるし」

「ちよつと姉さん、こんな時にいつたい」

「そんな・・・ヒツキー・・・」

「ウフフ、大丈夫私が終わったら順番にさせてあげる、でもその時は三人とも手足無くなってるから私が手伝うことになるけどね」

うわ、やっぱダルマにされるのかよ。

そう考えると足がすくんでしまうが氣力を振り絞る。

「そうですねキ、キスをしたいです、俺陽乃さんのこと実は初めて会ったときから氣になつてましたし、陽乃さんに抱きつかれながらキスとかちよつとだけ妄想したりしてまして」

なんか後ろから凍てつく視線が来るんですけど、作戦！これ作戦ですから！

「八幡はエッチだね、でもそこも好きよ」

陽乃さんが近づいてくる。

近づくに従って色気が増して来て頭がボーツとしてしまう。

「八幡、顔を上げなさい」

目の前いっぱい陽乃さんの顔がある、この人に溺れたくなる。

そう頭をよぎるが接近している今がチャンスだ。

俺は陽乃さんが持っている刀の刀身を掴み自分の腹に当てる

「雪乃おお！」

「八幡ごめん！」

背後から魔法で速度を上げた雪ノ下が俺に思いつきりぶつかつた。

ズブリ

刀が体を貫通したのを感じる、と同時に雪ノ下は筋力強化魔法を最大出力で俺にかけその場を離れた。

筋肉が一瞬でメキメキと成長するのがわかる。

そのまま腹に力を入れる、物凄く痛い。

「え？雪乃ちゃん？え？何してるの？ちよつとやめなさい、あれ？抜けない？」

陽乃さんは刀を抜こうとするが腹筋を締めているせいで全く抜けない、今の筋力は某格闘漫画のアンチエインと言われてるあの人に匹敵するかもしれない

「結衣いい！」

横から由比ヶ浜が最大出力で陽乃に魔法を撃つ

「ハッチー！ウインドショット！」

魔法を撃つたと同時に距離をとる。

陽乃さんはまたも吹き飛ばされ壁に激突する。

仕上げだ！

「雪乃！結衣！」

雪ノ下は自分にも筋力強化と速度強化の魔法をかけ由比ヶ浜の前に走り出る

「八幡！いくわよ！」

「ゆきのん！ウインドショット！」

由比ヶ浜が放った魔法で雪ノ下が打ち出さられる。

雪ノ下の狙いは俺の体に刺さった刀だ。

すれ違う一瞬にすべてをかけた攻撃で仕留めにかかる

バキーン！

弾丸のように飛ばされた雪ノ下は刀の根本を正確に捕らえ叩き折った。

柄の部分が宙を舞う。

陽乃さんの悲鳴が聞こえる。

成功したのか？

俺は意識を失った。

第十九話

「・・・ツチー・・・ツチー」

何かとても息苦しい上にうるさい。

柔らかいものが顔に押し付けられて息苦しいのだが

「ブハア、なんだ？どうなったんだ？」

目を覚ますとどうやら由比ヶ浜に頭を抱きしめられていた模様、柔らかいのは由比ヶ浜さんの自前のメロンでした。

「ハッチー！良かった！目を覚ました！」

「八幡、戸塚くん達が来るまで動いてはだめよ」

二人とも心配そうに俺の顔を覗き込んでいる

「俺はどのくらい気を失ってた？陽乃さんは？俺が倒れてからどうなったんだ？」

雪ノ下が刀を叩き折った瞬間、刀身の断面から黒い霧が吹き出し同時に陽乃さんは悲鳴を上げて倒れたそう。

呪いとやらはなくなっただろうか？

俺の腹に刺さっていた刀の刀身はそのままだと危険だと思ったので抜いたそうだが

触つて大丈夫だったのか？

某アヌビス神みたくなならないだろうな。

「そんなに時間は経つてないわ、出血が酷いから戸塚くんを呼んでくるので待つててちようだい」

「ちよつとまで、由比ヶ浜と二人きりの時に陽乃さんが目を覚ましたら目も当てられん、俺の出血は大丈夫だ、それよりお前ら大丈夫か？」

「私たちは大丈夫よ・・・」

「あたしも大丈夫だけと・・・ダメだよ、早く止血しないと」

うーん本当はこのまま戸塚かめぐり先輩のどつちかを呼んできて貰う予定だったが、呼びに行っている間陽乃さんが復活したらヤバいし、このまま引きずってもらつてもいいんだが体がだるいし思うように動けない。

まあ美少女二人に看取られて死ぬのも悪くないな、などと考えていると

「八幡、死んではだめよ、もし死んだら絶対に許さない」

雪ノ下と由比ヶ浜が今にも泣きそうな顔をする、だからそんな顔をするなよ。

まあ休んでれば回復するだろと目を閉じていたら

「八幡！我完全復活！助太刀に来たぞ！」

材木座が叫びながら入ってきた。

なんとか回復治療が成功したらしい

「八幡！大丈夫？僕も戦うよ！」

「比企谷くん！大丈夫？」

戸塚とめぐり先輩も来てくれたか、あの二人を見るだけで癒やされる、と思っていたら。

「ぬう！八幡！どうした？大丈夫か！八幡しつかりしろ！」

巨体がまつさきにやってきて俺の顔をはたき始めた

「八幡！寝たら死ぬぞ！はちまーん！」

うるせえそれって雪山の話だろ

「材木座、ちよつとだまれ」

なんとか声を絞り出す

「城廻先輩、戸塚くん！八幡を助けてください、お願いします！」

「おねがいます、ハッチーを助けて！」

雪ノ下さん由比ヶ浜さん、ちよつとオーバーですよ？

あとさつきから気になってるんだがなんで俺のことを名前呼びなの？

由比ヶ浜さんに至ってはどこのみなしごミツバチですか？

めぐり先輩と戸塚がダブルでヒールをかけてくれたおかげで具合はあつという間に

かなり良くなった、さすが最強の癒やしのコンビだな。

「はるさんは？」

「あそこに倒れています、陽乃さんは妖刀に体に乗っ取られていたようです、妖刀は叩き折ったのでもう大丈夫かと思いますが」

「そっかーよかった」

めぐり先輩は倒れている陽乃さんのところに行く様子を見ているようだ、ヒールをかけた、枕代わりに何かを頭の下においたりとしばらくやっていると戻ってきた。

「気絶してるみたい、休んでいれば大丈夫かも」

本当に大丈夫か怪しいもんだが、そうしていると外がだいぶ騒がしくなった。

葉山たちが到着したらしい

一色と葉山たちが部屋に入ってきた

「先輩！どうしたんですか！大丈夫ですか?！」

「おにいちゃん！」

「比企谷大丈夫か？陽乃さんに何があつたんだ？」

「あー話すと長くなるんだが・・・」

と説明しようとしたら

「わたさない・・・」

どす黒い気配を感じて振り向くと陽乃さんが起き上がっていた。手には先程跳ね飛ばした刀の柄を持っている。

柄からは黒いオーラのようなものが刀身のような形を形成していた。

なんかビームサーベル見たいで格好いいとかのんきに思っている場合ではないよう
だ。

どす黒い気配は大きくなり陽乃さんはそのまま空中に浮いた状態になる

「説明しろ比企谷！」

葉山が怒鳴ってくる

「簡単に説明すると妖刀に支配されているみたいだ」

「妖刀に体に乗っ取られているのか・・・まさか」

葉山も呆然としている

「諸君！ここにいたのかね！探したぞ！」

シリアスな空気をぶち壊すように平塚先生が部屋に入ってきた。

「必殺技を使えるというのは楽しくて仕方ないな！さつきはサイコクラツシャーをかま
してやった！こんなか弱い女性に襲い掛かってくるなんぞ言語道断だから自業自得だ
な！」

か弱い？か弱いってなんでしたつけ？もうこの人何でもアリだな

「ム？陽乃はいったいどうしたというのだ？あれじゃ魔王みたいでかつこいいじやないか！ちよつとずるいな！おい！陽乃！私の話を聞いてくれ．．．ってどうした？こちらを睨んで？よくわからんから遊んでないで状況を説明しろ！」

興奮気味の平塚先生は状況をイマイチ把握してないのか空中に浮いている陽乃さんに近づく

「邪魔しないで！」

陽乃さんが柄を振ると黒い刃が飛んで来て平塚先生を襲った、が平塚先生はそれを簡単に打ち消すと

「ほう、恩師に暴力とはいいい度胸だな、一度お前には思いつきりお仕置きしないと行けないと思つてたところだからちようどいい」

そういうと顔の前で腕を交差させ唸り声を上げ始めた

「ぬおー」

平塚先生の体から白い何かが立ち上つてくる

「おい、葉山あれなんだ？」

「俺が知るか、かめはめ波じゃなさそうなのはわかるが」

あの人またとんでもない技を出すんじゃないだろうな？

「静ちゃん邪魔、どっかにいって！」

陽乃さんが叫んでまた柄を振り上げたがそのとき

「霸王翔哮拳!!!」

はおうしようこうけ、のあたりで食い気味に円盤状の光線の塊が飛んで行き陽乃さんに激突した、あまりにも早くても早くてほぼぶつかった状態しかわからなかった。

ビシャーン

という音とともに陽乃さんが吹っ飛ぶ、柄はここから見てもバラバラになっているがわかる。

「あ、強くやりすぎた」

そのまま空中から落下する陽乃さん

「陽乃さん!」

葉山が走っていきそのまま受け止めた、親方!空から女の子が!でもあーしさんがすごい顔で睨んでた。

「あれ?隼人、なんでここににいるの?あれ比企谷くん?雪乃ちゃんも静ちゃんも?なんでここににいるの?めぐりは?」

雪ノ下や由比ヶ浜から安堵のため息が聞こえる、ともあれこれで終わったのか?

俺たちはどうやら魔女に勝利したようだ。

俺じゃなくて平塚先生が来てたらすぐ終わった気もするが、やはり俺は後方で待機し

てたほうが良かったんじゃないか？

でもまあみんな生きのびたし、こういう感触が味わえるんだから今回はこれでいいか、と雪ノ下と由比ヶ浜が喜んで抱きついてくる感触を味わいながらそう思う事にした。

第二十話

「確か領主の悪行の証拠品を整理していて……!!」

陽乃さんの顔つきが変わる、まずいなこれ、やってたことを覚えているパターンだ。

「比企谷、一体どうなっている？ 魔女は？」

葉山がよくわかってないといった顔だ、そもそもここにいる大半がそういつた顔をしている。

「魔女はここにはいない、初めからそんなのはいなかった、今詳しく説明するからちつとまで」

ともかく今は陽乃さんを落ち着かせないと、俺は一呼吸して気持ちを落ち着かせる。

「雪ノ下、由比ヶ浜、城廻先輩は雪ノ下さんをつれて別な部屋に行つて状況を説明して落ち着かせてくれ、頼む」

あの状態だと身内や近い者が話をした方がいいだろう。

「比企谷くん、ごめんなさい……」

陽乃さんは今にも泣き出しそうな顔だ。

「雪ノ下、頼む」

「・・・ええ八幡任せて、姉さん、言いたいことは沢山あると思うけど今はいいの、行きましょう」

四人は部屋から出ていった。

雪ノ下と陽乃さんの話がこじれても由比ヶ浜とめぐり先輩がいれば大丈夫だろう。ともかく状況説明だ。

皆に状況を説明した。

「そうか・・・妖刀のせいか・・・」

葉山はバラバラになった刀の柄や刀身を拾い上げる

「おい触って大丈夫なのか？」

「一応俺は聖騎士だからな、プリーストも呪いに対する耐性の加護はうけているよ、城廻先輩が影響を受けなかったのはそのせいかもな、これは証拠品として持ち帰ろう、しかし外の連中や国王になんて報告したらいいんだ？」

外では部隊が屋敷を包囲、葉山の帰りを待っているのだ

窓からも包囲している兵士達が見える。

「ともかくここを出ないか？それと葉山ちよつといいか？」

「・・・君がちよつととかいうとろくでもないことを言ってくる気がするんだが？」

「当たらずとも遠からずだな、お前にとつても悪い話じゃないが他の奴に聞かれると面

倒だからな」

比企谷は葉山に何か耳打ちしている。

葉山は驚いたような顔をして拒否したり揉めたりしていたようだが

「わかったよ……俺としては君が解決したと伝えるべきだと思うんだがな」

「俺みたいなのが出しやばってもいいことはねえよ、お前もそろそろ学習しろ」

ちなみに海老名さんはその光景に例によつて鼻血大噴出していた。

あと小町から散々怒られてしまった。

あの時はああするしかなかったし雪ノ下も由比ヶ浜も了承済みだと言つたが俺が丸め込んだんだろうとか言われてしまった。

まあそうなんですけどね、ともかく二度とこういふことをするなど釘を刺されてしまった。

川崎からもきつい口調でバカとか言われるし、平塚先生に至つては一辺死なないとわからないようだなと指をゴキゴキならしながら言ってくるし、やめてくださいしんですまいます。

本牧と藤沢は俺らしいと苦笑いしてくるし、大志に至つては尊敬の眼差しだ、やめろ、おまえに尊敬されてもうれしくねえ、それより小町に怪我させてないだろうな？

陽乃さんが落ち着いた後皆は東の領地から撤収する。

やはり領内の兵士も妖刀の影響を受けていたらしく、現在は皆正気に戻っているようだ。

葉山達は洗脳されていることを考慮して戦ったとかで奇跡的に死者はいないらしい、それより平塚先生がやらかしたことの方がでかすぎる、門の扉は破壊されてるし館から門まで一直線に道が出来ている。

これでよく死人でなかったな、あとでこれどつかから怒られるだろ。

陽乃さんは俺たちと顔を合わせるとひたすら謝っていた。

特に材木座には土下座せんばかりの勢いだったが、当の材木座は妖刀のせいだから、大丈夫だからと逆に逃げ腰だった。

しおらしい陽乃さんを見れるのはかなりレアじゃなかるうか？

それよりも問題は雪ノ下と由比ヶ浜である、呼び方が比企谷くんから八幡、ヒツキーからハッチーに呼び方変わってしまったことだ。

こちらが苗字で呼ぶと無視である、その上

「姉さんと城廻先輩のことは名前で呼んでいたのに……」

「ハッチーはもう名前で呼んでくれないんだ……」

陽乃さんの場合は仕方ないでしょ？

めぐり先輩はつい呼んでしまったんだよなあ、だってしろめぐりって長いじゃん、

とつきについ口に出しちやったわけで、と弁解しようにもなんか目のハイライトを消してこちらに迫ってくるので観念せざるを得なかった。

「わかったよ……雪乃、結衣……これでいいだろ？てかハッチーってなんだよ」

「八幡だからハッチーなんだけどだめ……かな……」

結衣さんそんな悲しそうな目で見ないでくださいよ

「わーったよもう好きに呼べよ」

二人はニコツと笑って俺の両隣に座って満足そうだ、馬車が狭いのも相まつて密着度が半端ない、一色はふくれっ面になっていたがその他の連中はニヤニヤして……もう勘弁してください。

「あー比企谷くん？私のことも名前前で呼んで欲しいかな？雪乃ちゃんだけなんてずるいとおもうな」

陽乃さん、あなた何を言っているんですか？

「先輩、こうなったらわたしも名前前で呼んでもらわないとバランス取れませんよね？」

一色も何を言ってるんだ？バランスってなんだよ。

「うーん、だとせつかくだからわたしも呼んでほしいかな？私のこと名前前で呼んで庇ってくれた時凄く嬉しかったよ？」

めぐり先輩までかよ！

「フム、だと我のことも名字ではなく『よしてる』と呼んでもらう必要が有りそうだな！
我を名前で呼ぶ事を許可してしんぜよう！さあ早く呼べ！恥ずかしがらずに！」

材木座、お前は調子に乗るな、戸塚なら名前で呼んでもいいな。

と戸塚の方を向くと

「あははは、僕は別に戸塚でいいからね？」

クソ！

「まあ、わかりましたよ．．．陽乃さん、いろは、めぐり先輩、これでいいですかね？」

今度は雪乃と、結衣が不満そうだ。

もう誰をなんて呼んでもいいでしょう？

「あれれ？八幡？我は？ねえ？」

これ以上めんどくさくならない事を願いつつ絡んでくる材木座を無視して王都までの道のりをひたすら疲れて寝たふりをして過ごすことにしたのだった。

第二十一話

王都につき、国王に事態は収束したと報告に行くことになった。

どうやら国王の城に滞在していた東の領主もどうやら妖刀に操られて私利私欲を働いてたらしい。

俺たちが刀を破壊した日に突然ぼったりと倒れ、目が覚めたら刀を手にした日からの記憶がおぼろげで、ところどころは思い出せたが、自分のやっていたことの重大さに気が付き、自ら国王に懺悔していたとのことだった。

「・・・というわけで妖刀の力を利用し領地の民を操っていた魔女は私どもの手で始末しました。こちらがその妖刀の残骸です、魔女は霧となって消滅しました」

「さすが聖騎士葉山殿、仲間の救出と妖刀の破壊、魔女を倒すのを同時にするとはさすがだな」

「おほめにあずかり光栄です」

そのやり取りを聞き周りの空気が変わる、雪乃から氷のような視線を感じる、雪乃だけではなく結衣、いろは、戸塚まで睨んでくる、というか全員だ、おまえ何言わせてんの？ 的な空気だ、材木座だけはウンウンと首を縦に振ってすべてを理解したような感じ

だ、チラツと見たら小さくサムズアップしやがった。

葉山には事実と異なる報告をさせた。

東の領主が妖刀に操られて私利私欲を尽くしていたところに魔女が取り入って妖刀を奪い、その力で領内の民を全員操って自分の国を作り王都に攻め込む予定だった。

その計画に陽乃さん達が気が付いて魔女を倒そうとしたら逆に捕えられてしまい、葉山達が救出し協力して魔女を倒して妖刀も破壊したとそういつたストーリーを報告させたのだ。

「陽乃殿も実に勇敢であった、恐ろしい魔女に自ら立ち向かうとは」

陽乃さんもすぐくなくにか言いたいそうな顔をしてこちらをちらつとみたが、すぐいつもの顔に戻る

「もったいないお言葉、身に余る光栄でございます」

「うむ、彼らには十分な報奨を授けよう、そちらのヒキ・ヒキガ？ だったかな？ 貴殿らも葉山殿の下で十分に働いたのであろう、無論報酬は授けるぞ」

「光栄に存知……つます」

雪乃が足を思いつき踏みやがった、気に食わないのはわかるが今は辞めましょう？ 報奨として金貨が何枚か入った袋をもらったが葉山達はものすごい量をもたらしていた、さすが格差社会、さらに東の領主が葉山達に対し困ったことがあったら無条件で協

力してくれるという約束までしていた。

おまけに国を救ったということでパーティーを開催するので主賓として招かれる模様、もはや英雄扱いである。

俺たちは誘われなかったけどね！

報告も終わり王都の宿屋に戻るがその間皆終始無言だ、なんか皆殺気立つてるんですけど？

葉山達は別の宿なので途中で別れたが俺たちの宿屋につくなり雪乃が鬼の形相でこちらを向き

「八幡、正座」

「ハッチー正座して」

「先輩！わたしたちの言いたいことわかりますよね？」

「八幡、僕たちが怒っている理由わかるよね？」

事情を知る皆に囲まれて俺は床に正座させられた。

材木座はニヤニヤしながら離れたところから見えていやがる、わかってくれてるなら援助してくれよ。

陽乃さんは複雑な表情でこちらを見ている、この人もわかってくれてるみたいだな、ただ立場が立場だけになかなか言え出せないみたいだが。

平塚先生や小町達は呆れた感じで見ている、まあそう言う反応だろうな。

「あのなあ……」

「なんであの男の手柄にしてしまうの？何を企んでいるのか正直に白状しなさい」

他の連中も顔が怖い、戸塚も顔が怖い、今だけ天使には見えないかも

「んじやあ言うけどな、正直に話したとしてどうなったと思う？陽乃さんは世直しのつもりだったかもしれないが東の領主は結局は妖刀に操られていただけだったし、陽乃さんも操られてミイラ取りがミイラだ、国王からすると陽乃さんは余計なことしたとかで処罰が下ったんじやないか？」

「それはわかるわ、だから架空の魔女がいたということと納めたわよね？そうじやなくてなんで彼に手柄を取らせたのだったことよ！本来はあなたが今の彼の立場になっていたはずよ！」

雪乃は大変ご立腹のようだ

「いいか？俺たちは名も知らぬ一介の冒険者だ、そいつらが解決しました、というのと葉山のように国王の信頼を得ている奴が解決したというのどちらの方が国民の皆様の心証がいいと思う？」

「それとこれとは関係が……」

雪乃が反論しようとするが大いに関係がある

「それがあるんだな、国王や何も知らん第三者から見れば葉山が解決したとなるとまた聖騎士様がやってくれたと信頼度もアップ、流石葉山隼人様とね、ところが俺たちのような無名が解決したなんてなると不祥事を起こしたことを逆手にとつて脅されたりする可能性とか、詳細が外部に漏れないようにとかで消されかねん、仮に報酬が貰えたとしても適当にくれるだけかもしれないとかで消されかねん、仮に報酬が貰えた？所詮俺たちみたいな無名の冒険者なんてごろつきの集まりなんて認識だからな、それにさつきもあつただろ、奴は東の領主の協力まで取り付けた、葉山達には実績があるし国王に貸しを作つてる存在だから権力者はお近づきになりたいだろうさ、おかげであいつらの知名度はうなぎのぼり、このまま国全体にあいつらの知名度が以上に広がるとどうなると思う？」

「いろんな人から今以上に声をかけられるでしょうね・・・まさか!!!」

「そうだ、情報をより集めやすくなる、それこそ黙っていても向こうからやってくる、それに東の領主の協力も得られるだろ？これであいつにお願いしている香辛料や米の件もうまく運べる可能性が高まつたし、食材を安く入手できるルートも開拓できる可能性が高まつた」

「・・・またあなたは・・・いつもそうやってひねくれて・・・文化祭の時のように・・・」
「まあな、実際文化祭でも今回のように葉山の立場があつたから出来たわけだ、そして

う一つの悩みの種を今回で解決だ」

「何かあったかしら？」

「酒場だよ、忘れたのか？葉山がもらった報酬があいつらの分丸ごと貰えることになって、手柄と引き換えにな、初めこの作戦を葉山に言った時は正直に全部話すとか抜かしたんで、そうなるど報酬が減るだろとなだめすかしてなんとか引き込んだ、これで建築費用なんかの初期投資は問題ない」

「わ、わたしは初めからハッチーのこと信じてたし！」

「さすが先輩です！私も初めから信じてましたよ！」

うそつくな、さっきまで睨んでただろ、調子よすぎだろお前ら

「ごめん八幡、そんなに色々考えてたんだ、僕何も知らなくて・・・」

戸塚はいい、お前はそのままでもいい、材木座は相変わらずサムズアップしてきている。

「ねえ、その酒場つてなに？」

陽乃さんが興味津々に聞いてくるので俺は計画を話した。

「私も協力する！罪滅ぼしに手伝わせて！でも確かに香辛料とお米が欲しいわね・・・以前城に招かれた時ごちそうになったことはあるわ、でも料理方法がまずいのかあんまりおいしくなかったし、国王陛下もあまり好きではなかったような・・・!!!雪乃ちゃんみんなちよつといいい？」

なにやら女性たちで固まって話をしている

「比企谷くん、この国は軍事国家よ、つまり軍隊中心の世界、だから食べるものは美味しさより栄養とか保存とかのコストパフォーマンス重視で考慮されてるから料理をおいしくつくるという考えが薄いのかもしれない、そのせいで香辛料とか調味料の重要性が分からず流通が悪いんだわ、お米もきちんとした調理方法を知らないみたいだし、ちようど隼人を招いてのパーティがあるから私たちも厨房に入るわ、お城なら庶民が手に入らないような材料あるはずよ、それ使って現代料理のすごさを見せてやらぬか？ 隼人から故郷の料理が食べたいとか言ってくれば国王も嫌とは言えないでしょ？」

そう言うのと陽乃さんは女性たちを連れて葉山の宿まで行ってしまった。

確かに海外の軍用レーションはクソまずいのばかりとか聞くしな。

「ほむん、だんだんいい方向へといつてないか？ 八幡よ！」

「そうだな……」

でも俺たち招かれてないから食えないよな。

本当に雪乃や陽乃さんの腕なら元の世界の料理と同じような物作れるんじゃないか？ こういう時だけ葉山達が羨ましい。

第二十二話

その後陽乃さんは葉山に城の厨房に入れてくれるよう国王にお願いするように命令したとか、葉山も頭が上がらないので渋々国王に伝えたところ快く承諾してくれたとかで陽乃さん達は厨房に入り料理を作ることになったそうだ。

はたして結衣と三浦は必要だったのか疑問だ、炭とか作って国王暗殺とかしてないか若干不安があるがまあそこは陽乃さんと雪乃がどうにかするだろ。

一旦戻ってきた陽乃さんから話を聞いた後は暇になる。

明日帰るまで何もすることがないからだ。

戸塚を誘って街を見物に出ることにした。

やったぜ！戸塚とデートだ！とウキウキ気分で街へと繰り出す。

材木座？あいつは早々に一人でどっかにいつてしまった。

ちゃんと帰ってこいよ。

街をぶらついていると材木座が走ってきた。

「ハッチマーン……ここにいたかー」

あまり大声で呼ばないで？恥ずかしい！

「実は暇潰しにギルドを覗いていたら面白いバイトがあったので応募してきた！」

「ここまで来てバイト？ どんだけ働き者なんだお前？ とうかしてきたってなんだよ？ 俺いくの確定なの？」

「材木座くん、そのバイトってどんなの？」

「戸塚むつちや不安そう、そりやそうだここまで来てモンスター討伐とか勘弁しろよ。」

「ぬっふっふっ、パーパラッパパパパー！」

と某発明家のアニメの効果音を口ずさみ出した依頼書には

「城の臨時給仕人？ 今晚緊急にパーティーが開催、給仕してくれる人若干名募集、男女問わず、年齢不問、簡単な面接あり、応募の方はギルドの紹介状を持参の上城までこられたし、担当××××ってこのパーティーって葉山が行く奴だろ！」

「その通りなり！ 葉山殿ばかり料理を味わえるのは不公平であろう？ これに応募すれば我々もつまみ食いとかで食べられるに相違ない！ そしてバイト代もでる！ 一石二鳥！」

「却下、俺はいかねえよ、なんでまた働かないといけないんだ」

「フム、実は既に本牧殿と大志殿の了承は取り付けた、後は主らだけなのだが」

「いこうよ八幡！ 明日まで暇だし、僕も食べたいな、それに面白そうだよ！」

「戸塚がそう言うならなあ……」

「そうだな！ んじゃ行くか！」

とは言ったものの・・・

「いったい俺は何をやっているんだ・・・？」

俺達は面接にあつまり通り給仕をすることとなったのだが、猛烈に忙しすぎる、材料を倉庫から厨房に運んだり食器を並べたりしかも厨房は複数あるらしく雪乃達はどこにいるかわからない。

材木座に文句を言いたかったがテヘペロだと、あとであいつぶつ殺す。

「バイト！これを5番のテーブルにもっていけ！大至急！」

何かの魚をまるごと焼いた物を持っていくよう言われる。

いかにも大味っぽい大雑把な料理が宮廷料理というのもどうなんだ？

「5番5番と・・・げ！」

そのテーブルには見覚えのある連中が座っていた。

「・・・何やってるんだ？」

見覚えのある金髪の男が呆れ顔で話しかけてくるが無視だ無視

「えーお待たせしました、魚の・・・丸焼き？です」

「・・・見ればわかる、比企谷、その格好はなんだ？」

クソ、ごまかせなかったか！

「バイトだ、俺達はお前と違って常に金欠だからな」

「報酬もらったばかりのお前がバイトなんてするはずないだろ」

「ヒキタニ君超似合ってるべー」

「それな」

「だな」

はあーとため息をつく葉山、実際俺もする気なかつたしな、説明するのもなんか恥ずかしいなど思っているとパーティの司会者から案内が出た。

「みなさん！聖騎士葉山様より特別な料理の提供がありました！葉山様の故郷の料理だそうです！ぜひご賞味ください！」

と会場の扉が開き雪乃達がカートを押して中に入ってくる

「運んでいる美しい女性達は実際に料理を作っていた方です！皆葉山様のご友人とのことですよ！」

来賓の偉いさんは皆感嘆の声を上げている、実際皆美人ぞろいなのは認めなくてはならないな。

料理の皿を配るがみんなどこのテーブルでもすごい人気だ、でも結衣さんあなた料理に手を出してませんよね？

平塚先生はなんか求婚までされてたな、ここにきてモテ期到来じゃないですか、よかったですね。

しかも平塚先生の焼き肉丼が受けてた。

ここらへんの国は軍事国家だから偉いさんは皆軍人上がりでまだ現役もいるらしい、おしやれなものより味の濃いこういう高カロリーなわかりやすいものがうけるのかもしれない。

とうか焼肉のたれはどうしたんだ？作ったのか？

それよりもだ

「・・・何故あなたがいるのかしら？」

ほら見つかった。

「いや、それはその・・・」

「あれー比企谷くん！どうしたの？こんなところで何やってるのかな？お姉さんにそんなに会いたかったのかな？」

「ここに集まらないでくださいよ、他のテーブルでお偉いさんがお待ちかねですよ？」

「そうやってまたあなたはごまかすのね・・・きつとまたなにかトラブルが起きたのでしょうか？そしてまた大切なことを私達に隠して一人だけ犠牲になるつもりなんですか？」

雪乃は悲しそうな目をしてうつむいた。

いやそんな訳無いでしょう、勘違いしないでくださいよ。

「……何も起きてないしそういうことではない、単にお前らがどんな料理を出すか興味があつたのとあわよくば俺たちも食べればと思つて……な」

その答えに雪乃も陽乃さんも顔をぱつと嬉しそうな表情になる。

「ふふふ、そんなに待ちきれなかつたのかしら？でも厨房に来てくれればよかつたのに」
「場所がわからなくてな」

「片付けのときに余つたのを特別に食べさせてあげる、厨房の場所は……」

なんか他の厨房からちよつと離れてるらしい、だからわからなかつたんだな。

「そういえばさつき私、貴族様に息子の嫁にどうかと言われてしまったのよ？結衣さんやいろはさんもテーブルに行くことに同じようなこと言われているわ？八幡どうしたらいいと思う？」

「あー私も求婚されちゃつたな、是非第二王女にだつて比企谷くん、どうしよつか？」

「……とりあえず仕事に戻りましょうよ……」

クソつ全部材木座のせいだ！

仕事に戻つたが給仕の仕事は忙しく、ワインやらを運んだり食器を下げたり正直モンスタ―討伐をしていたほうがものすごく楽だ。

ヘトヘトになり雪乃達の待つ厨房に行つたらすでに俺以外の連中全員いた。

なんでも藤沢が本牧に話してたのを聞いたらしい、なんでまたナチュラルに俺ハブラ

れてんの？

材木座は雪乃が作ったパエリアを顔突っ込みながらかき込んでいた。

おい！それ俺によこせ！

材木座が全て平らげる前になんとか自分の分を確保して食べたがやはり雪乃の料理はおいしい、川崎の煮物もうますぎる。

陽乃さんが作った料理は雪乃と同レベルかそれ以上、意外などころでは海老名さんもなかなかの腕前、まあ葉山達の食事担当だから当然かもしれん、藤沢はもう本牧のためだけに作ってる感じ、お前らもう結婚しろよ。

いろははどうぞととわざわざあーんを強要してきやがった。

そういうのは周りの空気がやばい感じになるのでやめてくれませんか？

雪乃や結衣もあーんを強要してきてしまいいには陽乃さんから体を抑えられて三人に無理やり口に突っ込まれた、フォアグラか！

しかし久々に食う俺達の世界の料理は美味しくて涙が出るほどだった。

国王の城だけあって高い材料でも使い放題、醤油や味噌も献上品としてあったので味噌汁もできたとか、スーパーで数百円のものでもこちらじゃ金貨一枚に相当するものもあるようだしな。

カレーとかこつちの世界では金貨数枚出さないと作れないだろ。

結衣と三浦は火力担当だったらしく、ずっと火の管理をしていたとか、それ正解ですよ。

その後、国王を始めとする偉いさん連中は料理にいたく感激したそうで、全員城に召し抱えたいとか言い始めたそう。

だが皆丁重にお断りをし、代わりに香辛料や米の流通を改善してほしいと言ったらすぐ経路の拡大に取りかかると言ってくれたとのこと、ただ拡大に成功したらまた料理が食べたいと希望したので辺境の領地に食堂つくるから食べに来てくださいと言ったらしい。

国王に食いに来いというのはどうなんだろう？

言ったのは陽乃さんと雪乃だそうだがあいつら度胸ありすぎだろ。

次の日俺たちは辺境の地へと帰る準備をする、だが葉山達はそのまま王都にのこり、国王からの次の依頼の準備をして今度は北へと旅立つそう。

とにかく一騒動を片付けた俺たちは大きな土産を手にして辺境の地へと帰ることになった。

第二十三話

辺境へと帰ったら真つ先に領主のアダムさんの館へ行く

「おお、お帰り！君たちのことはニュースになってるよ！」

どうやら魔女を倒したという話は国内あちこちにすさまじい早さで広がってたようだ。

さらにこちらの世界に印刷技術があるため、かわら版が発行さればらまかれらしく実際にそれを見せてもらうと

「なにになに・・・聖騎士葉山様大勝利！希望の未来にレディゴー！！・・・なんだこのタイトル・・・」

これ絶対召喚された人が考えたよな？なんか平塚先生が喜びそうなタイトルなんだけど。

内容はタイトル通り、半分は葉山を讃える物でもう半分は陽乃さんを讃えるものだった。

「ハッチーのこと一言も書いてないじゃん！」

結衣がご立腹である

「やっぱりあなたは賞金首以外で目立つことは未来永劫無きそうね」

お前ら国王にそう話したんだからこうなるのは当然だろうが、そんな不満そうな目で見ないでくださいよ。

「しかしうちのところから異世界の人達とはいえこんなに凄い活躍をする人が出るとは私も鼻が高いよ！比企谷くんもここに書いてないけど何かやったのかい？」

とアダムさんは興味深々だ。

「いえ大したことは何も」

知っていてくれる人なんて周りにいる人たちだけで十分だ。

俺が黙っていれば上手く回る、目立ってもいいことはない

「この男は嘘が上手なんです、領主様、実はそこに書いてあることはでたらめです」

雪乃がとうとう言いやがった。

結果的に解決してるけど色々知られたら不味いだろう、国王も騙してることになるんだぞ？

「おい、もうその辺で止めろ、陽乃さんも止めてください」

と助けを求めるが

「比企谷くん、心配なのは分かるけどアダムさんはそういう人じゃないから安心して？このおじさまは出世とか考えてないから多少のやんちゃには大目に見てくれるから大

丈夫、ですよね？」

とニコニコの陽乃さん

「う、うむ、陽乃くんは確かに優秀だったが、扱いに困ることが多くてな……君のフォローには苦勞させられたよ……」

え？この人何やったの？

「ですよね！陽乃は私の教え子でしたがもう本当に手に負えないというかなんとか」

平塚先生が同調し始めた。

「あの、話を進めたいのですが……」

と雪乃が話に割って入る。

「お、おう、すまぬな、では話を聞こうか？」

そして雪乃や結衣、その場にいる全員で話を始めた。

「……なるほど、欲望を増大させる妖刀絡みの事件だったわけか、人の欲望とは限りないものだな、確かに東の領主はここ数年おかしな感じになっていた、下手したら私がそうなっていたかもな」

とアダムさんは感慨深そうに感想を述べた。

「それより国王様に正直に言えばよかつたのに、今の国王様は実力主義だから冒険者だ

ろうとなんだらうと実力があればどんどん召し抱えてるし出世も出来る、実は私も元冒険者なのだよ、この元領主は跡継ぎがないからと抜擢されてね」

「いいんですよ、そういうのは葉山の仕事ですからね、まあそんな感じで金が集まったんですよ、これで足りみますか？」

と金貨が入った袋を見せる。

「ああ、酒場の件か・・・こんなにいっぱい！すごいな！うん、大丈夫だ十分だ、腕のいい大工をたくさん雇うし土地は良さそうなどこを紹介しよう」

「ありがとうございます」

それから俺たちは建物の打ち合わせやら何やらであちこち走り回るようになった。

陽乃さんは元より雪乃も家が建設業という事もあつてか現場のことにも詳しくすぐ現場監督状態となりすべてを仕切り始めた、その手腕は本職の大工も舌を巻くレベル、さらに結衣の有り余る魔力を重機代わりに使い穴掘ったり埋めたりと色々させている模様。

いろはやめぐりさんもそのコミュ力で現場の大工やら土方の人と仲良くなった上にお茶を入れたりマツサージをする等のサービスをした為、現場の人たちは士気も妙に高くなり、作業はものすごく順調に進むことになった。

反面男の俺たちは打ち合わせや手配が済んでしまうと数日でする事が無くなってし

まう、材木座はやつぱり一人でどっかにいってしまい、俺も戸塚もすることが無いので毎日街をぶらついている状態、あれこれヒモって奴じや？

平塚先生たちはバイト生活に戻った模様

現場の手伝いでもするかと見に行くと、現場は雪ノ下姉妹によつて完全に仕切られ工程管理票やら安全指標やら例の黄色と黒のストライプの模様があちこちにあつて微妙に近代的な建築現場になっている状態で一部の隙もない、俺達も手伝おうかと聞いたところ

「こういうところは職人さんに任せるのが一番なのだからあなた方は休んでて結構よ」

そんな感じで追い出されてしまった。

工期は1か月ほどかかるとか、長いのか短いのかわからんが、宿屋も住居も兼任するから結構広くなるので建物の規模からすると素晴らしく早いらしい、雪乃曰く結衣一人で重機4台分の働きはするとか、なにやら冒険者が使う魔法とは別に職人独自の魔法があるらしく、結衣レベルとなると簡単に仕えるとか、確かに職人は魔法を使えるのが標準のようで丸太があつという間に柱に加工されていた、のこぎりとかいらんジャン、魔法超便利だな。

「するいこないね」

戸塚が大変暇そうだ、現場は見てて楽しいがいかんせんすることが無いのですぐ飽き

てしまった。

今は二人で街をぶらついている状態。

遊ぶにしてもここにはゲームも無ければカラオケなども無い、かといって二人で討伐はリスクが高すぎてやりたくはないしアルバイトも正直メンドクサイのが本音ではある。

そもそも報酬がまだまだたくさんあるので無理して稼ぐ必要がない

「そういうえば材木座くんはどこにいったんだろ?」

あいつのことだからまた一人でギルドにでも行ったのか?

「さてな、また一人で仕事請け負ってんじゃねえの?」

と何気なく周りを見渡したところ見覚えのある巨体が山のように食材を担いで歩いているのを見つける

「あれ材木座くんじゃないかな?」

「あいつ何やってんだ? ストックはあるからあんなに買う必要は・・・あれ誰だ?」

材木座の横には金髪の美少女が一緒になって歩いている、年は俺たちと同じぐらいだろうか?

すごく親しげな感じだ。

「なんかすごく仲良さそうだね」

「・・・つけてみるか・・・」

「ええ！八幡！それはダメだよ！」

と戸塚は口では言うものの興味津々の模様、結局後をつけることになった。

二人は親しげに話しながら街外れの教会へと入っていった。

「あいついつの間に入信したんだ？」

建物に近づくと裏手から子供の歓声が聞こえる、裏手に回つてみると教会に隣接している建物の大きな部屋の中に子供がたくさんいるのが窓から見えた。

そのまま建物の扉の方まで行つてみると看板には孤児院と書いてある。

俺たちは窓からこつそり中の様子を見ることにした。

「しょーぐんだ！」

「けんごーがきてくれた！」

「みなさんがいい子にしていたので今日は久しぶりに義輝様が遊びに来てくれました！」

金髪の美少女が子供達に向かって言うど歓声がさらに上がる

「けぶくんけぶくん、皆の衆、息災であつたか？」

「「「そくさいでしたー！」「」」」

「おい戸塚、何だアレ？」

「僕に聞かれても……もしかして材木座くんが一人でいなくなってる時ってここに来てたのかな？」

それにしてもこの人気っぷりは異様だ。

「では義輝様、今回の冒険譚を是非子供たちにお聞かせいただけませんか？」

金髪の美少女がうやうやしく材木座にお辞儀をする。

「うむ、よかろう！皆静かに聞くのだぞ！」

「「「はーい」」」

材木座はどかっとな椅子に座ると話し始めた

「ほむん、貴殿ら今回東の領地で起きた事件はご存知かな？」

「うん、悪い魔女が聖騎士葉山様と陽乃様に倒されたって話でしょ？マリアママに読んでもらったから知ってる！」

と子供の一人が号外の紙をぶんぶん振っている。

マリアママとは金髪の美少女のことらしい、あの子が皆のお世話をしているようだ。

「ふむ、実はその内容はでたらめなのだよ！聖騎士殿に我が手柄を譲るためわざと嘘の報告を国王にしたのだ！」

「「「えーうそだー！」」」

「嘘ではない、証拠に魔女を倒したお話を詳細にしてやろう！」

と材木座が話した内容は俺と材木座の立場を脚色を加えて入れ替えたものだが話は大きく変更されていた。

まず陽乃さんが正真正銘の極悪な魔女になっていた。

そして激しい戦いの末勝利を取めた材木座が陽乃さんを改心させ、二度と悪さをしませんと誓わせたと言うことのようなのだ。

それを身振り手振りを交え時には剣を抜き寸劇を披露しながら話した為、その度に子供たちは笑ったり歓声を上げたりと大盛り上がりだった。

しかも雪乃や結衣やいろは自分に陰ながら惚れているとか戸塚は普通に友人扱いだった俺のことになると思っていた時は相棒にして下僕、しかし一回死んだので復活の儀式をして甦らせた目が腐ったゾンビとか言いやがった。

相棒にして下僕って矛盾してるだろ！

「そういうわけで陽乃殿は私の大いなる活躍で改心し二度と悪さはしないと誓ったのよ！葉山殿が到着した時には既にすべてが終わっていてな、このままではせつかく改心した陽乃殿が悪者になってしまう、そこで我はかわら版のような話をでっち上げて手柄を譲ってやったのだ！」

「えーなんでてがらをゆずったんですか？」

子供の一人が聞いてくる

「我の手柄になると有名になって忙しくなってしまう、そうすると貴殿らとこうして遊ぶことも出来ぬであろう？そのほうがよかったか？」

「よくない！しようぐんさまありがとう！」

「しようぐんさまかつこいいい！」

「さすがけんごー！」

「なんだこれ？材木座つて猛烈に子供からのポイント高いぞ？下手したら俺の小町ポイントより高くないか？」

「すごい……材木座くん、こんなに子供たちに慕われて……」

戸塚が感激しているが、この調子だと今までやった討伐の話も脚色加えて話しまくった可能性は大だぞ？

戸塚のこともあまり良く言ってなかった可能性もあるんだが。

「よし！お話はこのぐらいにして外で遊ぼうかのう！また剣豪將軍直々に稽古をつけてやろう！」

うわーいと言う歓声が上がリ材木座は文字通り子供に囲まれながら外に出ようとした。

このままでは見つかってしまうので俺たちも撤収するかと思っていたら。

「……あ」

目が合ってしまった。

途端に挙動不審になる材木座

「あ、あああ！すまぬ！大事なギルドからのクエストがあつたのを忘れておつた！」

「義輝様、今日は久しぶりに皆と一緒に食事をしていただけのではありませんか？」

金髪の美少女はすぐ悲しそうな表情だ。

「すすすまぬ！この埋め合わせはいずれ！」

と材木座は部屋飛出すとまっすぐ俺達の方へ走ってきて腕を掴む

「八幡、戸塚殿ちよつとききて、ちよつと」

引きずるように教会から少し離れた建物の陰に連れ込まれる

「どどどどこから見ておられた？」

「お前があの子とデレデレしながら買い物していたあたりからだな、おまえと彼女は
どういった関係だ？なんでさつきみたいになつてゐるんだ？」

「な、なんと初めからか・・・実はだな・・・」

前に俺たちが食材調査をした際材木座だけ一人でギルドに行ったわけだがその時、
ちよつど一人の募集があつたそうだが、それが孤児院の子供の遠足の荷物持ち。

一人で受けるギルドの依頼は初めてということもあり、練習も兼ねて物は試しとやっ

てみたところ、そこで彼女出会ったそうさ。

「なあ八幡よ、一目ぼれってあるもんだな・・・」

遠い目をして語る材木座、ものすごく似合わん

「あの方はマリア殿と言つてな、領主殿の娘だそうさ」

「は？あのアダムさんの娘？」

まるで似てない、遺伝子がまるで仕事してない、ちなみにアダムさんはハゲ散らかしているうえにダルマ髭のおっさんだ

「まあそう思うのも無理はない、正確に言うとは義理の娘だ、もつと正確に言うとは我らと同じ召喚されし者であるな」

「マジで？でも今まで召喚された人たちちって何故かわからんが日本人だけだったような？あの子は変な言い方だが外人だろ？」

吉原さんもそうだが、何故か召喚されてくる人たちは皆日本、それも千葉県周辺に集中しているのだ。

「いや、れっきとした日本人なのだよ」

材木座の話からすると、彼女はいわゆるハーフとのこと、日本で生まれて育つたとか、しかし彼女が小学生の時に両親が不慮の事故で亡くなり、身寄りもなく施設に入れられたが、見た目のこともあり施設や学校では友達はできずあまりいいとは言えない生活

だったらしい、小学校から帰宅途中、突然こちらの世界に召喚されたとのこと。

「召喚されると領主殿の所に報告が上がるようになっていくらしく、すぐ発見されたのはいいがずっと泣いておったそうだが、子共が召喚されたのは初めてということもあって領主殿が扱いに困り自分で引き取ることにしたのだ、マリア殿は施設で生活してたのである、同じ境遇の孤児院の子供達を放っておけなかったのである、毎日来ては子供たちのお世話をしているのだよ」

「んで、あの人に惚れたんでことあるごとに孤児院に押しかけては作り話をしていたと、そういうわけか」

「そ、そうなのだよ！スマヌ！あの子らには我らの子供の頃のようにテレビもゲームも無い、本すら高くて買えぬのだ！だから我が討伐の話とかに脚色付けて話すと皆喜ぶのだ！だからそのうち調子に乗ってしまつて・・・本当にスマヌ！」

全くこいつは、架空の話ならわざわざ自分が活躍したつて話にせんでもいいだろうが、ほんとどうしてやろうか・・・と考えていたが戸塚が目をうるうるさせながら訴えてきた

「八幡！許してやろうよ、子供たちもあんなに喜んでたよ！材木座くんも悪いことしてるわけじゃないんだから」

うん戸塚がいうなら仕方ないかな・・・つて雪乃や陽乃さんが知ったら面倒なことに

なるだろこれ

「もしかして弁当の宅配とか前言ってたのもこのことだったのか？」

「左様、あそこは年老いた神父殿とシスター殿とマリア殿の三人で切り盛りしておるでな、家事がとでも大変なのだよ、洗濯も掃除も料理も十数人分以上を同時にこなさないといけなくてな、掃除や買い出しの手伝いは我も出来るが食事は出来ぬから・・・」
「全く、そういうことはちゃんと皆に相談しろ、弁当作るつたつて簡単じゃねえんだ、ともかく雪乃達に相談する、子供たちにも何を話しているかは黙っておいてやる」

「恩に着るぜよ八幡！」

「もうわかったからお前戻れ、一緒に昼飯食うんだろ？夕方には戻ってこいよ？」

「あいわかった、ではこれにて失礼するなりー」

やはりこいつはうざつたい、でもまあそこが子供には人気でるのかもしれない。

材木座が教会に戻ってしばらくすると歓声が聞こえてきた。

楽しいのは結構だが、あいつはやっぱり元の世界には戻らないだろうな。

そう思いながら夕方まで戸塚と暇つぶしをしながらまた街をぶらつくことにしたのだった。

第二十四話

材木座の件を雪乃達に相談したらやはり弁当宅配は手間がかかるので折を見て決めるよという事になった。

その代わりめぐり先輩と戸塚が孤児院を手伝うと言ってくれた、さすがめぐりん、子どもの扱ひも得意そうだ。

戸塚は材木座に心底感動している模様、材木座は下心半分だというのに戸塚はピユアだな、やはりそのままの君でいてほしい。

いろははそのまま現場補助を継続するとか、んで肝心の俺だが

「八幡、今日のお弁当の内容は何かしら？」

雪乃達に弁当作る係に任命された。

それだけではない、弁当だけではなくうちの連中の家事全般をやらされる羽目になった。

「専業主夫の夢が叶って良かったじゃないの？主夫谷くん？」

クスクスと笑う雪乃

「ハッチー主夫って、それってあたしの・・・あわわ何でもない！」

結衣さん何慌ててんですかね？

「比企谷くん、ホントの主夫になる気は無いか？お姉さん頑張るけど？」

「先輩が主夫……いえそういうのはキッチンと手順を踏んでからお願ひしますごめんなさい」

この人たちは本当に何を言ってるんですかね。

面倒なのは洗濯だ、色々厄介そうなので下着関連は自分で洗うように通達をした。

女子の下着とかそういう趣味は無いが、普通に嫌だろうし、材木座の下着を洗うなど言語道断だ。

それでもたくさんある、しかも陽乃さんとめぐり先輩も同じ宿舎に寝泊まりすることになったので洗い物が増えて面倒である。

しかも女性陣の服は異様に多い、毎日違う服を着ているのには意味はあるのか？

洗濯機なんてないので洗濯板、ものすごい重労働だ

「こんなはずでは無かった気がするんだが……」

専業主夫って家で家事やって暇な時間はゴロゴロという生活だったはずだが……
考えても無駄なので今日の業務を淡々とこなすことに専念しよう。

「これが終わったら夕食の買い出しに行くか……」

冷蔵庫もあるし、皆早く帰ってくるので最近は外食ではなく宿舎で取ることにしてい

た。

夕食は食材そろえておけば俺じゃなくても雪乃達がやってくれるからな。

「戸塚のここに行きたかったなあ」

材木座の野郎何気にハーレムじゃねえか！

洗濯物を干して買い物に行く準備をしていると街の方からカーンカーンと非常事態を伝える鐘の音が聞こえる。

こういう場合、火事かモンスター襲来か兎に角ヤバイ事態であることは間違いない。

俺は急いで戦闘用装備を身につけると走ることにした。

まずは一番近い工事現場だろう、行ってみると既に雪乃と陽乃さんというは、結衣が戦闘態勢を取っていた。

えーこの人たちは武器を現場に持ち込んでいるのか？

ともかく何が起きたか聞いてみるか

「今来たばかりでよくわからんが何があつたんだ？」

「先輩！あそこ！あそこにトカゲみたいなのが何匹かこつちに向かつて飛んできてるんです！」

というはが空を指差すが何も見えない

「なんにも見えないが・・・トカゲ？疲れて幻覚でも見えたんじゃないか？」

「んもー！先輩！真面目にして下さい！」

そんな怒ってますよポーズをとられてもな、見えんものは見えん

「先輩！わたしはハンターの技として魔力で一時的に視力を上げることが出来るんです！だからあそこにいるのが見えるんですよ！」

ああそうか、ならそうといってくれれば、と思っていると青空に黒い点が出現する。

「おい、あれか？」

「そうです！ってあれ？誰か乗ってますね？」

トカゲの背中に？ドラゴンライダー的な？

かっこいいけどドラゴンとかヤバそうな臭いしかしないんだが

「ともかく非常事態なので冒険者の人は領主様の館前の広場に集まるようにとさつき伝令の人が走り回っていたよ、私達も行かない？臨時報酬出るかもよ？」

と陽乃さんは先に行ってしまう。

俺たちも後を追うことにした。

途中、戸塚とめぐり先輩と合流する、材木座は孤児院の防衛をするとかで残ったらしい。
い。

館前は混雑しておりアダムさんは冒険者の人達に色々指示を出していた。

「おお！君たちも来てくれたのか！すまんが非常事態だ！街の防衛に協力してくれ」
偵察の話によると飛んできていのはワイバーンでこのまま真っ直ぐ飛んでくるとなると館の直上を通過することになるとか。

しかも誰かが乗っているとなると明らかに何かの目的があつて来ているのは間違いないとのことなので、冒険者を領主の館を中心に街のあちこちに配置して不慮の事態に備えると言う事で俺たちも館の近くに配備された。

空を見てると黒い点は大きくなつておりワイバーンと分かる位の大きさになつていた。

どうやら館に向かつて降下してくるようで高度がどんどん低くなつていのがわかる。

「冒険者の諸君は戦闘態勢を維持！私が合図するまで手を出すな！」

アダムさんが表に出てくるとそう指示を出す。

「何気にかっこいいなあの人」

「そうですね、ただの美味しい物好きのヒゲハゲのおじさんじゃなかったんですね」

いろはよ、お前なにげに酷いな

「こんな世界に生きていますもの、いざとなったら皆を統率して戦うぐらい出来ないと領主なんてやっていけないのでしよう」

雪乃さんはその位楽勝で出来そうですね、あとその後ろで意味もなくこちらにウイंकしてくる姉の人なんか言うまでもないでしょう

ワイバーン達はそのまま館の前の広場に着地をする。

「意外とデカイな」

10メートル以上はあるだろうか、見た目は微妙に悪く本当にトカゲの前足が翼になりました感が凄いつてか葉山はこれ倒したとか言つてたな、どうやって倒したんだろ？

「国王陛下の使いで参りました」

ワイバーンに乗っていた男がそう言つた。

国王？ワイバーンってまさか、アレか！

「葉山様の提案によるワイバーンを使用した輸送経路の拡大に成功しましたので領主殿にご報告がてら荷物を輸送してまいりました。こちらの物を陽乃様とそこご友人たちにお渡しするよう国王陛下からの命令です」

と男達はワイバーンに括り付けられた樽やら箱を下ろしにかかる。

中身は米やら香辛料の類がたくさん入っていた

「これは胡椒かしら？これは唐辛子？茶葉もあるわ！他にもいろいろ・・・」

雪乃が興奮気味だ。

「本当は航路やら陸路の改善から行くんだろが、いきなり空路とはな、大航海時代は訪

れる間もなかつたな」

「そんなことはどうでもいいのではないかしら？ここはファンタジーの世界ですもの」
「ねえハッチーあれってドラゴンと違うの？」

「ドラゴンは翼の他に前足がある、ワイバーンには後ろ足と翼だけだ」

と他にもドラゴンは魔法が使えるやら言葉がはなせるやらとワイバーンとドラゴンの違いについてのうんちくを語っていると、荷物をあらかた下ろし終わったらしい男達はアダムさんに書類が入った箱を渡していた。

「ではこれから物資の運搬等は我々が定期的に行うことになり、細かいやり方は先程お渡しした書類に記載されておりますので領主殿は熟読下さい。それと陽乃様とご友人達に国王陛下より伝言です」

「なんすか？」

またメンドクサイ話じゃないだろうなと思っていると

「酒場が完成したら食事をしに来るので開店日が分かり次第伝えてほしいとのことでした、では私もはこれにて失礼します」

とワイバーン達はバサバサと飛び立っていった。

クロネコヤマトの宅急便じゃなくてミドリワイバーンの宅急便？

ゴロが悪いな、とどうでもいいことを考える。

「嵐のようだったな」

「先輩、これどうすんです？めっちゃいっぱいありますよ？」

樽やら箱やらがたくさんある、どうにもならんぞこれ、なんか持つて帰るのメンドクサイと思つたがちようど近くに収容できそうなところがある事に気が付いた

「アダムさん、一時的にこれ預かつて解いてくれませんか？酒場が出来たら一日食い放題にしますんで」

一瞬嫌そうな顔をしたが食い放題という言葉に目を輝かせる

「そういうことなら仕方ないな、あーすまんがみんな手伝つてくれ！」

とその辺にいた冒険者に手伝つてもらい館の中に保管してもらうことになった。

これで調味料関係の問題は解決だ、食材の確保もなんとかなるだろうあとは建物の完成を待つのみとなり、俺の重労働な主夫業務はしばらく続くことになった。

第二十五話

予定通り順調に工事は進み建物が出来上がる、同時進行でワイバーンの発着場も整備したようだ。

流石雪ノ下姉妹、簡易とはいえ滑走路や管制塔の為の櫓や吹き流し等小さな飛行場のような感じに仕上げている、もはやなんで有りだな、荷物だけの運搬とはいえ空路が使えるとはファンタジー世界恐るべし

「えーつとようやく建物が出来上がったんだけど・・・肝心なこと忘れてたわよね？」
陽乃さんが俺に向かって困った顔で聞いてくる

「なんすか？トイレや風呂が無いとかそういうことつすか？」

「それはちゃんとつけたので問題ないのよ、私も忘れていたわ」

と雪乃

「ゆきのん何を忘れたの？」

結衣も不思議な顔をしている、当然だ、建物はちゃんとできている、内装はまだ完全ではないがもう中に入って住めるレベルにはなっているし、しっかりしたつくりだ

「この酒場兼宿屋の名前よ、屋号とでも言えばいいのかな？どうしようかな？」

「そうよ、これは私たちの大事な場所になるのに失念してたわ、きちんとした名前をつけないとね？」

と雪ノ下姉妹は俺に聞いてくる

「まあいくつかアイディア出していい奴選べばいいんじゃないか？」

というはと戸塚、めぐり先輩に材木座を呼んでくる。

「はいはいはい！あたらしい名前考えた！」

結衣が元氣よく手を上げる、こいつのネーミングセンスは絶望的だから不安しかない

「居酒屋ハッチーってどうかな？」

「却下、次」

「宿屋八幡！」

「うーん、ゴロはいいがすまん戸塚それ却下」

「ダイニングバー八幡」

「しやれた感じにしてもダメだいろは却下だ」

「八幡君のお店ってのはどうかな？」

めぐり先輩そんな笑顔で適当な名前言われても困りますよ？

ってかさつきからなんで俺の名前が入ってるの？

「フーム、ならば八幡よ！サウザントリーフというのはどうだ？我々の故郷千葉をかつ

こよくした名前だ！」

お！材木座いい線いつてるんじゃないか？確かにそうだな故郷にあやかった名前か・・・

雪乃も陽乃さんもいい名前を考えようと二人で議論し合っているし他の連中は互いに名前がダサイと揉めている、まあ確かにダサイ名前ばかりだが、ふとひらめいた。

「名前はこれでいこう！その名も千葉亭だ！看板には漢字で千葉と毛筆体ででかかただな・・・」

「八幡、さすがにその名前はどうかとおもうわ？それは飲食店の名前ではなくて私たちがいた県の名前でしよう？それに漢字というのもこちらの世界の人は読めないのではなくて？」

雪乃は呆れ顔、陽乃さんも苦笑いだ

「ハッチー！あたしのこと言えないじゃん！」

結衣もプリプリとお怒りだし、皆文句がありそうな顔をしている。

「まあ言いたいことはあるだろうが聞いてくれ、わざわざ千葉つて名前にしたのはちゃんとした理由がある」

「先輩、千葉が好きだからなんてふざけた理由だったらこれで脳天ぶち抜きますからね？」

「そう言いながら弓矢を取り出したいろは、いやそれ屋内で使うなよ、今度こそ死んでしまおうわ！」

「ま、まあ俺の千葉愛は深いからな……っておいしいろは、弓矢をしまえ、ちゃんど理由話すから、いいか？俺たちみたいに日本から来た連中は結構いる、他の街に行っている奴らもいるしもしかしたらまた新しく召喚されるかもしれない」

「はあ、それで？」

いろははじと目で睨みつけてくる

「そう言う連中が千葉なんて文字を見たり聞いたらどう思う？ちよつと安心するとは思わないか？知らない土地でふと目にする自国の文字と名前、これはいける！」

「なら東京とかでもいいじゃないですか」

いろははまだ文句がありそうだ

「東京より千葉周辺から来た人たちの方が多い、俺たちもだ、どうせなら愛着が有る名前のほうがいいだろ」

「……そうね、召喚された人達の希望になるかもしれないし、元々この店はあなたのアイディアで作られてあなたが開店資金を調達したようなものだから名前もあなたが付ける権利があるわね」

雪乃のお許しが出たようだ、後ろで陽乃さんもうんうんとうなずいてくれている

「そうだろ？そして扉と外の壁には千葉のマスコットであるチーバくんを「パンさんね」は？」

雪乃さんいまなんと？

「パンさんを描くべきだわ」

「何故にパンさんだ、千葉と言えばチーバ君だろ！」

「違うわ、千葉と言えばデイスティニーランド、デイスティニーランドと言えばパンさんこれ以外に選択肢は無いわ」

雪乃さん強引すぎやしませんかね？

その姉の人は笑ってないで止めてくださいよ。

結局押し切られてパンさんを描くことになった。

雪乃が自分で描くと張り切ってたが黙っていると全ての壁に描き続けそうだったのでなんとか入口の壁だけにとどめさせた。

流石にこちらの世界で著作権がどうのと言うやつはいないだろう。

同じく世界的に有名なネズミも一緒に描いてもまるで問題ない

でもこつちの世界の人は知らないから珍しいモンスターだねとか言われそうだな、むしろこういうのいるんじゃないか？

看板も字には全く自身が無かったので困った時の陽乃さんである、どっからからなん

かの毛を調達してきてでかい毛筆作って書いてくれた。

アダムさんに屋号と開店日を伝えるに行くことにする、国王に開店日を伝える書状を送ってもらわないといけないしな。

「これが店の名前になります！これは漢字というものでして・・・」

「ちば？なんだかずいぶんとストレートなネーミングだな」

アダムさんは呆れ顔だ、なんか紹介する前に読まれてしまった。

なんでこの人漢字読めるんだ？

「ああ、以前君たちと同じところから来た人に教えてもらってね、吉原君達も千葉県出身とか言ってたしな」

まあ漢字はかっこいいからと元の世界でも外国人に人気だし、この人毎日暇そうだから教えてもらったこともあるかもしれん、と深くは考えないようにした。

住居も兼任しているので平塚先生たちも含む皆で引越になる、ようやく小町と一緒に住めるのが何より嬉しい！

葉山達だがあいつらは戻ってきてからだな、あいつらは特別ということわざわざ離れを作ってやった。

ファンが押し寄せるだろうからその辺は自分らでさばけという暗黙のルールみたいなものだ。

他の召喚されてきた人たちに住居に困ってたら是非と話はしたが、既に宿舎を住みやすいうように改築しまくっているのでそこで十分だと言われてしまった。

数年も住んで愛着湧いてしまったらしい。

あとはアダムさんに預けてある食材関係を引き取り、開店に向け野菜やら肉やらの食品の仕入れやらなにやらと色々忙しく働くことになった。

第二十六話

開店日当日、いつもは冒険者がうろうろしているだけのアダムの言う退屈な街が大賑わいになっていた。

なにしろ世にも珍しく美味しい料理を出す店がオープンしたわけだからな。

一応アダムさんや吉原さんに宣伝をしてもらったりギルドにチラシを置かせてもらったりしたおかげか物珍しさに惹かれた冒険者連中がどつと押し寄せてきやがった。

おかげで朝から大忙しである、念のため川崎や小町、平塚先生に至るまでフロアや厨房の手伝いをお願いしていて本当に助かった。

孤児院の方もお願いをしてしばらくはこちらの手伝いに専念させてほしいと材木座達を引き揚げさせてもらった。

ほんとスンマセン。

店内では平塚先生や小町達が注文をとっては厨房に伝え厨房では料理を作るので大忙し、結衣は会計担当だ、何故か奴は単純計算が異常に早い、消費税が無いので余計にやりやすいのかもしれない。

値段は強気に攻めて他の店よりちよつと高めだ、そのぐらいの自信はあるし、そもそ

も他より手間はかかっている、このぐらいは当然だな。

そして俺はというと

「はい、そこー！列からはみ出ない様にー！」

「ちよつと！まだ食えないのかよー」

「今店内は大変混雑しておりますので、申し訳ないですがお待ちくださいー！」

俺はフロア担当ではなく外で列の整理だ、ちなみに材木座も列の整理担当である。

「八幡よ、我らだけなんか扱いが違う気がするのだが？」

「考えるな、これも立派な仕事だ・・・あーすみません、そこ割り込まないでくれますか？」

長蛇の列である、こいつらモンスター討伐はいいのかよ、なんか小町達がバイトに行っていたパン屋のオヤジまでいるぞ、自分のとこのパン食ってるよ、つてか街中の人に来てないか？食材間に合うのかこれ？

そう思っていると

「あー君、ここは宿泊もやっていると聞いたが？」

なんか結構年食って高級そうな鎧をまとったオッサン連中が話しかけてきた、なんか歴戦の勇士みたいな落ち着いた雰囲気である。

「ハイ！そうですか？」

「ふむ、本当に宿泊もできるようにしているとはな、食事も出来て泊まれるとはお得だな」

なんかブツブツ言っているのが俺は忙しい、次の客を中に入れないといけないからな「今猛烈に混んでいるので宿泊の受付は落ち着いてからでお願いします」

開店初日なのでウエルカムなのがこんなくそ忙しい時に受付までできない、客商売にあるまじきことだが仕方がない、NOと言える客商売も大切なことだと思う。

「ふむ、承知した」

そう言うとおツサン連中はどっかに行ってしまった、なんか見たことある気がしたのだが列の整理に忙殺されおツサン連中のことはすぐ忘れてしまった。

昼もすぎるとようやく客足は落ち着いてきた、客足が途絶えた段階で準備中の看板を立てる

「朝から皆お疲れ、悪いな列の整理しか出来なくて」

「ハッチー気にしなくていいよ！でもゆきのんがもうダメみたい・・・」

雪乃は完全にグロッキー状態だ、朝から休む暇が無かったからな。

しかしこれから夕食の仕込みもあるのだがこれではダメだろうな

「雪乃ちゃんの分も私が働くから大丈夫よ？」

陽乃さん、そう言ってくれるのはうれしいですが物理的に無理でしょう？

「こんなに忙しくなるとは予想外だったな」

「そうですね、先輩夕方の調理どうしましょう？ 幸い食材はまだ残ってるのでなんとかありますが・・・」

半日で予想していた2日分のストックが無くなってしまった、店を開くにあたって冷蔵庫を手当たり次第拾ってきて稼働させているので備蓄は万全と思っただけなのだがこのペースでは危うい、早急に手配も必要だ。

現状厨房に入っているのは雪乃、陽乃さん、一色、めぐり先輩である。

フロア担当は、俺、材木座、本牧、藤沢、小町、大志、川崎、平塚先生、レジ係も兼ねる結衣になる、多い気もするが昼はこれで何とか回せるレベルだった。

何しろ料理が出てくる速度が早い。

どうなってるのか分からないが、某牛丼の店ほどではないにしろ注文してそれ程経たずに料理が出来上がってくる。

陽乃さんは効率的にできるように仕込んでおいたと言っただけだがでもこれが夕方となると酒の注文も入るので余計に大変と思われる。

雪乃がいなくなると代わりに小町か藤沢か川崎を入れるしかなくなる

「注文に回っていた人を厨房に入れるか、でも夕方は酒も出す予定だから忙しさと厄介さは朝より上だ、正直フロアの人を増やしたいんだが」

「酔っ払いの相手は大変だしね．．．」

川崎は酒場でバイトしてたから面倒な客に絡まれたりとしよつちゆうだったらしい、体を触られたりしたらその度鉄拳を叩きこんでたそうだ。

それはまずいだろと思つたがぶつ飛ばされても店員に手を出した方が悪いと言われるんだそうだ。

こつちの世界はフリーダムすぎるな。

「川崎は客の扱いに慣れてるのでフロアから外したくはないな」

俺の場合小町が絡まれたら冷静ではいられなくなりそうだが、藤沢が絡まれたら本牧ブチギレるだろうし、見るからに絡んでくる男のあしらい方も下手そうだ、それにその手の対応は小町の方が得意そうだし、だとすると選択肢は無いな

「んじや藤沢厨房に入つて手伝つてくれ」

「わかりました！頑張ります！」

「みんな！お姉さんもがんばるから雪乃ちゃんも抜けた分フォローおねがいね！」

おお、さすが陽乃さん頼もしい姉つぷりを発揮している。

「ごめんなさい八幡、私が体力無いばかりに．．．」

「雪乃は気にせず休んでろ、無理して前みたいに熱出されたら困るからな、こういう時は周りをつかえ、なんでも自分でできると思うな、さつさと休んで回復したら手伝いにこ

い」

陽乃さんがなにかいいたげだったが無視だ無視、そういうのは元の世界に帰ってからにしましょう？

「しかしフロア担当が減るのは痛いな、正直増やしたいレベルなんだが・・・」
と考えてると

「あーお話中すまぬが宿泊をお願いしたいのだが？」

さっきのオツサン連中が現れた、準備中の看板は出したが扉は開けっ放しだったから入ってきてしまったようだ。

しかしこのオツサン連中よく見ると全員中々ダンティーだ、全員大剣やら槍やらのなにかかしらの武器を担いでいて姿勢も良くどこことなく規律正しい感じがしてとてもかっこいい

「あー今準備中ですが・・・まあいいか、いろは、台帳持ってきてくれ、結衣、受付頼む、陽乃さんは部屋までの案内をお願いします、ところで実はお客さん達ががこの宿の第一号の宿泊客になるんですよ」

「私達が第一号か、それは光栄だね、ところで君は列の整理をしていた者だな？この店のオーナーは陽乃殿かと思っていたのだが先程の様子からすると君なのか？君は何者かね？」

なんだこのオツサン？なんでそんなこと気にするんだ？まあ陽乃さんは有名人だしと思つていると

「ほむん！ここにわざわざ方こそ比企谷八幡といい私の相棒にして我らのリーダーである！八幡の八面六臂の活躍により国を救い、仲間を助けこの千葉亭が出来たのだ！」

材木座が紹介してくれたがあまりそういうことを言うなよ？突つ込まれたら面倒なことになるかもしれないだろ、そして大分大げさだな

「ほう、国と仲間を、どこかで聞いた話だな」

やはりこの人の顔見覚えがあるなと思つていたらアダムさんが駆け込んでくる

食い放題にすると言つたから来るかと思つてたのだが今来られても困るな

「ここにいらっしゃいましたか！泊まられるなら私の館に部屋を用意してありますのでどうぞそちらに！」

なんかやけに緊張しているようだ

「どうしたんですか？この人達知り合いですか？」

「知り合いも何も君たち覚えてないのか？顔を合わせてた筈だろ？この方は国王様とそのお付の方であらせられるのだ！君たち無礼は働いてないだろうな！」

え、マジデ？どうりで見覚えが、陽乃さんは今思い出したみたいな顔してぽんと手を叩いている、あんたが一番国王と接点あったでしょうが！

「領主殿、わたしも久々に昔のように宿に泊まってみたいと思っ
ていてな、だからこ
うやって周囲の反対を押し切つてまで少人数でやってきたのだよ、
おかげで道中も中々
楽しかったぞ？まだ腕は衰えていないらしい」

と背中の中のやけにゴツい大剣を片手で軽々と振り回す。

まじかよ王様が強いとか軍事国家といつてもちよつとやりすぎ
だろ、しかもお付の人も含めて5人程度でここまで来たのか？

なんかあつたら困るんじゃないのか？

「若いころ冒険者まがいのことを色々やったことを思い出してな、
君たちの店ができた
と聞いてこうやって食べに来たのだ、宿も兼ねていると聞いたから
せつかくだから宿泊もしたいと思っ
てね、ところで先ほどの話の続きだが？」

とこちらに向き直る、ヤバいな材木座の話でピンときたみたい
な顔してやがる、国王騙して大金せしめたと知られたら死刑じや
ないか？

「あーそれは・・・」

ヤバイななんも言い訳が出来ない、開店と同時に閉店とか洒落に
ならんかと考えてる
と

「比企谷くん、もう仕方ないよ、どうせ後からばれると思っ
ていたし全部話そうか」

陽乃さんが前に出てくる

「おお、陽乃殿、相変わらずお美しい、やはり第二王女の件は考え直しては頂けぬか？」
「それは丁重にお断りさせて頂いたはずですが？」

「手厳しいな、して話の内容とは？察するに東の領地での話であろう？ただ話の内容によつては私の立場上本意なことをしなくてはならなくなるが」

「まず陛下、誤解の無いようお伝えしますが私達は元の世界に帰るのを第一目的とします、だからといって陛下に反逆したり、国を脅かそうなどとは思っておりません」

そう言う陽乃さんは本当のことをかいつまんで話し始めた。

ちなみにアダムさんは冷や汗ダラダラだ。

「・・・話は分かった、陽乃殿災難だったな、そして比企谷殿すまぬな、知らなかったとはいえ大変失礼した。しかし何故本当の事を話してくれなかったのだ？」

ちよつとムツとする国王

「仮に本当の事を話したとして、報酬を隼人と同じぐらいだけ頂きましたか？それにワイバーンを使った輸送経路の拡大、こちらも隼人の為に開いて頂いたパーティーで私達の料理を披露したおかげで実現したのでは？その比企谷くんだった場合はパーティーはおろか私達の料理を披露するチャンスすら無かったと思いますか？」

陽乃さんは国王相手でもまるで引かない、おかげで国王も、タジタジだ

「う、うむ・・・確かにそうだな・・・」

「でもこの件は国王陛下と私達だけの秘密にしましょう?」

「何故だね?」

「隼人がやったことにしていた方が何かと都合が良いからよね?ね比企谷くん?」

ちよつとこつちに話を振らないでくださいよ、俺なんて言えはいんですか?

「君が全ての仕掛け人か? 若いのにずいぶんと策士だな、まあ詳しい話は後ほど聞くとして口止め料がほしいね」

うわーやばいぞ、陽乃さんを嫁によこせとか言われたら断れんと思ってるよ

「うーん、陛下?もし比企谷くんが私の救出に失敗していたら私のことを館ごと焼き殺そうとしていたとか?しかも救出には消極的だったと聞いてますよ?それはわたしの中で無かったことにしますのでそれでチャラってことでどうですか?」

えーそれって俺が言うのもおかしいけど国王の選択としては仕方ないんじゃないの?
?

と思っていたが、国王なんか痛いところ付かれたみたいな顔してる

「う、うむ、でもそれは・・・」

うわこのオッサンどんだけ陽乃さんに弱いんだよ。

「それとせつかく来ていただいたので本日陛下にはメニューにないとおきのお食事をご用意します。夕食楽しみにしてい下さい」

そう言うのと陽乃さんはニコツと笑う、この笑顔何時もの仮面被った笑顔だわ、スパー駆け引きモードだよこの人

「おお！本当かね！」

あ、これ陽乃さんの勝ちだわ。

というか本当にいいのかこれ？

「しかし比企谷殿には本当に悪いことをしたな、名前を間違つて呼んだり知らなかったとはいえ報酬に差をつけるようなことをしてしまつて・・・しかしそれも含めて全部作戦だったとは恐れ入つたよ、君みたいな面白い人も人材として欲しい所ではあるが：」

「いえ・・・俺は・・・」

なんかいつのまにかスカウトされてる流れになつてるんですけど？

どうしたらいいんだコレと思つていると。

「国王陛下、大変申し訳ありませんが・・・この男は大変扱い辛く・・・私たちが常に一緒にいないと・・・一人で勝手なことをするので・・・お勧めできる人材では・・・ありません・・・」

なんか雪乃が息も絶え絶えに辛辣なこと言つてきたんだけど、おまえホントに休んでろよ

「そ、そうだよ！ハッチーはあたしたちがいないとホントダメなんです！だから上げら

れません！」

おい！結衣くつつくな、そして俺は物ではない。

「そうですよ！先輩はわたしの責任を取る義務があるんですから！」

いろはよ、いつまで俺は責任取り続けなくてはならないのだ・・・

そんな三人に国王は半ばあきれ顔である

「・・・君たちは彼のなんなのかね？」

「一言で言うのは難しいですが、私たちは彼にとって必要な人です、私たちにとっても彼は大切な存在です」

「ほう、なるほど、では諦めるしかないな、いやはや見せつけてくれるな、若いとほいものだ！」

そう言う国王は豪快に笑う

なんかみんなやれやれみたいな顔してやがる、材木座はサムズアップした親指を下に向けやがった。

こつそりリア充爆発しろと言ったの聞こえたからな？お前もマリアさんと仲いいじゃねえか

「ついでですので陛下、こういうのはいかがでしょう？」

と陽乃さんが提案を出す

「今、うちの雪乃が体力的にこれ以上業務ができない状態な上にこれからまた混雑が予想されます、なので国王陛下、用心棒のアルバイトをやってみませんか？私どもも頑張りますが、何しろこの世界でこういうことをするのは今回が初めてですし、おそらく酔っ払いにも絡まれる可能性が非常に高いです、その際うちの男連中では少々心もとないのでお手伝いいただければなんと、暇つぶしにもなりますよ？」

この人なに言ってるの？何国王働かせようとしているの？暇つぶしとかじゃないでしょ？国王もびつくりした顔してるじゃないの

「無論夜間の飲み食いは全部タダにしますよ？」

「よしのつた！お前らもいいな？今宵は無礼講でいいぞ！実は昔冒険者まがいのことやった時も似たようなことをやったことがある、懐かしく楽しい夜になりそうだ！」

この国王大分ノリノリである、お付の人も無礼講と言われて苦笑いしているし、客にバレたら厄介だと思うが、まあ写真なんてないしましてや辺境の人なんて国王陛下の顔見たことすらないだろうから大丈夫かな？

そして陽乃さんは国王一行を部屋に案内しにいつてしまった。

アダムさんは陽乃くんはこれだからと冷や汗を拭っていた。

心中お察しします。

「ねえハッチー、本当に大丈夫なのかな？」

「しらん、もうどうにでもなれだ、とりあえず夕食の仕込みと酒の準備するぞ」

俺たちはまた客が押し寄せて忙しくなるであろう夕方へ向けて準備をすることにした。

第二十七話

夕方千葉亭の営業が開始される、

開始と同時にまたどつと人が集まりまたも大混雑になった。

夜はお酒も出すため回転は悪く、おかげで相席をお願いしたり立つてでもいいから入れるとか言われたり本当にすし詰め状態である。

そんな状態、やはりというか冒険者連中は血気盛んなので酒が入ると暴れ始めるのがちらほら出てくる

「ああ！やんのかこら！」

「上等だ！てめえ！」

お決まりの文句から殴り合いスタートだ。

やつぱり始まったか、嫌だけど一応止めに入ることにするが
「てめえは引つ込んでろ！」

と突き飛ばされてしまった。

「いてて、クソ！暴れんなよ！」

と文句を言うがまるで聞き入れてくれない

「大丈夫かね？君は参謀には向いてるかもしれないと見える、まあ見ておきたまえ」

と国王がラフな格好でやってきた、鎧の上からではわからなかったが筋肉がものすごい、腕が俺の脚より太い。

でもこの人酒が入ってないか？悪化しないだろうかと心配になるが今の俺には見る
ことしかできない。

「やー君たち、ちよつといいかな？」

殴り合っているところに強引に割り込んでいく。

「あんだ？オツサンは引つ込んでろ！」

「うっせえぞ！割り込んでくるんじゃないやねえ！」

と喧嘩してる連中が国王に殴り掛かる

「一応用心棒なのでそういうわけにもいかなくてね」

と殴ってきたこぶしを簡単に受け止めるとカウンターで殴り飛ばした

ガッシャーン

近くにいた人のテーブルをひっくり返しそのまま男達は壁まで吹き飛ば

「あー諸君！こうなりたくなければ楽しく酒を飲みたまえ！君たちも水を飲んで頭冷やして落ち着きたまえ、次やったら追い出すからな？あとそのテーブルの人？大変ご迷

惑をかけた、ここはわたしがおごろう」

あつさり場を取めやがった。しかも迷惑かけた人へのフォローも忘れない、流石経験者である。

「こんな感じで躊躇なくやるのが大事だよ？ほら君の友人を見てみなさい」

と川崎を指差す

「ちよつとあんた！どこ触ってるんだ！」

どうも尻を触られたらしい川崎はテーブルにいる客の顔をグーで殴ってた。

顔はいかんから、ボディーにするのが座右の銘じゃなかったでしたっけ？

でも一応加減はしているようだ、殴られた方の連れはゲタゲタと笑ってる。

「こういう場はあのぐらいいい、連中にもいい葉だ」

そういうと国王は自分の席に戻っていった。

でもそうなると平塚先生はどうなるんだ？また変な必殺技かまされたらやばいな、とあたりを見回すと

ちよつと何かされたらしく男の胸ぐらを掴んでいた。

そこに格闘の教官も居合わせて一緒に睨みつけている為、男がなんかかわいそうな感じになっていた。

まあ自業自得だろう。

「ちよつとやめてください!」

結衣の声が聞こえる、やれやれまたか

「えーいいじゃん一緒に飲もうよ! 君結衣ちゃんつていうの? かわいい名前だね! ねえこんなところの連中とじゃなくて俺と組もうよ! きつと楽しいよ!」

あーチャラ男みたいなのにかままれてるな、面倒だが今回は俺が行つてみるか、どうにもならなかったら国王に助けを求めればいいやと考えると結衣とチャラ男の間に割つて入る

「いやーすみません、こいつはうちの大切な奴なんでスカウトは勘弁してくれませんかね?」

いきなり殴るのは心情的にどうかと思つたので一応説得から入る

「ああ? おめーには聞いてねーよ、結衣ちゃんこっちにきなよ」

とチャラ男は結衣を引つ張る

「嫌! やめて!」

「ちよつとやめてもらえませんかね?」

軽く男の手を軽くはたいだがそれが良くなかつたようだ。

「ああ! やんのか!」

といきなり顔面パンチをもらつて倒れてしまった。

「ハッチー！」

結衣に抱きかかえられるがそれが余計にチャラ男を刺激した模様

「てめえ！ いい気になつてんなよ！」

と今度は腹を踏みつけられる

「がふっ」

「ああ？ その腐った目で分かった、てめえ最近調子にのつてるヒキガヤとかいう奴だろ！ 領主様に取り入りやがって！ 何が異世界人だ！ 俺なんかバイト先の生意気な女をちよつと殴つただけで異世界から来た人を見習えとか言われて首にされるしよ！ 大体てめえはいつもかわい子侍らしやがって！ ずるいんだよ！」

と言いがかりをつけられたうえ何度か腹を踏みつけられる

「ゲホッ、ガハア」

「もうやめてくださいー！」

結衣が叫ぶ、こんなんだつたら初めつから殴つときやよかつたと後悔していると

「やれやれ、やつぱり君は優しすぎるな、まあ異世界の連中は全体的にそう言うところがあるみたいだがね」

国王がやってきてチャラ男の前に立つ

「君が痛めつけた人はこのオーナーなんだけどね？ 首がどうこうは自業自得だろう、

彼には関係ないことだ、出て行つてくれないか？」

国王はそう言うのと片手でチャラ男の胸ぐらを掴むとそのままヒョイと持ち上げ睨みつける

「ヒィー！」

歴戦の勇士の眼力はかなりものらしくチャラ男の表情は見えないがかなり怯えてる模様

「酔っていたとはいえ無抵抗の人間を痛めつけるのはどうかと思うがね、二度と顔を見せるな」

そう言うのと扉からチャラ男を文字通り外に投げ捨てた。

「ハッチーごめんなさい・・・」

「結衣、謝んな、俺の対応が不味かっただけだ」

「確かに対応が不味いな、あと結衣くん、会計待ってるお客がいるぞ？ここは任せて早くいくといい」

国王が戻ってくる、ちよつと辛辣ですね。

「まあ慣れない時はこうなる物だ、私も酔っ払いでも言えば分かってくれると思つていた時期もあった、君は少し休むといい、代わりに私が働こう」

「それは、流石にちよつと」

「気にするな、こゝろ見えて結構楽しんでるからその礼だ」

無理やり休憩室に押し込まれると国王は俺の代わりに注文取りに向かつてしまった。その後回復した俺は国王の助けもありなんだかんだでその日を乗り切った。

次から躊躇なくいくことにするか、中途半端は良くない。

戸塚も絡まれたが男だと言ったら微妙な反応になり即解放というのが何度かあったらしい、小町も絡まれたが材木座がすぐにやってきてにどうにかしてもらったりしたとか、あいつ中身入れ替わってないよな？本当に本人か？

奴は以外に結構多くの冒険者と顔なじみであるらしく、対応すると、よう！將軍！と言われて穩便に事が済んでしまつてたとか。

あの口調と行動だから面白がられてるのかもしれない。

大志は自分のことで精一杯だったみたいだが小町のピンチに駆けつけなかったペナルティとして後で説教だな。

「やつと終わつたな」

夜、ようやく最後の客を追い出し店を閉めた。

閉めるのが早いみたいなのを言われたが昼もやってるのだから夜遅くまでやるのは正直俺たちの体が持たない、明日の仕込みもあるんだから早々に締めることにした。

「しかし疲れたな、今日だけでずいぶん稼いだんじゃないか？」

「ごめんなさい、私が途中で抜けたりしなければ・・・」

「雪乃先輩！その分わたし達頑張りましたから！」

「そーだよゆきのん！へーかにも手伝ってもらったし！」

確かにみんな頑張ってくれた、しかしお客であるはずの国王にも手伝いをさせたのは問題だと思う、ここは一応オーナーとしてお詫びをすべきだろう。

「国王陛下、お手伝いさせて大変申し訳ありませんでした」

「いやいや、楽しかったので私はいいんだ、それより葉山君や陽乃君達から話を聞くと君たちの世界は大分物騒な武器があったり世界情勢もめんどくさそうで厄介だと思っていたのだよ、だが今回君たちの働いている所を見てわかった、君たち一般人の世界は平和すぎるんだな、正直羨ましくはある、だが商売をしていく以上もつとこの世界の流儀に慣れた方がいい、優しくしていると相手はつけあがるぞ？守りたいものがあるなら力を見せるんだな」

と自分の腕の筋肉を見せびらかす、マジで丸太のようである

「すつごーいカチカチだよおにいちゃん！」

なんか小町が国王の腕を触っている、ちよつとやめなさいって

「スツゴーい！小町普通にぶら下がれる！おにいちゃんもこのぐらい鍛えればいいのに！」

小町ちゃんあんたなにやってんの？国王もなんだか楽しそうだし

「フム、鍛えるのは良いぞ！比企谷、私と一緒に鍛えようじゃないか！」

平塚先生勘弁してくださいよ、あんたと鍛えたらいつの間にか亀仙流か極限流空手の門下生になっちまうわ。

でも雪ノ下の体力増強は課題の一つだろう、討伐でも戦いが長引かないよう補助魔法を駆使しての一撃必殺の戦い方しかしてこなかったしな

「雪乃ちゃん？もう少し体力つけないとこれからいろいろ大変よ？お姉ちゃんとトレニングしよっか？」

陽乃さんうれしい申し出です、しかしここにきてなんだか姉妹の仲がぐつと近づいた感じではある、妖刀のことがあったり一緒に仕事したりして少しは雪乃の話を聞くようになったからかもしれない、雪乃もなんだかうれしそうだし仲良きことは美しきかなである。

「あのー先輩、そろそろ明日の仕込みをして寝ませんか？このままだと深夜になってしまいませんか？」

ナイスいろは、明日も朝から混雑が予想されるからな

「そうだな、結衣、清算しておいてくれ、あと明日食材調達も必要になるからその確認も必要だ、さっさと準備をして寝ちまおう」

他にも掃除やら食器洗いやら色々な雑用が沢山残っているので皆に指示を出して片づけに入る。

「やはり君はこういうのは得意そうなんだな、私は明日帰るがもしその気があるなら城に来たまえ」

またスカウトされた、ちよつと困るんですけど

「あと陽乃君のことは諦めてないからな、むしろ雪乃君と結衣君というは君もセットで欲しい、うちの王女の良い友人になってくれそうだしな、他の者もできたら欲しい所だ、色々な刺激になる」

平塚先生とか物理的に刺激を与えかねませんがね。

そういうと国王はまた笑いながら自分の部屋に帰って行った。

引き抜きの対象が増えてるんですけど、なんだか変な風に目を付けられてしまったな。

店はまだまだ忙しさが続くだろう、しばらくは情報収集なんてできるような状態ではないが、命の心配が無いし焦って討伐をする必要も無い上に明日の飯のことを考えなくて済む、こんな元の世界では当たり前前なのがこんなうれしいことだったとは思わなかった。

第二十八話

またも忙しい一日が始まる、朝食といえど飯に味噌汁、あと納豆やらサケの切り身やら卵やらなにやらと俺たちの世界の定番メニューを色々考えた、サケ自体はもちろんいなかったのでもいろんな魚を試しようやく似たようなのを発見、それを使う事にしていい、朝食に米が食べられるというのはいはり素晴らしいことであると云わざるを得ない、しかし雪乃や陽乃さんが米を炊くと他の人よりおいしくなるのは何故なんだろうか？

朝食メニューは国王一行にも大好評だった、流石に納豆には初め難色を示していたが、材木座が旨そうに食べてるのを見て真似して食べてみたところ本当に旨いと大好評だった。

レシピを教えてほしいと言っていたので伝えたが魚の丸焼きを宮廷料理にするレベルのコツが果たして味噌汁を作ったりできるのか不安ではある。

納豆は腐った豆だし味噌だつて発酵食品だ、一応城にも置いてあったが人によつてはこれは食い物じゃないと激怒するやもしれん、大丈夫なんだろうか？

宿泊客の朝食時間は特に決めていなかったので国王一行の方々と一緒に取ることに

したのだが、朝食後国王一行は俺たちが開店準備をしている間に早々に出発していった。

アダムさんに挨拶していくからと出て行つたが、あの人起きるのがいつも遅い、大丈夫なんだろうか？

開店後暫くすると客がどんどん入ってくる、ちよつと遅めの朝食だがそれでも人は入ってくる。

一仕事終えてきたなんて気が早い連中もいた、お勤めご苦労様です。

またも外に列ができるので列の整理にとりかかっていると

「君たち！国王様が館に来るんだつたら先に言つてくれよ！」

なんかアダムさんがプンプンとお怒りになりながらやってきた。

どうやら国王の顔を見たことが無い館の使用人が冒険者の人が挨拶に来たと思つたらしく、寝ていたアダムさんに冒険者の人が挨拶に来ました、と言つてしまつたらしい。

またなにか厄介ごとかと思つたアダムさんは寝間着のまま出てしまつたらしく、おかげで国王に『もう日が上つてずいぶん経つぞ！その恰好は何だ！』と怒られたとか、やはり怒られたか、そういうった規律のようなところは厳しい感じだったしな。

「しりませんよ、そういうのは仮にも領主の館なんだから周知させておくべきでしょう？それにいつも遅くまで寝ている方が悪いんじゃないですか？」

「それはそうだけど・・・君はいつも辛辣だよね！まったく！開店直後は混んでて大変だと思つてこなかつたけど今日食い放題の権利を行使させてもらうからな！沢山食べるぞー！」

そういうつつちゃんと並んでくれる領主様偉いです。

雪乃は倒れる前に休んでもらい夕方に備えてもらうことにした。

そうやって夕方を迎え、先日の教訓に従いたちの悪い客には一撃食らわせることにしたのだがどうも慣れない、結衣はというと昨日みたいにしつこく絡まれたら相手のテールの上の物を一瞬で凍らせビビらせることにしたらしい、昨日のことを思いだすと自然と怒りがこみ上げて我慢できなくなるとか、食い物が凍るのでついでおかわりも要求させて一石二鳥だとか。

それってヤクザみたいな気もするが、この世界ならそれも許される模様、力こそ正義、いい時代になった物だ。

「やっぱり慣れんな」

先日国王に言われたのにどうしても相手に手を出すというのがやりにくい、注文を伝えに厨房まで行くとぽろっと漏らしてしまう。

「知ってる、ハッチーやさしいし」

そういうことをさらつと言うな、恥ずかしいだろうが

「八幡よ、そういう時は我を呼ぶがよい、我の力で何とかしてやろうぞ！」
「あんた、どうしてもつて時はあたしを呼んで？」

材木座と川崎が申し出てくれる、正直情けないが頼るしかないのが現状だな
「八幡、僕も頼つていいからね！」

戸塚、嬉しいがお前に迷惑をかけるわけにはいかない、ただでさえお客は戸塚を見るとずいぶんと微妙な顔つきになってるからお前に申し訳なく思っているんだ、そのケがある野郎に絡まれたらどうしようと思つてるぐらいだしな、でも女性客からは大うけだ、戸塚を指名するお客もいてアイドル扱いである、戸塚が行くたびに大騒ぎしている。
看板娘にしてもいいのではないだろうか？

この場合看板男の娘であるが

そうやってその日も乗り切り次の日へ、毎日お客が押し寄せてくるのでマジで大変ではある、死ぬほど忙しく毎日があつという間に過ぎていく、宿屋の方も好調である、住居も兼ねる都合上敷地を広く取る必要があつたので、街中に店を構えることは無理だった、その為街から若干離れた外に近い場所に構えているので外から来る人のアクセスが非常にいい、さらにワイバーンの発着場が近くにあり、物珍しさもあつて泊まる客が多いのだ、宿の値段も他よりも高めだが旨い飯と美人の店員ということで人気はかなり高くなつていようだ。

たまに厨房のメンバーも接客に回ってもらうことがある、雪乃と陽乃さんあたりだとまた絡まれるんじゃないかと心配したが美人すぎてビビってしまい逆に何もできなくなるらしい、ごつい男でさえ雪乃や陽乃さんの顔を見ると顔を真っ赤にして固まってしまふので注文が取りにくいとぼやかれる始末。

いろはは元よりめぐり先輩も何故かお客のあしらい方がうまく、絡まれてもうまいことかわしている模様、藤沢はなにかという本牧がすつとんできて対処してたのでこれも問題なしだ。

そうして日を追うごとに少しずつ混乱も減り客足も安定してきた、そもそも値段は他の所より高めに設定してある、毎日これる冒険者は限られてくるのだ。

そうなると客は必然的に稼ぎがいい冒険者や葉山のように名前が売れている冒険者等に絞られていく、そうして客足が安定してくると今度は絡んでくるような客は激減していった。

どうやら国王も他の偉いさん達に旅行に行くなら千葉亭がいいと言ってくれているらしくたまに偉いさんも来る、わざわざ反対側の領地から泊まりに来たという人までいるようだ。

そういつた人たちはモラルが高い、偉いさんには軍人が多い為規律にはうるさいというところもあるのだろう。

有名どころの冒険者も下らない問題起こして名前に傷がつくのが嫌らしく、そういうのは控えてるようにしているようだ。

無論アダムさんもよく来店する、頻繁に来てくれて場合によっては朝昼夜と一日中顔を出す様な状態だ。

結果としてマナーが悪かったり酒癖が悪いような客層がくることは他の酒場より圧倒的に低くなり、安心して食事や酒が飲めるということでもまたも評判があがることになった。

余裕が出てくると孤児院の手伝いを毎日ではないが再開することにした、材木座は大喜びで孤児院へいく、ついでにパワーアップをしたいからといくつかの補助魔法を覚えるため訓練所の人の所に相談に言ったりもしてらしい、アクティブすぎるだろうあいつ、防御や反射の魔法を中心に習得するとか、アクセラレータでも目指すのか？

本牧たちも鍛冶屋に復帰、こいつらは鍛冶屋の店主に気に入られまくったので引越しするといったらぜひ家に住んでくれと言われ半ば強引に住み込みで働くことになったそうだ。

そして小町と川崎姉弟は正式にバイトから引き揚げさせてもらい、うちで働いてもらうことにした。

平塚先生は訓練所通い、たまに訓練生を連れ来るので儲けさせてもらってる。

あと食材確保の為の討伐も再開することにした。

食材自体は仕入れることは出来るが、討伐もしておかないと体が戦い方を忘れてしまうというのもある、この世界は今後何が起きるかからん状態だし、いざという時戦えないと困ることが起きるかもしれん、もちろん食材確保が目的なので遠出はせず近場でやることにしていた。

開店から3ヶ月ほど経ち、すべて順調にまわっていった為当初の目的であった情報の収集にかかる、収集と言っても、なんとなくお客に話しかけたり、最近どう？とか話題を振るのだけなのだが、雪乃をはじめとするうちの女性陣は皆美人ばかりなので男性客は大喜びでいらん事まで話してくれる、お陰で非常に情報収集がはかどった。

俺たち男性陣はというと、戸塚は女受けするので問題なし、材木座は冒険者に顔が効くので何もしなくても話しかけられるし、大志もバイト先に来た客と知り合いになつたらしくちよくちよく話しかけられている。

あれ？俺だけ人脈なくね？異世界に來てもボツチかよ・・・

ただ今の国内の情勢やモンスターの動向等は色々聞けるのだが、肝心の異世界に帰る情報や以前葉山から聞いた転送魔法の話等の情報はまるでなかった。

そして葉山達は未だ戻ってきていない、情報によればあまり状況が良くないらしい。

北方面にモンスター討伐に行つたが相当苦戦しているらしいとのこと、なんでもモン

スターが次々と押し寄せてきていくら倒してもきりがないとか、ゴブリンが村一つ丸ごと占領して罾を仕掛けたとか、同行してる国王軍の部隊がその罾にはまって危険な状態になっているとか大分物騒なことになっているそうだ。

なんとかその村の罾を突破したそうだが部隊もほぼ壊滅、その上箝口令が敷かれたらしく、どういった罾だったのか、何故そこまで追い詰められたのか、葉山達はそもそも無事なのかが一切わからない。

客層が有名どころの冒険者や稼ぎが良かったり、身分が高い人だったりするので、必然的に得られる情報の信頼度も高く、怪しい情報というのは少なかったのだが、そういう人たちですら何が起きてるのか皆目見当がつかないそうだ。

「あいつら死んだりしねえだろうな」

ある日の夜、客足も落ち着いたので休憩がてら皆で食事をとっている時ふと口に出ってしまった。

学校にいるときはリア充なんて死んでしまえばいいなんて思っていたが、さすがに本当に死んでしまうのはアウトである。

「隼人はバカだけバカじゃないから大丈夫よ、比企谷くんはおバカさんだけどね」

「そうね、あの男はあなたと違って自分を犠牲にしたりしないから大丈夫ではないかしらっ？」

あんたら姉妹なんか辛辣ですよ？

そして雪乃さん痛いところ付かないでください。

「葉山先輩は先輩よりしつかりしているから大丈夫ですよ、きっと」

「隼人君は大丈夫！それよりハッチーの方が心配だよ、また変なことしたら許さないんだから！」

いろはは何気に酷い、そして何故か結衣から怒られてしまう。

「なんでお前ら葉山の信頼度がそんなに高いんだよ・・・そしてなんでついでみたいに俺をデイスるんだ？」

「あなたの信頼度が低いからあの男の評価が相対的に上がってるだけよ犠牲谷君」

雪乃は笑っておらず真剣にこちらを見つめている、他の連中もこちらをじつと見ている始末だ

「わーったよ、大丈夫だから、もう二度としませんって」

また雪乃の口撃が始まってしまうな、そう思っているとどつかで見たことがあるチャラ男が俺たちのテーブルに近づいてきた。

「あのーすみません」

「あーすみません今飯食ってるんで、注文つすか？」

飯食ってるのになあ、でも客商売だからこういうのは仕方がないかと思っていると

「いえ、そうではなくて比企谷さん、あなたに用事があつてきました。私は以前ここが開店した時結衣さんに絡んであなたに酷いことをしてしまつた者です」

あーそういうことあつたな、と周りにいる連中の気配が変わる

「話は聞いてるわ、今更何をしに来たのかしら？」

「ハッチーちよつと下がつて、この人絶対許せない」

「八幡、ここは任せてもらおうか」

いきなり雪乃達が武器を手に取り臨戦態勢である、戸塚までもが無言で杖を持つて殴ろうとしている、めぐり先輩なんて見たことないような怖い顔をしている、陽乃さんに至つては完全に無表情だ。

ちよつとあんたら待ちなさいよ、まだこの人話し終わつてないでしょうが

「ちよつとお前から待て、戸塚も武器を下ろせ、何しようとしてるんだ」

「大丈夫、殺しはしないわ、ただ死んだ方がマシだつたと思わせるだけだから大丈夫よ」

「火傷してもすぐヒールをかければ大丈夫だよ？」

「某剣心は言つていた、逆刃刀だから大丈夫だよ」

「お前から全然大丈夫じゃねえよ、ちよつと落ち着け、んであんたは今更なにしに来たんだ？ 復讐つてわけでもなさそうだが？」

その男はお詫びをしにわざわざ来たらしい、ずっと平謝りの様子に皆武器を下ろして

くれた。

なんかみんな血の気が上がってませんかね？

特に戸塚も小町も天使じゃなくなっている気がするんだが、アレ？でも天使って剣持ってたり天罰くらわしたりするからいいのか？

などとどうでもいいことを考えてると

「本当に今更で申し訳ありません、このお詫びの品を探すのに手間取ってしまって、討伐や外部に出かける際に使うととても便利な物です」

と小さい白い鳥居のようなアクセサリをくれた、身に着けてるとゴブリンが攻撃してこなくなるそうだ。

「そういう事なら有難く頂戴します」

ゴブリンは気をつけていないと奇襲をしかけてくるから食材目的の討伐だと大変厄介な存在だ、それに食えるものではないし、今や換金目的で討伐する必要もないしな。

「みなさん最近討伐を再開されたと伺いました、ちなみにいつもどの辺で討伐をしてらっしゃるのですか？」

チャラ男が聞いてくる、まあ秘密にするようなことでもなし、仮に出先でこいつに襲われてもこちらも一人二人でいるわけじゃないし武器を持ってたらこいつ程度には勝てるだろと思いき普通回答する

「んーいつもは近場なんだが最近はずっと足を延ばして丘の向こうあたりまでだな、森を抜けるとちよつとした広場があつてそこをベースにしてやつてるな」

「ああ、あの辺ですか、確かに少し遠いですね、気をつけてくださいいな」

そう言ううちチャラ男はその場からすぐに姿を消してしまった。

「あれ？もういなくなつた、んもーなんだし！」

「結衣さん、こういう場合は塩をまくといいのよ？」

「物を渡せばいいと言うものではあるまい、しかも今更来おつてからに！誠意が全く見

えん！」

みんな不機嫌気味だ

「ま、まあもう絡んでくることも無いだろ、それより早速次の討伐の時に使つてみるか、転ばぬ先のなんとやらだ」

陽乃さんを救出してからここまで順調に行きすぎていた。

そして偶然にもいい人に恵まれていたこともあつて俺は気が緩んでいたのかもしれない、ここは平和な日本ではなく、力こそ正義であり隙を見せたら食われてしまう食うか食われるかの過酷な世界、俺はそういう世界に身を置いているということを忘れていたのだ。

それを身をもつて知ることとなる。

第二十九話

「よし、荷物はこれで十分だな、弁当も持ったし、んじやいくか」

今日は狩り目的の討伐の日だ、店は陽乃さん達に任せて雪乃と結衣、いろは、戸塚、材木座と共に出る。

無理はしないとはいえ最低このぐらいはいないと何かあった時大変だ、さらにいろはには煙が出る矢を持たせている、いわゆる信号弾のような物だ、もし負傷者が出たり面倒なことが起きたらこれを空に向けて撃つて周囲に知らせるのだ。

近くに冒険者がいた場合は救助に来るような暗黙の了解のような物があるらしい。

お互い助け合えということだが、まあ来てくれるかは五分五分だ。

ヤバイ時は陽乃さんをお願いしてテレポートの魔法で戻してもらおうと思つたが、実際は目視できる範囲を移動するぐらいであまり使い物にならないとか、人ひとり転送するだけでかなりの魔力を消費してしまうらしい、前めぐり先輩を転送できたのは妖刀の有り余る魔力のせいでできてたんだとか、確かに領地の人全員にチャームをかけて魅了したりとか異常な量の魔力だったみたいだし、それに一般人が簡単にほんほん使えたら盗みとか簡単にできちゃうし、使えらと言つてもそんなものだろう、現実には厳

しい。

「またいつものところかしら？」

「そうだな、それとおまえも最近は少し体力がついてきたみたいだな」

「補助魔法をなるべく使わないで戦うようにしているからかしら？ 最近は体が軽いのよ」

その調子でお願いしますよ？ 厨房担当が倒れられたら困りますもの。

「八幡よ！ 最近我也補助魔法を少し使えるようにしているのだよ！」

そう言うのと材木座は小さな盾のような防御魔法を見せてくれた

「ふっふっふ、投石を弾き返すとまではいかないが、少しだけなら防御可能だ！ あと反射の魔法もだな……」

と長々と講釈を垂れ流そうとしてきた、うーんちよっとうざいかな？

「ほーん、んじゃあ結衣の魔法を受け止めたり反射できるかやってみようか？ 結衣は気軽に魔力調整が出来るからな、たまに人の数倍の威力が出す時があるが練習にはもってこいだろ？」

「え？ あー八幡？ 遠慮しときます……」

まあ、今日の結衣は出かける前に全部の冷蔵庫に魔力注入してきたからそれほど魔法連発できないんだがな、調子に乗るのは良くないから材木座にはいい葉だ。

そんなこんなでいつもの広場へ到着した、途中モンスターに遭遇しなかつたので余計な体力を使わずに済んだのは良かった。

ちよつと気楽すぎるかな？と思っていたが無理しないし、この辺はモンスターも小さい個体しかないので大丈夫だろ、そう思っていたらふと広場の真ん中に妙なオブジェが置いてあるのに気が付いた。

「何だこれ？」

骨で作られた妙なオブジェが異様な存在感を醸し出してる

「ゴブリンが作った物に似てるわね？ 罨かもしれないから近づかない方がいいのではないかしら？」

「うーんなんか妙な魔力を感じるよ？ ゴブリンが作った物とは違うんじゃない？」

戸塚がそう言いオブジェを観察している、俺も一緒に覗き込んでしげしげと観察してみる。

「強いて言えば斬新なかかしに見えなくもないな、まあ大丈夫だろ、何か飛び出てきたら俺が戸塚を守ってやる」

とそんなことを言っていると突然オブジェの目のあたりが光り出す

「うわ！」

「戸塚！ 大丈夫か！」

「ハッチーなんか変だよ？なんかこの辺の魔力が変な感じになってる！」

「先輩！なんか突然モンスターの気配が接近してきました！この気配はゴブリン、ダイアウルフ、オウルベアー、ワイルドボア・・・ほかにも虫やトカゲの奴とか！なんか凄くいっぱいこちらに向かっています！」

「はあ？んなバカな！さつきまでなんもいなかっただろ！クソ！罠か？とりあえず逃げろぞ！」

来た道に戻ろうとするが

「嘘だろ・・・」

道の向こうから姿を隠そうともせずモンスター達がこちらに向かってきているのが見える。

「クソ！こいつが原因なのか？」

オブジェを破壊してみるが、モンスターの様子に代わる気配が無い

「ここで迎え撃つ！お前ら固まれ！あのゴブリンがこつちまで来たら一点突破で逃げ・・・」

最後までしゃべる前にゴブリン共が放った矢の雨が降ってきた。

「お二人とも危ない！」

材木座が雪乃と結衣を突き飛ばして矢の雨から回避してくれたが、落ち着く間もなく

矢継ぎ早にモンスターたちが襲って来た為俺たちは分断されてしまった。

「八幡！雪ノ下殿と由比ヶ浜殿のことは任せられよ！」

材木座が二人をかばい襲ってくるモンスターたちを切り捨てている、無論雪乃も結衣も負けじとモンスターを倒しているがどんどん襲ってくる、こちらにいる戸塚やいろはは接近戦は苦手だがなんとか対処してもらっている。

倒しても倒してもきりが無い、幸いこの辺には大きい個体のモンスターは冒険者たちに狩りつくされほとんどいない、ほとんどが小さい個体モンスターなのでなんとか対処できている、ただ武器を振り回すゴブリン共が厄介だ。

「クソ！きりが無いぞ！」

しかもこいつら攻撃よりもこちらに接近することを最優先にしているかのようにふるまっている。

おかげでモンスターが邪魔ですぐ近くにいるのに雪乃達と全然合流できない。

「いろは！信号弾を打て！」

「ハイ！」

いろはが隙を見て空に向けて信号弾を放つ、オレンジ色の煙を出しながら信号弾は空へと消えていく

「誰かが見てくれてほしいんだが」

この辺には小さい個体ばかりだが実際のところ大きい個体がいつ襲ってくるかわからないのだ、可能性は0ではない、ここは辺境だ、前に見たオーガなど森の奥深くには大型のモンスターが多数いるという話もある。

「早く逃げ出さないとまずいことになるな」

雪乃の方を見るとさすがに疲れが見え始めていた。

結衣の魔法も威力が落ちているように見える

「まずいな・・・ん？」

木が不自然に揺れているので上をみると斧を持ったゴブリンが雪乃の頭上にいる

「雪乃！上だ！」

俺が叫ぶと同時にゴブリンは雪乃の頭上に飛び降りた。

「雪ノ下殿！」

「きやあ！」

頭上から振ってくるゴブリンに気が付いた材木座が雪乃を思いつき突き飛ばした。

ズバツ

「はれ？腕が？」

材木座が雪乃を突き飛ばそうと伸ばした左腕がそのまま頭上から落ちてきたゴブリンの斧でひじから先を切断されてしまった。

「ちよつと材木座くん乱暴すぎ．．．あ．．．」

振り向いた雪乃はひじから先が無くなつた材木座を正面から見る形となる、切断された腕から血が勢いよく噴出し雪乃の顔が真っ赤に染まる。

「いやあああああああ!!!」

雪乃の声がこだまする

第三十話

「ゆきのん！どうしたのって！中二！その腕！」

モンスターを魔法で吹っ飛ばしながら結衣が近づくと

「ははは、斬られてしまったようだ、すまぬな雪ノ下殿、私の血で汚してしまったようだ、しかし不思議とあんまり痛くは無いな？アドレナリンというものか？それより片腕ではうまく剣をふれぬようだ」

しゃべりながら右手でロングソードを振っているがゴブリンにすら致命傷は与えられず追い払う程度しかできていないようだ。

「また、私のせいです．．．材木座くんも私のせいです．．．入学式の八幡のように．．．ごめんなさい．．．」

血だらけの顔で雪乃がへたり込み放心している。

「ゆきのん！そんなことしてる場合じゃないよ！ハッチー！中二の腕斬られちゃった！あとゆきのんおかしくなっちゃった！」

一部始終を目の前見ていた。

材木座の腕が切断されたのに俺は何にも出来なかったのだ。

「クソ！雪乃！しつかりしろ！あと結衣！雪乃のカバーをしろ！材木座は止血だ！」

この世界の回復魔法は万能ではない、体の一部が欠損してしまつたら現代で言うところの手術をするしかないのだ、その為の医者はある、今の俺たちに出来ることは今すぐここから逃げ出して医者に駆け込むことだ、だがそれも出来ない。

「材木座くん、ごめんなさい、今すぐ止血しないとイケないわね、なにかひものような物が・・・ちょうどいいわこれを」

雪乃は自分の髪につけているリボンをほどく

「これで腕を結べば止血できるわね、動かないでちょうだい？」

雪乃の目には光が無くなっていた、ショックで正気を失っているようだ。

「雪ノ下殿！そんな細いリボンでは意味が無い！」

「ゆきのん・・・ハッチー！ゆきのんこわれちゃった！」

「くそつ、結衣！マントとかを破って腕を結んでやれ！」

「無理だよ！モンスターを追い払うので精いっぱいだよ！！そんな暇無いよ！！」

「我は大丈夫だ！なに！体が軽くなっていい感じよ！」

材木座は片手で剣を振るいどうにか対処しているが出血がひどくどう見ても長く続きそうにない、その時森の奥からモンスター唸り声が聞こえる

グオオオオオ

「なんかやばいんじゃないのか？」

「先輩、やばいです、あれやばいですよ！」

モンスター達が一瞬固まった

「おい！今だ！材木座達の所へ行くぞ！固まれ！」

一瞬の隙を見てダツシユで合流する

「八幡……ごめんなさい……私のせいで……ごめんなさい……」

雪乃は涙を流しながらへたり込んでいた。

「戸塚！材木座の止血だ！あと雪乃！あとからいくらでも話を聞いてやるから今はまず立て！立って剣を構えてくれ！」

「私が悪いのよ……ごめんなさい……ごめんなさい……」

ドスン、ドスン

と森の暗闇から大型のモンスターが歩く音が聞こえる、

こん棒を持ったゴブリンチャンピオンが姿を現した。

「嘘だろ……あんな無理だろ……」

「先輩、どうしましょう……」

「ハッチー……」

「ええい！クソツ、戸塚、材木座、俺と前に出ろ！時間を稼ぐから結衣というはは雪乃を

担いでここから逃げろ！逃げることを優先しろ！」

結衣の魔法はそろそろ打ち止めだ、目に見えて威力が落ちている、しかしゴブリンの数を大分減らしたし他のモンスターもゴ布林チャンピオンに恐れをなして逃走したのかさつきよりは減っているようだ、森から抜ける道にもまだモンスターはうろついているが、そろそろ打ち止めの結衣の魔法でも、あの程度なら薙ぎ払えるはずだ

「嫌だよ……一緒に逃げようよ……」

「逃げてもあいつが走ってきたら簡単に追いつかれる！今しかチャンスは無い、いいから逃げろ！」

「先輩……わかりました！結衣先輩！雪乃先輩！行きましょう！」

「結衣さん？いろはさん？どこへ連れて行くの？八幡は？嫌よ……嫌よ……」

「二人とも雪乃を頼むわ、あと小町のことも頼む、それと……きちんと答えを出せなくてすまなかった」

「ハッチー……」

「ふん！アレを倒してしまっても構わんのだろう？なあ八幡よ！」

「そうだよ、怪我しても僕が回復させるから大丈夫だよ」

「二人ともすまん」

「そこは『ええ、遠慮はいらないわ』というところであろう？まあいいわ、某アーチャー

ではないがこういう結末になるとはさすがの我でも予想は出来なかったがな！」
「本当にすまん」

「僕も最後に男らしいところ見せれるんだもん、八幡も一緒だし、気にしてないよ！」
「戸塚……」

俺たちは構えた、結衣たちは既に後ろの道を進んでいるようだ、雪乃の叫び声が聞こえる。

「……では八幡、戸塚殿いこうか」

「いくぞー！」

と踏み出した途端

「三人とも伏せるしー！」

後ろから聞き覚えのある声があった。

俺たちは反射的に地面に伏せる

「ファイヤーアロー!!」

後ろから炎の矢が数発飛んでゴ布林チャンピオンの体に突き刺さる

グギャアアアアア

ゴ布林チャンピオンは悲鳴を上げかがみこんだ

「エクスプロード！」

ズドーン

かがみこんだゴブリンチャンピオンの頭に魔法が命中する。

煙が晴れるとそこには上半身が無くなったゴブリンチャンピオンだったものが座っていた。

「比企谷！」

振り向くと馬に乗った葉山と三浦が俺たちを見下ろしていた。

第三十一話

「信号弾を見つけたから急いで来たんだ、いったいどうした？・・・材木座くん！その腕はー！」

「ヒキオは下がりな、隼人、とりあえずこいつら何とかするし」

葉山と三浦は馬から降りる、三浦は両手からファイヤーボールを連射して散らばってるモンスターを掃討しはじめた。

ゴブリンチャンピオンが倒されたことに恐れをなしたのかゴ布林共の大半は逃走、しかしまだ残っているゴ布林やモンスターがこちらに襲ってきている。

「そうだな、他の奴らは追いついてきたか？」

「あいつら足早いからもう来るっしょ、それよりまとめて吹っ飛ばしていい？」

「まで、まず材木座君の腕を探してからだ、あと彼の応急手当だな」

「す、すまぬ・・・しかし・・・これで・・・たす・・・かった・・・」

材木座は安心したのかそのまま倒れ気を失った。

「材木座ー！」

「大丈夫だ、息はある、それより比企谷、どうしたんだ？慎重なお前らしくないな、結衣

「たちを途中で見つけて話を聞いた」

「そうしているうちに戸部たちも到着、こいつらは走ってきたらしい、合流した結衣達もつれてきていた。」

「どつたの？ヒキタニ君らしくねーべってザイモクザ君、その腕!!!」

「戸部、大和は材木座君の腕を探しつつモンスター[!]の掃討を頼む、大岡は馬で一足先に戻って医者を探してくれ、材木座君は君たちの宿に一旦運び込む」

「「わかった」」

「姫菜はマジックポーションとかの回復剤を結衣たちに分けてくれ、それと適当な木の枝を切るからそれで担架を作ってくれ」

「うん」

「すまん・・・」

「それは材木座君に言ってくれ、聞きたいことは山ほどあるが今はここから逃げるのが先決だ・・・おい、比企谷腰につけてるそれはなんだ？」

葉山が先日チャラ男にもらった白い鳥居のようなアクセサリーを指差す。

「ああ、店に来たやつからもらったんだよ、ゴブリン避けって言ってたけど全く役に立たなかつたな、まあお守りなんてそんなもん・・・おい！なにしてるんだ？」

葉山は比企谷から強引にアクセサリーをもぎ取ると空に向かつて投げる

「優美子！」

「わかつてるし！」

空中で三浦のファイヤーボールが命中しあつという間に燃え尽きてしまった。

「おい、一体どういう・・・」

「ここに来たとき、変な物はなかったか？ 具体的に言うとは骨で作られた物だ」

「ああ、確かにあつた、なんか目が光つたかと思うといきなりモンスターが大量に押し寄せてきたんだ」

「そうか、やつぱり」

「おい、どういうことだ？ それを壊してもモンスターの動きには全く変化なかったぞ」

「アレはスイッチみたいなものだ、さつき燃やしたアクセサリーの能力を発動させるためにあるだけだ、一度発動するとアクセサリーの方を破壊しないと周囲一帯のモンスターを強制的に引き寄せ続ける、詳しいことは後で話す、とりあえず比企谷、モンスターの掃討を手伝ってくれ、アクセサリーを燃やしても引き寄せられなくなるだけでこいつらは逃げたりしないからな」

「・・・くそ！ 俺は騙されたのか!!」

「後悔は後にしろ！ とにかく手伝え」

いつにない強引さで葉山の勢いに押されてしまう

回復剤を飲んだ結衣というはも掃討に参加するが雪乃だけが座り込んでしまいだ動かない

「私のせいで……」

「雪乃、いいんだ、いいから顔を上げてくれ……」

説得するが身動きしてくれない

「比企谷ちよつといいか、雪ノ下さん」

葉山は雪乃の顔を強引につかんで上に向けると

パン

葉山は雪乃の横つ面をひっぱたいた

「おい！おまえ！」

「比企谷、黙ってみている、雪ノ下さん、今そんなことしている場合ではないだろ？君はいつも正面から戦ってきたはずだ、早く立つんだ、陽乃さんが知ったら失望するぞ」

その言葉を聞いて雪乃は葉山を睨みつける

「……何故あなたにそんなこと言われたいといけなにかしら？そんなことを言う資格が貴方にあるのかしら？」

「言われたくなければ早く立て、今の俺は比企谷みたいに甘やかしたりしないからな」

「……不愉快ね、貴方から説教されるとは思わなかったわ……八幡、もう大丈夫よ」

雪乃が立ち上がる

「葉山……すまん……」

「俺はこれ以上彼女に嫌われようがないからな、とりあえず立たせたから後のケアは任せたよ」

「腕見つかつたシヨ」

「隼人君、担架できたよ」

「よし、優美子！まとめて一気に吹っ飛ばせ！他の奴は材木座君を担架に乗せるんだ、いか！乗せたら速効この場から離れる！全員で走るぞ！」

材木座を4人がかりで持ち上げ担架に乗せようとするが材木座が目を覚ます。

「うーん」

「目を覚ましたか材木座」

「痛い」

「どうした？」

「すごく痛いよ八幡!!!、痛いよ!!痛い痛い痛い!!!」

材木座は腕の痛みに耐えきれず暴れだす

!!!!!!

「クソツ、落ち着いて痛みを感じるようになったのか？、おい材木座！暴れるな！担架に乗せられんだろうが！」

「姫菜！麻痺と睡眠の魔法を強くかけて！」

葉山が叫ぶ

「うん、それがやってるんだけど、防がれたりこっちに反射されたりしてうまくかからないのー！」

「こいつ防御や反射の魔法を少し使えるようになったとか言っていた！多分それが暴走してるのかもしれない！」

「ここに来る前にこいつ言っていたな、こんなことで裏目に出るとは

「私がやるわ、私なら、彼に麻痺や睡眠の魔法を連続でかけつつ反射してきた分体力強化の魔法を自分にかけて補うことができるわ」

「雪乃、走りながらだぞ？絶対途中でばてる」

「海老名さん？確か走り続けても疲れない薬あるのよね？」

「う、うんあるけど、連続使用はあんまり良くなくて……って雪ノ下さん!!」

雪乃は勝手に姫菜のバッグを漁ると

「これね、いたたくわ」

勝手に飲み始めた

「準備は出来たわ」

そう言ううと雪乃は睡眠と麻痺の魔法を材木座にかけるがやはり少し反射されて自分

自身へと軽く睡眠と麻痺がかかってしまう

「つく！これは地味に辛いわね」

同時に自分へと体力増強の魔法をかける

「おい雪乃無茶するな！」

「ゆきのん、姫菜と交代でやろうよ、これじゃゆきのんの体が持たないよ」

「だめよ、海老名さんは逃げるときにみんなの補助をしてもらわないといけないんですもの、材木座くんは私が見なくてはいけないの！それにこの薬を飲み続ければ私もとりあえず走り続けられるから気にしなくて結構よ！葉山くん！早く行きましょう！」

「わかった、戸部と大和は担架を持って、優美子と結衣は前に立って前からくるモンスターを全力で吹っ飛ばせ、魔力が付きたら姫菜からマジックポーションをもらって打ち続けろ、戸塚というはは走りながら援護だ、特に戸塚は材木座くんに感染症にならないよう浄化の魔法を定期的にかけてくれ、比企谷は俺としんがりをつとめろ、追いかけてくるモンスターを止める、森の外に馬車が止まっているからそこまで走るぞ！」

葉山はそう言うのと全員を走るようにせかす、死のマラソンの始まりだ。

確か前もこいつと走った覚えがあるがあの時も厄介なことになっていた、今回もそうだ、こいつもたぶん同じことを考えてるのかもしれないな。

俺たちは全力で走った、雪乃は走る速度が落ちるとすぐ薬を飲み材木座に魔法をかけ

続ける、魔法をかけることにわずかに反射されてくる麻痺と睡眠に苦悶の表情を浮かべながらそれでもかけ続ける、おかげで材木座も一応落ち着いているようだが大粒の汗が流れている。

前からダイアウルフの集団が突進してくるが三浦と結衣の魔法で吹っ飛ばされた。

次々とモンスターがとびかかってくる、いろはも走りながら矢を放つ、後ろから猛烈な突進を仕掛けてきたワイルドボアには葉山が盾で防ぎ俺が頭上から脳天に一撃を食らわせその場を離れまた走り出す、殺す必要は無い、ただまともに追いかけれなくなるだけでいいのだ。

そうして俺たちは走り続けようやく森の外へと到達した。

「さすがにこの辺までくればもう大丈夫だろ」

「街に着くまで油断するな！馬車はすぐそこだ、ついたら全員すぐ乗り込め」

馬車自体は二頭立てだが一頭は大岡が乗っていった為一頭しかつながれてない

「おいこれ大丈夫なのか？」

「姫菜！馬に筋力強化の魔法を全力でかけろ！馬が潰れてもいい！街まで持たせるんだ！」

海老名さんが馬に魔法をかける、馬の体型が変わるぐらい筋肉が盛り上がっている、馬の化け物のようだ

「よし！すぐ出発だ！」

大和が鞭をふるい馬車は全力でその場を離脱する、後ろを見ると森からモンスターの群れが追いかけてきていた。

「あーしにまかせるし！」

三浦が群れにめがけて魔法を放つ

「クリムゾンフレア！」

さつき放った魔法の上位の魔法なのかモンスターの群れの中心部に炎の塊ができたとおもくと大爆発が起きた。

ドツカーン

ものすごい爆発音がし熱風がここまで吹いてくる。

あたり一面焼け野原となり、動いている物はいない。

「これで大丈夫だと思うが油断はするなよ」

馬車はものすごい速度で街へと走っていった。

第三十二話

街へ着くと担架と共に千葉亭へと駆け込む、外に近い場所に作って今日ほどよかったと思つたことは無い。

「比企谷くんおかえり〜つて葉山くんもきたんだ？みんなどうしたの？怖い顔して・・・つて材木座くん!!!」

昼もすぎたお客がほとんどいなくなつたのか外を掃除してためぐり先輩に会う。

「すみません、詳しいことは後で！それより大岡は来てなかつたですか？」

「大岡くん？さつきお医者様連れてきてたよ？何があつたの？」

「後で説明します！とりあえずお湯を沸かしてください！」

葉山は怒鳴るようにめぐり先輩に指示を出していた。

「う、うん！わかつた！」

めぐり先輩と店内に駆け込む、中にはまだ数名の客が食事をしていた。

「すみません！今日はもう閉店です！お題は結構です！川崎！小町！大志！テーブルをくつつけるから手伝え！担架を乗せる！」

俺はそう言いうと手直にあつたまだ片付いてないテーブルから食器を床に全部落と

して他のテーブルとくつつける、皆何があつたか理解してくれたらしい、すぐに手伝いに来てくれた。

陽乃さんとめぐり先輩も出てきたのでとりあえず残っているお客を全員外に追い出してもらつたり、宿の客は部屋に戻つてもらつたりと接客対応をお願いした。

担架をテーブルに乗せると葉山は早速医者と話している。

「先生！腕を切断されました！、時間は結構経つてますができますか？」

葉山が医者のお爺さんに切断された腕を見せている

「出来ますかと言われてもな、どうせやれというんだろ？しかしこりや結構ぼろぼろだな、切られた後齧られたか？くつつくかどうかは五分五分だがね、その分料金は高いしお前らにも手伝つてもらうからな？」

「お願いします、こいつを助けてください、土下座でも何でもします」

「私が全部悪いんです．．．彼がこうなつたのはわたしのせいです．．．お願いします先生．．．」

俺と雪乃は床に膝をつく

「お前らが土下座して治るんならなんぼでもやつてもらうが今やられても治療の邪魔だ！いいから手伝え！男連中はこの大男の手足を押さえろ！腕をくつつけるのは相当痛いから麻痺と睡眠が使えるのは手伝え、あと浄化の魔法もだ！手すきの奴はわしの手伝

いをしろー!」

と医者は全員に怒鳴り材木座へ麻痺の魔法をかけるが

「こやつ防御の魔法が暴走しておるのか・・・? 厄介だな」

「私がやります」

雪乃が名乗りを上げるが、かなり憔悴しきった顔だ、ここに来るまで走り続けることのできる薬を何本も飲み、麻痺や睡眠の魔法をかけつつ反射されてきた分を体力強化で補ってきたのだ。

「雪乃ちゃん、あなたはちよつと休みなさい」

そんな雪乃を陽乃さんがたしなめる

「でもー!」

「駄目よ、ガハマちゃん連れて行って」

「うん、ゆきのん、行こう?」

「私がやらないといけないの! 結衣さん離して!・・・う!・・・姉さん・・・あなた・・・

!!!」

叫んでる雪乃に陽乃さんが近づくと雪乃は崩れるように陽乃さんに抱きとめられる、
 どうやら睡眠の魔法をかけたようだ

「ごめんね雪乃ちゃん、ちよつと正気じゃないみたいだから休んでいてね? ガハマちゃ

よかったのだ、いつもなら疑い、裏を読んで受け取ったりはしなかったはずだ、あの時
なんで俺は受け取ってなおかつ信じてしまったのだろう

「全部おれのせいだ・・・すまん材木座」

「貴様のせいだ八幡!!ぐあゝあゝあゝあゝ」

「ちよつと黙っててくれないか」

葉山が材木座の口をタオルでふさぐ

「ム————ん————」

「比企谷、今彼は錯乱状態だ、痛みに耐えきれず手近な人に怒りをぶつけているだけで心
にもないことを言っている、落ち込んでる暇があるなら彼の体を抑えるのを手伝え、手
術が失敗するとそれこそ一生後悔するぞ」

俺はバタバタと暴れようとしている材木座の腕を押さえつける、材木座はこちらを睨
みつけているように見える。

魔法がかかりにくい為手術は長時間に渡り続けられた。

途中平塚先生や本牧達も駆けつけてくれた、皆材木座の状態を見ると言葉が出ないよ
うだったが、すぐ手伝ってくれた。

そして医者のお爺さんの健闘もありようやく縫合が終了し手術は終わった。

材木座もようやく落ち着いたのかまた眠ってしまった。

「なかなか厄介だったな、さてあとは定期的に浄化の魔法をかけるのと、目を覚ましそうになったら睡眠の魔法をかけてやるんだが、こやつは効きにくいようだしな、平行して薬を使うか、少々高いがお前さんなら払えるだろ、取ってくるからちよつと待ってろ」
そういうと医者のお爺さんは出て行った。

「みんな本当にすまん……俺が甘く見ていたせいだ……」

「それについてだが比企谷、アレをどこで手に入れたか詳しく聞かせろ」

葉山がアクセサリーのことを聞いてきたので入手した経緯を詳しく伝えた。

「そうか……大岡、今の情報で探せるか？」

「顔知らないけど何とかなると思う、でもこれって隼人……」

「……ああたぶんそうだ、厄介そうだったら大和と戸部もつれて行ってくれ」

「そうだべ！俺も行くつしよ！ザイモクザくんにこんな酷いことする奴許せねえべ！」

「だな」

葉山が大岡になにか含むような言い方をしている、二人とも顔が険しい、そして珍しく戸部が激昂している、材木座と仲が良かったみたいだしな、三人はそろって出て行った。

残された俺たちは材木座を部屋へ運び込み、店内を片づける、皆終始無言だった。

店内を片づけていると金髪の女性が駆け込んできた。

「義輝様がお怪我をなさったとは本当ですか!？」

「・・・ たった今手術が完了して今休んでいるところですが・・・」

この人誰だったかな、孤児院にいたマリアさんという人だったか？

「御無事なのですか？今どちらに？なにか私にできることがあればさせてください!」

ものすごく心配そうな表情だったので材木座のところまで案内をする。

「ごらんのとおりに、こいつは今寝ています、あとは浄化の魔法をかけた薬を飲ませるぐらいですので・・・」

「材木座様・・・こんな御勞しいお姿になられて・・・比企谷様、その作業私がやります、これでもプリーストの職は納めておりますから」

いやこれはこちらでやるべきことだ、もつという俺がやるべきことなのだ、だから外部の人にそんなことさせるわけにいかない

「いや無理でしょう、一晩中ですよ？それにこれはこちらで交代でやるんで・・・それにこちらは孤児院の方があるのでは？」

「いいえ！私がやります！孤児院の方は大丈夫です！神父様とシスター様に許可をいただいてきました!」

結局強引に押し切られてしまいマリアさんは材木座の部屋で看病をすることになった。

第三十三話

片づけも終わり落ち着いたあたりで葉山が話しかけてくる

「比企谷、色々あつて大変だがあの白い鳥居のような物について詳しい話をする、他の人も聞いてくれ」

「俺達が国王の命令でモンスターが大量に発生している北の領地に向かったと言うことは皆知っているだろ」

葉山達は国王から部隊を預けられ北の領地へと進軍していったが到着時、すでに大量のモンスターが領地に攻め入ろうとしているところだった、その為すぐモンスター共の掃討を開始したがこれが中々終わらない、倒しても倒してもまるで引き寄せられるようにモンスターがやって来る、初めは優勢だったが数で押され兵士も何人かモンスターに倒され始める、そして門を突破されてしまい街中までモンスターが入り込み住民に被害が出始めた辺りでモンスターの数が減り始めたとか。

「お陰で掃討が捗ったが、掃討後に現場を調査していたら骨で作った意味ありげな物が街を囲むように設置されていたんだ、何と呼んでもいいかわからなかったから便宜上それを俺たちは『トータルテム』と呼ぶことにした、そして殺されてしまった住民や兵士の所持

品にあのアクセサリーがあっただよ」

殺された人全員が持っていることに疑問を感じたため、葉山が部隊の魔法使い達にアクセサリーとトーテムについて調べてもらったところ、因果関係が発覚、アクセサリー持っている人がトーテムに近づくと能力が発動、モンスターがアクセサリーに引き寄せられるように集まってくるので必然的に所持している人は潰されるか食われて死んでしまう、その為トーテムは全て破壊、他に能力発動前のアクセサリーを持つている住人を数名発見、いずれも北の領地と王都の間の村から来たという男からお守りだと言われて買ったということがわかった。

「あのアクセサリー自体は壊れるか時間が経つと効果が無くなるものらしいが、兵士たちが戦闘中にトーテムに近づいてしまい能力が発動ということが次々と起きていたんだろう、殺された俺たちの部隊の奴も持っていた、野営の為に村に立ち寄ったからその時に手に入れたのかもしれない」

やばいアイテムを秘密裏に量産してばらまいてる村は放置しておけない、すぐさま葉山達はその村へと進軍していったのだが

「ここで俺は失敗した、部隊長は村人を問い詰めるだけだと高をくくっていた、俺は止めるべきだったんだ、兵士たちも騙されたと憤慨するものが結構いたので、休憩もそこそこに動ける者たちだけで動いてしまったんだ、だが俺たちがアクセサリーについて調べ

たことも、出所も突き止めたことも奴に知られていた、だから俺たちがすぐやってくることはあいつらはわかっていたんだ」

「あいつらって誰だ？またなんかの呪いとかで操られているとか、テロリスト的な連中か？」

「それならまだいいさ、あいつらとはゴ布林共だ」

「ゴ布林って・・・あいつらにそんなアイテムを作る能力とか罫をしかけるとか複雑な作戦立てるとかできるわけないだろ？それに街の人は男から買ったとか言ってるんだろ？」

あいつらは本能のままに生きている、集団で襲ってくることはあるが統率力があるようには見えない、ただ欲望のままに食って犯して燃やす連中だ。

「いや、あいつらの中にはそういったのもまれに出てくる、ゴ布林ロードという奴だ、こいつは統率力が優れているし他のゴ布林よりも知能が高い、しかも人語を話せる、こいつが村を占領していてそこからアイテムを北の領地にばらまいていたんだ、モンスターに蹂躪させた後に自分たちが領地を乗っ取るうという計画だったそうだ、人間に協力者がいてばらまくのはそいつの担当だったらしい、見返りとしてゴ布林から金と女をあてがわれていたそうだ」

「んなまさか・・・でも村人はどうしてたんだ？一回お前たちは立ち寄ったんだろ？」

「ああ、ここからが問題だ、箆口令が出て詳しいことは話すなど言われているんだが……」
と葉山は三浦の方を振り向く、三浦は黙ってうなづく

「……村人は全員寄生タイプの虫型のモンスターにやられていたんだよ、そいつは頭に取っついて体の自由を奪う、その虫の女王を持つていけば好きな時に体を意のままに操ることが可能だ、ただし操られる当人の意識は正常なままで、はじめ立ち寄った時は俺たちの装備も充実していたから攻めるのは悪手と判断したんだろう、下手に俺たちに接触しない様に人質も取っていたからそうだ、だから気が付かなかった、俺たちが引き返した時村人が武器を持って襲ってきたのでそこで初めて気が付いたが後の祭りだ、襲つては来るが口では助けてくれと言っているので部隊の連中も攻撃できないし、抑え込んで意識が無くならない限り怪我をしようが骨が折れようが無理やりこちらに武器を向けて来る、そういうしているうちに同じく体を操られた村人がアクセサリーの能力を発動させモンスターを引き連れてやってきたんだ」

「……どうなったんだ……」

「部隊の人数もそれほど多くなかったから思わぬ反撃にめちやめちやになった、さらにゴブリンも側面から強襲してきたからあつというまに壊滅寸前まで追い込まれた、部長の判断で無差別に強力な魔法で村を吹っ飛ばし、兵士たちも襲ってくる村人を切り殺してなんとか俺たちは逃げられたんだ。さつきまで話した詳しい事情は気絶させるこ

とに成功した村人を何人か逃げるときに担いで連れてきてな、落ち着いた先で色々聞き出した。意識を取り戻すと首から下は言うことを聞かない状態だから拘束しながらだったか」

「……切り殺したって……お前……」

「……ああ、俺達は操られているだけの罪もない人を殺しながら逃げてきた……」

「で、でもそうしないと逃げられなかったんでしょ？し、仕方ないかったんじゃないかな……？」

そんな中めぐり先輩が励ますように言うが

「結論として俺が人を殺したという事実には変わりはないよ……ただこれだけははっきりさせておくが、優美子や戸部たちには手を出させてはいない、俺たちのパーティを襲ってきた村人は俺が全部対処した、その辺は誤解しないでくれよな」

葉山はうつむく

「で、でもですよ葉山先輩、言い方変ですけど東の領地でも同じようなことあったじゃないですか！めぐり先輩が言うように仕方なかったと思いますよ……」

いろはも葉山を励ますように言ってくれたが

「東の領地で襲ってきたのは兵士たちだ、彼らは訓練を受けているし装備もちゃんとしていたから怪我を負っても致命傷にはなりにくい、そして魅了状態ということもあつた

のか、ある程度ダメージを与えれば痛みや何やらですぐ戦意喪失して襲ってこなくなっていた、俺たちも加減する余裕があつたしな、だが今回は違う、ただの平和に暮らしていた村人だ、それが押さえつけても自分の骨が折れるぐらい力を入れて無理やり脱出して襲ってくる、足を抑えても足の骨が折れたり千切ったりして無理やり抜け出して這つてでもこちらに武器を向けてくる、しかも当の本人は涙を流し助けを求めて叫びながら、体の自由がきかない助けしてくれと、殺す以外止め方が分からなかつた……」

皆絶句していた

「……気絶させた村人はどうなつたんだ？」

「……助けられなかつた……頭の中に寄生するというのも避難した先で調べてわかつたんだ、ただ取り出しようがない、なんとか助けようと頑張つたが、殺してくれと懇願してきてね……部隊長がやってくれた、俺は何もできなかつた……結果を王都へ報告したらそんなモンスター聞いたことも無いと帰ってきてね、それに事情があるとはいへ正規の部隊が村一つ消滅させたんだ、国中が騒ぎになるとまずいということで箝口令が敷かれたんだよ……」

「ちよつとまつて、隼人、なんか話し終わりそうだけど協力者の男つてどうなつたの？あとゴブリンロードつてのもどうなつたかわからないし、そもそも比企谷くんがもつたアクセサリーの出所もよくわかんないんだけど？」

陽乃さんが声を上げる

「アイテムの出所は俺もわからない、出所を調べようにも村は跡形もなくなくなってしまった、ただゴブリン達が作った物ではないらしい、大きな箱から取り出していたそうだし、作ってる様子も全くなかったそうだ、そしてゴブリンロードだが死体は見当たらなかつた。たぶん自分が逃げる為に村人を犠牲にしたんだろう、他のゴブリン共の死体も極端に少なかつたしな、完全に逃げるための時間稼ぎだったみたいだ。

それと協力者の男はアクセサリー補充の為に戻ってきて散々楽しんだ後また旅立つことを繰り返してたそうだ、王都にもばらまきに行つてたらしい、でも王都の方は防衛が完璧だから失敗したんだろう、俺たちがこの世界に来たときまではモンスター押し寄せてきてたらしいがその時は全部殲滅できてたそうだ、そのうちぱったりと来なくなつたと国王陛下が言つてたからな、諦めたんだろ、そうやってばらまいて、秘密裏にトテムを設置、そのうちモンスターが押し寄せてきて街や村を襲う、自分たちは巻き込まれないよう高みの見物をしてそれを待つていればいい、そして相手は何がどうなつてるかかわらないうちに壊滅状態に陥る、くやしいがゴブリンにしてはうまいやり方だ」

「だと僕たちもその策略にはまつたつてこと？んじゃこの間来た男がゴブリンの手下つてことだよね！だとするとまずいよ！襲つてきたモンスターにゴブリンもたくさんいたよ！」

戸塚が焦っているか大声を上げる

「そうなるな、だからまず領主様へ報告して臨戦態勢を取ってもらう、あとはその比企谷にアクセサリーを渡した男を探しだす、今回は状況がちよつと違うようだしな、どういった計画なのかまだこの街に居れば捕まえて色々聞かないとな・・・」

「・・・すまん・・・俺が軽率だった・・・」

「それは材木座君に言ってくれ、じゃあ今回のこと領主様と国王陛下に報告しないといけないから失礼するよ、ああそれとせっかく宿を作ってくれたみたいだけど今日は前の所に泊まるから、荷物は明日にでも運び込むよ」

葉山はそう言うのと三浦と海老名さんを連れて店から出て行った。

「先輩・・・」

「八幡・・・」

戸塚というはが不安そうな目でこちらを見てくる。

平塚先生や川崎たちも何も言えないようだった。

ゲームのように一つ前のセーブデータに戻って選択肢を選びなおしたとしても人生は変わるかと前に考えたことがある。

最終的にそれは否であり、受け入れて進むという結論に達した。

だがあいつの腕が動かなかつたら、俺はどうすればいいんだろうか、これは簡単に受

け入れていいものではない、仮に治つたとしても罪悪感は消えないだろうし、材木座は俺を信用してくれないかもしれないし、俺を恨み続けるのかもしれない。

もう二度と前のような関係にはもどれないだろう。

異世界に来てあまりに上手く行きすぎていた、自分の作戦もことごとく上手く行つた、陽乃さん達を救出するときも酒場を建てる為の金策も、だから自分の考えに浮かれていたのだろう、ここは元の世界とは違うのだ、よく知らない相手の言葉を鵜呑みにしてホイホイと信じて酷い目にあつたというのは騙された方が悪い世界なのだ、やつた方よりやられる前に自衛の手段を取らない奴は間抜け呼ばわりされてしまう、そもそもこうならないための選択肢はあつたはずだ、何故それを選べなかつたのか。

悔やんでも悔やみきれない。

「お店しばらく休みにしようっか?」

「うん、そうした方がいいかな・・・この状態じゃお店まわせないよね・・・」

不安そうな顔で陽乃さんとめぐり先輩が提案してきた。

「そうだね、少なくとも明日は休もうよ、それと八幡はもう休んで!あとは僕たちがやつておくからさ」

戸塚が微笑みながら俺を部屋まで引つ張つてくれる、いつもなら飛び上がらんばかりに嬉しいが今はとてもそんな気になれない

「・・・本当にすまん・・・」

俺は一人で部屋に入るとそのまま倒れるように寝てしまった。

第三十四話

次の日の朝、部屋に駆け込んできたマリアさんに俺は起こされた

「義輝様が目を覚ましました！それと腕は治っているみたいなのですが・・・」

昨日手術したばかりだろう、治っているとはどういうことなんだ？

とりあえず材木座の部屋に行ってみることにする

「材木座！大丈夫か？」

「あ、ああ八幡、おはよう・・・」

材木座は、上半身を起こしていた

「すまない、俺のせいだ・・・腕の方はどうなんだ？」

「・・・何が起きたのか大方マリア殿から聞いた・・・それより我の方こそすまぬ、八幡は全然悪くないのに、怒鳴ったりして・・・あの時はどうかしていた、すまなかった」

顔をこちらに向け頭を下げる材木座だったがなにかおかしい、一日しか経っていないのに少し痩せている上に布団で左腕を隠している。

「いや俺のせいだ、俺がアレを受け取らなかつたらこんなことにはなっていないかつたはずだ」

「自分を責めないでくれ、我が言い過ぎた。それに又シはやさしいからのう、あの場で受け取ってなければおそらく我らによってあの男はボコボコにされていたであろう、もともと現状を見るに話は我らのことだけではなくなっているみたいだが」

「そうだな、俺の軽率な判断で大変なことになりつつある、あの場であいつをぶち殺しておけばよかつたんだ」

「貴様らしくも無い発言だな」

「それより腕の方はどうなんだ？動くか？大丈夫か？」

「あ、ああ腕・・・だ、大丈夫、ほら動くし・・・」

と何故か若干焦ったような感じを見せながら布団の下で腕を動かして見せる

「腕の状態は私にも見せていただけませんか、義輝様？本当に大丈夫なのですか？」

「し、心配にはおよばぬぞ、又ハハハハ」

「ちよつと見せてみる」

強引に布団をめくり縫合されている腕をみて驚愕した、腕の太さが右腕よりかなり太くなっているのだ。

しかも腕をくつつけた跡が完全になくなっている

「これはいったい・・・」

「め、目が覚めたらこうなっておつてな、な、なに見た目だけだ！」

化膿したりして腫れているわけではない、明らかに筋肉の量が増大して太くなっているようだ、国王の腕より太いかもしれない。

「ともかく医者と呼ばない」と！

速攻で医者をつれてくる

「これは・・・確かこいつの腕はモンスターどもに齧られていたな？他に強力なモンスターの体液に浸かっていたりしなかったか？」

あの時材木座の腕が飛ばされた後ゴブリンチャンピオンが出てきていたが、三浦の魔法で上半身が吹っ飛ばされていた、あの時は炎で蒸発したのかと思ったが、もしかすると千切れた残骸が腕の所に飛んで行ったのかもしれない

「それはあるかもしれませんが」

「まあ、こういうことはまれにある、強力なモンスターだと体液に含まれる魔力も強力だな、それが腕に入り込んで体中の栄養を吸い取って筋力や回復力を増大させてしまったんだろ、齧られていたというのも原因の一つだな、命には別状ないがこやつのは普通の人間とは比較にならないレベルになっているはずだ、くつついただけマシだと思え、それと栄養ある物たっぷり食わしてやれ」

そう言うともうくつついてるからと抜糸してさっさと医者は帰ってしまった。

「八幡、こっとなつたらもう隠しておけぬ、先程ベッドの縁を握ったら縁が割れてな・・・」

薪を持ってきてくぬか？ちよつと試したいことがある」

早速薪を一本持つてきて材木座に渡すと

メキメキメキバリツ

左手で薪を軽く握りつぶしてしまった

「やはりな・・・力加減ができなくなっているようだ・・・思いつきり握るか軽く握るか
のどちらかしかできなくなっている・・・これではまともに戦いに出れぬな、味方を傷
つけてしまう」

材木座が起きたと聞いて皆が駆けつけていたのだが、今の状態を見て雪乃と俺は膝を
付く

「本当にごめんなさい」

「俺のせいだ・・・お前が怒鳴ったのも無理はない、本当にすまない」

「顔を上げてくれ、あの時はつい反射的にな？だからお主らのせいではないと言ってお
るだろう、ほら、右腕が大丈夫だから我にはまだ執筆が残っておる！な？八幡」

「反射的に言つたつてことはそう思つてたつてことだろ、本当にすまない」

「そこは『言葉の勉強をしてからだ』とかでいつものツツコミをいれるところであろう、
雪ノ下殿もやめてくれ、お主らは悪くない、お主らのそんな姿みたくない、由比ヶ浜殿
も一色殿も二人を止めてくれないか？戸塚殿も頼む、二人の顔を上げさせてくれぬか、

クソツあの時我があんなことを言わなければ・・・」

材木座は泣きそうな顔になっているが全員動くことはできなかった。

「言おうが言うまいが俺のせいであることには変わりはない」

「そうよ、私のせいでああなたの腕は・・・ごめんなさい」

「もうやめてくれぬか・・・いつものようにしてくれよ、マリア殿すまぬが・・・二人を部屋から連れ出してくれ・・・」

マリアさんから即され部屋から出る

「比企谷様、義輝様のことですが、私のところに住み込みで働いていただくのはいかがでしょうか？ 男手が全然足りませんの、片腕だけでも使えるなら十分ですわ」

「あいつがああなつたのは・・・」

「義輝様はそういう扱い嫌いですわ！ それに比企谷様や雪乃様がそのような態度ですと義輝様はずっと嫌な思いをしてしまうことになります！」

「でも彼の腕力は尋常じゃない強さよ、子どもたちにとつても危険よ」

雪乃が言うことももつともだ、あれじゃ子供を握りつぶしてしまいかねない

「大丈夫です！ 義輝様は以前言っておられました！ たまに腕が暴走すると！ その度に『静まれ！ 我的腕よ！』と言つて収めておられましたわ！！ 今回も似たようにすれば大丈夫ですわ！ それでもだめなら私が腕のカバーを編んであげます！」

いやそれ違いますよ、それは単なる中二病ってかあいつ何やってんだ？

マリアさんはまくしたてるように自分が面倒を見ると言つて聞かない

「比企谷くん、雪乃ちゃん、そうしてもらいな」

いつのまにか後ろにいた陽乃さんが話しかけてくる

「悪いけど君たちでは材木座くんには何もできないよ？ 仮に君たちがお世話すると言つてもどうするつもり？ お店で働けないからといつてずっと部屋で飼い殺しにするつもり？ そんなのお互い不幸よ」

陽乃さんはマリアさんの方を向くと

「彼のことお願いしますね」

「任せてくださいー！」

パツと笑顔になると材木座の部屋にマリアさんは駆け込んでいった。

そして材木座は孤児院に住み込みで働くこととなった。

しかしこれではまるで厄介払いである、材木座に俺たちも何もしないというわけにもいかないと力説したら、食材を買い集めるのは地味に時間がかかり大変なので一括で購入させてもらえたら嬉しいとのことだった。

無論そんなことは簡単だ、喜んで協力させてもらうことにした。

材木座は自分も言い過ぎた、痛み分けてことで今までと同じようにやっつけていこうと

言ってくれたがやっつけていけるのだろうか？
あいつには大きな借りが出来てしまった。

第三十五話

材木座が出ていってから俺はあまり外で戦わないことにした。

これ以上誰かの犠牲を出したくは無かったからだ、元々その為に千葉亭を作ったわけだしな。

一方陽乃さんはたまに誰かを連れてふらつと出かけては狩りをしてることが増えたようだった。

大丈夫ですか?と聞いたことがあるが

「んー?このままだとなまつちやうしね、必ず誰かに行っているしそれに今はこの間の一件もあつて冒険者とかが必ずうろついているし一人にならないから大丈夫だよ」

葉山がアダムさんへアクセサリーやトーテムの話をした為、冒険者たちに臨時のクエストが出されて今や常に冒険者が街の外で不審な物が無いか探しており、しかもゴブリンを倒すと報奨が多めに出るようになった為見つけ次第ガンガン葬られている状態だった。

葉山達も俺たちの所へ引越してきて毎日どこかへ行っている。

チャラ男の行方も探しているようだがなかなか見つからないとか、俺も店に来た客に

話を聞いてみたが街で見かけたという人が複数いたのでどこかに潜伏しているのは間違いないようだ。

しばらく経ったある日のこと陽乃さんから呼び出される

「ねえ、比企谷くん、材木座くんのことで話があるんだけど」

あれから材木座とは殆ど顔を合わせていない、食材を受け取りに来る時はあるのだが合わせる顔がない。

「比企谷くん、いい加減に彼から逃げるのはやめたら？仲良しこよしになる必要もないけどこれじゃちよつとやりにくいかな」

「この世界に来てあいつが一番喜んでました、戦闘も一番喜んでやっていました、それを俺が……」

「君ねえ……」

そんな俺を陽乃さんが呆れたように見る

その時だ

「だから金は払うと言っておるだろう！」

「だめよ！受け取れないわ！」

材木座が食材を受け取りに来た、当初は買うという話だったが、責任を感じた雪乃はお金の受け取りを拒否、おかげで毎回こんな感じだ。

ちなみに左腕はマリアさんの編んでくれたカバーをはめていて使えるのは右手だけの状態だ。

「だからお主らが責任を感じる必要はないと！」

「あなたを戦えなくしたのは私の責任よ」

「いやそれは・・・わかった、今回の分の支払いもツケだ！絶対受け取ってもらうからな
！」

材木座は食材を受け取ると出ていった。

「君たちは勘違いしているんだよ、この間森の奥で彼を見つけたんだけど・・・まあいつか、一緒に来なさい」

俺たちは陽乃さんに無理やり材木座のそこへ連れていかれることになった。

「この間こっさり様子見に来たら面白い話をしていたんだよね、今日もしているかもね」
と俺たちは物陰から材木座の様子を伺う、どうやら外で子供たちに話をしているらしい

「八幡と雪ノ下殿は今日もよからぬ悪霊に取りつかれておつて大変困っておる、おかげで奴らは我とまともに会話をしてくれなくてのう、困ったものだ」

「けんごーがその悪霊をぶちのめしてやればいいじゃん！」

「そう簡単に行けばよいのだが・・・」

「けんごー、これつけていつものアレをやれば悪霊なんていっばつだよ！」

と子供達がやたらとごっこつい黒い金属の塊のような手甲を引きずりながら持つてくる

「これこれ、むやみと出す物ではない、しかしそうだな・・・我が戦えるということを示せばあるいは・・・」

「君たちは悪霊にとりつかれてるんだってさ、それにあれなにかわかる？」

陽乃さんが聞いてくるがさっぱりわからない

「本牧君が作ったんだってさ、あれつけると握力の制御ができるみたいよ？右腕用もあつてそっちはまた別みたいだけどね」

「なんでそんなこと知ってるんですか」

「んー使ってるの実際見たからかな？」

と陽乃さんは物陰から飛び出しずいと材木座の方へ

「ひやつはろー元気かなー？」

「ああ、これは珍しい雪ノ下姉上殿ではないか、どうされた？」

「うーん、いつも思うんだけど別に『陽乃殿』でもいいよ、なんか回りくどすぎだよ君の場合」

と陽乃さんが名前を口に出すと

「陽乃？魔女だ！」

「しよーぐんが改心させたから大丈夫だよね？」

子供たちが一気にざわめきたてる、そういう前にそんな話してたよなと思いだす

「ふふふ、そうよ！私は魔女！復讐しに来たのよ！手始めにその男の友人を私の下僕にしてみらったわ！」

と陽乃さんはこつちを向くと

「いでよ！わが下僕達！」

魔女とか言われて平然としてるつてことは材木座がでつち上げた話聞いたのか？

それよりもなんか呼ばれてるんですけどつてか下僕つてどういうこと？

渋々材木座の前に姿を現す

「さあ君たち！材木座くんと戦いなさい！」

「何言ってるんですか、片手がまともに使えない奴と戦えるわけないでしょう」

奴は左手の制御が聞かない、かなりのハンデになる

「ふむ・・・良いアイディアであるな・・・諸君！下がっておれ！魔女は相棒達をたぶらかし下僕にしてしまったようだ！私の強さを思い知らせ正気にもどさなくてならぬな！」

子供たちを建物の中に下げると巨大な手甲を付けた材木座が木刀を手に出してきた。

手の部分はさながら金属の手袋と言った感じでひじの部分は円筒形をしており黒と

赤でペイントされていてどっかで見たような形をしている。

「アレってなんかのアニメのロボットの腕にそっくりなのだが、なんだっけ？」

「そんなんでやれるのかよ」

「貴様が心配することではない、戦い方のスタイルを変えたのでな、では立ち会おうか？」

「こちらに木刀を投げってくる、つい受け取ってしまうが戦う気なんぞ全く起きない

「お前と戦う理由が無い」

「当然だ、なんで戦わないといけないんだ。」

「またそのようなことを・・・雪ノ下殿も同じ意見か？」

「そうね・・・」

木刀を受け取りはしたが構えることなんて当然できない

「理由・・・なるほど八幡はそうやって御託を並べまた逃げる気か？」

「なんのことだよ」

「その二人のことよ！我が知らぬと？元の世界でその二人がどういった気持ちでヌシのそばにいたのか、その二人が勇気を出した結果貴様は逃げ出して今に至るわけであらう？」

「なんだこいつ？いきなり関係ない話で煽ってきやがって

「それで挑発しているつもりかよ、大体お前には関係のない話だろうが」

「そうね、それはここで論じることではないわ、私たちの問題よ」

「そうだよ中二！中二は関係ないじゃん！」

さすがに二人はムツとしたのか声が多少大きくなっている

「ほむん、自分らの気持ちも伝えたのにうやむやにされて尚こやつこそばに居たいと思う貴女らの神経がよくわからんな、それにこの八幡がしでかしていたこと貴女らは知らぬであろうから教えてやろう、千葉亭が出来て間もないころ、我は店の裏手の木陰でよく休憩をしていてな、うまい具合に隠れる形になるからよくサボっていたのだが面白い物が見れてのう」

店の裏手は小川が流れている、わざわざ水を引いて作った人口の川だ、大量の食器を洗ったり、洗濯したりと中々重宝している

「八幡よ、そこで洗濯中の雪ノ下殿を後ろから抱き締めてなにをしようとしていたのかなく？」

ニヤニヤしながら煽ってくる材木座

「いやそれ「抱きしめたのは事実であろう？」それはそうだがそれは「顔と顔が近づきすぎて我にはとても直視できなかつたわい、雪ノ下殿は美人だからのう、ムラムラするのはわかるが昼間つから発情するのはいかななものか？」」

「本当ですか？先輩・・・？」

いろはが不安げな表情になっている、結衣も表情が暗い

「は！その様子だと知らなかった見えるな！由比ヶ浜殿！お主に至っては八幡が正面から抱き付いて押し倒しておったであろう！そのままどうする気だったのかな？」

「ちよつと中二！その言い方！それにあれは！」

「そして一色殿だけ蚊帳の外だものなあ、ああひよつとして我が見てない時になんかやってたのか？八幡も罪深き男よのう」

「ちよつと材木先輩！」

いろはもイラついている、何しろ材木座の表情が下卑た笑いに満ち溢れているように見えるからだ

「八幡は誰かを選ぶとかほざきながら現実はこうだ、うやむやにして3股か？こんな性欲丸出しの不誠実な男に好意を寄せているお主らも大概であるなあ」

こいつ、なんてこと言いやがる

「学校にいた時から思っていたのだよ、貴様はなんやかんや言うておったが、このような美女等とお主等は放課後の人がめつたに訪れない特別棟の教室で毎日ナニをしておったのやら、まあ我でなくとも簡単に想像はできるわ、よかつたのう、この世界では大びらにやつても止める者はいないぞ？」

挑発しているのだからがさすがに言いすぎだ

「おい、おまえそんなこと考えてたのか？」

「は！当然であろう！美女を連れまわして何も無いなんてあるわけないであろう！お主ら別な意味で有名人なのを知らんと見えるな？我も冒険者仲間から良く聞かれて辟易するレベルだ、違うというなら止めて見せればいいだろ？エロ谷くん？」

材木座の表情は今までに見たことが無いニヤニヤとしたいやらしい笑い顔になっている。

さすがにこれにはブチンときた、挑発のつもりなのかもしれないが、なんでこいつにこゝまで言われなきやならんのだ

「八幡、さすがに彼の暴言を許すわけにはいかないわね」

「ハッチー中二をちよつと黙らせようか」

「先輩、私も手伝います！」

「材木座くん、言いすぎだよ！」

皆材木座に怒り心頭だ、こいつには確かに負い目があるが少しお灸をすえなくてはなるまい

「戸塚、いろははすまんが待機だ、俺と雪乃と結衣でラツシユをかけてあいつをぶちのめす、多分加減できないからぶちのめした後回復治療をたのむわ」

戸塚は回復担当だし、いろはは弓矢での援護担当だ、二人とも杖やショートソードでの近距離戦もできなくもないが速効で相手を沈める対人戦には不向ということもある。

「分かったよ八幡」

「先輩！私の分もお願いますね！」

「雪乃！結衣！速効で片づけるぞ！」

俺と雪乃で材木座を思いつきりぶつ叩いて結衣の魔法で吹っ飛ばす、シンプルな作戦だ。

無論雪乃の強化魔法で速度を上げ速効で終わらせるつもりだったが陽乃さんが話しかけてくる

「ねえ比企谷くん、彼を甘く見すぎてないかな、油断しない方がいいとおもうな」

「何言ってるんですか！」

「まあいいけどね、悔いの無いようにやればいいと思うよ」

この人はまた引つ掻き回すようなことを・・・もう今はそんなことどうでもいい

俺と雪乃ははニヤニヤしている材木座にとびかかる

「材木座あ！」

「ふん！ヌシのような腑抜けの攻撃何ぞ軽くないなしてくれるわ」

ガキーン！

手甲によって簡単に攻撃は防がれてしまったが、これは困だ

「結衣！」

「二人ともどいて！ウインドショット！！」

結衣から魔法が放たれる

強力な風の塊が飛んでいく、これは避けられないはずだ、陽乃さんですら避けられなかったわけだしなど思っていたが甘かった。

材木座は左腕を上げると

「プロテクトシールド！！」

材木座の左手が開かれると大きめの防御魔法が展開されるが何かが違う、

シユン

風の塊が材木座の左手の部分で渦巻くとそのまま消滅してしまった。

「んなバカな！雪乃！もう一度行くぞ！」

と二人で再度とびかかるが

カキン

全く力が入らず俺と雪乃の攻撃はあっさりと防御魔法に止められる、強化魔法で速度も上げたはずなのにそれすらも無効化されてしまう。

力が吸い取られていく感じがする

「一体何が起きたんだ？」

「説明しよう！八幡！、これぞ我が開発した新型魔法プロテクトシールドだ！この防御魔法は展開と同時に周囲の魔力を一気に吸い取るのよ！、故に襲ってきた対象の魔力を吸収してしまうのだ！この魔法の前では魔力の恩恵にあずかっている貴様らはただの高校生程度の力しか出ないのだ！」

第三十六話

「新型魔法ってなんだよ」

「こいつどつかの勇者王かよ！ちよつと見ないうちについていたいどうなってるんだ？」

「まあ、吸い取ると言っても一時的な物だから安心せい！我らの魔力は簡単に復活するのでな、秘密はこの化け物じみた握力よ、これで防御魔法を極限までに圧縮し解放すると魔法を展開した方向の魔力を一気に吸い取りながら膨張するのよ！アレだ、冷蔵庫を拾って使えるようにした時に吉原殿らに色々聞いたのだ、本来冷蔵庫はガスを圧縮、膨張させて熱を吸い取る仕組みだがこの世界では魔力でも似たようなことができる言われたのを思い出してな、ただあんまり持続できないのが難点だが」

「そんなに秘密をペラペラしゃべっていいのかしら？持続できないなら連撃を繰り返すだけよ！」

雪乃が剣を構えなおす

「ふん、ならばくればよかろう？」

さっきの防御魔法は握力を使ってやるといつていたが右腕は違うはずだ。

右腕にも手甲をはめているがこっちにも何か仕掛けがあるのだろうか？

考えても仕方がない

「雪乃、あいつの右側を攻めるぞ」

「言われなくても！」

雪乃が飛び出すが材木座は右腕を後ろに引くと空中を殴るように前に突き出す

「プロウクンマグナム!!!」

手甲が腕から打ち出されて飛び出してきた。

なんだあれ、マジでどっかの勇者王の技じゃねえか、すんでの所で雪乃はかわしたがそのまま手甲は結衣の方へ飛んでいく

「結衣！」

俺は結衣にタツクルをして吹き飛ばすが手甲の一撃を食らってしまう

「グハア！」

「おっと、八幡に当たってしまったか、由比ヶ浜殿に当てるつもりだったのだが」

どういう仕組みかわからないが手甲はそのまま材木座の右腕に戻っていく

「この手甲の中には魔法を押し込む空間があつてだな、そこに反射の魔法を詰めるだけ詰め込み打ち出すエネルギーにしているのよ、まあ簡単に言うると鉄砲の火薬の代わりみたいなものだな、由比ヶ浜殿の魔法は強力なのでこれで早めに始末しておきたかったのだが」

「あなた今始末って言ったわね？自分が何言ってるかわかっているのかしら？」

「この世界は弱肉強食だぞ？守りたいものがあるなら強くなれと国王陛下もおっしゃられていたであろう、忘れたのか？」

「おまえ、正気なのか？」

「ああ、我はフェミニストではないので女だろうが容赦はしない！それにもし顔に傷でも入ったら戦いに巻き込んだということでお主が責任とるのであろう？良かったではないか、自動的に結婚できるぞ？」

「お前言ってることが無茶苦茶だぞ！」

「だったら止めて見せろ！八幡！」

そう言うのと材木座が手甲で殴ってくる、背中からブースターのように魔力を放出し突撃してくるのだ。

剣で受けきれぬものではないので避けるしかない。

「ファイヤーボール!!!」

結衣が隙を見て魔法を打つが

「プロテクトシールド!!!」

魔法はあっさり無効化されてしまう

「どうした！威勢がいいのは口だけか！」

隙を見て剣を打ち込むが手甲に簡単に防がれ即座に構えた材木座からまた手甲が飛んでくる

「はあああ!!!ブロウクンマグナム!!!」

「隙あり!」

雪乃が手甲を打ち出した直後の一瞬の隙をついてとびかかるが

「プロテクトシールド!!!」

「またも防御壁が展開される

「きゃあ!」

「ゆきのんだ丈夫?!中二!やりすぎだよ!」

力や能力が元のただの高校生レベルまで落とされてしまうのだ、防御壁の魔力に接触するだけで吹き飛ばされてしまう。

「やりすぎ?違うな、こやつらは我を見下しておるから思い知らせているのよ!」

「俺は別に見下してなんか・・・」

「黙れ八幡!貴様は我が片腕が使えない程度で話もしてくれなくなりあまつさえ我を戦う事が出来なくなつたと決めつけておるではないか!雪ノ下殿もだ!対等な立場であればそのようなことはせぬわ!」

「違う・・・俺は別に・・・」

「ふん！貴様は前から勝手に思い込むふしがあつたからのう！貴様には体に教えてやる必要があるようだな！受けてみよ我の必殺技を！」

材木座は両手を広げると

「ヘル！アンドヘブン！」

両手から防御の魔法と反射の魔法が最大出力で放たれているのが分かる

「二つの魔法を無理やり同化させることにより強力なエネルギーが発生するのだ！」

材木座が両手を組むと膨大なエネルギーが発生しているのが分かる

「八幡、これはまずくないかしら」

「ハッチーやばいよこれ！」

「・・・二人とも逃げろよ、俺も逃げたいがここは受けなくてはならんだろ」

「その理屈でいくと私も受けなくてはならないわ」

「二人だけなんかずるい！あたしも受けるからね！どうなつても一緒つて言ったじゃん
！」

「あいつ本気だぞ？・・・もうしらん好きにしろ」

「覚悟は良いか！八幡！」

「こい！材木座あ！」

「おおおおおお!!!」

材木座は背中からブースターのように魔力を放出しながらエネルギーの塊を纏って突撃してくる。

避ける気は無いがすさまじい速度と威圧感だ、結衣がカウンターで攻撃魔法を唱え雪乃が防御壁を展開するがそれを全部突き抜け材木座が突撃してくる、そして拳が俺の腹に思いつきりめり込むとそのまま雪乃と結衣と一緒に吹っ飛ばされた。

「きゃあー！」

「ぐはあ」

吹っ飛ばされた俺たちは地面に叩きつけられ悶絶する。

「見たか！ 我の必殺技を！」

「・・・殺してないから必殺ではないだろ・・・」

「直前で手加減したのよ！ そのぐらい分かれ！」

「にしても強すぎだろ、わかった、俺の負けだ・・・雪乃も結衣もいいな？」

「そうね・・・私たちの負けよ・・・好きにするといいわ・・・」

「中二、強すぎだよ・・・」

「好きにしるとか、そうじゃなくてだな・・・ほら八幡達より我強いつてことが証明されたわけだ」

「ああ、俺たちの完敗だ」

「ならばもう又シらが負い目を感じる必要はないということだな！我はパワーアップしたのよ！他にもまだ見せてない必殺技があるのだぞ！」

「……」

「なあ八幡、雪ノ下殿、我は腕を一回失ったことにより強くなった、お主にお礼を言わないといけないと思っていたのだ、ありがとう八幡」

そう言つて材木座は倒れている俺に右手を差し出す

「さあ立て、そして元通り我とお主はいつもの関係、すなわち盟友にして相棒に戻るのだ！」

俺は材木座の手を取ると

「いつお前と相棒になつたんだ？体育の時に一緒に組んだだけだろう？」

「そうね……今度こそあなたはその妙なしやべり方と中二病？というのを直す必要があるわね、その男は卒業したと自称しているのだけれど」

「二人とも辛辣だのう！それでよい！それでこそ八幡と雪ノ下殿よ！モハハハ！」

腕を組んで材木座は高笑いをしている、ライバルは河原で殴り合いをして友情を深めるらしいがこいつの場合はなんか違ったような気がする。

だが気分はいい、全力で向かい合ったからかもしれない。

「なあ材木座、ついでに誤解を解いておきたいのだが」

「分かつておるわ、先ほどの抱き付いたとか言う話であろう、あの小川は無理やり水を引いてきたせいか周囲がぬかるみやすくて滑りやすい、八幡は率先して水汲みしておるからのう、滑って誰かにぶつかりそうになるなんてそりや起きるわ、あんまり酷かったから砂利敷くように雪ノ下姉上殿「陽乃」・・・陽乃殿に進言したのが我よ」

「知つてたのかよ・・・」

「ああでも言つて無理やり挑発せんとかかつてこなかつたであらう」

「いやー君たち青春だねえ、比企谷くん？だから私言つたじゃん、君たちは勘違いしてゐるって、彼は凄いや、なんかそこそこ大きいモンスターを一人で倒してたもの」

「ずつと静観を決め込んでいた陽乃さんが割り込んでくる

「マジかよどうやって・・・？」

「ほむん、それは我が説明しよう！先ほどのヘルアンドヘブンは原作だとゾンダー核を抜き取る為によく使われておつたのは知っておるだろう、さつきは手加減して殴るのに使つたが本来は心臓を抜き取るの使うのだよ」

心臓？まじかよえぐすぎんぞ

「ここには護くんはいないのでな、抜き取つた後はこうブチュツと」

と握りつぶす動作をする

「そうそう、彼が隼人たちと一緒に森の中に入っていくの見たから気になって後つけて

みたら見つめちゃってね、驚いちゃった、あとなんか別の技でゴブリンチャンピオンも一人で倒してたよね？」

え？マジデ？こいつ強すぎないか？

「全部見られておったか、フム、我は魔法の才能が無いとはつきり言われたのでな、攻撃魔法も一応使えるが一般のメイジに比べるとしよぼいレベルだ」

そう言うと材木座はファイアーボールやアイスブラストやらの攻撃魔法を見せてくれるが明らかにしよぼい

「こんなレベルだからモンスターに当てても大した効果は無い、『外側』から当てるとな」
「どういう意味だ？」

「先ほどのプロテクトシールドを接近して使うとモンスターの外皮硬度が削れるのよ！恐らく魔力を一時的に吸い取るからだとおもうがな、そして削ったところで右腕をモンスターにぶち込んでな、体の内側に反射の魔法をかけて、攻撃魔法をありったけ打ち込むのよ！我の弱い攻撃魔法でも体内で乱反射するから内蔵はズタズタになってモンスターは絶命する！いくら体が硬くても内蔵は柔らかいからな！たまにモンスターの体が爆散するのが困り者だが、これを我は『ダイダロスアタック』と名前を付けた！」

「またパクリかよ．．．でもそれってほとんどそのまんまだな．．．」

マクロス戦艦の必殺技、ピンポイントバリアで敵戦艦に自分の戦艦の一部を突撃させ

たあと防衛用のデストロイドの一斉射撃で内部から破壊する技だ、こいつの場合それを一人で実現してるわけだ。

ゴブリンチャンピオンに対峙した時俺たちは死ぬ覚悟だったのだがこいつはそこから遥かに高いレベルになってしまったようだ。

「我がその手の大型の奴を倒して報酬をもらいに行く」と騒ぎになるのでな、葉山殿が倒したことにして金だけもらっていたのよ、お主のマネだな」

とサムズアップをする材木座

「だから食材の分を払っても生活する分には問題なくあるのでな！ちゃんと金は受け取れよ！八幡！」

「・・・わーったよ、雪乃もいいな？」

「わかったわ、あなたがツケと言った分全部いただくわ」

「ウム！これにて一件落着！諸君！よからぬ悪霊どもは八幡達から去っていきおった！我らの勝利だ！」

材木座が子供たちに向かって勝利を宣言すると歓声が沸き上がる。

「なんかまた奴の株があがってるなあ」

「あら？そういう比企谷くんだってさつき彼と戦った時、何気に雪乃ちゃんやガハマちゃんをかばいながら戦ってたでしょ？そういうのってお姉さんの結構ポイントた

かいわよ〜?」

陽乃さんが抱き着いてくる

「ちよつと姉さん? ナニをしているのかしら? 八幡もその気持ちの悪い目を余計に気持ち悪くしないでさっさと仕事に戻るわよ!」

「ちよつと雪乃耳を引つ張るな! イデデデ」

なんだかまたいつもの調子に戻ったようである、これにて一件落着と思いきや、さらなるトラブルが俺たち待ち構えているのであった。

第三十七話

帰ろうとするところを材木座に呼び止められる

「八幡よ、先ほど挑発する為とはいえ失礼な物言いをしてすまなかつた」

「終わった事だろ、わかっているから気にすんな」

「スマヌ、ただこれだけは覚えておいてほしい、貴殿らが周りからどういう目で見られているかということだ」

「ああ、お前が冒険者仲間からよく聞かれるとかってやつか」

「左様、実のところそれは本当によく聞かれる、お主らはどういう関係なのだとな、私もどう答えていいかわからないので家族のようなものと適当に答えておる、それで大概納得してくれているようだが、そういうた奇異の目で見られていることゆめゆめ忘れるでないぞ」

「いやそれお前がそんなこと言っているせいじゃね?」

「他に形容しようがないだろう・・・雪ノ下殿どうされた?」

「八幡の家族、八幡と家族・・・」

「あたしが、ハッチーの家族・・・えへへへ」

「先輩の……」

「……はー、ほら！もう帰るよ！じゃあ材木座くん！またねー」

惚けてる女子三人を引つ張つて陽乃さんがさっさと帰つて行つた。

「我が言えた台詞じゃないが、まあ頑張れ」

「おまえもな」

「材木座くん、また手伝いに来るからね！」

「うむ、戸塚殿待つておるぞ」

女性陣のあとを追いながら帰りの道を急ぐことにした。

千葉亭の近くまでくると何やら騒がしい

「アレって葉山か？」

「単人またなにかしちやつたのかなあ」

陽乃さんがまたため息をつく、実際葉山達の前に誰かがいて揉めているようだ

「だから俺は関係ないって！知らないつうの！」

「とぼけてもらつても困るな、ネタは上がっているんだ、ここの店主が帰つてくれば分かることだ」

「知らないつてば！俺は忙しいんだから帰らせろ！」

「ちよつと待つし！」

「おめーちよつとまつべ、なあ？」

三浦と戸部に回り込まれて凄まじいようだ

「おい葉山、店の前で騒ぐな何やってんだ」

「比企谷、こいつだろお前にアクセサリー渡したのって」

そっくり男を指差す

「あーこの人！この人だよ！ハッチーに酷いことした人！」

結衣が騒ぎ立てるのでよく見ると確かに見覚えがあるあの時のチャラ男だ

「よく見つけたな、確かにこいつだ、んで葉山はこいつをどうするんだ？尋問でもするか？」

「その必要は無い、大岡に身边調査させたからな、こいつから情報は取れるだけ取ったしもうアクセサリーも持ってない」

「んじゃあなにを……」

と葉山としゃべっていると背後からパチパチと何かが弾けるような音がする

「先輩、結衣先輩が……」

いろはが困った顔で話しかけてきたので後ろを振り返ると

「許せない……こいつのせいでハッチーは死にかけたし、中二も腕を無くしちゃったし、ゆきのんもいろはちゃんも彩ちゃんもみんな酷い目にあつて……絶対に許さない！」

結衣の体から電撃が時折放電している、パチパチという音はこれだったようだ、非常にヤバイ

「結衣さん、落ち着いて?」

雪乃がなだめようとするが

「ゆきのんは怒らないの? あいつが全部悪いんだよ! あいつ殺さないとまたみんながひどい目にあう、私が殺さなきゃ」

放電はさらに激しさを増し結衣はチャラ男へ近づく

「ヒッ! ヒー! た、助けてくれ!」

チャラ男は腰が抜けているのか立てない、周りを囲んでいる人たちも距離を取って離れて見守っている

「死んじゃえ!」

結衣が右手を挙げ魔法を発動させようとした矢先

「そこまでだ!」

葉山が盾で結衣を吹き飛ばした

「きゃ! ちよつと隼人君! なにする...の...」

倒れた結衣はそのまま寝てしまった。

海老名さんが葉山の突進と同時に睡眠の魔法をかけたようだ

「姫菜ありがとう、比企谷すまんが結衣を頼む、それとこれから起きることを見ていくれないか？」

そういうと葉山はチャラ男の前に立つと

「これではつきりしたな、君は彼を罠にかけた、いったい何故だ？」

「わ、わかったよ、言うよ……本当はこの辺境をゴブリン達が襲撃する予定だったんだ、その前にアクセサリーの力でどういうモンスターが集まるか調べるとゴブリンの親玉に命令されて仕方なくだ！」

「仕方なく？仕方なくでなんで比企谷達なんだ？ちゃんと本当のことを言え、言わないと……優美子、こいつの腕を燃やしていいぞ」

「わかったし」

三浦はそう言うのと無表情で男の上でを掴む

「何を……熱い！熱い！ギャー!!!」

男の腕を掴んでいた三浦の手が光ると肉の焦げるにおいがする

「話す！話す！、だから腕をどけてくれ！」

「優美子離してやれ」

「腕が……これどうしてくれるんだ！」

「……後で助けてやる、何もかも正直に話せ」

「わ、わかった、本当だな？ゴブリンの親玉は自分が占領していた村が無くなったからって今度は辺境のここを襲撃しようとしたんだ、それでさっきも言ったようにアクセサリーの力で集まるモンスターを調べると言われてその実験台を選ぶときこいつらのことを思い出したんだ、ゴブリンの親玉は女は好きにしていると言ってた、この店主のヒキガヤとかいう奴はいろいろ気に食わなかったから、モンスターに襲撃させて女どもを手に入れるつもりだったんだ！でも全部失敗したからゴブリンの親玉も逃げてしまってもう連絡のとおりようがない、だから二度とこんなことはしないしできないからもう勘弁してくれ！、正直に話したんだからもういいだろ！」

「葉山先輩、そこどいて下さい」

「葉山くん？ちよつと離れてくれるかしら？」

「八幡、僕、プリースト辞めるよ・・・」

いろはと雪乃から殺気を感じる、戸塚も武器を構えて目が座っていた。

「三人とも武器を下ろせ、一応この世界でも殺人は犯罪だし君たちには人殺しをさせたくない、ここは俺に任せてくれ、比企谷頼んだ」

「お、おう、葉山がああいつてるんだ、ちよつと落ち着け？戸塚も杖を構えるな、気持ちは俺も同じだ」

三人をなんとかだめる、ぶつちやけ俺もこいつを殴り飛ばしたい、材木座を連れて

きてヘルアンドヘブンの餌食にでもさせたいが、とりあえず事の推移を見守ることにした。

葉山はチャラ男に近づく

「なあ、君は本心でそれをやったのかい？もしかして不本意だけど本当に仕方なくやったんじゃないのかな？」

「え？ええ！そう！そうです！不本意だったんですよ！ほんと！」

「そうか、やつぱり」

「こいつ何を言ってるんだ？」

さすがにいくらみんなの葉山とはいえこいつのことを仕方ないで済ますのか？

「おい葉山、おれが言えたことじゃないかもしれないが……」

そう言つて葉山を止めようと近づいたとき葉山が周りに聞こえない様にぼそつと男にしやべつた言葉を聞いた

「君は虫に操られていたんだろ？実は助ける方法があつてね、簡単な方法で体の中の虫は消滅するんだ、それをすれば君は操られていたつてことで無罪放免になれるんだがどうだい？」

おい、助ける方法は無かつたんじゃないのか？

「虫……あれに乗つ取られたら助からないつてゴブリンの親玉が……」

「ああ、あの後簡単に消滅させる方法が見つかつてね」

この案に乗らない手は無いだろう、操られているかどうかなんて主観でしかないのだから当人にしかわからん、状況から見るとどう見ても操られているようには見えないが当然チャラ男は乗ってくる

「おねがいします！やっつけてください！」

「んじや始めるからそこに立って」

「おい！葉山！おま「君は黙っててくれないか！」」

葉山に一喝されてしまった。

周りの人は遠巻きに何が始まるのかと興味深く見ている

葉山はチャラ男の正面に立ち、ニコツと笑うと

「そんな方法あるわけないだろ」

そう言うとうち居合のように一気に剣を抜きチャラ男の首を跳ねる、周りで見ていた人は皆固まってしまった。

「皆聞いてくれ！さっきの話の通りこいつはあろうことかゴブリンの手先としてこの辺境の襲撃計画に加担した上、俺たちの仲間みんなに危害を加えた！殺そうとした！俺はそういう奴を容赦はしない！」

そういうと葉山は地面に転がっていた首を剣で刺す。

「優美子！」

「あいよ」

転がった首と胴体は三浦の魔法で一瞬にして灰になった。

「比企谷、前に言っただろ、俺は皆で帰るのを目標としている、本当に帰るかどうかは自由だが俺たちが帰るのを妨害だけはするなとね、この世界である程度の信頼と権力は手に入れた、それをフルに使ってでも俺は俺たちのことを邪魔する奴を容赦せず排除する、今灰になった奴はそのことを周りに伝える為の生贄だ、結衣の本気も見れただろ？これで下手なちよつかいをかけるような奴もいなくなるだろ、比企谷、今度は俺が手を汚す番だ」

「今度はつておまえ・・・」

「君がどう思おうと関係ない、これは俺なりのけじめだ、んじや俺達は領主様へ報告してくる、件の男は寄生虫に操られていたから殺したとね、いいか？何度も言うがこういう仕事は俺の役目だ、君たちが手を汚す必要は無い」

「でもこれじゃお前悪者扱いだろうが」

「悪者？違うな、俺が言ったのは『俺たちの仲間みんな』と言ったんだ、つまり受け取り方によっては召喚されてきた俺たちに限定されてない、さつき奴はここを襲おうとしたと言った、だから『みんな』には辺境の人全員が入っていると取られてもおかしくな

い、いくらでも言い訳が聞く便利な言葉だ、ここは故郷のようなところだから辺境の人はみんな仲間とかそういう言い方しても成立する」

葉山はそう言うのと最後に

「なにしろ俺はみんなの葉山隼人だからな」

そう言つて三浦たちと領主の館方へと去つて行つた。

第三十八話

「今日はもう休みにしようぜ」

一日で色々あり過ぎて正直整理が追いつかない

「そうだね、いくら大義名分があつたとはいえあんなことあつた直後はちよつとやりにくいかな？」

「そうね、姉さんの言うとおりね、私もちよつと疲れたわ、結衣さんも休ませないといけないし」

結衣を膝枕しながら雪乃は心配そうに言っている。

とりあえず結衣を部屋に運び込むと今日は店じまいにすることにした。

「しかしあいつ大丈夫かな・・・」

今日の葉山の様子は尋常ではなかつた。

「彼なりに信念を貫こうとしているのかもしれないけどちよつと危うい気がするわね」

珍しく雪乃も心配そうだ。

考えても仕方がない

「俺は掃除でもしてるから後は各自勝手にやってくれ」

皆何か色々言いたそうだったが議論しても意味は無いだろうし、戸塚も興奮状態だったから落ち着いてもらわないといけない、とにかく今日は時間が必要だろう。

明日からは通常営業するからと皆に言う俺は無心で床の雑巾がけをすることにした。

次の日から営業は再開したわけだが女性達、特に結衣にちよつかいをかける人は全くいなくなってしまう。

店では声をかけられなくとも街に出るとたまに男が寄ってくるものがあるのだがそれすらも無くなっていった。

やはり昨日のことがあったからだろうか？

現在買い出しに出かけているわけだが、特に結衣に対する態度が全く違う、今までは露店とかにいくとスケベなオヤジとかは胸をガン見してきていた、しかし今は微妙に怯えた目つきになっている。

「ハッチー、なんか街の人の視線がいつもと違うんだけど・・・」

「まああんなことがあったからな、放電しながら死んじやえはさすがに怖いわ、俺でも怖い」

「ゴメン・・・」

「謝るな、むしろこれで余計なちよつかいにかけてくる人いなくなつて安心だろ、色々」と

「そうね、結衣さんはお菓子を上げると知らない人にもふらふらとついて行ってしまいたいね」

「ちよつとゆきのんなんだし！んもー！」

結衣さんはお怒りモードである

「ふふふ、冗談よ、でも本当に安心かしら？」

雪乃はうれしそうだ、結衣は無防備なところがあるからちよつと心配ではあったんだよね

「やっぱハッチーも安心する？」

結衣は顔をぐつと近づけてくるのでちよつと焦ってしまふ

「あ、ああ、そりやそうだな」

「えへへー」

結衣さん俺の腕を抱きしめないでくれますか？

当たってるんですですよそのあなたの体の一部がですね・・・

「結衣先輩ばかりずるいです!!」

いろはがよくわからんことを言っただけで空いてる方の腕を抱きしめてくる

「お前から買い出しに来たんだぞ？腕をふさがれると荷物を持てんだろうが」

「えーいいじゃないですかーたまにはデート気分になりたいんです！」

「デートってお前・・・おい、雪乃からもなんか言つてやつてくれ」

「そうね、右手も左手も塞がってしまったてるわ、私は八幡のどこに抱き着けばいいのかしら?」

「おまえら仕事しろよ・・・」

「あなたの口から仕事なんて言葉が出るなんて、明日は雪でも降るのかしら?」

「先輩が仕事しろつて、すごいですね!」

「ハッチー、成長したね!」

「・・・もういいや、大志の野郎連れてくればよかった・・・」

買い出しの人選間違つたと思つても後の祭りである。

仕方がないので店でがんばつてる陽乃さんや川崎に心の中で頭を下げつつ、少しの間だけ誰にも邪魔されないデート気分を味わうことにしたのだった。

数日後、その日は朝から雨が降っていた、雨が降ると客足は途端に落ちる、というか全くと行つていいほど来なくなる。

天候が荒れると冒険者も休業だから必然的に暇になるわけだが、雨が降つても風が吹いてもお休みだつて南の島の大王かよ、ちようど宿泊客も無く、昼時だというに完全に暇な状態だ。

葉山達はどうと、先日この街に来た行商人の一団が食事に來た際、珍しいことに統

率のとれたゴブリンの集団が一方向にむかって進んでいるというのを見かけたという情報を入手、詳しい話を聞きに行くという事で雨だというのに葉山達は行商人達のテントに話を聞きに行っている、宿は高くつくから常にテント生活なんだそうだが、流石商人はがめつい、おかげで今日は三浦と海老名さんだけで食事をしている。

「そういえば優美子、隼人くん大丈夫なの？」

ここ数日葉山は表情こそいつものイケメンスマイルだったが、あんなことがあつた手前どうにも近寄りにくい、街の人たちは葉山のことを英雄から守護神扱いにしており相変わらず持ち上げていたようだが、俺たちとはというと結果として皆避けるような扱いになってしまっていたのだ。

実際奴から感じる雰囲気は今までと全然違うものになっており、ちよつと怖い感じがする。

「安心するし、結衣達が心配することじゃない」

「でも、なんか雰囲気がちよつと・・・」

「結衣、隼人はあーしらに人殺しは絶対させないっていった、北の領地で起きたことも結衣達に話したつしよ？元の世界に戻れたら、ここでやったことは罪に問われることは絶対に無いけどやったことは消えないから全部自分で背負うって、そういう事もあるから雰囲気少し違うように感じるのかも、だから結衣が心配することじゃない」

横では海老名さんがうんうんとうなずいている

「あーしらは何があるうと隼人についていく、死ぬもいきるも隼人と一緒に、そう約束したし、結衣もそうっしょ?」

「うんうん、あーしさんは盗み聞きしていた俺を睨みつける、いや睨む必要無いでしょうに」

「う、うんどうなつてもゆきのんとハッチーと3人で一緒にいるって……」

「ふーん3人一緒?んじゃ2人でヒキオと寝たの?」

ガチャン

紅茶を淹れようとしていた雪乃が手を滑らしてしまったようだ。

結衣はもちろん、川崎も陽乃さんですら動きが止まっている。

戸塚やめぐり先輩はいつものニコニコ顔だ、なんか動じないなこの二人、小町と大志は聞いていけないと思つたのか一緒に奥に引つ込んでいった。

ちなみにいろはは買い出しに行つており今はいない、いたら大騒ぎしていたと思う。

「え……ゆ、優美子? ななな何言つてるの?寝るってそんなでできるわけじゃないじゃん!」

「ま、ヒキオにそんな甲斐性求めても仕方ないか、でもあーし隼人に抱いてもらった、他に想つている人がいるとか言つて拒否られたけど、でもそれでもいいといつて強引に抱いてもらった」

「え！ほ、ほんとに？・・・で、でも優美子はそれでいいの？」

「さつきも言ったつしよ？あーしはなにがあらうと隼人についていく、世界が全て敵にまわつてもあーしだけは隼人の味方をするつてそう決めた、だからあーしはあーしのできることで隼人を支えていくつもり」

結衣はなにも言えなくつてしまったようだ、俺も何も言えん、あーしさん男前すぎるだろ

「あと結衣は勘違いしてるかもしれないけど・・・」

とあーしさんが話しかけた時だった

「先輩！大変！大変なんです！」

買い出しに出かけていたいろはが戻ってきた。

「副会長と書記ちゃんが大変なんです！」

「おちつけ、何が大変なんだ？」

「出来ちゃったそうなんです!!」

ものすごい慌てっぷりである

「何ができたんだ？材木座の新兵器でも完成したのか」

「先輩！ふざけないでください！男女で出来たといったら一つしかないじゃないですか
！」

は？まさかアレ？男と女がアレがナニしてああするとできるアレか？

「いろはさん、もしかして藤沢さんが？」

雪乃が恐る恐る聞いているが、おそろくそれか？

「ハイ！妊娠したそうです！」

マジかよ、あーしさんの話も衝撃的だったが本牧の奴の方がもつと衝撃的だ。

「気分が悪くなって医者にいったら妊娠してるって言われたそうです！おかげで鍛冶屋の店長さんは大喜びで今妊娠記念で大セール中なんですよ！これは買うしかないです……じゃなくて！どうしましょう！先輩！」

「どうしましょうって……どうすりゃいいんだ？」

おめでとうとでも言えればいいんだろうか？

こういう時のマナーとかはよくわからん、そういうときは困った時の陽乃さんだ。

「ま、まー私もよくわかんないからみんなでお祝いに行こっか？」

流石の陽乃さんも軽く動揺している模様、ともかく雨が降って暇なのを幸いにこの場
にいない材木座や平塚先生も呼んで全員で本牧のところに押しかけることにした。

葉山達はいつ戻ってくるからわからんそうだが

「あーしらが代表でいくし」

と言つてたから問題は無いだろ。

鍛冶屋につくと確かにセール中の看板が立っている、雨だというのに客が結構入っているようだ。

「比企谷……どうしよう……どうすればいいんだ？」

店に入ると完全にうろたえている本牧に出くわす

「どうしようってお前、俺に聞くなよ……」

「本牧殿、こうなったら腹をくくるしかないであろう」

なんか材木座がやけにイケメンだ

藤沢は奥の部屋にいるらしい、店は店長と奥さんに任せてとりあえず上がらせてもらって全員でお祝いの言葉を伝えた、それから女性陣だけで話があるそうなので男の俺たちは部屋を追い出されてしまった。

「なあ比企谷、実は前から二人で話会ってたんだが、今回ので決めた、俺たち元の世界には帰らないことにする」

まあやつぱさそうなるよね

「まあいいんじゃないかね？これが無かったとしても色々辛いだろ」

「ああ、この世界に来て俺も沙和子も色々解放された気分になっていたからな、正直戻りたくはなかったが今回で決心した、この世界に残るよ。でもお前らの手伝いはさせてもらうからな、武器の手入れは任せてくれ、あと要望があったら新しい武器も作るから

「や」

頭を下げる本牧、まーこうなるだろうなどは思ってたんだがね、そういう材木座はどうするんだろ？

いい機会だから聞いてみるか

「なあ材木座、お前は どうするんだ？」

「八幡……すまぬ、私も帰りたくない、腕のこともあるが魔力が無い元の世界に戻つたらもしかしたらまともに腕が動くようになるやもしれぬ、だが我はこの世界で守りたいものが出来た、マリア殿はこんな我とずっと一緒に居たいと言ってくれるしベッドに入るといつも我に感謝の言葉をささやいてくれるのだ、それに冒険者連中をはじめこの世界の人たちは皆こんな我を受け入れてくれる、元の世界では我は嘲笑の的だし理解者など皆無だ、それに貴様には言いたくなかったがいじめに近いようなこともされてたしな、両親には悪いが我はこの世界に骨をうずめようと思う」

「……そうか……そうなつちやうよな、まあ葉山には俺からいつとくわ」
「そういうや平塚先生はどうするんだろ？」

聞くまでもなさそうだが一応後で聞いとくか

「なあ八幡、我の左腕、もしかしたらこれが神が我に与えてくれたチートなのかもしれぬな、きつかけはどうであれ、この力のおかげであらゆる攻撃を物理、魔法にかかわらず、

遮断、無効化できるようにした。単純な腕力でもその辺のモンスターなぞ簡単に握りつぶせてしまう」

「いや、その原因は……」

「謝るな！むしろお礼を言いたいぐらいだ！いや、言わせてくれ、八幡、ありがとう」

そういうと材木座は深々と頭を下げる

「やめろよ、もとはと言えは……」

「だから謝るなど言っておろう……そうだ八幡、忘れておった、元の世界に戻ったら私のパソコンのハードディスクとベッドの下の木箱を完全に焼却してくれ、絶対中身を見てはいけないし両親にも絶対に渡すなよ？大変なことになるからな？もし下らない負い目を感じているのであれば今いったことをしっかりと遂行していただくか？」

その程度なら、と言いかけた時本牧もポンと手を打って

「そーだ忘れてた、比企谷俺のパソコンも頼む、あと俺は本棚の奥に隠してある雑誌を捨てておいてくれ、お前にも見られたくはないがこの際仕方がない、もつともお前は興味のない分野だと思うが、だから絶対他人には見せるなよ？」

見られたくないのはわかるがおまえらなんなの？そろって特殊性癖なの？アレか？リアル盗撮とかでもやってしまったのか？

俺もその手の本はあるけどそこまでじゃないぞ？

とどこまで考えてアレ?と思う

「材木座、さつきベッドがどうとかって、お前もしかしてマリアさんと一緒に寝ているのか?」

「もしかしなくとも寝ているが? 男女の営みのことを指しているのならほぼ毎晩やつておるが」

「は? 毎晩つてお前・・・つていうかそうなるのと童貞なのは俺と戸塚ぐらいじゃないのか?」

海老名さんの態度見ると戸部となんとなくしちやつた感があるし、大和や大岡もあれだけでもはやされてるんだからやつていてもおかしくは無い

「まさか材木座に先を越されるとは・・・」

なんとなく悔しいと思っていると

「あのー八幡? ゴメン、実は僕も・・・」

は? 戸塚までいったい何を言い出すんだ?

「戸塚、すまんが俺には戸塚を抱いた記憶が無いのだが?」

「あのー八幡? 大丈夫?」

いかん、ちよつとシヨックで錯乱気味になっている

「一体誰と?」

「実は材木座くんの所に城廻先輩と泊まり込みでお手伝いに行つたとき、材木座くんとマリアさんのしている声が聞こえてき、ちょうど隣の部屋だつたから丸聞こえで、城廻先輩としばらく一緒に聞いていたら二人とも興奮してきてその流れでさ……」
「は？流れで？マジデ？」

「その時城廻先輩は今回だけつて言つてたけど、それからちよくちよく隠れてね？声は出さない様に気を使ってしているから誰も気が付いていないみたいだけど」

顔を赤らめて衝撃的な発言をする戸塚

え？何それ、なんで俺の知らないうちにみんなやりまくりなの？ちよつとマテよ、あれ？もしかしてこの流れで行くと大志の野郎もまさか！

「なあ大志、あまり聞きたくないのだが……」

「お兄さん！安心してください！まだそこまではしてません！」

大志は堂々と宣言してくれたので若干ホッとしたが違和感バリバリである。

「そつか安心した……つてまだつてどういう意味だ？説明しろよ、おい！ちよつと逃げなな！」

「大丈夫つす！小町さんを傷つけるようなことはしてないつす！むしろ喜んでいたつす！義兄さん安心してください！」

「貴様！喜ぶつて何を！しかもなんか兄の字が違くないか？」

廊下でバタバタと大志を追いかけまわしているというはがバーンと部屋の扉を開けて飛び出してきた。

「先輩！結婚しましょう！」

駄目だこいつとうとうおかしくなりやがった

「落ち着け、なんだかお前おかしいぞ」

「おかしくありません！しましよ！今すぐ！」

ダメだこいつ早く何とかしないと、そう思っているとドヤドヤと藤沢の部屋から女性達が出てくる

「雪乃、いろはが錯乱してるから止めてくれ」

「あら八幡？いろはさんのプロポーズを受けないのかしら？いつまでじらすのかしらねこの男は、あなたはまたうやむやにして答えを出さなかつもりね？今度はそうはさせないわ」

「そうだよハッチー、結婚しよう？」

こいつらもう何が何だかわからん、この間から短時間で襲ってくるイベントが多すぎて頭の整理が追いつかない

「ちよつとマテ、なんでお前ら結婚とか言っちゃってるの？何が何だかわからんだが……」

そんな俺の様子を見て

「はあー」

と三浦がものすごいため息をついている

「ヒキオ、この世界は条件さえ揃えれば一夫多妻OK、条件つていうのは地域的に重要な物件の管理をしていたり、その土地を治めている領主様に許可を得ること、なんか他にも色々あるらしいけど、基本的に資産があつて子孫を残す必要がある人は許可されてれば一夫多妻OKなんだし」

分かりやすい解説ありがとうございます、でどの辺が俺たちに該当するんだ？

「あんたの店、領主様に気に入られてるじゃん、ああなれば普通にOKだよ」

え？そんなの？

「副会長と書記ちゃんはずぐ式を挙げるつて言ってます！先輩！私たちも上げましょう！」

いろはちよつと黙っている・・・つていつのまにか雪乃と結衣にも囲まれてるんですけど

「八幡よ、先日我と戦つた時に言つたであろう、雪ノ下殿達が勇氣を出した結果の貴様のとつた態度よ、いきなり選べと言われたわけではないであろう、近くで見ると予兆のような物はあるのが丸わかりなのに貴様は勘違いだのなんだのと気が付かないふりば

かりしおつて……そこにムカついたのは本当のことだ、よいか！この世界で結婚しても元の世界では関係のないことだ！しかもいつ死ぬかもわからないのだ！悔いの無いようにやれ！」

なんか材木座から怒られてしまった

「お、俺のことよりお前は どうするんだよ！」

「うむ、我らは式はまだだな、新婚気分になるのは子供たちが大きくなったらだ」

「お前言つてること矛盾してるだろ！」

「どこも？我は悔いの無いようにと言つたのだ、我自信は悔いの無いようにマリア殿と生活しておる」

「三浦！海老名さん！そつちはどうすんだよ！」

「あーしらはそういうのはいい、あーしらのことよりヒキオは自分のこと考えな」

確かに答えを出すつもりだったがなんか色々すつ飛ばしすぎたろ。

ふと戸塚を見るとめぐり先輩とニコニコ笑つてこつちを見ている。

「僕たちは、そういうのとはちよつと違うかな？」

違つてあれか！体だけの関係か！戸塚つて天使じゃなかったっけ？

汚れてるよ！天使じゃなくて墮天使の方だよ！めぐり先輩も大人の階段登りすぎててつぺんまで行つちやつてるよ！

「比企谷くん、年貢の納め時だね」

ちよつと陽乃さん何ニコニコしてとんでもないこと言ってるんですか

「この際だから私も比企谷くんと結婚しちやおつか？ そうそう沙希ちゃん？ 貴方も素直になつた方がいいと思うな」

え？ まだ増えるの？ 川崎も？ 何で？

「比企谷ごめん、雪ノ下さんや由比ヶ浜がいるからさ、あたしじゃ勝負にならないな
思つてた、でも本音を言つと」

そう言いながらいきなり抱きしめられる

「重婚できるなら雪ノ下さん達に気を使う必要もないね」

そういうといきなりキスしてきやがった

「ん・・・」

「あー！ ちよつとサキサキ！ 酷くない？ あたしたちもまだなのに！」

「そうですよ！ 抜け駆けは反則です！」

「あ、ごめん、あんたらのことだからつきりもうこのぐらいはしているのかと・・・」

「川崎さん？ いえこれから沙希さんと呼ぶことにするわ、ちよつと今のはずるいわね、ペナルティとして初夜は見学だけね」

「おい何仕切ってるんだ？ ちよつとマテ、一旦落ち着け、みんな一旦冷静になろう、あと

陽乃さんは国王の件があるので俺と結婚したら国王に目をつけられるのでダメです！」
「んーじゃあセフレで、ほらーこんな綺麗なお姉さんを好き放題にできるなんて男子高校生ならあこがれるでしょ？」

「姉さん、ちよつと下品よ？」

「ふむ、若いとはいいいない！しかし比企谷、これから先どうするかはお前次第だぞ？」

「先生！何で止めないんですか、無茶苦茶なことですよ、出来ちゃったあと帰れるってわかつたら色々やばいでしょう！」

「一応避妊の魔法はあるから大丈夫だろ、プリーストなら習っているはずだしプリーストでなくてもその手の道具は色々あるから大丈夫だ、問題ない」

「・・・え？俺初耳なんですけど？」

本牧が困った顔をしている

「そりゃあお前ここのオヤジさんにはめられたんだろうな、まあ元々帰る気が薄かったし踏み切り付かせるためにわざと教えなかったかもな」

「はめたのは本牧殿だがな！ガハハハ！」

「材木座！女性の前だぞ、TPOをわきまえろ！」

「このデブこぞとばかりに下らない下ネタギャグを言いやがって、平塚先生に怒られてげんこつ食らってやんの、いい気味だ。」

「まあ、ちゃんとするれば大丈夫だろ、私はたまに忘れるが」

ちよつとそういう事は聞きたくないですよ、先生の性事情とかちよつとやめてもらえませんかね

「静ちゃんも検査してもらった方がいいとおもうよ？相手も困るでしょ？」

「う．．．うむ、そうだな．．．」

「あと先生、聞くまでも無いと思うんですが一応確認です、こっちの世界に残るんつすよね？」

「すまんな比企谷、私はこの世界に残る、今は訓練所の教官補佐だがゆくゆくは学校を作ってみたいと思う、教育はどこの世界でも大事だ」

「やつぱさうつすよね」

ちなみにこの数日後平塚先生も検査してもらったところ妊娠はしていなかったそうだがなんだか複雑な顔をしていたのが印象的だった。

第三十九話

「とんでもないことになっちまったな」

頭をポリポリとかきながら独り言をつぶやく

女性たちは藤沢とまだ何かやることがあるとかで鍛冶屋に全員残ることになった。

まあ男にはわからない色々なことがあるんでしよう、材木座も手伝える女性というところで教会のシスターを呼んでくると言って戻っていった。

今は戸塚と俺と大志の三人で千葉亭までの帰り道を歩いているところだ。

雨降りなので往来の人もほとんどいない、どこかに寄るのも億劫なのでまっすぐ帰宅なわけだ。

「なあ戸塚、なんか大変なことになっちまったな」

「んーでもいざれこうなつてたと思うよ?」

「でもよ、俺どうすりゃいいんだ? いきなり複数の女から求婚されるとか漫画かよ」

「僕は普段の彼女たち見ててそのうちだれか行動するんじゃないかと思つてたけどね、あと僕さ、学校の時の八幡は雪ノ下さんや由比ヶ浜さんみたいな綺麗な女子に囲まれてもデレデレしないし、クールでかっこいいと思つてたけど、今はちよつと違うかな?」

女性に迫られたら逃げないで毅然とした態度を取らないと男としてちよつとよくないと思うな」

戸塚が大人に見える、これが非童貞か……

「そ、それはそうとだな、もしヤルとしたら俺どうすればいいかわからんのだが、避妊とかもさっぱりだ、戸塚はどうしたんだ？」

実践なんてしたことが無い、一人での練習は死ぬほどしたことはあるんですが

「僕も城廻先輩もプリーストだからさ、そこはお互い満足するまで回復や避妊の魔法を使いあつてやるから参考にはならないかな？八幡の場合プリーストはいないから道具とか色々調べておいた方がいいと思うよ？」

「満足するまでつて……」

エロいよ、戸塚エロいよ！

「あはは、気が付いたら外が明るくなってた時もあったかな？その日はずっとあくびしっぱなしだったよ」

マジかよ、戸塚とめぐり先輩のあくびかわいいと思つてほのぼのしていたら裏では二人とも大人の階段を全力疾走していたとは

「葉山くんに聞いた方が参考になるかもね」

あいつに聞くの？聞いたらすごく嫌な顔されそうなんだよな、かといつて戸部だ

とベーベー言つて大騒ぎしそうだし大和と大岡は論外だし

「お兄さん！相手が喜ぶように優しく接すればいいんつす！特に姉ちゃんには優しくいてほしいつす！実家でも寢言で先輩の名前言っているの聞いたことあるすから！」

「そうか・・・すまんな大志、お前に教わるとは・・・つてちよつとマテ、お前小町に本当に何やつたんだ？怒らないから正直に言え！」

「あ！俺姉ちゃんに買つてきてほしい物があると云われてたの忘れたつす！んじや義兄さん！また後で！」

「おい！また兄の字がちよつと違うだろうが！・・・つてもう行つちやつたな、ハー、ほんとうしようか」

「八幡も素直になればいいんだよ？大丈夫、雪ノ下さん達ならキッチンと受け入れてくれるよ」

千葉亭に戻ると葉山達がちよつと帰つてきた所だった。

本牧達のことを話すと

「そうか・・・わかつた、式には参加するよ、日取りが決まったら教えてくれ」

「ああ、ちゃんと教える、あと俺もそうなりそうなんだな」

いろは達に突然求婚されてしかも重婚OKとか初めて聞いたとまで話した。

流石にヤル時はどうすんだ？までは聞けなかつたが

「なんだ、知らなかったのか・・・そうだな、この世界なら君たちもしがらみから解放されるし色んな問題も解決してしまう・・・やっぱ比企谷は帰らないつもりか・・・」

なんだかものすごく残念そうな顔なんですが

「い、いやそうではなくだな？この世界にいる限りどうなるかわからんから悔いの無いようにというところでこう仮と言いますか一応と言いますか、君たちは俺の翼だ的な・・・」

「ごまかさなくてもいい、決まってるならその時まで決めてくれよ？」

言い訳をひねり出したがこうもバツサリやられると来るものがあるな、そして戸部は相変わらずベイベー言ってるかと思つたら

「結婚の話も重要だけどよ、隼人、今日のことヒキタニくんに言わないといけないべ？」

いつもの調子ではない、かなり真面目な戸部である

「・・・タイミングが悪いから言うか言うまいか迷つてたんだが、仕方がない比企谷、商人達に話を聞いてきた」

「それでどうだったんだ？」

「東の領地のさらに東、隣の国との国境付近の山を歩いていたら崖の下の道をゴブリンの集団が森の方に向かって進んでいるのを見つけたらしい、でかいのや普通サイズのやらの色んなタイプのコブリンが統制が取れているかのように集団でいる上に大事そう

に箱を担いで移動してたから珍しいと思って商人たちは山の上から観察してたそうだ」
「箱？アレか？アクセサリーしまう為のやつ？それと森の中って奴らのアジトでもあるのか？」

「恐らくその認識で間違いないだろう、村は無くなつたしアクセサリーの補充かなんかで戻ってきたのかもしれない」

「んじや早速……と言いたいけどまだゴブリン連中は森にいるのか？行ってみたらもぬけの空でしたとかバカくさいだろ」

「ああ、その辺は大丈夫、商人たちに話を聞いた後即行で領主様の所に行つてワイバーン便を一つ抑えてもらつてね、東の領主様と国王陛下に速達を送つておいた、東の領主様は協力的だからね、早速森に続く道は全て監視を置いてくれることになった、ゴブリンの話も裏が取れたそう、森からは出てはいないらしい」

おいおい、一日でそんなに手が回るのかよ？

「どうやったたらそんなに早く対応ができるんだよ……まだ一日も経つてないぞ……」
「国王陛下も北の領地の惨状は知つているから秘密裏かつ速やかに始末したかつたんだろう、前もつてヤバイゴブリンの集団がいるという書状を各領地の領主様たちに送つていたそう、そのせいもあつて対応が早かつたみたいだな」

「そうか、よし、んじや早速森ごと燃やそうぜ、正直行きたくない」

普通の話ならここで主人公たちが森にいつてゴブリンと死闘を繰り広げる展開だろうがそんなことやつてられるか

「君ならそう言うと思つた、でもあの森は国境付近の森だからな、隣国までつながってるからそつちまで燃え広がるのは問題だからそれは避けたいそうだ」

「んだよ、んじや兵隊揃えてもらつて全軍で突入すればいいんじやね？ 国王様も力貸してくれんだろ、あと東の領主も」

燃やすのがダメならここは葉山の威光を使つて軍隊派遣してもらつて全力で叩き潰してもらおう、セオリーなんぞ叩き潰そうぜ

「国境付近といつただろう・・・軍隊を国境に集めてたら無用の不安を隣国にあたえて面倒なことになるだろ・・・それにその森は色々厄介でな、瘴気が漂つてるとかで普通の人は近づくとすら難しいそうだ、入るのであれば常時魔力で解毒する必要があるんだとか、だから・・・」

「おい、それつて魔力が強い異世界人にしか入れないからお前らあとにはよろしくみたいなことになつてるんじや無いだろうな？」

「Enemyとでも言えばいいかな？ だから比企谷達に協力をしてほしかつたんだが、タイミングが悪すぎたな・・・」

流暢な発音がちよつとムカつくな

「結局俺たちで何とかしろってことになる、どうするかだな・・・」

俺たちで？んなことやってられるか

「なあ葉山、おまえはアホか？俺たちだけで行ってもゴブリンは数で押してくるだろうが、お前は三浦や海老名さんがゴブリンに捕まって好き放題されても平気なのか？」

「だから困ってるんだろ」

「俺も雪乃や結衣があいつらにとつつかまって悲惨なENDを迎えるの嫌だからな、あいつら相手に少数で行くのは悪手だろ、こつちも人数をそろえないとな」

「数ってどうするんだ？」

「吉原さん達にも協力してもらおうんだよ、俺たちよかベテランだし、他の異世界組もできる限り集めてよ、国王陛下やアダムさんに頼んで異世界人をかき集めてもらおうんだよ、大勢で行ってルール無用の残虐ファイトで連中を叩き潰してやろうぜ、大半が冒険者みたいだから、隣国が怪しんでも調査ですと言いつつだろ、森の外には領主や国王あたりには物資をしこたまねだって豪華なベースキャンプを設置してもらってだな、魔法や道具は使い放題、ゲームやアニメだと少数で行かないとみたいな展開になって主人公大ピンチとかになるが、そんな理不尽設定は全力で投げ捨てようぜ、でも本牧と藤沢は留守番だな」

「いいアイデアだが君たちも留守番だろ、本牧達と一緒に式を挙げるんだろ？新婚を連

れてはいけないな」

「そんなこと言ったら誰も連れていけないだろうが」

「材木座は連れて行くよ、彼はマリアさん達に危害が及ぶような問題は自分の手で片づけると言つて聞かないからね、ゴブリン達を見つけたら絶対教えろ、教えないと握りつぶすとまで言われてるし正直彼がいると心強い」

おー材木座、とうとうリア充トップカーズに頼られるとは、流石だな

「材木座もいくなら余計に行かないとな、あいつには借りがある、俺たちの式はこの問題を片づけてからすりゃいい、あの悪夢みたいな状況は二度と起きてほしくない、手数は多い方がいいだろ」

「葉山くん、もちろん僕もいくよ、解毒だったらプリーストの出番でしょ？」

今まで黙つて聞いていた戸塚も行くと言つてくれる。

「葉山、みんなを集めて一回話会おうぜ、黙つてお前らだけで行くのは無しだからな」

先日の様子からするとこいつは一人で全部抱え込んで行つてしまふそうだ。

もしそんなことになったら目も当てられん。

「……わかつたよ、夕食の時にでも話そうか」

第四十話

さて夕食である、雨降りなのをこれ幸いに店は早々に閉店している。

店の中には異世界に來た俺たち総武高校のメンバー全員がいる状態だがアダムさんが何故かいる、まあこの人は一応いてくれた方はいいんだが材木座の隣にはマリアさんが座っているのはどういうわけだ？

「あのーマリアさん？なんでいるんです？」

「義輝様は戦いに赴くのでしょうか？なら今度は私も行かなくてはなりません！」

「マリアは一回言いだしたら聞かないからなあ・・・」

諦め顔のアダムさんであるが俺は声を大にして言いたい、おいおっさん、娘なら説得しろよ！

ちなみにアダムさんは結婚はしているが諸事情により子供がいらない、なので養子のマリアさんが跡継ぎなわけだが、アレこれって必然的に材木座が次期領主になるんじゃないか？

「八幡、マリア殿のことは我に任せられよ、それより早く話を進めていただけぬか？」

「あ、ああうん・・・」

なんかこいつとんどん貫禄が増してくるな、こいつも非童貞だからなあ

「んじや葉山説明頼む」

「・・・君がやるんじやないのか・・・まあいいけど」

色々動いた人が話した方が早いだろう、というのは建前で単にめんどくさいので葉山に丸投げだ。

「・・・というわけだ、異世界から来た人をかき集めて東の国境の森を攻める予定だ、何か質問は？」

「森のどこにゴブリンのアジトがあるかはまだ分からないのね？」

陽乃さんから質問だが、これは俺も思ったことだ、やみくもに森に入っても遭難したり下手したらゴブリンに囲まれBad Endになりかねん

「むろん現地に付いたら偵察隊を出す、大岡と比企谷は決定だな」

「え？俺？」

「おにいちちゃん頑張つて！」

あれー小町さんあなたもシーフでしたよね？

「八幡？小町さんにどこにゴブリンが潜んでいるかわからないところに行かせるつもりじゃないでしょうね？」

「先輩サイテーですね」

なんか女性陣からの視線が異様に冷たいのだが……

「何も言つてないだろうが……」

なんでこいつらに心の声がダダ漏れなんだろうか？

「ゴブリン達はどのくらい規模なんだ？商人たちはゴブリンの一団を見たのだろうか？戦力分析をしないとないな！」

平塚先生はこつちの世界に来てから前にも増して脳筋つぼくなつてるから一人です突つ込みそうで怖いんだよな。

「結構な規模らしい」

そう言うとうと葉山は商人たちに聞いた話を元に何が何匹いる可能性があるという絵を見せてくれた。

「うーむ確かにこれは多いな、よし！かめはめ波で吹つとばそう！」

出た脳筋発言

「先生、国境付近ということを忘れないでくださいね？」

葉山が珍しく怖い顔をしている、確かに派手に大技をぶちかまして相手国に被害が出た場合、それが原因で開戦とか洒落にならんからな

「う、うむ、自重する」

「東の領地の城門破壊した件は大目にみて頂いてもらつてますが隣国がらみですとフォ

ロー出来ませんからね！」

さらなる追い討ちでシヨボンとなる平塚先生、これだけ釘を刺せば下手に暴れないでしょう。

好き勝手暴れる決戦兵器みたいな扱いだから大変だ。

「先生のこととはもういいでしょう、結果論だけど、先生の技で姉さんは正気を取り戻したようなものでも、それよりこれだけの規模を収容できる建物か洞窟のようなものがあるってことかしら？それならばワイバーンで上空から探すのはどうかしら？」

「それも考えたんだが、国境付近を周回させると、スパイ活動と思われるで大騒ぎになる可能性がある、ワイバーンの輸送経路計画の際、国を跨いだ計画になるからと各国で軍事目的には使わないという条約を交わしているそうだから、管理も国際運輸ギルドとか言うのを作って共同管理してるとかで、国内だけなら領主や国王の権限で緊急要件に限り少しは使えるが、基本的に自由に使ってはいけないことになってるそうだ」

「なんだか色々メンドクサイのう、隣国にもヤバイゴブリンの群れがいるとか言えばよからう？何故言わぬのだ？」

「自国のことだし、ゴブリン程度に大苦戦してるというのを知られたくないのかもしれないかもね、最悪隙をついて攻められるかもしれないし」

千葉亭に来る客の話の話を聞くと先代の王の時代までは周囲の国と派手にドンパチやつ

ていたらしいからな、今の王の時代になってようやく休戦協定が結ばれたとか、今のところ平穏だがあくまで休戦だからいつ再戦するかわかったものではない

「ともかく隣国には開拓されてない森を冒険者が調査するという報告をあげてもらおう、領主様もそれでよろしいですね」

「フム、わかった、それと良ければ私も行っていいかね？あの辺に私の故郷があったのだよ、私が小さい頃戦争で村ごと無くなっちゃってね、たまには墓参りぐらいしないかな」

「別にかまいませんが・・・森に入るのは厳しいですし、そもそも領主様は戦えるのですか？」

葉山にしてはちよつときつい言い方だが当然だろう、権力者が物見湯山気分で来られても邪魔なだけだ

「比企谷君達には言ったが私も元は冒険者でね、メイジとしてはそこそこの活躍をしたのだよ？魔力だけは高いからな、まあ由比ヶ浜君や三浦君には負けるが」

そういうそんなことをちらつと行ってたような気もするが本音は娘が行くから心配なんだろう、まったく娘には甘いオッサンだ

次の日から、吉原さん達に話を持って行き協力してもらおうよう頼み込むことになった。

「交通費、滞在費は全額支給でそれプラス成功報酬も結構出るなんて結構美味しいね、まあそれはともかくとして、そもそも僕たちとしても君たちばかりが活躍するのは異世界から来た者の年長者としてのプライドが許さないからね、無論協力させてもらうよ」
プライドが許さないと云ってる割にニコニコ顔である、この人何気に親戚のお兄さんみたいな立ち位置なんだよな

吉原さんにも協力してもらい他の人にも声をかけて辺境の地にいる異世界組のほとんどが集結させることに成功した。

さらにアダムさんは他の土地に行っている人たちにも順次連絡がいくように手配、冒険者ではなく俺たちのように店を経営している人もいたが、そう言う人は野営地の設営と補給物資の管理役にするとか、集まった人数は俺たちを除いて約40人ほどだ

「結構いるんだな」

「ああ、でもよ、逆に言うところだけの人が日本から消えてるのになんで騒ぎにならなかったんだ？おかしくねえか？」

「吉原さん達は親兄弟が死別していたり、元は施設の子供だったりして家族がいらないばかりだそうだが、もしかすると他の人もそうなのかもな、いなくなっても誰も探そうとしないから騒ぎにならない・・・考えすぎか」

「でもそうなる俺たちがここに連れてこられた意味が分からん、俺たちは普通に両親

いるしな」

「そういう考察は後からにしましょう？今は全員でゴ布林共を叩き潰す、それだけよ」
雪乃が珍しく鼻息を荒くして熱弁してる、奴らはある意味女の敵でもあるからな、ともかく準備を進め数日後俺たちは馬車に乗り東の領地へと出発することになった。

第四十一話

東の領地へとたどり着く、葉山がいる為案の定の歓迎っぷりだったのだが

「門は直っているけど街の配置が平塚先生がぶつ壊したままになってるじゃねえか」

城門から館まで一直線に道ができていた。

館の前に行くつか建物があった気がするのだが

「なんかこっちの方が利便性が高いからとかで正式にこうしたらしいよ」

防衛的にどうなんでしょうねそれ？

ともかく全員東の領主の館へと案内され森の現状を確認することになった、無論こういう場合は全部葉山にお任せだ。

「ゴブリンの一団は森からは出てはいないのですね」

「うむ、森へと続いているあらゆる道を監視していたがゴブリンらしきものは確認されていないと報告が上がっている」

葉山の質問に東の領主も困惑気味である、何しろ森には入れないのだから中で何が起こっているか確認しようがない。

「それと近隣の村にも確認したがゴブリンによる略奪や女性をさらうなどのことも起き

ていないらしい」

「それは逆におかしいですね、本当にゴブリン達は森に入ったのですか？」

葉山の疑問ももつともだ、あいつらはとにかく仲間を増やそうとするし人を見れば襲ってくる。

「それはこちらでも複数の目撃証言が得られたので間違いないはずだ、足跡も確認したしな」

「もしかしてあの森になにかあるのですか？」

「先代の王の時代、隣国を攻めるルートの開拓にできないかとかで宮廷魔術師達が入ってたことはあつたらしいが内容は極秘とかで私も詳しくは知らされてないのだよ」

宮廷魔術師？それってなんだ？と思つていたら隣にいた雪乃から

「王様直属の精鋭のメイジ達のことよ、研究とかが主な役目」

とこつそり教えてもらった。

ともかく森に入らないとなんだかわからん状況のようだ、あとはベースキャンプの設置の為の手配やらなにやらの話になったので全部葉山とアダムさんにお任せすることにした。

領主の館から出た途端、平塚先生は兵士たちに取り囲まれた。

何事かと思つたら、先生のファンだそうだ、いつの間にか大人気になっていたようだ。

魅了されていたとはいえあの時の状況を覚えていた人が結構いたらしく素手で矢を弾き返したり門を破壊したりととんでもない強きな上に、平塚先生は外見もスタイルも上の方だ。

皆話を聞きたいらしく人だかりができていたが、旦那がいると知れると一様になつて顔つきになつていた。

平塚先生、この世界ではモテモテですね。

なんかファンクラブ的なものまでできてみたいだ。

陽乃さんとめぐり先輩も大人気だった。

国王からの正式発表では葉山と陽乃さんが魔女を倒した事になつていく上に、自分たちを操っていた魔女の顔を誰一人として覚えていないのが幸いしたようだ。

雪乃達も囲まれていたがこれは普通に見た目が美人ぞろいだからである。

客商売をしているおかげか、雪乃は愛想笑いができるようになっていて、男どもが群がりまくつて大変である。

結衣といろはと小町がどうにか寄ってくる男をさばいている状態だがこちらも話かけられるので対応に困っている模様。

そこ！小町に話しかけるな！こういうときは大志の役目だろ！と思つてあたりを見回すと姉の川崎に群がる男どもを追い払っている模様、あいつも大概シスコンだな…

ちなみにマリアさんも相当な美人ではあるが材木座が隣にいる為誰も寄り付かない模様。

腕に怪しげな手甲をつけているうえにあいつは巨体だから皆怖がつて目も合わせられないようだ。

一方俺はと言うと男どもから戸塚を守るので精一杯な状態、こいつは男だから！

でもかわい、くそ！なんで俺は戸塚と結婚できないんだ・・・

そんなアホなことを考えていると

「困ったことになった」

打ち合わせが終わったのか館から葉山が出てきた、ただ浮かない顔をしている。

群がる兵士や男どもをどうにか追い払い葉山に詳細を聞くことにした。

「この領主様、協力をしてくれるそうだが交換条件を出してきた」

「なんだよそれ・・・無条件で協力するとかそんな話してなかったか？」

「ああ、そうなんだが是非にと言われてね、なんでも俺達の実力が知りたいそうだ」

「実力ってなんだよってまた厄介なことか？」

「簡単に言う俺たちと試合をしたいそう、平塚先生や陽乃さんの活躍を知ってる訳だし、俺たちも過大評価されてるみたいだな、是非一度お手合わせ願いたいと言うことらしい」

「んな暇ねえだろうが、さっさと行かないとゴブリン共が・・・」

「俺も断ろうと思つてそういつたんだが『それについてはちゃんと監視してるから大丈夫』だつてさ」

やれやれといった顔で両肩をすくめる葉山

「そういうわけで君たち、ここは一つ頼むよ」

と後ろからひよっこり顔を出したアダムさん、ずいぶんのんきなものである。

「やるにしても全員戦うとか無理じゃないですかね、それに俺も自信ないんですけど」

対人戦なんぞ勝てる気がしない、雪乃や結衣が戦ったら間違いないと思うが、雪乃はすぐ息切れするだろうし、結衣は戦いたがらないだろう。

「まーそうだな、多分それについては全員ではなくて主に葉山くや陽乃くん、あと平塚さんの実力が見たいんだと思うよ？流石に全員はちよつと時間がかかりすぎる」

とアダムさん、まあ大方そんなことだろうとは思つたがなんだか不安である。

「あのーそれって僕たちも含まれてます？」

吉原さん達も不安そうな顔だ

「吉原くん達は特に何も言われてはおらんから残念ながら今回は応援だな」

アダムさんにそう言われて吉原さん達はほつとしてるようだ。

ずるい！俺もそつち側に行きたい！

「まーそう深刻にならんでも大丈夫、試合用の魔法で大きな怪我しないようにいろいろカバーするから、実際のところ致命傷になったりはしない、お遊びみたいなもんだからさ」

とアダムさんはガツハツハと笑っているが不安しかな
とにかく試合をする会場の確認をしに行くことにした。

「なんすかこれ・・・?」

皆でぞろぞろ歩いてくると、スタジアムをさらに小さくした感じの建物がある、中に入ると体育館ぐらい広さの土地をそれこそスタジアムのようにぐるつと座席が囲んでいる状態だ。

ローマのコロッセオをものすごく縮小したものといえればわかりやすいか、いわゆる円形闘技場というものであろう。

真ん中には石畳のステージが設置してある。

「なんか世界史の教科書でみたような気がするが、こんな見世物みたいところで戦うのか?」

「多分皆興味あるだろうから、仕方ないんじゃないかな?」

爽やかな笑顔で言う葉山だが比企谷は不満である。

「お前らはサッカーやらなにやらで衆人観衆の目にさらされながら試合とか慣れてるだ

ろうがこつちはボツチだぞ?」

「八幡、あなたと言いう人は……」

雪乃はこめかみに手を当て呆れ顔

「柔道部の一件、あの時あなたも衆人觀衆の前で豪快に負けてたじゃないの」

負けてたは余計ですよ雪乃さん、そして葉山はあーやっぱり見たいな面をするな、そ

うだよお前抜けたから俺が出て負けたんだよ!とちよつとだけ睨んだら

「あの時は試合中に抜けちゃってゴメンな」

だつてよ!

そんなこと言われたら、うん君は悪くないよ、としか返せんだろうが!

最もあんときはいろはが迎えに来たのが原因なんだが……

「なんと言おうとこんななんだつたら俺はやらん、比企谷くんは病欠ということでは

一つ……」

と逃げ腰の比企谷

「あはは、ハッチーらしいや……でもあたしも人と戦うのはちよつと嫌かも」

と結衣は暗い表情になる。

その状況を見てアダムさんはアゴをさすりながら提案をしてきた。

「ふむ……ではエキシビジョンということで比企谷君達数名で共闘して何か倒すつての

はどうかね？それなら向こうも納得するだろ」

「何かってモンスターとかですか？モンスター程度ならまあ、つてか俺は戦うの決定ですか？」

「まあな、さつき言うの忘れたんだが、実は君も偉いさんの間では有名でね、影の実力者みたいなこと言われているようだよ？それはさておき決まりでいいね？エキシビジョンのメンバーと試合出場のメンバー決めておいてくれ、んじや了解もらったってことで」

アダムさんはそう言うときさつきと戻ってしまった。

「つたく・・・んでどうするよ？」

面倒なことになったと比企谷は葉山へと向きなおる。

「そうだな・・・俺は出ないといけないようだし、他にも出場したい奴がいたら自己申告してことどうかな？」

そういうと葉山は自分のグループメンバーへ話をしにいったようだ。

やはりこいつは元の世界ではサッカー部の部長ということもありこういうことには慣れてるようである。

そしてあいつのグループは軒並みリア充、イベントごとには積極的、元の世界ではちよつとイラつく存在だがこういうところでは心強い。

「んじやあ俺達はどうするっ？」

比企谷は雪乃たちへと向き直り相談をすることにした。

第四十二話

「八幡よ我は試合に出るぞ？」

と材木座、まあこいつはこの世界に来て一番馴染んでる奴だから絶対出ると思った。

「私の力を良く知らぬものいるしな、お披露目にちようどいい」

「まあお前はファイターだし当然か、でもその手甲はいいのか？」

こいつはファイターだが徒手空拳というべきか、魔法を用いた某ロボアニメの必殺技をふんだんにパクつての攻撃だ。

しかもいわゆるロケットパンチが繰り出せる手甲である。

「八幡、んなこと言ったら魔法なんて無限に射出できる飛び道具みたいなものであろう？だから問題はない！」

とドヤ顔、なんかむかつくがまあいいか

「僕はいいかな？応援してるよ」

戸塚は回復メインだからこういうのも当然だろう、でも杖を使った攻撃は悔れない、テニス部だったということもあり一撃が非常に重い。

試合に出てもいい線行くかもしれないが、戸塚をこんな目立つところで戦わせるわけ

にはいけない！なにしろ戸塚はかわいい、とつかわいいだかんね。

「わかった、戸塚は応援を頼む、むしろ俺だけを応援してくれ」

「んもう、駄目だよ八幡！みんなを応援するからね？」

ニコツと笑う戸塚を見てるとこの純真な笑顔を守りたいと思うのだが、めぐり先輩とやっちゃつてんだよなあ……

「八幡？気持ち悪い顔をさらに気持ち悪くしてどうしたのかしら？」

雪乃は体力なくせにファイターだが補助魔法でバフを唱え一撃必殺鎧袖一触見敵必殺……とまあ形容する言葉が出るぐらい速攻で相手を即殲滅するスピードタイプである。

しかも戦う姿は容姿端麗才色兼備、因みに俺の嫁だ。

「八幡？なんか顔がにやけてるわよ？」

「いや……まあそのエキシビジョンは頼む」

「言われなくてもそのつもりよ？あとのメンバーはどうしましょうか？」

「ハッチー、あたしもハッチーの手伝いしたい……ダメかな……？」

結衣は遠慮がちに協力を申し出られる、胸の前で指をつんつんしているその仕草はいじらしく思う。

「いや、お前も一応メンバーで考えてた、魔法でお前にかなう奴はこの中にいないから

な」

結衣はメイジであるが魔力が他の人より圧倒的に多い、何にも考えず魔法を使うと人の数倍の威力を発揮してしまうのだ。

それゆえにメンバーの中では火力担当である。

「やった！ハッチー！あたし頑張るからね！」

と結衣は抱き着いてくる、スキンシップが過剰なのが一番困る、なにしろ魔力も一番だが胸のサイズも一番だからである。

あとこいつも俺の嫁だ。

「先輩？結衣先輩の胸を凝視してまたエロイこと考えたんですか？」

「ちよつといろはちゃん！、別にあたしならいいかなあつて・・・」

「良くないですよ？先輩？少しはTPOというのをですな？」

と説教モードに入るいろは、こいつはハンター、弓の扱いは一応一番たけている。

「あー、お前もエキシビジョン頼むわ」

「先輩？そんなのでごまかされませんか？」

ちよつと怖い、でもこいつはかわいい後輩ではある、そして俺の嫁。

一人でニヤニヤしていると雪乃がため息をついてまとめにかかると

「それでは私と八幡、結衣さんいろはさんでエキシビジョンマッチに挑むということで

いいかしら？ 試合に参加するのは材木座君ね？ 戸塚君は応援ね？」

「おう、それでいいぞ」

「では決まりね、他のグループはどうなのかしら？」

「ああ、特に小町が心配だな、あいつが試合に出ると言ったら全力で止めないと」

小町をを傷つける奴は絶対に許せん。

「貴様のシスコンぶりも大概よのう」

としたり顔の材木座だが横にはニコニコ顔のマリアさん、既にこいつら夫婦の様である。

「なんかめんどくさいけど私も出ないといけないみたいだし」

と陽乃さん、この人目当ての人かなりいそうだから出なかつたら暴動もんだらう。

この人の得物は細剣、レイピアのような物である。

戦闘は攻撃魔法と補助魔法を駆使して戦うオールレンジファイターだ。

剣は細いのにでかいモンスターでもやすやすと切り刻み魔法で吹き飛ばすその様は戦闘の女神と言つてふさわしくバルキリーと呼ばれている。

普段はあまりやる気はなさそうだがめちやくちや強い、多分この人が優勝しても誰も文句は言わないと思う。

「はるさんがんばって！ みんな！ がんばろー！ おー！」

と右手を突き上げるめぐり先輩、この人は回復と補助魔法が凄まじい

「……あれ？ほら！がんばろー！おー！」

「お、おー！」

みんなおらずおらずと右手を突き上げる、やはりこの人のテンションにはなかなかついていけないが、ほんわかとしていい近くにいるだけで癒される、でも戸塚とやっちゃつてんだよなあ……

他のグループはと言うと……

「葉山んところはどうすんだ？」

「俺は出ないといけないんだが他は御覧の通りさ」

やれやれといった表情の葉山

「隼人君！俺も出るわ！隼人君には負けないつしよー！」

戸部がでかい声で叫んでる、こいつ海老名さんにいいところ見せたいだけなんだろ？

当の海老名さんは

「とべつち、あんま無理しなくていいよ？」

とちよつとうんざり顔、いつもこの調子なんだろうか？

しかしめげることなくそれにこたえるように戸部は槍を振り回して

「海老名さんに俺の勝利をささげるっしよー！」

と見得を切る。

ちなみに戸部の槍は、国王から授かったもので雷の力を封印している、使用者の魔力を使用して一振りごとに電撃が走り、能力を解放すると落雷を任意に発生させられるとかなかなか物騒な代物である。

「んじや戸部はでるってことであーしはどうしようっかなー」

と三浦、悩みながら小さい火球を出し手の中でもあそぶ、三浦はメイジであるが炎の魔法に才覚があるとのことではほほ火炎魔法に特化している、おかげで炎を自由自在に操ることが出来るのである。

ちなみに持っている杖はこれも国王からの授かった物で炎の魔法を飛躍的に強化する、これを経由して魔法を放つと炎の力が数倍に増幅されるという代物。

三浦が全力を出した魔法で杖を経由させるとどうなるかは想像するだけで恐ろしい。

「んーやつぱでるし、隼人の為に邪魔な参加者を一人でも多く始末しとくしー」

「いや始末って・・・トーナメント戦だそうだから別に無理して出なくても・・・」

と葉山は困惑顔

「それな」

「だな」

いつもの相槌をうつつ大和に大岡

大和と大岡もそれぞれ国王から授かった刀身が青く光る氷の力を封じ込めた大剣と風の力を封じ込めたダガーを持つている、どちらも能力を解放すると周囲一帯を凍らせたりかまいたちを発生させたりとすさまじい力を有している。

「二人はでるの？ 私は応援だけだ」

と海老名、こちらも国王から土の力を封じた杖を授かったのだがこれが色々とまずい、プリースト職であるので回復と補助魔法で味方をサポートがメインの彼女、無論攻撃手段はないも同然なのだがこの杖の能力を使うと補助魔法に毒属性が付加されてしまうのだ。

防御魔法は触れたらただれる腐敗障壁になり、武器強化魔法を使えば切れ味アップに加えて切った際に毒素を相手にねじ込む能力が付加される。

杖の能力を使わなければ毒属性は付加されないので使用には細心の注意が必要らしい、杖の能力を全開放すると周囲一帯に毒素をまき散らすというどこぞのプロシユートの兄貴も真つ青な代物である。

尚、本体は腐女子である為ある意味お似合いともいえる。

「俺達はいいかな？ 隼人にまかせる」

と大岡

「だな、悪いが平塚先生にはかないそうにないしな」

と大和が後ろを指さす。

尚、葉山のチームは皆魔力を封じ込めた武器を所持しているのだが、葉山は自分の武器についてなんにも教えてはくれない。

「俺の剣は特別性だからね」

と言って触らせてもくれなかった。

もつともこいつの場合その辺の剣持たせてもそこそこ活躍しそうではあるが。

話を戻して平塚先生のチームの状況はというと

「天下一武道会に出れるなんて・・・感無量だ・・・この世界はどこまでも私を高ぶらせてくれる！」

空を仰いで涙している平塚先生、あのー誰も天下一武道会なんて言っていないんですけど・・・

「あたしは試合に出るよ」

と川崎沙希

「ま、たまにはあんたにいいところ見せたいしね」

と軽く俺の目の前でシャドーをする。

鋭い蹴りが宙を舞う、こいつも平塚先生と同じ格闘で戦う、一度一緒に狩に行ったことがあがるが、こいつの蹴りでゴブリンがはるかかなたまで吹っ飛ばされていた。

因みにワイルドボアもかかと落としで一撃である。

あと俺の嫁

「お、おう、でも無理すんなよ」

「まかせな、あと大志も出ると言ってるんだよね、あんた辞めるようにいつてくれない？」

そしてこいつはかなりのシスコンである

「まあ善処する」

と次は弟の川崎大志だ

「お兄さん！俺も出るっす！姉ちゃん！心配ご無用っす！」

「大志君大丈夫？」

小町が隣で不安そうにしている、おいお前小町泣かせたら許さんからな？

「おまえなんで張り切ってるんだ？」

「大志、あんたはそんなに戦ったことなんかないでしょう？怪我したらどうすんだ？」

そもそもこいつはメイジで肉弾戦は不向き、それに三浦や結衣のように高火力を持っているわけではないし、積極的にモンスターと戦っていたわけでもないのだから一般人よりもちよつとだけ強いレベルのはずだ。

「男子、三日会わざれば刮目して見よっす！大丈夫っす！こんなこともあるのかと！」

我・・・げふん、俺は準備してたっす！」

なんか微妙に特定の誰かの影響を受けている気がするんだが・・・

「アダムさんは試合用の魔法で色々カバーするとか言ってたから大丈夫なんじゃね？」
微妙に納得してない沙希だが俺がどうこう言ってもはじまらないだろ。

さて出場メンバーは決まった。

あとはアダムさんに報告か？

と思っていたら吉原さんが話しかけてきた。

「君たちは血気盛んでいいね、いやー青春だなー」

この人たちは俺達よりも前にこの世界に来ていたのだが俺たちのようにチート気味な能力は持っていない。

召喚の影響で魔力は一般人よりも高いのだが、派手なことはせず堅実に暮らしている、20代から40代ぐらいの人たちが大半であり実際に技術系で働いている人もいるため、知識量は俺たちの比ではない、実際共同浴場やら手押しポンプの井戸やら簡単な機械類を製作したりと異世界ものにありがちな現代知識でどうこうを一通りやっているのだ。

「僕たちは君たちみたいに派手に戦えないからうらやましいかな？」

「いやうらやましいって言われても俺も派手に戦うなんてできないですし」

「いやいや君たちには若さがあるじゃん！若さ若さってなんだくあきらめないことさ！ってね！」

「は？何言ってますか？」

突然歌いだしたのでちよつと驚く

「え？ギャバンしらない？蒸着！って！ほら！宇宙刑事シリーズだよ！」

「……いえ全く……」

「吉原さん、最近の子は知らないですよ？」

他の人から突っ込みを入れられて納得したのかちよつと赤くなる吉原さんだった。

俺は知らないですけど平塚先生なら知ってるかもしれないよ？

ちなみに吉原さん達、俺たちがこつちに召喚されたときについてに転送された教科書類を見て感激していた。

なんでも物理の計算式やら化学式やらすっかり忘れていて製作が停滞していたものがたくさんあるんだとか。

働いてたときは、エクセルなんかのフォームに数字入れれば勝手に計算してくれてたので式や定数なんてすっかり忘れてしまってたんだとか。

ハイテクの弊害ではあるが、この人たち産業革命でもおこすつもりなんだろうか？ともあれ出場メンバーは決まった。

エキシビジョンメンバー

比企谷

雪乃

結衣

いろは

試合出場メンバー

陽乃

葉山

戸部

三浦

川崎沙希

川崎大志

材木座

平塚

応援メンバー

小町

戸塚

めぐり

海老名

大和

大岡

マリアさん

吉原さん達

以上だ。

領主の館に戻りメンバーを伝えるときつそく対戦カードを決める準備が開始された。なんでも兵士側は申し込みが殺到しているそうだ。

「あんまやる気満々で来られても引くな」

ボソツと言うと

「君という人は本当に・・・」

と葉山に呆れられた。

第四十三話

二日ほどの準備期間を置いて試合は開始されることとなった。

ちなみに開始までの間観光してたら皆道行く人に絡まれまくる事となる。その為一人で出歩かないようにと言ったら、俺の場合常に雪乃と結衣というはと沙希がくっついてくるので、見せつけんじやねえと余計に絡まれることになった。

一体どうすればよかつたんだろう・・・

何はともあれ試合開始である。

試合は単純なトーナメント戦、全員腕自慢の兵士と組み合わせられていた。

俺たちとはというとエキビジョンマッチとして大型のモンスターと戦うことになってしまっている。

本当に大怪我したり死んだりしないのかとアダムさんに念押ししたら

「こういう闘技場は致命傷になりそうなものを自動的に検知してギリでダメージを吸収するようあちこちに強力な魔力が仕込まれているから大丈夫」

なんだそうだが、ただし致命傷の場合痛みだけは与えるようにしてるので猛烈に痛いんだそうだ。

ステージの中央に立つともものすごい歓声である、もうマジ無理、なんでこんな人目にさらされなきゃならんのだ？

「八幡？ 雰囲気にもまれてはだめよ？」

と腕組みをして仁王立ちの雪乃

「ほえーすごいなあー」

結衣は相変わらずである。

「みなさん！ わたしーがんばっちゃいますからねー！」

いろいろもいつもの調子

「さあやってまいりました！ 辺境の地よりやってきた勇者御一行と我ら精鋭との一騎打ちの時間です！」

アナウンスが流れてくる

「勇者御一行って葉山のことか？ 俺はあいつのおまけか？ まあしょうがないけどよ……」
と不満顔の比企谷

「あら？ あなた勇者様と呼ばれたかったの？ 名もなき神のくせに？」

雪乃さんなんでまだ俺の黒歴史覚えてるんですかね……

「へ？ 名もなき神ってなに？ ハッチー神なの？」

「結衣先輩、そこは先輩のデリケートなところなので触れないでおきましょう……」

と一色は憐れんだ顔で比企谷を見る

「もうやめてくれよ……穴があつたら入りたい」

しやがみ込む比企谷に雪乃が活を入れる

「八幡？一応あなたは千葉亭の店主で私たちの旦那様よ？もつとシヤキツとしなさい
！」

「現在あそこで女性たちの尻に敷かれている男が辺境の地で今一大ブームを巻き起こしている千葉亭の店長比企谷八幡！そしてそれを囲むようにいる美少女は全員彼の婚約者とのこと！いやーリア充爆発しろとはよく言つたものですね！」

またもアナウンスが流れる、周りからはブーイング

なにそれリア充爆発とかこの世界でも流行つてるの？

つてか周囲の視線が痛い、もうおうち帰りたい

「まずは前座として彼らにはモンスターと戦つてもらいます！さあモンスターの登場だ
！」

と反対側のゲートからモンスターが現れた。

「なんだあれ？オーク？」

「それにしても大きいわね……」

4 mぐらいはあろうか。

腹はかなり出て醜悪な面をしている。

そして獣の臭いがすごい。

片手には棍棒を持っている。

「今回の為に特別に捕らえてきたオークの変異体です！さて彼らの実力はいかに?!」

「なるほどな・・・んじや適当に負けて帰ろうぜ？怪我しないようになってるらしいからよっ。」

とはじめつからやる気のない比企谷

「八幡？あなた本気で言ってるの？」

「ハッチー？」

「先輩？」

「い、いや冗談に決まってるだろうが・・・」

「冗談に聞こえないから困るのよ？」

三人にすぐまれてタジタジとなる比企谷

「まずは様子見だ、いろは！」

「任せてください！」

一色が矢を放つが以外に素早く棍棒で防がれてしまう。

「いろは！速射してやつの気を引け！結衣はあいつを拘束しろ！俺と雪乃はあいつを側

面から攻める！」

と比企谷達はバラける

一色が矢を連射しているところへ結衣の魔法が放たれる

「アースバインド！」

地面を割って無数の木の根が現れオークの体を拘束する。

「よし！一気に攻める！」

「八幡！待って！」

雪乃が叫ぶと、オークはブヒーと叫びながら体を拘束していた木の根を一気に引きちぎった。

「おいマジかよ、結衣の魔法は普通より強いはずなんだが」

啞然とする比企谷へオークが棍棒を振り下ろす。

「一旦立て直すか、しかしあいつの腹出すぎだろ、材木座でもああはなってなかったぞ・・・ん？そうか、いいこと思いついた」

オークの攻撃を避けつつ一度集合することに。

「いろは！これを矢にくくりつけてあいつの顔面に打て！相談の時間を稼ぐ」

比企谷から渡された卵のような物を矢にくくりつけると一色はオークの顔面に向かって矢を放つ、当然オークはあっさりと矢を受け止めてしまうのだから

「グエツホ！ギヤツホ！」

突然咳き込み攻撃どころではなくなる、棍棒を振り回してその場で暴れてる模様

「アレなんだったんですか？」

「厨房にあったコシヨウやカラシなんかを卵のからに詰め込んだものだ、うちが食堂だから出来る芸当だな」

「貴方は本当に……」

雪乃はまたもや呆れ顔、そんな雪乃をほっといて話を続ける。

「ちよつといい考えが思い付いた、結衣、落とし穴掘れるか？鋭角の円錐形の奴だ」

「とんがりコーンみたいな感じ？ウーン土木工事した時色んな穴掘ったからできると思
うけど……」

「よし、あいつの胴回りより少し広い感じで出来るだけ深い奴頼むわ、落とし穴にしてあ
いつを嵌め込む、内側には氷張って滑らせるようにしてくれ」

「八幡？どんな作戦かしら？」

比企谷は作戦の概要を話す。

「またあなたは……」

「ハッチーらしいや」

「今回はダメージ食らっても致命傷にはならんそうだからな、ルールの穴をついた作戦

だ」

「先輩！奴が復活したみたいですよ！」

見るとオークは鼻をならし目を真っ赤にし吠えている、怒り狂ってるようだ。

「この作戦、俺にかける魔法のスピードというはの射撃の正確さが命だ、頼むわ」

全員その場からバツと離れる。

「ウーンあのおなかより少しだけ大きいってこんぐらいかなあ？」

由比ヶ浜は走りながら念じるとはオークの前に光る円が描かれる

「んで深さは 深く、鋭角に・・・」

ズンと音がして砂ぼこりが舞う、周りからは見えないが地面の皮一枚残して下には深

い穴が出来た模様

「んで氷を張つてと・・・」

またも由比ヶ浜が念じると冷気が地面から立ち上がる、どうやら完成したようだ。

「ハッチー出来たよ！」

「よし！結衣は所定の位置に移動だ！あとはいろは！頼んだ！」

落とし穴を挟んでオークと対峙する一色

「鬼さーんこちらー！」

と言いながらオークに矢を放つとそのまま逃げようとするのだが転んでしまう

「きゃっ」

それを好機と見たのかオークはブヒーと叫びながらいろはに襲い掛かるがズン

という音とともに穴にはまり込んでしまった。

「よし！いろは成功だ！」

一色が転んだと見せかけ襲い掛かってきたオークを落とし穴に落とす作戦である。

落とし穴は内側に氷が張っているため足が滑って抜け出せない、しかも円錐状になっているためオークの出っ張った腹がはまり込み暴れば暴れるほど中に潜り込んでしまう状態だ。

「あとは奴の武器を封じる、雪乃、結衣、頼む」

と比企谷は暴れるオークの目の前に走り出す。

ブヒーと叫び上半身だけで暴れていたオークはすぐそばに来た比企谷を見つけると頭上に棍棒を振り下ろす。

「雪乃！」

「八幡！耐えて！」

雪乃は比企谷へ筋力強化魔法を使い比企谷の腕力を飛躍的にアップさせる。

ゴン！と鈍い音がした、比企谷の頭に棍棒が振り下ろされた音のように聞こえる。

しかし

「つくーいつてー」

棍棒が当たりそうになった直後、比企谷はさらに奥へと走りオークの右手首のところまで走りこんでいた、おかげでオークの拳が頭に当たってしまったが、ダガーとショートソードで手首を挟み込むように突き刺した為威力は大分殺されたようである。

筋力強化をしているためダガーとショートソードは手首に完全に突き刺さっており全く抜けるような状態では無くなっていた。

「試合じゃなかったら即死してたな、でも確かに猛烈に痛い！結衣！頼むー」

「ハッチー！ごめんね！アースバインド！」

無数の木の根が比企谷とオークの右手にまとわりつく、オークはなんとか振り払おうとするが既に大地にがっちり固定されている比企谷によって手首が突き刺されているので全く右腕を動かすことが出来ない。

「とどめだ！雪乃！結衣！いろは！」

「はーい！」

一色はオークの両目にピンポイントで矢を弓なりになるよう複数本放つ、やや上方から目を狙って飛んでくるので当然オークは、矢を確認するため一瞬少し上を向き残った左手で目を覆う。

おかげで喉元はがら空きだ。

「結衣さんお願い！」

「ゆきのん！ウインドショット！」

妖刀を叩き折ったあの作戦と同じである。

複数の補助魔法で強化された雪乃は高速で射出される

「はあー！」

まさに鎧袖一触、掛け声とズバツという音とともにオークの首は宙を舞う

ズサツと雪乃が地面に降り立ち剣についたオークのどす黒い血を振り払うと観客席から一気に歓声が沸く

「すげー!!さすが千葉亭！」

「雪乃さんかっこいい！」

「結衣さんナイスアシスト！」

「いろはさん素敵です！」

女性陣をほめたたえる歓声でいっぱいである。

一方比企谷はと言うと・・・

「おーい、ちよつと終わったんなら拘束切ってくんない？なんか全然ほどけないんですけど？あとダガーも剣も全く抜けねえ、誰か手伝ってー」

誰の目にも触れることがないまま、モンスターの残骸を片付ける係の人に一緒に持つていかれる始末であった。

第四十四話

一回戦目第一試合

「大志、本当に大丈夫なのか？」

「お兄さん！俺は大丈夫です！小町さんに勝利を捧げるです！」

とまあ誰かと同じことを言っていてやがる。

大志はそのまま闘技場中央のステージへ、ちなみに先ほど穴をあけたりオークが叩き割ったりしていたところは綺麗に直っていた。石畳を交換した模様。

「大志！無理はしないで！」

「大志くーん頑張つてー！」

紗希と小町が叫ぶ。

「小町、大志と本当になにやったんだ？」

「お兄ちゃん？今それ聞くの？ポイント低いよ？」

冷たい視線を食らってしまった。

ステージを見ると対戦相手が出てくる。

応援している人の声を聞くとどうやら相手は新兵のようだ、緊張しているのかきこち

ない手つきで剣を振っている。

二人とも中央に向かい合って立つがどう見ても大志の方が不利に見える。

「あいつ本当に大丈夫なのか？」

「まあ同じセリフをつぶやいてしまう

「八幡よ！心配ご無用なり！」

次の試合に出るはずの材木座が話しかけてくる。

「刮目してみよ！大志！今こそ新しい力を示すのだ！」

材木座が叫ぶと

「師匠！わかったっす！」

と大志がマントをがばつと翻すと腰には剣が

「あれ？あいついつの間にかファイターの訓練してたんだ？」

「訓練所には行っておらぬよ？我が秘密裏に特訓していたのだ」

え？マジで？そんなんでやれんのか？

「師匠！見ててください！速攻で決めるっす！」

「異世界の連中とはいえメイジが付け焼刃の剣技でファイターにかなうわけないだろ

！」

相手の新兵はバカにされたと思ったのかイラついているようだ。

「くらえー！」

新兵君一氣に間合いを詰めると大志の頭上に剣を振り下ろす

「豊穰なる幻の大地・・・プラスチックサンドロック！」

大志が叫ぶと足元の石畳が砕け砂ぼこりとなってあたり一帯を覆う

「おい、今の・・・」

大変聞き覚えのある言葉である

「しっ、八幡黙ってみておれ」

砂ぼこりはすぐ晴れたが大志がいない

「あれ？あいつどこにいった？」

「空駆けし破壊神！メテオストライク！」

叫びながら大志が空から落っこちてきた。

新兵君は避けようと上を向いてあつちをふらふらこつちをふらふらとしている。

まああんな攻撃する奴なんざいままで見たことないだろ。

そのうち新兵君は足を取られて転んでしまった。

「あーやつちまったな」

そこに落下してくる大志、勝負はあっさり決まった。

「魔法を地面にぶっ放して煙幕を張り自分は空中へ、あとは落下しての急降下攻撃よ！

落ちる時も風の魔法を使い軌道修正して自らを質量爆弾とし相手の頭に渾身の一撃を叩きこむ！相手は死ぬ！どうだ八幡！」

「どうだって、相手が全力で逃げたらこれ意味ないか？しかもあれテニス時のやつだろ」

「そうね、しかも外したら立て直せないわ、それに相手が複数だったら囲まれてまうわね」

と雪乃も援護射撃

「あんたうちの大志に何教えてんだ！」

「い、いやだって大志は小町殿を守りたいからと・・・ぐへえ」

沙希に首をつかまれて締めあげられる材木座

「まあ、ともかくあいつは一回戦突破だな、ほら次はお前じゃないか？」

一回戦目第二試合

材木座と対決するのはこちらは精鋭っぽい感じの兵士である。

ちなみに顔が結構いい、葉山みたいなイケメンであるため女性からの黄色い声援が凄いい、ちなみに材木座の方は冒険者から熱いエールが送られている、どうも奴は冒険者の間では有名なようだ、全員むさくするしい野郎ばかりである、皆一様に剣豪剣豪と熱いコールを送っている。

ラツパが鳴り試合開始。

「悪いが色物に負ける気はしないんでね、俺の目標は葉山隼人さ」
イケメン兵士が剣を向けて言ってくるが材木座はどこ吹く風で

「義輝様！がんばってくださいーい！」

マリアさんからの熱い声援に軽く手を挙げて返している

「君！試合中によそ見とは！聞いているの」「プロウクンマグナム！」

イケメンが怒鳴りながら近づいてきた所に材木座の手甲が発射される。

「ぐはあ！」

そのまま場外に吹っ飛ばされるイケメン

「勝者！材木座義輝！」

あっさり勝負はついてしまった。

一回戦目第三試合

次は平塚先生の出番である。

相手は山のフドウやハート様を連想させるような大男だ。

「へっへっへ、賭けをしようじゃないか、勝った方が負けたほうに何でも命令できる権利つてのはどうだ？」

「・・・何でもか・・・いいだろう」

「おいお前ら！何でも言うこと聞いてくれるってよ！今晚は寝れねえな！」
相手陣営は大盛り上がりである

「一つ言っておくがあんた格闘で戦うんだってな？俺の体に格闘攻撃は効かないぜ？」
あいつなんか相手どつかで聞いたようなセリフを言っているぞ？

「ほー！あちゃあー！」

平塚先生、これまたどこかで聞いたセリフで相手の腹に一撃を加えるが

「なにー！」

拳が腹にめり込み衝撃は吸収されてしまう

「ふふふ、おまえの拳もこの分厚い肉壁にことごとく吸収されてしまうというわけだ、
おーっと今更賭けは無しなんていうなよな？みんな楽しみにしてんだからよお」

下卑た笑いをする大男である

「・・・ほう・・・」

平塚先生余裕の表情だ、そりやそうだよなあ・・・

「かつて似たようなことを言う男がいたが貴様と違ってもっと上品だったぞ！」

そう言うと

「あーたたたたたた！」

平塚先生は男の腹に蹴りの連撃を繰り返す

「無駄なこと……なに！腹の肉が！」

蹴りによって腹の肉がより分けられる。

「北斗柔破斬！」

そして分けられた肉の隙間に渾身の一撃を叩きこんだ。

「ぐはあ！」

「北斗神拳の前には肉の壁なんぞ無きに等しい、経絡秘孔の一つをついた、お前もう死んでいる……」

と踵を返す平塚先生

「えーおい！俺死ぬのか！ただの試合だろこれ！異世界の連中には常識が通じないのかよーいやだ！死にたくねえー」

と大男は場外に走って逃げて行った。

「救えんな……あの男は民の事を第一に考える武人であつたというのに……」

と天を仰ぐ平塚先生だが、それって漫画のキャラですよね？

いわゆるハート様ですよね？

あと経絡秘孔とか完全に創作ですよね？あの人が爆発してないですよね？

色々突っ込みどころが満載であるがとにかく平塚先生も一回戦勝ち抜きである。

因みに大男の方はやはり爆発はしてなかった。

一回戦目第四試合

ハイ！みんな！私頑張るからねー

相変わらずの陽乃さんである。

観客席からは

「HA・RU・NO！HA・RU・NO！」

の大合唱だ。

対戦する相手はこちらも女性兵士、兵士というよりは軍人といった言葉が似合いそうである。

しかも結構強そう

「葉山殿と共闘して魔女を倒してくれたのには礼を言う、魅了されていたとはいえ我らは戦うべき相手を間違っていた」

やけに恐縮気味だ。

「まーあれは成り行きでねー」

陽乃さんは言葉を濁す、そりゃ、残念！魔女なんてはじめからいなくて実は妖刀に操られていた自分でした！

なんて言ったら手のひらくるりの火炙りになっても文句言えない立場だしな。

国王陛下はその辺上手いことごまかしてくれてるみたいだが

「それはさておきだ、実は私は冒険者というのを信用していない、国家に忠誠を尽くすわけでもなく、ただその日暮し、明日の100よりは今日の50を取る連中ばかりだ、故に陽乃殿、あなたの事も信用していない、所詮噂なぞ噂に過ぎんしな」

「・・・へえ」

この人ハッキリ言い過ぎ！ほら！陽乃さん完全戦闘モード入ってるじゃんか！

「ただ葉山殿は違う、彼には気品がある、国王からの信頼も厚い、彼を称える言葉ならいくらでも出てくる」

「はあ、あんた隼人にほれてんだ？」

呆れ顔の陽乃さん

「な！何をいうか！軍人の私が冒険者に惚れるなぞ・・・」

「あーハイハイ、同じ惚れるならその比企谷くんにしたほうが面白いと思うけど？」

「ハツたかが宿屋の主のどこが？」

「ふーん・・・ところで試合はまだ始まらないのかな？」

陽乃さんちよつとだけ苛ついてる様だ、俺は別にそんなのいいんで・・・つてか雪乃達もお怒りモード入ってるし！

「姉さん！・・・お願いね？」

「フツふーん！お姉ちゃんにまつかせなさい！」

「ほう、妹？あれは確か？なるほどそうか！それなら仕方ないな！」

高笑いをする女軍人、ただその余裕もすぐ終わる。

試合開始のラッパが鳴らされた途端

カン！

と音がしたかと思うと軍人の手から剣が吹き飛ばされ無くなっていった。

同時に目の前から陽乃が消える

「アレ？」

と軍人が振り返ると

「遅い」

喉元に剣を突きつける陽乃がいた

「いつの間に……」

軍人が驚いてると

「探しものはこれ？」

左手を横に広げるとちようどそこに吹き飛ばした軍人の剣が落下してきた。

それを陽乃は簡単にキャッチする。

「ちよつとおしやべりが過ぎたみたいね？軍人さんっておしやべりで食べてるの？」

「くっ！」

「まだやる？その場合本当に容赦しないけど？」

「わかった、審判！私の負けだ・・・」

試合終了の合図がなる。

開始から十数秒、材木座についてタイムは二位である。

ってか戦ってる時間より喋ってる時間のほうが長かったぞこの二人

「比企谷くん！勝ったよー！後でござ褒美ちようだいねー！」

「姉さん！そのへんにして頂戴！」

「ありや怒られちゃった、比企谷くん慰めてー？」

ちよつと勘弁してくれませんかね・・・

第四十五話

一回戦目第五試合

「八幡！見ていてくれると嬉しい．．．な．．．」

沙希の出番だ、格闘を駆使する彼女は平塚先生みたいなトンでも必殺技をもっているわけでもないが強さは折り紙付きだ。

ただ人間相手に戦った事は無いはず、少し心配ではある。

「大丈夫だ、ちゃんと見ている、やばくなったらギブアップしろよ？」

俺の言葉に軽く手を振って沙希はステージに立つ

「へえー俺の相手はこれまた美人だな．．．なあ確かあんたも千葉亭の店主の婚約者だっけ？あんな何考えてるかわからねえ優男より俺と付き合えよ」

「．．．控えめに言っただけアンタ死んだほうがいいよ？」

川崎は相手の男をにらみつける

「オー怖い、そーいや試合中は体のどこ触っても仕方ないよなあ？何しろ真剣勝負だし」と男は舐め回すような視線を送る。

因みにこいつも格闘家の模様

試合開始のラッパが鳴らされる

「んじやゲスなあんたのこ希望に答えるでしょうか？」

川崎はファイティングポーズを取る

「そりや楽しみだ、それよりそんなに睨むなよ、きれいな顔が台無しだぜ？」

バカにしたような男に向かって、ダッシュする川崎、そのまま側転や前方回転を繰り返すと宙を飛ぶ

「なんだ？」

あまりの軽業に男は一瞬ついていけなくなるがその一瞬が命取りだった

ドスンと男は両肩に重量を感じ視界が遮られる

「ほら、好きなかだけ触りな」

宙を飛んだ川崎は男の両肩に着地、ちょうど肩車の逆の形になり男の顔面を正面からふとももで挟み込んでる状態だ。

「ムグ？」

「堪能した？んじやサヨナラ」

男の顔を挟んだまま川崎はぐるっと男の背後に体を回転させそのまま体を弓なりにしならせると男の頭を後頭部から地面に叩きつけた。

「あれはフランケンシュタイナー！」

材木座が叫ぶ

「マジかよ、ゲームだけの技じゃなかったんだ」

驚く俺に平塚先生が解説してくれた。

「比企谷、あれは実際にプロレス技として存在するものだ、ただああやって挟んでから回転させ後頭部からつてのは無いな、脊髄が普通にやられるし下手したら死んでしまうからな！」

「もしかしてあれ教えたのは先生ですか？」

「いや？すでに知っていたようだ、ただ川崎はゲームやアニメには疎くてなあ・・・」

なんで寂しそうなんですかね、つてか死んでしまうつて不味くないか？

「しかしあれを出すということは川崎め、相当頭にきたようだな」

一人で納得している平塚先生

試合の方はというと

「イテテ、試合じゃなかったら死んでたぞ！」

男が後頭部をさすりながら起き上がろうと片膝を立てたその時

「死んどけば？」

少し距離を取っていた川崎はダッシュすると男の立てている片膝を踏み台にして顔面に膝蹴りを打ち込む

「があー！」

男はそのままふつとばされ起き上がっては来なかった。

「あれぞ必殺シャイニングウイザード！相手の片膝を踏み台にすることにより至近距離でより勢いをつけダメージを与える事ができるのだ！」

平塚先生が叫ぶ

「シャイニングウイザード・・・閃光の・・・うむ！閃光の魔術師であるな！」

それを聞いた審判

「勝者！閃光の魔術師！川崎沙希！」

なんか二つ名が勝手につけられてた

観客席も騒然となっている

「魔術師？格闘の？聞いたことない・・・」

「でも今までの戦いを見ると・・・」

あーこれから沙希の奴魔術師扱いだわ

比企谷はそう思い川崎の方を見ると

顔を赤くしていますそそくさと引っ込んでいった。

一回戦目第六試合

三浦の相手は同じく女メイジ兵、しかし得意としているのは水系統の魔法のようだ。

「相談なんだけどあなたに勝てば代わりに私が葉山様の付き人に成るって言うのはどう？」

「はあ？」

「葉山様には冒険者じゃなくてワタシのような正式な兵士がつくべきだと思うの」

「・・・好きにすれば？」

「あちやー優美子めっちゃ怒ってるよ」

海老名さんが困った顔になっている

「ああなるとえげつない手を使ってでも勝ちにいつちやうからちよつとね・・・？」

「えげつないってマジかよこえーよ！」

ステージの上では試合が始まっている。

「アイスニードル！」

ぶつといつららが十数本一気に三浦に襲いかかった。

「ファイアーウォール!!」

しかし瞬時に炎の壁が生成されつららは全て蒸発してしまった。

「まだまだ！アイスブラスト！」

三浦の立っている地面が氷結、つららが立ち上る

「あれあれ？逃げてばかりじゃないの？やっぱり葉山様にふさわしいのは私ね！」

「調子こくのも今のうちだし！」

三浦は腰につけていた鞭を取り出すと

「フレイルムウィップ！」

鞭は炎の鞭となり相手に襲いかかる

「アイスウォール！」

相手は氷の防御壁を生成するがこれを蒸発させ貫通相手の体に炎の鞭が巻き付いた。

「へーやるじゃん、でもこっからどうすんの？これ試合だから私が燃えたりしないしそもそも氷張ってるから熱くもないし？」

女メイジは巻つかれる直前に体に氷を張っていたので炎の鞭は直接体に触れてない、その為余裕の表情だ。

「あんさーなんでわざわざ鞭に火をつけて巻き付かせてると思う？」

三浦はそれににやつとした笑みを返す、炎の鞭からは煙が立ち上り始めた

「この鞭特別製でちよつとした毒を混ぜ込んでるんだし、そーいやあんたら火事で人が死ぬ本当の死因とか知らないっしょ？」

炎の鞭から立ち上る煙はどんどん激しくなる

「ゲッホゲッホ！なによ！前が見えないし息苦しく、ゲッホゲッホ！」

「火事つてさ、死因の多くは焼け死ぬんじゃないかって煙による窒息死が大半なんだって、う

ちらは避難訓練とかで常識だけであんたらは知らないっしょ？それでこの鞭、毒混ぜ込んでるおかげで燃やすとちよつとヤバイ煙が出るようにしてんだよねー、お陰で使い捨てになつちやうけどさ、そういえば試合って怪我はしないけど窒息とかどうなん？モンスターの首に巻き付けると大概即ぶつ倒れるんだけど？」

「まさか・・・息が！」

「ほらほら早くギブアップしないとあんた死ぬよ？」

「苦しい！た、たすけて！ギ、ギブアップ！」

「勝者！三浦優美子！」

審判が叫ぶと炎と煙は一気に消えた。

女メイジ兵は医療班に担架に乗せられて運ばれて行ったようだ。

「さすが獄炎の女王、ひくわー」

これにはさしもの材木座もドン引きである。

「優美子ちよつとえげつないかな・・・」

結衣もこれには苦笑い

「まー優美子は隼人君の為ならどんな手でも使うって言ったからね・・・」

感慨深そうにうなづく海老名さん

「それな」

「だな」

大和と大岡は相変わらずである

お前らそればっかかよ！三浦マジこえーよ！

一回戦目第七試合

戸部の出番になる、こいつの場合は槍の力なのか電撃を纏った瞬間移動が出来るらしく素早い動きで相手を翻弄する、しかし相手も健闘し、なかなか致命的な一撃は与えられない模様

「こうなったら、覚悟するっしよー！」

と戸部はジャンプ

「ばかかお前」

相手の兵士はそのままダッシュして距離をとったのだが

「サンダーブレイク！」

急降下した戸部が叫びながら地面に槍を突き立てると周りに落雷が発生

「どあー！」

落雷の一撃を食らい兵士の武器は碎けぶっ飛んでしまった。

「よゆーっしよー！」

と戸部が決めポーズをしていると

「くそっ！ぶざけやがって！」

相手が最後に苦し紛れにナイフを投げてきた。

「危ないっしょ」

戸部はこれを足で受け止め軽くリフティングして蹴り戻す。

流石サッカー部の風格というものだろうか

一回戦目 第八試合

いよいよ葉山の出番である。

相手兵士達の団長さんらしい、厳ついおっさんが出てきた。

「よろしく願います」

「こちらこそ、私はこの兵団の団長を勤めてましてな？噂の葉山殿と手合わせできる
とは願ったり叶ったりです」

両者礼儀正しく一礼をすると開始のラッパが鳴り試合開始である。

ただ試合内容は驚くほど普通だ。

普通に剣で切り結んでいる。

「なんかおかしくねえか？お前らみたいに武器の力使えば楽勝なんじゃねえの？」

と疑問を呈す比企谷だったが三浦がそれに答える

「隼人はあんまり剣の力を使わないんだし、どんな条件でも戦えるようにしてるって言った、それにあーしらが戦った相手三下ばかりだったけど、隼人の相手は団長さん、相手のメンツも考えてんだし」

「マジかよ、どんだけお人好しなんだあいつ・・・」

結局葉山が勝ってた。

傍から見ると団長さんも善戦していたように見えるのだが・・・

あそこまで追い詰めるとは流石団長といった声も聞こえるし、試合に負けたけど勝負に勝った感が凄い。

「お前、どういいうつもりなんだ？」

「君の真似さ」

葉山はさらっと言うとそのまま休憩しに戻っていった。

第四十六話

二回戦目 第一試合

「結局全員勝ち残ったね、みんなすごいなあ」

「はるさんも平塚先生もものすごく強かったね」

戸塚とめぐり先輩が話している

この二人が話をしているのを見るとほんわかしてくる、癒し系なのだが実はアレな関係なんだよなあ・・・

トーナメント戦二回戦目全員勝ち残ったため身内で対決になるわけだ、第一試合は大志と材木座である。

大志は先ほど派手な大技を決めたので注目されているようだ、材木座は相変わらずである。

「師匠！覚悟するっす！」

「まいられよ」

試合開始のラッパが鳴ると同時に大志が材木座にとびかかる

「ふむ、しかし踏み込みが浅いのう」

材木座は大志の攻撃を簡単に払う。

「もう一度っす！」

なおも飛び掛かる大志だがそのたびに材木座の手甲で簡単にいなされてしまう。

「つく！アイスニードル！」

2, 3本の少し太めのつららが大志の回りに生成され材木座に向かって飛んでいく
「大志、おぬしの魔力では魔法と同時に攻撃せぬと意味はないぞ」

と材木座は飛んできたつららを簡単にキャッチして握りつぶしてしまった。

「あいつさつきから自慢の魔法使っていないな」

「使うまでもないということかしら・・・」

実際材木座は自分からは全く攻撃していない、大志の攻撃を防いでいるだけだ。

「ふむ、なかなか強くなったようだな、だがまだまだ、あとは我に任せるがよい」

「負けないっす！サンダーボルト！」

大志は電撃を放つと同時に材木座にとびかかる

「その意気やよし！プロテクトシールド！」

「うわ！」

材木座が展開した防御壁に大志が激突、すかさず材木座は大志の手から剣を奪い取る

「精進いたせ」

「・・・負けたっす・・・」

試合終了の合図が鳴る

「なんかあいつの風格が半端ないのだが」

「中二が中二じゃなくなっちゃってるよ・・・」

由比ヶ浜も啞然としている、小町はほっとしているようだ。

妄言も実現させたら中二病ではなくてそれは既に事実だしな。

本当にあいつどうなっちゃうんだ？

二回戦目 第二試合

「この試合がある意味一番興味深いのだな」

「そうね、姉さんも平塚先生もどちらも実力者ですものね」

ステージの上では腕組みをしている平塚先生と剣の柄に手をかけ、けだるげに立っている陽乃さんが向かい合っている。

両者とも口は笑っているようだが目が全く笑っていない、殺気がここまで伝わってくる。

しかいそんな殺気を吹き飛ばすように観客席は大盛り上がりである

「HA・RU・NO! HA・RU・NO!」

「SHI・ZU・KA! SHI・ZU・KA!」

会場は二つに割れて応援合戦の様相を呈している。

「まさか静ちゃんとか戦うことになるとはねえ〜」

「先生をつけるバカ者が・・・」

「もう私の先生じゃないもんね」

「ふっ、では再教育してやろうか」

平塚先生は重心を落とすと足を広げて半身になり腕を構える。

陽乃さんも細剣を抜くと正面に構える

試合開始のラッパが鳴ると同時に平塚先生は陽乃にとびかかる

「衝撃のファーストブリッド！」

そのまま陽乃に向かって拳を繰り出す

「ちよつと静ちゃん本気!？」

陽乃は慌てて飛んで避けるがものすごい衝撃とともに地面には大穴があく

「本気も本気、陽乃！お前が学校にいた時はずいぶんと苦労をさせてもらったからなあ

！」

「それってもう時効じゃない？」

陽乃は補助魔法も使える為身体能力をアップさせ平塚先生にとびかかり剣を繰り出す。

スピードが半端ない為瞬間移動したようにしか見えない。
「ふん」

一瞬で目の前に現れた陽乃に驚くことなく繰り出された剣を半身になって躲すと膝と肘に剣を挟み込んで叩き折ってしまった。

「うっそ……この剣高かったのに……」

びつくりする陽乃

「陽乃、なかなかやるな？ さすが優秀なだけはある、だがお前は優等生ではなかったからなあ、学校にいた時お前の後始末にどれだけ私が苦労させられたか知らんだろう？ 一度本気でお前の頭にげんこつを食らわせたかったのだ、覚悟しろ」

「ちよつと静ちゃん？ いやーん……なんてね？」

折れた剣を投げ捨てるとそのまま平塚先生の顔面にハイキックを放つ陽乃

「剣だけだと思った？ 残念！ 私格闘も得意なんだ！」

「お前という奴は本当に……はあ……」

ハイキックをバックステップで躲すと平塚先生はため息をつく

陽乃のしなやかな体から次々と蹴りや拳が連続で平塚先生を襲ってくる。

息つく暇もない連撃に平塚先生は防戦一方だ

「陽乃さんすげえな」

「そうね・・・でも何か違和感感じないかしら？」

呆然と見ている比企谷だったが雪乃が違和感を感じているようだ。

「そういうえば必殺技をほとんど使っていないな、陽乃さんも攻撃魔法全く使っていない」

「二人ともどういいうつもりかしら？」

「静ちゃんどうしたのかな？拳が止まっているけど？」

「・・・もう満足か？」

「は？」

「もう満足かと聞いているのだ陽乃！」

と平塚先生はバックステップで飛びずさるとそのまま陽乃の回りを軽いフットワークで回り始める

ポンポンとんで陽乃の回りを翻弄する平塚先生

「ちよつちよつと静ちゃん？」

あまりにも早いフットワークに陽乃もその場でくるくると回ることになる。

「陸奥圓明流奥義！龍破！」

平塚先生はフットワークを駆使し陽乃の死角に回り込むと一瞬逆立ち状態になり両足で陽乃の頭を挟み込もうとする

「ちよつと！あぶな・・・」

すんでの所で首をそらし回避する陽乃、空振りした足は陽乃の首元で激しく交差することになったがその直後

「つぐはあ!!!」

陽乃の首に鋭い痛みが走る

「ゲッホゲッホ」

陽乃はそのまま倒れて咳き込んでしまった。

「これで私の勝ちだな、あまり人を舐めて調子に乗らないことだ」

陽乃の頭に一発げんこつを食らわせる平塚先生

「勝者！平塚静！」

試合終了の合図がかかると

「SHI・ZU・KA!SHI・ZU・KA!」

の大合唱で会場は揺れる

「一体何が起きたのかしら?」

見ているこっちは何が起きてたのか全く分からない

「陽乃さんは先生の足技避けてましたよね・・・でも直後に喉を抑えて倒れてしまったみたいですが?」

ハンターの一色は目がいいので細部まで観察できていたようだ。

「ほむん！アレがうわさに聞く陸奥圓明流奥義、龍破であるな」

材木座がしたり顔で話しかけてきたので解説を求めることにした

「知っているのか雷電！」

「うむ、あれは相手の懐に飛び込み高速で足を交差させる技よ！今の陽乃殿のように回避しても交差したときに発生する真空破によって喉に深いダメージがいく幻の技である！今回は試合なので陽乃殿の首は切れなかったがダメージ自体は入ったようだな」

マジかよ！かわしてもダメージいくとかえぐすぎんぞ

ステージを見ると平塚先生と陽乃さんが抱き合っている

「もしかしたら姉さんが魔法をほとんど使わなかったのって先生と本気で殴り合いたかったからかしら？」

「拳で語り合うつてやつ？あの人がそんなことするかね？」

「姉さんはいつも何考えてるかわからないけどきつと今回はそうよ・・・」

平塚先生は陽乃さんに肩を貸しながら観客席に手を振り退場をしている。

「女の友情つてやつかねえ・・・」

二人を見ながらぼそつとつぶやく比企谷だった

第四十七話

二回戦目第三試合

沙希vs三浦の試合、ステージの上では二人がにらみあっている。

たださっきの陽乃さんと平塚先生と違うのは二人とも全く笑っていない、マジモードなところだ。

「あの二人仲悪いのか？」

「ウーン、むしろ二人一緒にいるところ見たこと無いかな？優美子もサキサキもこっちに来てからも一緒になったことないし？でも私がサキサキと喋っていると優美子はちよつとだけ不機嫌になってたかも？」

と海老名さん、この人一応二人と仲良くしているしな、単に接点がないからなのか？ステージの上では二人が会話をしている。

「あのさ、正直に言うとおたし学校にいたときからあんたのこと気に入らなかつたんだけど」

「はあ？それあーしの台詞なんだし？一人でクールぶって、一匹狼でも気取ってるの？海老名が気を使って話しかけないとあんたポツチのままだったんじゃない？」

「は？あんたのそういうところが気に入くわないんだよね、自分の価値観を人に押し付けてばつかで本当に傍から聞いているとイライラする！」

「あ？」

「は？」

二人ともお互いメンチを切りあっている

「あのお、試合開始しても・・・」

ほら審判も困ってるじゃんか、お願い！仲良くして！

比企谷の願いもむなしく

「勝手にすれば？」

二人とも全く目を反らさず審判を威圧

試合開始のラッパがなるが二人は全く動かない

「こえーよまるでヤンキーじゃねえか」

「でも片方は貴方の婚約者よ？」

雪乃からの鋭い突っ込み、知ってるよ！でも怖すぎなんですけど！

二人とも全く動かないため次第にざわつきはじめる観客席

「もうあのままやめさせようぜ」

と比企谷が呟いた辺りて二人は動き出した。

唐突に川崎はノーモーションからのハイキックを繰り出す。

「うっ！」

避けられず吹き飛ぶ三浦

「は！威勢がいいのは口だけ？」

挑発する川崎の言葉にブチンときたのか

「へえ……」

手には燃え盛る炎、それがだんだん細くなり鋭くどがった炎となる

「あんたなかなかやるし！ファイアーアロー！」

どう見ても矢ではなく槍ぐらいのサイズになった炎は川崎に向かって飛んでいく

「あまいね！」

川崎は回し蹴りにてこれを粉碎、そのまま殴りかかろうとする

「ハードファイアー！」

しかし、三浦の足元から炎が噴出したかと思うと一瞬で離れたところに移動した。

「炎を極めると何でもできるんだよね〜」

とニヤつく三浦

「逃げるしか能がないの？は！そうやってあの男に守ってもらってんだ？」

「はあ？あんたこそヒキオがいなかったら今頃一人で討伐に行つてモンスターに食われ

たしー！」

両者とも怒りは最高潮に達している

「サラマンダークロー！」

三浦の手が真つ赤な炎に包まれると炎がだんだん鋭くどがった爪の形になる

「くらいな！」

ハードファイアを唱え突つ込んでくる三浦、川崎はよけきれず爪の一撃を食らつてしまふ

「グハツ!!」

吹き飛ばされる川崎

「猛烈に痛いっしょ？これ食らうと大体のモンスターは胴体ちぎれるんだけどね」

よろよろと立ち上がる川崎の顔をつかむ三浦

「わりーけどあーし、隼人の邪魔する奴を排除しないといけないし、とどめ刺させてもらうし」

川崎を掴んでいる手の炎はさらに燃え盛る

「もう力ないっしょ？負け認めるし」

よろよろと拳を出す川崎、拳は三浦の腹にポスンと当たる

「それで？ほんと負けず嫌いってのはこまるし」

とため息をつく三浦だが

「お互い様でしょ？」

川崎はニヤつと笑う、それを本能的に危険と察した三浦は

「赤龍波!!」

腕にまとつた炎が龍の形になり爆発を起こす、しかし爆発の直前

「虎砲!!」

魔力によってブーストされた拳は至近距離にも関わらず三浦の腹に勢いよくねじ込まれる

「グハア！」

「ガハア！」

お互いの渾身の一撃をくらい両者とも場外まで吹き飛ばされてしまった。

「優美子！」

葉山が駆け寄る

「沙希！」

比企谷は観客席から飛び降りると川崎の元へと走り出す

「大丈夫か！」

「あたしは大丈夫・・・勝負は?・・・」

「気にすんな、ともかく医務室だ」

比企谷は川崎を抱き上げると医務室へ運ぶ

葉山も三浦を抱き上げて医務室へと運んだ

因みに勝負は両者とも同時に場外となった為勝者なしの引き分けとなる。

医務室では目を覚ました三浦と川崎が第二ラウンドを始めないように強制的に眠らせ監視が付いたとか。

二回戦目第四試合

葉山と戸部の対決である。

両者とも女性ファンが多く会場は黄色い声援で埋め尽くされている。

ちなみに男どもは面白くない顔をしている者、どっちも死ぬと思っている者、早く終わんねーかなーと思っている者などばかりであった。

「すげえ歓声だな」

「そりやそうだよ、隼人君はどこ行っても人気者だからね」

と海老名さん

「まー隼人は一応勇者様扱いだからね？ね！真の勇者様？」

と陽乃さんが顔を近づけてくる、近い！近いですよ！

「姉さん？」

うわ！こつちも怖い！

「ハッチー？なんでゆきのんから逃げてるの？駄目だよ？」

お前もなんか怖い！

「あはは、ここでは八幡が一番人気者だね」

戸塚、もうお前だけでいいよ・・・

「当然であろう！なにしろ我らが主みたいなものであるからな！」

「わたくしの主は義輝様だけですわ」

「うむマリア殿、そういうことはなんか照れ臭いし分かっているから言わずともよいぞ？」

「そんな・・・言わせてください・・・」

おいこいつらなんかイチャイチャ始めやがったぞ？

そういうのは帰ってからやってくれませんかね・・・

比企谷達がワイワイやっている中、試合は開始される。

「戸部、少しだけ力を使わせてもらおうよ？」

「全力で来てもいいっしょ！」

戸部の槍に電撃が走り瞬間的にジャンプをする戸部

「隼人君覚悟するっしょ！」

雷をまとい急降下する

「・・・対人戦でワンパターンの攻撃は辞めたほうがいいぞ」

葉山は落下してくる戸部を盾であっさりいなしてしまふ

「つくー流石つしよ！でもまだまだ！」

飛び掛かる戸部をまたも盾でいなしてしまふ。

「ちよつと！みなさん！ほら！葉山先輩と戸部先輩の対戦はじまってますよー」

と一色が陽乃さんや雪乃にいろいろもみくちやにされている比企谷に向かつて叫ぶ

「あー、そうですね！ほら陽乃さん！葉山が戦ってますよ！ほら見ないとー」

「えー結果がわかってるのを見ても面白くないじゃん？」

「姉さん、流石にそれは・・・戸部くんも健闘してるみたいよ？」

と陽乃をたしなめる雪乃だったが

「どうせ隼人の回りを戸部君がぐるぐる回ってるとかそういう感じになってるでしょ？
んで最後は相手の武器をギリギリで弾いて終わり」

「あーほんとだ・・・とべっち、隼人君の回りを回ってるように見える・・・隼人君ほとんど動いてないや・・・」

由比ヶ浜が納得したように言う

実際戸部は超高速で突きを放ったり槍を叩きつけたりはしているが葉山は避けたり

受けたりして自分から切り込んではいない

「なんだあれ？葉山苦戦しているのか？」

「んなわけないじゃん？そう見せようとしているんだよ、戸部君の攻撃で移動を封じられてるように見せてるだけ」

「なんでそんなことを？」

「決まってるじゃん、君の真似だよ」

それさつきもあいつから言われたな、そう考えてると

カキイン

という音がする。

「ツクー負けたっしょ!!」

どうやら槍を弾いて飛ばしてしたようだ。

「勝者！葉山隼人様！しかしこれは当然の結果と言えるでしょう！しかしさすが葉山様の片腕の戸部様です！素晴らしい健闘ぶりでした！」

司会者は興奮気味だ

「ああやって相手のメンツも保ってあげてるんだよ、速攻勝っちゃうと盛り上がり欠けるし何より戸部君に負けた人もかわいそうじゃない？それがいいのか悪いのかは別としてね」

そういうと陽乃さんはこっちを見る

「全部君のせいだよ？責任取ってあげてね？」

そういうと陽乃さんは伸びをして

「んーつと屋台に行つてなんか買つてくるね？めぐりー戸塚君といちやいちやしてないでいくよー」

「ちよつと！はるさん！」

めぐり先輩と一緒に買い物に行つてしまった。

「メンツねえ・・・」

テニス対決のことをふと思ひ出した、あれは不可抗力なんだがあいつの中では俺に感謝しているんだろうか？

そんなことを思っていると三回戦が始まるのだった。

第四十八話

三回戦目第一試合

材木座と平塚先生の対決になる。

「材木座、本気でかかってこい！」

「ほむん、先生といえど容赦はせぬ！」

「なんか材木座と平塚先生の風格が半端ないのだが」

「あの二人強さの次元が違うものね・・・」

「うくん、ハッチー、どっちが勝つかな？」

「全くわからん！」

試合開始のラッパが鳴らされる

「速攻決めるぞ！霸王翔吼拳！」

平塚先生の手から円盤状の魔力の塊が飛んでいく

「甘いわ！プロテクトシールド！」

材木座の手からは防御壁が展開されるが簡単には防げない模様

「むう！強すぎる！」

平塚先生の魔力が膨大すぎて吸収しきれないのだ

そのまま押し切られそうになる材木座だったが

「むうん！」

防御壁を動かしなんとか振り払うことに成功した、しかし

「おい！こつちに飛んでくるぞ！」

「逃げろ！」

「キヤー！！！」

振り払われた霸王翔吼拳は観客席に飛んでいく、幸い観客には魔法障壁が張られていたので被害はなかったのだがそれでも当たった瞬間はすさまじい轟音と振動が伝わってきた。

「おい、先生ちよつと強くなつてないか？」

「ほえー先生すごい！」

「静ちゃんちよつとは手加減した方が……」

みんなあきれやるやら驚くやらである。

というかあれ陽乃さんに食らわせたのか？

でもあのときより威力が桁違いになっているようなのだが

「これはいかん！、大志！アレを出せ！」

材木座が叫ぶと観客席に座っていた大志が大きな包を取り出す。

「なんだそれ？」

「本牧先輩に作ってもらったんです！お兄さん！これを渡すんで手伝ってください！」
腕にはめる長い棒のようなものである。

何となくマイナスイオンドライバーを思い出させるようなフォルムをしている。

戸部や戸塚も手伝い観客席からステージの方へと投げ飛ばすことにした。

「ほう、武器か？材木座」

平塚先生は不敵な笑みを浮かべる

「武器？違うわ！これは観客を守るものである！行くぞー！」

材木座は棒を腕に嵌めジャンプし勢いをつけて棒を地面に突き立てた

「デイベイディンググドライバー！！！」

途端に地割れが発生、引き裂かれた地面は巨大な穴に変形した。

「これぞ反射、防御、大地の魔法を合成、増幅させ地面にバトルフィールドを形成する

デイベイディンググドライバーよー！」

「なるほど、これなら暴れても問題はないと」

「当然なり！いざというときの備えはしておかんとな！」

「それでは全力で行かせてもらおうぞ材木座あ！！」

平塚先生は穴の底に飛び降りると両手を後ろに構え力を込める

「かくめくはくめく」

手の間に光の玉が出来、それがどんどん大きくなる

「なら私も全力で行かせてもらおう！」

材木座は腕に嵌めた棒を投げ捨てると両腕を広げ両手に力を込める

「ヘルアンドヘブン！」

膨大な魔力が材木座の両手から発生される。

平塚先生の手に出来た光の玉はかなり巨大化していた。

「波あああああ！」

掛け声とともに光線が放たれ、同時に材木座も叫びながら背中からブースターのように

魔力を放出し光線の中へ突っ込んで行く

「おおおおお!!!」

二つに割れる光線、その間を材木座は突進していく。

「先生！お覚悟！」

材木座の拳が平塚先生の腹にめり込んだ

「グツはあ！」

たまらず吹き飛ばす平塚先生

「つく！やるな！」

「先生、貴女はどこを目指しておるのだ？」

「知りたいか？・・・ならば勝負の二文字を持って教えてやろう！」

平塚先生は手に力を込める

「ばあああく熱！ゴッドフィンガー!!!」

「プロテクトシールド!!!」

「甘いわ！」

平塚先生の右手は材木座のプロテクトシールドを貫通し左手をガッツリ掴む形になる。

次第に押される材木座

「ヌウ！強い！」

「まだまだだなあ材木座あ！」

「だが先生！あなたの方がまだ甘い！」

材木座は右手を平塚先生に向ける

「ブロウクンマグナム！」

「なに！」

平塚先生は避ける間もなく手甲の一撃を食らい吹っ飛んだ。

そのまま倒れた平塚先生は立ち上がってこなかった。

「先生！」

材木座は駆け寄る

「材木座、強くなつたな・・・」

「先生！」

「ウム、ではあれをやるぞ」

「はい！」

「流派！東方不敗は！」

「王者の風よ」

「全新」

「系列」

「天破侠乱」

「見よ東方は紅く燃えている!!」

ガクツと首を垂れる平塚先生

「師匠!!!」

叫ぶ材木座

ステージの上では大盛り上がりなのだが観客の半分ぐらいは状況を把握できてない、

しかしもう半分は把握できているのか何故か泣いている、ちなみに戸塚も何故か感激している

「材木座君よかったね・・・」

え？マジで？ちよつと大丈夫？

横で見ている雪乃も結衣もいろはは状況が全く理解できていない模様、当然のことながら疑問を投げ掛けてくる。

「ねえハッチー、中二が勝ったの？あの二人は何やってんの？平塚先生は大丈夫なの？」
「先生は大丈夫だろ、多分あれがやりたかっただけだと思う」

一度はやりたいこのやり取り、ただ知らない人にとっては本当に疑問しかわかない謎の行動である。

案の定しばらくしたら二人共歩いてゲートに戻ってた。

「やっぱアレがやりたかっただけかよ・・・」

二人ともやりきったといういい笑顔をしていた。

第四十九話

四回戦目最終戦

「いよいよ最終戦か」

「葉山くんはいいとしても材木座くんが残るとはね・・・」

雪乃は意外そうだ。

「義輝様が残るのは当然です！当然優勝します！」

マリアさんは材木座の勝利を確信しているようだ。

本当にあいつ色々すげえな

「さあいよいよ最終戦です、今回は特別に解説役として葉山様のご友人にして我らが救世主の一人！雪ノ下陽乃様においでいただきました！」

「あの人がやってんだ？」

「はるさんらしいね」

「そうねやっぱり姉さんは姉さんね」

皆が呆れ半分の中陽乃は

は？なにか問題が？普通ですけど？

と言わんばかりの表情である。

「只今ご紹介預かりました雪ノ下陽乃です！ 皆さんひゃっはろー!!」

「姉さんテンション高すぎよ・・・」

こめかみを抑える雪乃、いや俺も同じ気持ちだ

「今回の優勝決定戦、予想通り葉山様が勝ち上がってきましたが、相手の材木座と言う男について、我々はほとんど情報が無いのです、これについて陽乃様何か情報をお持ちですか？」

「えー彼は我々が千葉亭の店主比企谷くんの親友！ 彼の手甲からは防御と反射の魔法が放出されるの！ そしてそれらを強力な腕力で圧縮開放し特殊魔法として戦うのよ！ 実はそこに至るまで彼には、いえ、彼らには悲しい物語があるのよ・・・」

「ほう！ その物語とは?！」

司会もノリノリである

「それは・・・はい！ ここから先は千葉亭で！ 「陽乃さんに聞いた」と言えば全品二割引！ 今なら家の女の子のスマイルもつけちゃうぞ? でも持ち帰りは厳禁！ 皆比企谷くんの物だからね? あと私も比企谷くんの物、だよね?」

陽乃さん！ でつけえ声で余計な事言わんといってください！

国王の耳に入ったら何されるかわからんでしょ！

そして観客席から嫉妬の視線を感じる比企谷である。

「はい！見事なまでにリア充爆発しろでしたね！さて両者共ステージに入場です！」

葉山と材木座が選手入場のゲートからステージへと向かう

「さて陽乃様？葉山様の力の秘密は何でしょうか？」

「んーいいこと聞くねえ、隼人の力の秘密は国王陛下から授かりしあの剣と盾！両方とも強力な魔力が込められていて、特殊な力を発揮するのよ！その力にあやかつて彼は剣のことをフラガラツハ、盾はイージスとか言つてたね！なんでも切つてなんでも弾くまさに最強の剣と盾！」

「ほほう！そうするとあの材木座という男には勝ち目が無いと？」

「うーん戦い方次第では材木座くんにも勝ち目ありかな？」

ステージ上で向かい合う二人

「葉山殿が魔剣フラガラツハとイージスの盾の名前をしゃつているとはしらなんだ」

「俺だつて漫画は読むしアニメも見る、ゲームだつてやるさ、ただ君より数が少ないつてだけでね」

「お主らしくエクスカリバーとかにすればよかつたものを」

「俺は正義じゃないからな、名前負けしてしまふよ」

「ほう、では貴殿が今まで戦つてこれた理由はなんだ？」

「材木座君は何のために今までモンスターと戦ってきたんだい？」

「一番はマリア殿と笑って暮らせるように、次に八幡達が幸せに暮らせるようにだな」

「俺は・・・みんなの為だな」

「ほう？そのみんなとは？」

「みんなはみんなさ、だから俺は君に勝たないといけない」

剣を構える葉山

「君の強さは認める、だから少しだけ力を使わせてもらおうよ」

「良からう、ではやろうか」

構える材木座

ラツパが鳴らされ試合開始だ。

「なんか陽乃さんの解説は微妙に解説になっているようになってないな」

「そうね、すごいのはわかるのだけれど具体的なことはサツパリね、でも名前で何となくわかるわね」

「隼人君の剣と盾すごいのはわかるけど「ふらがらつは」ってなに？イージスの盾は知ってる！ゲームでよく見るよ！めっちゃ強い盾でしょ？」

結衣が疑問に思うのも当たり前かもしれない、イージスの方は超有名、確かにゲームにも出てくるからな、でもフラガラツハはちよいマイナー、力が欲しいか？のセリフで有

名な漫画のラスボスが持ってたけどな。

「そうだな、盾は何でも防いじやう最強の盾と思えばいい、剣の方はまあ簡単に言うとも盾でも鎧でも使用者が望めば何でも切っちゃやし切られたら必ず死ぬ最強の剣だな」

「ほえー、あれ？ んじやあその剣でイージスの盾切ったらどうなんの？」

ほらきた、大抵の連中はこの疑問にぶち当たる。

「結衣さん？ その時は宇宙が爆発するのよ？」

「宇宙が!? ゆきのん！ ハッチー！ それマジ!?!」

「マジもマジだ、だから葉山が自分の剣と盾ぶつけないように気を付けてみるんだぞ？」

「うん！ わかった！」

「・・・先輩？ 雪乃先輩も結衣先輩で遊ぶのは止めたほうがいいと思いますけど？」

「がーん！ あたし遊ばれてたんだ！ ゆきのん酷いよー」

「うふふ、結衣さんは純粹だから好きよ？」

「でへへーって！ ゆきのん！」

ぷりぷりとお怒りになりながら雪乃に絡む結衣、相変わらずの百合百合っぷりである、そーういや喧嘩の後のアレは余計に燃えるとか？

と余計な事を考えながら試合観戦に戻ることにした。

ステージ上では葉山の剣を材木座が手甲で防ぎ、材木座の一撃を盾で防ぐ、一進一退の攻防のようである。

「うむむ！うちが明かぬ！これではどうだ！プロテクトシールド！」

葉山の至近距離で展開される防御壁、魔力を吸い取るので俺達は体力的に普通の人まです落ちてしまうのだ。

しかし葉山がそのまま剣を材木座へ振り下ろす、当然防御壁に阻まれるはずだが

「甘いよ」

「なに!？」

防御壁をやすやすと貫通する葉山の剣、材木座は寸での所で飛び下がりに回避だ。

「少しでも力を使わせてもらおうといっただろ？これがこの剣の力、魔法障壁なんか簡単に切ってしまうんだよ、全力で力をだしちゃうと試用の防御魔法すら無視して対象を斬っちゃうからね、少ししか力を使えないのさ」

「うぬう！ならばこれでどうだ！プロウクンマグナム！」

手甲を発射する材木座だったが

「だから甘いよ」

葉山は盾でやすやすと弾いてしまう。

「この盾は反射の魔法が込められていてね、魔法の力が強すぎてどんな攻撃も簡単に弾

いてしまうのさ、おかげで薄くて軽くて扱いやすい」

「むう！攻撃を全部弾くとは！ずるいぞ！．．．む！良いことを思いついた！」

「いいことって俺の剣と盾をぶつけるとかそういうのじゃ無いだろうな？ぶつけようとしても剣が滑ってそもそも当たらないよ？」

「．．．お主、いつの間に私の頭を．．．」

「凶星かよ、さてどうする？お得意のヘルアンドヘブンもこれで弾くことは出来るよ？何しろ相手から受ける衝撃が強いほど弾く力も強くなるからね」

「又ウ！正に合気！」

「俺の勝ちって事で良いかな？無駄な戦いは避けたい、皆でゴブリン共の討伐に行かないといけないからね」

「．．．学校にいた時だったらお主の言うとおりにしてただろう、だがここでは違う！つかぶつちややお主に負けたくはない！マリア殿の目の前にかっこ悪い姿は見せられぬ！」

「君も大概だね．．．」

「かかってくるが良い」

手招きする材木座

「本当に君、いや君たちは．．．死なないレベルにしておくけど死ぬほど痛いぞ？」

葉山は一気に間合いを詰めると材木座の頭上に剣を振り下ろす
しかし

「取った!」

なんと材木座は真剣白羽取りにてこれを防ぐ

「これなら切ることは出来まい!」

「驚いた、でもここからどうする?」

「こうする!秘技トカゲのしっぽ切り!」

材木座は手甲から手をするりと抜く、手甲の方は葉山の剣を挟んだままくつついてしまっているようだ。

そのまま材木座は葉山の盾に左手を当てる

「ほむん、なかなか良い盾ではないか」

そのまま左手で盾を撫で回し、にやっとした表情になる材木座

「まさか!盾から手を離せ!」

焦る葉山に

「いやーすまぬな、私の左手は制御が効かなくてのう!」

バキ!バリツ!

左手で掴まれた最強の盾は段々とひしゃげていく

「強い「衝撃」に対しては無敵なのだろうがゆっくりとした力にならうだ？」

「君！自分のやつてることわかってるのか！」

「知らぬ、我はお主に勝ちたい、しかも圧倒的にな！」

盾はいびつな音を鳴らし材木座が掴んでる部分には穴が空いてしまった。

「こうなつてしまえばただの鉄屑だのう」

とボロボロになった盾を葉山から奪い取ると後ろに放り投げる。

「君は本当に……」

葉山は剣を振ろうとするが先ほどの手甲がまだ張り付いていて上手く振ることができな
きない。

「くそー！」

葉山が気を取られていと

「これで終わりだ」

材木座の左手が葉山の喉元に食らいつく

「グッ！があー！」

「どうだ？この化物じみた握力の味は、死にはせん、死ぬほど苦しからうがな」

「お、俺の負けだ……」

「フム、我だけに聞こえるようにこつそりとでいい、もう一度」

「俺の負けだつて、だから放せ」

「言質は取つた。我の勝ちだな」

そう言うのと材木座は左肩に力を込め始めた。

「何を・・・君の勝ちだと・・・」

「いいや、試合は貴殿の勝ちだ」

と材木座がボソツと言つたとたん材木座の肩から魔力が突如吹き出しそのまま爆発した。

「ぐあああああー！」

葉山を放り出し転げまわる材木座、そのまま場外へと転がっていった。

「お、おいー！」

「勝者！葉山隼人様！」

葉山の勝利が告げられ会場は歓声に包まれる

「さすが葉山様、何か奥の手を出したようですが・・・陽乃様これはいつたい・・・」

司会者には何が起きたのかさっぱりわからない模様

「んーまあ彼もおバカさんつてことかな？隼人様は強い！どんな時も負けない！みんなの希望！そういうことよね？材木座くん？」

「???陽乃様おっしゃつてる意味が分かりかねますが????」

「まー隼人の優勝つてこと！おめでとさん！」

「は、はあ、そうですね、さすがはみんなの葉山様！これにてトーナメント戦は終了ときせていただきます！優勝者の葉山様には領主様より賞金が渡されます！」

葉山はステージから降りてまだ地面に転がっている材木座の所へ向かう

「なんであんなことしたんだ？あのままだと君の勝ちだった」

「貴様の敗北宣言を聞けただけで満足だからな」

「君はバカだな」

「はじめに言ったであろう？我はマリア殿と笑つて暮らせればいいと、優勝したらおぬしの代わりに国中を右へ左へと駆けずり回つて笑つて暮らすどころではなくなるわい！マリア殿と一緒にいられなくなるかもしれないであろう？最強の称号なんぞくそくらえだ、強さを知っている人は私の回りで十分よ！あとついでに我が勝っちゃうとおぬしの立場がなくなつていろんな人が困るであろうしな」

「・・・本当に君たちはバカだよ」

「バカで結構！ほら！マリア殿が来た！葉山殿、すまぬがあっちに行つてくれぬか？」

「義輝様！」

マリアが材木座に駆け寄り抱き着いている

「本当に君たちは熱いな」

葉山はそういうとゲートへ戻っていった。

表彰式、葉山には金一封が渡される。

会場は大盛り上がり。

「お前も行けばいいだろ？あいつを追い詰めたんだからよ」

「ふっ！このような場合、真の勝者は影から不適な笑みを浮かべているものよ、ベガ立ちでな」

「お前の場合、ソドムってとこだろ」

「貴様！ブツメツバスターを食らいたいのか！」

そんなやり取りをしていると葉山がやって来た。

「材木座くん、これでマリアさんに何かプレゼントするといい」

そう言うのと金一封を押し付けようとしてくる。

「葉山殿、これは勝利の証ではない、勝負に負けた敗北の証、故に貴様がもつておれ！盾の修理もあるであろう？」

「本当に君は・・・分かったよ」

残念な表情を浮かべる葉山はそのままその場を離れる

「ねえ今の我がつこよかった？」

「おまえは・・・貰えるものは貰つとけよ」

「男の意地と言うものよ！」

「意地で腹は膨れねえだろ」

「さすが店主！現実的よのう！」

「私も八幡に同意ね」

いつの間にか近くに来ていた雪乃が言う

「でもその考え方こちらの方は随分とお気に召したようだけど？」

「義輝さま！素敵です！」

マリアさんである、なんか材木座と抱きついてデレデレしていた。

何をしても好感度がプラスにしかならん。

「……こいつらほつといて宿に帰ろうぜ」

と宿に戻ろうとする比企谷

「あら？あの二人を見て自分も私たちとイチャイチャしたくなったのかしら？」

「違うわ！ほら、森にいく準備とか、装備の点検とか……」

「それは明日にしましょう？みんなおまちかねよ？」

赤面する比企谷と嬉しそうな雪乃は揃って宿に戻るのであった。

第五十話

ようやくゴブリン共が潜む森へと出発することになった。

馬車に資材や食料を満載し森へと向かう、足りなくなったらすぐに補給にきてくれと
のことでバックアップは十分だ。

「途中アダムさんの墓参りがあったので吉原さん達には先に言ってもらい俺たちの馬
車だけ別ルートを通ることになった。」

村があつたとされたところはもう何もなくなっており、墓がいくつか並んでいた。

「ここが私の故郷だ・・・君たちには話しておいてもいいかな、厳密に言えば私はこの
村出身ではないのだよ」

「どういう意味ですか？」

「二十歳前後ぐらいだった、気が付いたらこここの村の近くで倒れてたそうだ、倒れるまで
の記憶がすつぽりと抜け落ちていてね、かわいそうに思った村人に引き取られてこの
村で生活させてもらってたのだよ」

「驚愕の事実である、もしかしてこのおっさん召喚されてきた人第一号なのでは？」

「んじやもしかするとアダムさんも俺たちと同じ可能性が？」

今までの流れからするとその可能性もある、見た目はあからさまに日本人ではないが、マリアさんもハーフだったしこのおっさんももしかすると？

「どうだろうね、でも君たちの日本語にはどっか懐かしさがあるから、もしかするとそうかもしれない、この村の人はよそ者の私にも優しく接してくれて皆いい人ばかりだったのだが、戦争で村が焼けててね、その時私の面倒をみてくれた老夫婦は亡くなってしまったのだ」

アダムさんは悲しそうな顔をして話を続ける

「そんなことだから君たちのような境遇の者を見るとほおつてはおけなくてね、もつともそのおかげで私の領地には辺境とはいえ他のところより冒険者が多くなってしまうんだよ」

まあ確かに、俺たちに支度金をくれたり、冒険者向けの宿舎とかいろいろ手厚い待遇をしてきている、他の領地のことは詳しく知らないが、少なくとも東の領地にはそういうのは無かったようだ。

「今回の話を聞くともしかして森になにか関係があるのかもと思ったのだよ、だから君たちに同行したわけだ、さあ吉原君達がまっているから早くいこう」

「そーいや前に千葉亭の屋号教えた時も千葉って簡単に読んじやったしな、その可能性はあったわけだ。」

「そういえば元冒険者とは言えあんまりこの世界の人って感じがしないのよね、朝は起きるが遅いし、私たちの作る料理も警戒せず普通に食べるし」

雪乃の疑問ももつともだ、アダムさんはこの世界の人が見たことが無いような料理を作っても躊躇せず普通に食べてたな。

あまりに反応が普通なので気が付かなかった。

「案外ニートしていてこの世界に召喚されたのかもしれないな！」

材木座がそういうのも分かる、しかしそうだったとしてやはりそうだった理由が不明瞭だ。

「本当に森の奥に秘密があるのかもな」

俺たちは森へと向かった。

森の手前についてみると既についていた人たちの手でベースキャンプづくりを開始していた。

瘴気がすごいという話だったが確かに森からは変な感じのする空気が流れてくる

浄化の魔法を使える人達から強力な浄化魔法をかけてもらい、さらに浄化の能力を持続させるアイテムももらった。

魔力が高い俺達ならこれで一日森に入っても瘴気にやられることはない。

準備をしたのち偵察として大岡や俺や他のシーフ達とそれぞれ森に入ったのだが……

「モンスターが見当たらんな」

俺が探索しているエリアにモンスターが見当たらない、本来瘴気が漂っている所にはモンスターがかなり潜んでいるはずなのだ。が何故かいないのだ。

そして肝心のゴブリン共も全く見つからない

「どうなってるんだ？ 全くよくわからんな」

当たりを見てもなんの気配もない

「スカウト能力のあるいろはを連れてくればよかったかなあ」

それはそれで面倒なことになるとブツブツ言いながら歩いていると地面にモンスターの足跡を見つけた。

「いるにはいるみたいだな．．．あ？」

足跡は全部一つの方向に向かって進んでいた。

「なんか色んな種類のモンスターの足跡があるが全部同じ方向向いてるな」

全ての足跡は森の奥の方向を指していた。

「なんかやばそうな感じがするな、一旦戻るか」

ベースキャンプに戻ると他の方向を偵察していた連中も戻っていて葉山へ報告するようだ。

「うーっす」

「比企谷お疲れ様、君のところはどうだった？」

「モンスターが全然いねえ、あとモンスターの足跡見つけたが森の奥に行ってるみたいだ、これ以上は危なそうだったから深追いはしてないのでわからん」

「ありがとう、やはり君の所もか」

どうも他のシーフも同じような報告をしていたようだ。

しかも足跡の方向も俺が見た方向と一致しているらしい

「消えたモンスター達か、ゴブリン達となにか関係があるのかもな」

消えたモンスターたちの後を追ひ、俺達は森の奥へと進むこととなった。

第五十一話

戦闘準備を整えて森へと全員で進むことになった。

足跡を追い森の奥へと入っていく、モンスターがいなかったためスムーズに森の奥へと進んだのだが……

「なんだこれ？」

森の奥で仰々しい石造りの建物を見つける、相当巨大なものだ、モンスター足跡は建物の周囲にたくさんある。

中に入っていくのだろうか？

「建物の上にも木が生えてるな……これでは上からでもわからんな」

「ゆきのん、なんかあれちよつと怖くない？」

建物の屋根付近には羽根の生えた悪魔的なモンスターの石像が並んでいた。

「結衣さん、あれはガーゴイルよ、私たちの世界では主にヨーロッパ等で建物に魔除けとして取り付けられることがあるのだけれど、こちらの世界ではどうなのかしら？」

「うーん魔除けというか侵入者避け？遠出した時のクエストで石像のガーゴイルが襲ってきたことはあったね」

と吉原さん、おいマジかよこの石像結構たくさんあるんだが・・・
下の壁にはモンスターの形したのとか、巨人っぽいのもいるぞ？

「ハハハ、石像を動かすのは相当強い魔力と特殊な魔法が必要だからね、僕たちの時もガーゴイルは2匹程度だったし仮に襲ってきたとしてさすがにこれ全部が襲ってくるなんてことはないと思うよ？」

なんか今嫌なフラグが立った気がする

「よし、ではこの建物を探索する、俺達は正面入り口から、吉原さんたちは裏口が無いか調べてください、もし見つかったらそこから探索をお願いします、もしモンスターに遭遇したら無理せず撤退を」

葉山が陣頭指揮を取ってパーティを2つに分けた。

俺達総武チームと吉原さんのベテランチームだ。

「んじゃ僕たちは裏口をさがすとするか、君たちも強いからって無理しないでね？」
と吉原さん達は裏口を探すべく建物の陰へと消えていった。

俺達は正面入口へ向かう、入り口に近づけば近づくほど石像の数が増える。

「ねえハッチー、本当にこれ大丈夫なの？なんか魔力の流れが微妙に変だよ？」

結衣はずっと不安そうだ

「大丈夫、お前の火力があれば何が来ても吹っ飛ばせるだろ」

「そっかー、そうだねー！あたし頑張る！……ってあれ？今あそこの石像動かなかった？」

結衣がガーゴイルの石像を指さす、これだけはやけに下の方に設置されている模様
「こえーこと言うなよ」

と比企谷は指さされた方を向くと

ガリ

妙な音がしたかと思うとこちらに石像の首がこちらに向いていた。

ガリガリ

それを皮切りに他の石像もこつちを向き始めた

「葉山ーヤバいー！こいつら生きてやがるー！」

言うが早いか石像のガーゴイルが台座から飛び上がりこちらに向かって襲ってきた

ギヤー、ギヤー

鳴き声を上げながら次々とガーゴイルが台座から飛び上がる

「全員散らばれ！戦闘態勢！」

葉山が言うが結構な大所帯、しかもモンスターが居ないので油断していたこともあり、全員固まりすぎていたのではらけるのに時間がかかる
「くっ！これでは下手すると味方に当たってしまうではないか！」

平塚先生が例によってなんかの技を手から出そうとしたようだがばらけようとする

味方が邪魔ですぐには動けないようだ。

「ブロウクンマグナム！」

どうにか戦闘態勢をとった材木座が空中に向かって技を放つがあっさりかわされてしまった。

「ぬう！なかなか当たたらぬ！マリア殿は伏せておられよ！」

「ウインドカッター！」

結衣も魔法を放つがあっさりかわされてしまう、その間にもガーゴイルは急降下してこちらにちくちくとダメージを与えてくる

「クソ！うざすぎる！」

相手が空中なので武器がまるで届かない

「先輩！任せてください！」

いろはが矢を放つがこれもなかなか当たらない、3本同時撃ちという神業みたいな技をつかってようやく当たるレベル、しかも致命傷にはならない模様

「これでは不利だ！みんな建物の中へ！全員走れ！」

俺達は走ろうとするがやはりガーゴイルが空中から襲ってくるので防戦一方で走るところではない。

「優美子！ワイバーンの時のアレをやってくれ！」

「任せて！」

と三浦はぐっと念じると

「ファイアーボール！」

と言いながら右手を大きく振る、すると空中に無数の火球が出現した。

「いつけー!!」

火球は散弾のように散らばり飛んでいく

「ワイバーンの時もそうだったけど、飛んでる奴に点で攻撃しても当たらない、だから面で攻撃するのさ」

「葉山、それはわかるがあんな小さな火球じゃあダメージ与えられないんじゃない？」

数は多いが一つの火球のサイズが小さすぎる、ゴブリンにも致命傷は与えられ無さそうだ

「当たればいいんだよ、奴らの飛行能力を奪うのが目的だ」

飛んで行った火球をガーゴイルは避けることが出来ずそのまま体中に火球をあびる、必然的に翼にも当たって穴だらけになりそのままガーゴイルは次々と落下する

「ああなると奴らは飛行能力を失う、飛ぶには魔力が必要みたいだけどやっぱり翼がないと飛んでいられないみたいだからね」

そういうと葉山は目の前に落下したガーゴイルをそのまま剣で切り裂く

「目の前の奴以外無視しろ！走れ！」

と建物の中へと避難する、しかしまだ倒しきれないガーゴイルはいる上に「おいやばいぞこれ！あちこち動き出してるじゃねえか！」

他のモンスター型や巨人の石像までもが動き出しているのだ。

「隼人……ここはあーしに任せて先に行つて！」

三浦は倒しきれない石像の中に入れないつもりらしい

ただ流石に一人では無理だろう、と思った矢先に沙希が三浦の横につく

「……つたく、八幡、悪いけどあたしも残るよ、こいつだけじゃ接近してきた奴防げないでしょ」

「あんた……ふん！、あーしの足手まといにならないでね？」

「そつちこそ、ちゃんと上の敵追っ払いな！」

そう言うのと沙希は鋭い蹴りで接近してきたモンスター型の石像を蹴り飛ばす

「つくー！なんつー硬さだよ！」

「しようがないなー、さきさき、優美子、私も手伝うから、ほらさきさき？足と拳にエンチャントしてあげる」

と海老名も名乗りを上げる

「絶対……は通さないから、お礼に今度いいはやはち見せつけてね！」

と海老名は杖の能力を使い腐敗障壁を張った。

「石像とはいえ劣化が早まるから少しはダメージいくかな?」

目論見通り障壁を無理やり突破しようとする石像は結構ボロボロになるようだ。

「数が多すぎますね、仕方がないので私も三浦先輩のお手伝いをします!」

というはも外に出る

「私の弓矢は屋内じゃ威力発揮できませんからね」

「・・・みんな、すまん!」

「やばくなったら逃げろよ、俺もやばくなったら逃げる」

「ヒキオ、あんまかつこ悪いこと言ってるよ、あんたの嫁達にあいそつかされるよ!」

最後に三浦からお叱りの言葉を受け俺達は建物の奥へと侵入することにした。

第五十二話

「まあやつぱりこうなるよなあ」

あれだけ外で騒いだので中に入ると戦闘態勢のゴブリン共にあつという間に囲まれてしまった。

「やはりこの建物の奥でなにかが起きているみたいだな」

葉山は厳しい顔をしている。

「フム、ゴブリン、ホブゴブリンばかりだな、チャンピオンはいないようだが・・・」

平塚先生はしやべりながら気を溜めている、この人だけ世界観がおかしい

「八幡、やっていいのかしら？こつちは準備万端なのだけれど」

雪乃もやる気満々だ、どのみち囲まれてるので早急に対処しないとイケないのだが葉

山が待ったをかける

「ちよつとまってくれ、他のモンスターがいないのが気がかかりだ、それに奥にはまだこいつらが控えてるかもしれない」

「葉山殿！悠長なことを言っている状況か！」

イラついた材木座が怒鳴り声を上げる、こいつ本当に変わったな、学校にいた時とは

雲泥の差だ

「すまない、君の力も温存しておきたいからね」

葉山はそう言う

「大和！剣の力を解放しろ！みんな離れろ！」

葉山が怒鳴ると同時に大和は背中に背負っていた殺してでも奪い取るで有名な例と似たような大剣を抜く、剣の刀身は青く光っている、氷の魔法が圧縮して封じ込められており、一振りでレッドドラゴンも凍らせるといふその剣をそのまま地面へと突き刺す。

ガキーン

「冷凍剣ー」

大和がそう叫ぶと剣の周囲の床が一気に凍りつく

ペキペキペキ

一気に白くなった床、当然ゴブリンの足元も凍りつき動けなくなる、裸足だからくつついたんだろ、いい気味だ。

ギャー

ゴブリン達は大騒ぎで逃げようとするが足が床にくつついて動けない。

「前にスケルトンの大群に囲まれた時これで全部倒した」

そう言うのと葉山は動けなくなっているゴブリンに素早く近づき首を跳ねる。

「みんな！今がチャンスだ！」

「よっしや全滅させようぜ」

なにしろ相手は動けなくなってるのだ、これなら非力なめぐり先輩でもなんとか倒せるだろう、と思っていたらめぐり先輩は普通にゴブリンを一撃で撲殺してた。

なんかウチの戸塚も重い一撃を脳天に食らわせてる、そのままゴブリンは倒れてしまふが、今度は床に直接くつついたらしい、ギヤーギヤー言いながら立てなくなっていた。そのまま全員で始末にかかる、小町が心配なので近くに寄ったら邪魔すんなど怒られてしまった。

そのまま殲滅といきたかったが

「おい！まだ湧いてくるじゃねえか」

奥の通路からまだまだゴブリンはやってくる、このままだとまた囲まれてしまう。

「きりがいいからここは俺達に任せて隼人は奥に行くつしよ！」

「それな」

「だな」

「戸部、無理するなよ」

「力を使えば余裕つしよ！」

と電撃が走る槍を構えポーズを決める戸部

「みんなすまない」

葉山が言い奥へと行こうとするが

「雑魚が多すぎるから俺も残るっす!」

と大志も名乗りを上げる

「大志君が残るなら小町も残るよ!人数多い方がいいよね!お兄ちゃんは奥の方お願いね!」

「小町、無理をすんなよ?大志、小町にケガさせたらお前ぶつ飛ばすから覚悟しとけ」
「任せるっす!」

そういうと大志と小町は戸部たちとゴブリンの群れに突っ込んでいった。

「回復役がいないとみんな困るだろうから僕も残るよ、ちよつと数が多すぎるからね」

と戸塚も残ると言い出した。

「僕も八幡の力になりたいからさ、ここは僕たちに任せて!」

と戸塚も戸部たちの元へと行ってしまった。

「よし!今のうちにみんな奥へ走れ!」

葉山の掛け声で空いている通路から俺達は建物のさらに奥へと走り出す。

通路を走ってしばらくすると広めの場所へと出たのだが

「・・・今度はちよつとやばいかもな・・・」

そこにはゴ布林チャンピオンやオーガが何体もいる。

幸いまだこちらに気が付いていないようだ

「ふむ！ようやく我の出番の様だな八幡よ！」

材木座が意気揚々と前へ出る。

「義輝様、お供いたしますわ」

とマリアさんも後に続く

「やあやあ我こそは・・・」

と材木座が名乗りを上げながら部屋の中へと進んでいくと当然こちらに気が付いたチャンピオンが襲ってくる

「名乗りを上げる前に襲ってくるとは無粋な連中よのう！くらえ！プロテクトシールド！！」

材木座の手から防御壁が展開されチャンピオンは足止めを食くらう

「秘儀！ダイダロスアタック！」

右手をチャンピオンの腹に突き刺す材木座

「ファイアーボール、アイスニードル、ウインドカッター！」

と立て続けに叫ぶと右腕を引き抜いて後ろに飛びずきつた。

「おい、それが例の奴か？」

「いかにも！奴の腹の中では私の攻撃魔法が内臓をぶち抜きながら全身を駆け巡っているのよ！」

チャンピオンの体はあちこちが膨れ上がるとそのまま地面に倒れてのたうち回り口から血を吐いて動かなくなってしまった。

「今回は爆発しなかったようだのう！さて次はどうしてやろうか！」

材木座はまだいるチャンピオンやオーガの群れにむけて拳を突き出す

「こんな頼もしい中二初めて見た！」

「そうね、もう彼の性格の更生はする必要のないかしら・・・」

チャンピオン相手にひるむことなく立ち向かっている材木座を見て結衣も雪乃も頼もしさ半分あきれ半分といった所である。

「材木座だけにいい恰好させるわけにはいかんな」

と平塚先生も出てきた

「静ちゃんが残るなら暴走しないように私がみてないと駄目ね」

と陽乃さん

「比企谷くん？雪乃ちゃん達をお願いね？ここは私たちに任せなさい！めぐり！比企谷くん達をおねがいね？」

自分の身長に2倍以上もあるチャンピンやオーガ相手にこの人たちは全くひるむ様子がない。

「すみません、後はお願いします」

俺達はさらに建物の奥へと走り出した。

後ろでは

「燃え上れ！私の小宇宙！必殺！ペガサス流星拳！」

平塚先生の叫び声が聞こえるまでも古い必殺技の模様。

「建物壊したりしないだろうね」

葉山は不安そうだったが、陽乃さんもいるし多分大丈夫？だよ？

第五十三話

しばらく通路を走っていると通路の反対側から吉原さん達がやってくる

「あ！比企谷君達、無事だったんだね！」

「それはこっちのセリフですよ、こちらはゴブリンがわらわらいて大変なんですけどそちらにはいなかったんですか？」

「そっか、んじゃあそっちには行かない方がいいね、それじゃちよつと来てもらえるかな？」

と吉原さん達は先ほど来た道を引き返し始める。

後について行ってみると

「なんすかこれ・・・」

大きな部屋にでる、そこには巨大な穴がいくつも空いており、中をのぞくと干からびたモンスターの死骸の山、かなりの数がある。

「僕たちが入ってきた裏口は搬入路みたいなどころだったんだよ」

確かにその部屋から外に通じている通路は大きい、何かを出し入れしてたのだろうか？

「裏口にはモンスター足跡がたくさんあったから多分この森のモンスターをここにおびき寄せ、穴に落として魔力を根こそぎ吸い取ったみたいだね」

おびきよせる？どうやって？と思ったら

「八幡、これを見て……」

「これは！」

見覚えがあるものがそこにあつた、骨で作ったトーテムと呼んでいる代物とそこにかつている鳥居のようなアクセサリー、それが穴のそばにいくつも設置してあるのだ。

「これでおびき寄せたのか？」

葉山はだいぶ渋い顔をしてる。

「いったい何のためにこんなことをしたんだ？」

穴に落ちているモンスターの死骸からはまったく魔力を感じない、強制的に魔力を吸い取られた模様。

「うん、それなんだけど多分こっちの設備を動かす為なのかも」

と吉原さん達、いや今設備って言ったか？

今度はさつき来た通路とは別の大きい扉の前に来た。

「僕たちも見えて驚いたよ……」

扉を開けると

「なんだこれ・・・」

「嘘だろ、なんでこんなものが？」

そこにはどう見ても近代的な科学施設が広がっていた。

培養液のようなもので満たされたガラスのカプセルのようなものが大量に並んでおり、中には様々な成長過程のゴブリンが入っていた。

小さい装置には芋虫状の生物が入っているものもある

葉山はそれを見つけるとまたも渋い顔をする。

「これは頭に入って人を操る虫だな」

「頭に入っていたのによく形がわかったな」

俺の言葉に暗い顔をする葉山

「まあね、死んだあと頭を割って形を確認したからさ」

「マジか、えぐいな」

「それよりなんかこの箱からやたらと強力な魔力を感じるな」

装置からは太い管が伸びており妙な形をした箱に直結されている

不思議に思った葉山とめぐり先輩や雪ノ下が箱を調べる

「・・・これは吉原さんの言う通りモンスターから吸い取った魔力を何らかの方法で圧縮してこの箱に封じ込めてゴブリンを成長させる養分になっているみたいだな」

「これってあの妖刀と同じ感じがするわね……」

「まじかよ……そんなことが出来んのかよ……」

あつけにとられる比企谷達

「もしかして自分たちを安全に増やす手段を見つけたから女をさらわなかったのかもな、こうやって十分に増やした後街を襲うつもりだったのかも」

そういうえば近隣の村や町は襲われてないとか言ってたな、でもこんな施設がゴブリンに作れるとは思えない。

「ここはちよつとヤバイ感じがしたから僕たちは詳しく見てないんだけど、一応奥にいく通路はある」

と吉原さん達は通路の方へ案内してくれる。

「……行ってみるか?」

俺達は通路を奥へと進んでいくと突き当りに扉が見えた。

ちなみにこの部屋に入ってからカプセルの中以外にゴブリンは現れてない。

「開けるぞ……」

と葉山がそつと扉を開けるとそこは少し広い部屋になっており一番奥に服を着たゴブリンがいる、こちらには気がついていないようだ。

「間違いない戦闘になるので吉原さん達は部屋の外で待っていてください」

葉山はそう言い俺達だけで部屋に入るよう促す。

「アレがゴ布林ロードって奴か？」

他のゴ布林と違い、メイジのような恰好をしているようだ、後ろを向いて何かをやっている。

「葉山、さっさとやっちまったほうがいいんじゃないやねえか？結衣の魔法なら一撃だ」

ラスボスがこちらに気が付いてないのだ、不意打ちでさっさとやった方が手っ取り早い。

「いやちよつとまで、なんか様子が変だ」

葉山が制止にかかってきたが悠長なことを言つてられない

「いいからやっちまおう、結衣！でかいの頼む！」

「わかった！いくよ！ファイアーボール！」

巨大な火球はまっすぐゴ布林ロードの所へ飛んでいった。

バチィ！

しかし激しい音とともに魔法が跳ね返される。

「なんだよこれ！」

「全員避ける！」

寸での所で回避する比企谷達

「なんで魔法が反射されるんだ？」

うろたえている比企谷達にゴ布林ロードはこちらを振り返りニヤつと笑う

「笑っているわ……」

「うー怖いよー」

「みんな気をつけろ！両側からもくるぞ！」

葉山が言うが早いか部屋の両側の扉からゴ布林が数匹出てきた。

「クソツ！まだいたか！」

「ちよつとまって八幡！あのゴ布林達、なんか変だわ」

「なんかゴ布林に頭にヒモがついてる！ハッチーアレ何？」

「なんだアレ……？」

確かにゴ布林にチューブのようなものがつながれている

様子を見ようと思っていたら

「○×
×◇○！」

ゴ布林が叫ぶと手から火炎が飛び出す。

どうみてもファイヤーボールの類の様だ。

「おい！葉山！なんでゴ布林が魔法を使えるんだよ！」

「俺が知るか！めぐり先輩！障壁を！」

「うん!」

めぐり先輩が間一髪で魔法障壁を展開した。

「これでとりあえずはしのげるな」

しかし障壁展開後もゴブリン達はひたすらこちらに魔法を撃ってくる

「さっきのも反射の魔法を使ったのかしら? いったいどうなっているのかしら?」

「俺の方が聞きたいよ」

魔法を使えるゴブリンなんて聞いたことがない、皆混乱気味だ。

「ハッチーどうしよう・・・」

「ゴブリンの使う魔法は威力が結構強くて障壁も長くはもたないよ・・・いい知恵なんかないかな?」

「んな無茶ぶりされてもな・・・」

とゴブリン達を見ると魔法を撃つたびに頭に刺さっているチューブのようなものが脈動しているように見える

「・・・すまん聞いてくれ、ちよつとみんなにお願いがあるんだが・・・」

「八幡? またろくでもないことを考えたのかしら?」

「まあな、すまんが障壁を解いて派手にやり合ってくれないか?」

「君はみんなに死ねといってるのか?」

さすがの葉山もこの意見には懐疑的である。

「お前の盾はなんでも弾くんだろ？、めぐり先輩も雪乃も小さい障壁は張れるからな、結衣は陰に隠れてあいづらに魔法をぶちかまして気をそらしてくれ」

「君はどうするんだ？」

「俺はシーフのスキルがあるから・・・考えがある」

「信じていいんだな？」

「どのみちこのままじゃなんもできんだろ」

全員やれやれといった顔

「よし！結衣は障壁を解いたらゴブリン共に魔法を撃つてくれ、全員囲まれないようにあんまり離れるな！」

「んじや頼むわ」

めぐり先輩が障壁を解くと俺はステルス能力を發揮してこっそりその場を離れる、自慢であるが俺のステルススキルは折り紙付きである。

ただでさえ薄い存在感が全くなくなるという悲劇の能力、しかし今回はそれを最大限に活用させてもらおう、目的はゴブリンの頭から生えてるチューブだ。

「どう見てもこれが魔力の供給源にしか見えんからな」

そつとゴブリン達の後ろに回り込むとチューブを切断する。

「ギャー!!」

切断と同時にゴ布林達は攻撃をやめ叫び苦しみます。

チューブからは黒い霧のようなものが吹きだした。

「やっぱり魔力の供給源だったか」

ゴ布林達は暴れてのたうち回っている。

「葉山! やつちまえ!」

今がチャンスと俺は叫んだ。

葉山と雪乃は切りかかり結衣も魔法でゴ布林を焼き払う。

あつという間にゴ布林共は始末された。

「あとはあいつだけだな」

奥の方ですつと何かをやっているゴ布林ロードだけが残った

「観念してもらおうか」

葉山が剣を構えると

「ニンゲン・・・シネ・・・アイスニードル・・・」

無数のつららが出現しこちらに襲い掛かってくる、前に三浦と戦った女メイジ兵とはくらべものにならないぐらいの数と太さである。

「やべえ!」

「私に任せて！」

めぐり先輩がまたも障壁を張りこちらに飛んでくる無数のつららをなんとか防ぐことに成功したが、葉山は盾で攻撃を弾きつつ一人で突っ込んでいく。

「くたばれ！」

葉山ゴブリンロードに一撃を与えようと剣を振り上げたが体がピタリと止まってしまった。

「つく！体が動かない！麻痺の魔法か？」

「グヒヤヒヤヒヤ！ソノママシネ・・・サンダーフレア・・・」

「ぐあああああ!!！」

電撃を撃たれ倒れる葉山

「おい葉山！」

「八幡！彼をこちらに引きずってでも連れてきて！めぐり先輩！回復を！結衣さん！弾かれてもいいように最小の魔力の魔法であいつの気をそらして！」

「わかった！」

雪乃が叫ぶと結衣は攻撃魔法を唱えまくってゴブリンロードの気をそらす。

この隙に俺は葉山を引きずって障壁内へ引っ張り込んだ。

「めぐり先輩！お願いします！」

回復をお願いするわけだがこっからどうすればいいんだ？

「比企谷……」

少し回復したのか葉山が話しかけてくる

「おい、しゃべって大丈夫なのか？」

「……まあな、一応俺が着ている鎧も特注だからな、それより比企谷、さつきあいつの近くにいつてわかった、あいつにもチューブのようなものが付いているみたいだ」

「んじゃまたやるか、ステルスヒッキーの力なめんなよ」

「俺も全力でいく、雪ノ下さんとめぐり先輩は俺に素早さ向上の魔法を頼む、俺がまず奴が魔法を撃つ前に突っ込んで魔法障壁を切り裂くから結衣はそのに魔法を叩きこんでくれ！魔法の合間に俺と雪ノ下さんで波状攻撃だ、めぐり先輩はサポートお願いしませう」

そして俺達は作戦を開始する。

相変わらずゴブリンロードはこちらを舐めているのかニヤニヤしているようだ。

「行くぞー！」

素早さを上げた葉山が魔法障壁を切り裂き作戦は開始される、

「ニンゲンガアアア!!」

ゴブリンロードは魔法で応戦しようとしているが波状攻撃をされているのでなかなか

かうまくいかないようだ。

完全にこちらには気が付いていない

「さーてつと……これか？これで終われるか？」

俺はチューブに剣を突き立て叩き切った。

チューブから黒い霧のようなものが吹き出す。

「グギャアアアアアア!!」

ゴ布林ロードは叫びその場でのたうち回った。

「とどめだ」

葉山はのたうち回るゴ布林ロードの首を跳ね飛ばす。

「終わったのかしら？」

「よくわからんがもうこの部屋には他にゴ布林はいないようだが」

部屋は一気に静かになる。

「なんだか意外とあっさり終わったな、もしかして第二形態とかあるんじゃないのか？」

「流石にそれはないな……首を跳ねてるし、でも結衣、念の為こいつを焼き払ってくれ」

ゴ布林ロードはあつという間に灰になった。

他にモンスターがないか探索していると

「ねーハッチーこれなーに？」

結衣がさきほどゴブリンロードが立っていた辺りで何かを見つけたようだ。

「なんかコンピューター？みたいに見えるね」

めぐり先輩も一緒にそれを見ている。

「おい葉山これってなんかのコンソールじゃないか？」

レバーやらボリウムやら、音響設備のように色々スイッチのようなのがたくさんついているパネルがあった。

「信じたくはないけどどうやらそうみたいだな・・・」

「映像切替と書いてあるボタンがあるわね・・・」

と雪乃が指を刺したあたりには部屋の名前が書いてあるボタン

「これって監視カメラの映像なのか？」

ボタンを押すたびに画面が切り替わる、そこには三浦たちや戸部、材木座達が戦っている様子が正面のパネルに投影された。

「いったいこれなんなんだ？」

「多分これはここの制御装置みたいなものなんじゃないのか？もしかしたら外で暴れている石像とかをこれで止められるんじゃない？」

葉山はそう言い停止ボタンを探すとあっさりと見つかった。

「防衛システム解除とあるな・・・」

葉山がそれを押すと今まで三浦たちを襲っていた石像は攻撃を止めた。

それどころか戸部や材木座が戦っているゴブリンの群れも攻撃を中止し、ギャーギャー言いながら散り散りに逃げ出し始めた。

「石像はわかるがゴブリンの意思もこれで制御できんのかよ・・・」

「ともかくみんなを読んでこよう」

俺達はこのファンタジー世界に似つかわしくない近代的な設備の前でこれからのことについて相談することにした。

第五十四話

「ふうむ、ファンタジーな異世界なのにこのような設備があるとはな、さてはこの世界の管理システムだな？」

としったかぶりをする材木座

ゴブリンは全部逃げ出してしまったのでとりあえず全員呼ぶことにしたのだが、ゴ布林チャンピンも逃げ出すとか、材木座も平塚先生も異常すぎるだろう。

まあ余計な戦闘は避けられるので助かるのだが。

そんなこんなでゴ布林ロードのいた部屋へ全員を連れてきたのだが、やはり道中のゴブリンの培養設備？には皆驚いていた。

「これマジでやべーでしょ、何がやべーってもうマジではないぐらいやべーって」と戸部、全く何を言っているか分からないが気持ちはよくわかる。

他の連中もザワザワとしている中

「まーとりあえずゴ布林がこれ作ったとは思えないから誰かが作ったってことだよな？それをゴ布林ロードが乗っ取ったかなんかで使っていたということかな？」

と陽乃さん、確かにそうかもしれないがいったい誰が？

ともかく皆で部屋の探索をすることにした。

ゴブリンにつながっていたチューブは魔力を圧縮した大きな箱のようなものに接続されていたようである。

「ここから有線で魔力を供給していたわけか」

これを繋げば俺でも魔法が使い放題？

ちよつと魅力的だがチューブを切断したときのゴブリンの死にざまを思い出すとてもそんな気持ちにはなれない。

「ん？これはなんだ？これ私も学校で使っていた事務用のファイルではないか！」

コンソール付近を材木座と漁っていた平塚先生は叫び声をあげる。

平塚先生が手にしたそれは現代日本でも事務の戸棚に良く鎮座している大量の書類を束ねる分厚いファイルである。

もろにK I N O J I M と書いてあるそのファイルにはタイトルが書かれていた。

「・・・設備操作マニュアル（引継ぎ用）・・・なんだこれは・・・」

「なんか仕事できる人見たいっすねそのファイル残した人」

と俺は平塚先生に言う

「うむ、引継ぎは重要だからな、私も・・・ってそういうことではないだろ！」

「静ちゃん、まずそれ見て見ようよ」

と陽乃さんはファイルをバサツと開いて読み始める

「ふむふむ、確かにこれこのコンソールの使い方が載っているね、あとそのゴブリン培養設備の使い方も書いてる、もともとゴブリンや寄生虫？を育てるのに使ってたみたいだね」

と陽乃さんはマニュアルを見ながらコンソールを操作、ピピっという電子音がするとどこかで何かのスイッチが切れたバン！という音がする。

「これで外のゴブリン培養設備が停止したはずだね、なんかこのマニュアルあちこち濡れてたりして汚いんだけどもしかしてゴブリンロードはこれを見てここの設備を使っていたみたいだね」

陽乃さんはまたマニュアルを読み進める

「ゴブリンに魔法を使わせるやり方なんて書いてるね……魔法が使えるレベルの魔力を強制的に送り込ませるって書いてある……」

「姉さん、それよ！私たちがこの場で戦ったゴブリン達は魔法を使ってきたの」

「魔法力は有線で供給させるとか……虫を使った操り方なんかも書いてあるわね……」
流石の陽乃さんも驚愕している、これを使えばゴブリン共を使役して一国と戦争することも可能なのかもしれない。

「ゴブリンロードってのがなにをやるうとしてたのかちよつと調べてみるね、静ちゃん

手伝って」

陽乃さんはマニュアル片手にコンソールを操る、どうやら稼働履歴を見ているようだ。

それにしてもこの人、初めて触るはずの機械なのに順応しすぎだろう。

「うむ、では他になにか書類が無いか調べてみるか」

「小町も手伝います！」

「ここは陽乃さん達に任せて俺達は他を探索しよう」

と葉山、確かにゴブリンの残党がいたりしたら困るしな、実はさっき倒したのは影武者だったとかそんなだったら目も当てられん。

「おう、んじゃよろしく」

しかしこういうのはやりたい奴にやらせるのが吉だ、俺は休ませてもらおうと思った

「よし、八幡！我らも行こうか！」

「八幡？ 私たちも行くわよ？」

「ハッチー置いてくよー！」

「比企谷！ここは私たちが調べておく！だから安心して行ってこい！」

「お兄ちゃん！あとはよろしく！」

なんで行くことが決定してゐるんですかね・・・

まあいつものことだと半ばあきらめ気味に俺は皆についていくことにした。

奥に行くともたもいくつか部屋がある、あちこち覗くが物置やらよくわからない装置やらが置いてあるようだ。

そのうちの一つにはベッドがありここで生活していたと思われる部屋があった。

部屋には机が置いてありそこには日々の記録と愚痴が書き連なれている日記のようなものが置いてあつた。

「これ日記みたいだな」

「日付は・・・先代の王様の時代のようね、ちようど戦争真つただ中だつたつて話だつたわね、読んでみましよう」

日記は結構分厚いがともかく開いて読むことにした。

『○月×日 明日は国王陛下より直々に召喚の命令が下つた。きつとこれまでの研究が認められたのであろう、これで宮廷魔術師の俺もいよいよ出世！今まで俺をさげすんでいた連中め！ざまあ見ろ！国の支援があれば俺の研究している地図を使った転送魔法をこれまで以上に強化できる！これさえあればこの世界の物流を一変できるしコショウを始めとする香辛料が格安で入手できるようになるはずだ、昔一度だけ食つた米とい

うものはおいしかった、きつとあれが腹いっぱい食べるようになるぞ」

『○月△日 違った・・・物流じゃなくて戦争に使う物資や人員の搬送の為の研究をしろだと、物だけなら何とかなるけど人なんて想定してねえよ！早く安く正確に安全に転送する方法を考案しろだど？しかも予算はカツカツとか何考えてんだ？米や香辛料の偉大さを唱えたら馬鹿にしたような顔で見られた！クソ！殺し合いよりうまい飯だろ！』

『○月□日 研究は極秘でやる上に完成したら即実戦で使うからと東の領地の国境付近の森に研究施設を建てることになったそうだ、あそこ森は瘴気のせいで普通の人が入ったら数分でぶっ倒れるしモンスターもわんさかいる、建物内は大丈夫なようにするとか言ってたが、実質的に監禁状態になるじゃねえか！勘弁してくれと国王陛下に進言したが、誰にも邪魔されず静かに研究できるだろだと！マジふざけんな！飯はどうすんだと聞いたら浄化魔法を大量にかけた人に運ばせるだど？瘴気は防げてもそいつらが森をうろついてるモンスターに食われたらどうすんだ！』

「・・・これこの研究施設の人の日記か？」

「ここまで読んで俺は顔を上げる

「優秀な宮廷魔術師だったようね、その頭脳を買われて一人で転送魔法の研究していたみたいね」

「でもなんかごはんのことばっかりだね」

雪乃も結衣もあきれ顔である、最も天才というのは往々にして変人なのが世の常だ
「うまい飯というのは重要だからのう、それよりもっと読ませろ」

と材木座も日記の主に同意している、その後の日記は一人つきりで着任し孤独に研究
を強いられてる男の愚痴ばかりが並べ立てられていたので重要そうなところまで読み
飛ばすことにする。

『△月◇日 しかしやはり人手が圧倒的に足りない、なんだかんだで設備はいいものではあるが人手が欲しい、昨日窓の外を見たらゴブリンが一匹ふらふらしていたので余ったパンを放り投げたらそいつ今日も来やがった。あいつを調教できないもんだらうか？』

『△月○日 件のゴブリンをパンで油断させて施設に招き入れ捕獲に成功した。これから餌付けと調教をしよう、魔法をある程度使えるようにしたらこっちはかなり楽になるので、魔力を高める注入装置を製作した。でも注入終了前にチューブを抜くと死んでしまうので要注意』

「猫の手も借りたいというのは聞いたことあるけどゴブリンの手を借りるとはね」
「さつき襲ってきた魔法を使えるゴブリンの正体はこれか、注入終了前にチューブ斬ったから死んだんだな」

日記はゴブリンの調教の様子が書かれていた。

ゴブリンはバカだが間抜けではない、調教後はそれなりに学習能力はあるようである。研究の雑用として役に立ってほしい。

『△月×日 誤った地図を描いたときの状況確認の為、適当なマップを書いて転送魔法を仕掛けたら転送は行われず妙なところにつながった。どうやらかなり高度な科学力をもつような所である、いわゆる異世界というところだろうか？都合のいいことに見るだけなら向こうからは気が付かれないようだ。こつちの研究の役に立ちそうな物があるかもしれない、何か物を転送して使えないか試してみることにする』

「・・・これまさかアレか、もしかして俺達の世界に繋がったとかそういうことか？」
日記はまだ続いている

『◇月○日 物だけ転送したが使い方が全くわからないので近くの人も転送することにする、こちらの世界でもいきなり人が消えたら周囲の人が大騒ぎするだろうから他人とのつながりが薄い孤独な人を選別して転送することにした、転送しても言語が理解できないので拷問用の強制言語習得魔法を転送時に刷り込むことにする、副作用として転送してきた人は全員魔力が高くなるがまあいいか、転送成功した人は「異世界転移したのか！おれも今日からなろうチートでハーレムだ！」と騒いでいるのもいた、言葉はわかるが意味が分からん』

「これ我らの世界の話であろう、しかももろ日本ではないか？」

「ここにメモで適当に描いた地図とやらがあるが、これ千葉県の形しているな・・・」

『◇月△日 物の使い方を覚えたら転送した人は記憶を消して再度元の世界に転送、転送後は魔力も消失しこちらの世界のことや言語知識は全く覚えてないようにする。下手に覚えてられると面倒なことになって最悪戦争になるからな』

「成程、これなら騒ぎにならない」

「でも私たちはどうして転送されたのかしら？」

「もつと読めばわかるかもな」

『×月△日 異世界の知識で研究施設を増設することにした、そうすると人手が足りなくなるからゴブリンを増やすことにする。』

初めに手なずけたゴブリンのクローンを製造することにした。しかし出来たクローンは言うことを聞かない、再度調教するのも面倒だったので強制的に思考を操る方法として頭に寄生する特殊な虫のモンスターを製造し操ることにする』

『◇月×日 設備を増設したので稼働させるには膨大な魔力が必要になった、その為モンスターから強制的に魔力を吸い取るとる装置を開発、モンスターをこの部屋の穴に落とせば強制的に魔力を吸ってくれる、モンスターを穴におびき寄せる為の術式アイテムを製作した、骨の目印にこのアイテムを近づけると発動しモンスターをおびき寄せられる、このアイテムの形は異世界にあつた鳥居というものと同じ形にした』

「これって葉山が言ってたアレか．．．この人が作ったのか」

研究は順調に進んでいったようだ

『△月○日 大変なことになった。国王陛下が崩御された、次の国王は戦争を終結させると宣言している。この研究も国外に洩れたら面倒なことになりとかで闇に葬られることとなったそうだ。一応設備は残すそうなので引継ぎ用の操作マニュアルを作ることにする。しかしこの異世界の書類を綴じるファイルというのは便利だ、似たようなもの作れば売れるのでは？それよりゴブリンを始末しなくてはいけなくなった。これは面倒くさい』

『△月◇日 初めに捕まえたゴブリンはかなり知識をつけており、始末しようとしたら逆に返り討ちにあつた、あいつらごとく簡単に焼き払えるが数が多すぎた、しかもあいつら転送した異世界人に使っていた記憶を消去する装置を使いこちらの記憶を消しかかつてきた、もういろんなことが思い出せなくなっている、もう駄目だ、なんとかここから逃げ出さないと、この日記もここで終わりにする』

「．．．一旦戻るか」

「そうね、戻りましょうか．．．」

俺達は一旦先ほどのコンソールがあつた部屋まで戻ることにした。

第五十五話

コンソールのあつた部屋に戻る、陽乃さん達はあちこちかなり調べていようだ。

「稼働履歴を見るとゴ布林ロードはクローンを大量に生産していたみたいね、チャンピオンの類も増やしてみたみたい、それよりそつちは何か見つかった？」

俺達は日記のみ、葉山達は何やら袋や箱を持ってきていた。

「へえーここにいた人の日記ねえ……」

と陽乃さんと平塚先生はその日記を読みはじめる

「なるほど、この男の人が私達の世界から色々盗んでこの設備を作り上げたのね、道理でこの世界に似つかわしくないものばかりだと思つた」

物だけではなく人から技術まで盗んでいた訳だしな、盗まれたことがわからなかったら盗んだことにならん、巧妙にそれを繰り返していたようだ。

でも俺達の場合はかなり雑に転送されてきた。

しかしろくな物持ち合わせて無いし技術も同様、まあそれはそうとして葉山達は何持ってきたんだ？

「んでお前らは何を持ってきたんだ？」

「まあ見てよこれ」

テーブルの上に置かれたそれは見覚えのある文房具

「鉛筆だな、鉛筆削りもある」

「消しゴムやコンパスもあるわね」

「見てください！これ！自由帳ですよ！」

他には書類を束ねるファイルはもちろん、付箋やらクリップやら事務用品があった。

「こっちは工具、ドライバーとかがある、奥の部屋には大型の工作機械もあったよ」

マジか、なんでもパクってたんだな

「日本の文房具はクオリティが高いと元の世界でも世界的に人気だ、ましてや鉛筆すら無いこの世界にとっては凄なお宝だろうね、実際さっきの日記、途中から鉛筆書きだったろ？俺達は当たり前だから全然違和感無かったけど」

「フム、書いて記録を手軽に残せたり、考えてることを図に描いて表すというのは重要なことだな！我もよく私の熱い思いを原稿にぶつけたものよ！」

お前はいつも珍妙なプロットやら中途半端な原稿ばかりだっただろ

「流石です義輝様！」

マリアさん、あなたどっかの流石ですお兄様みたいになってんぞ？

「彼の原稿はともかく、研究するにあたって書くのは重要ね」

雪乃が同意し、他の連中も文房具を囲んでワイワイ議論し始めた。

「ところでここに書いてあるゴ布林って比企谷くん達がやつけたゴ布林ロードって奴じゃないかな？ 設備を使えたり文字を読んだり書いたりしてたみたいだし普通のゴ布林には無理ね」

「あんなのが何匹もいたら大変ですよ」

陽乃さんによれば、ゴ布林ロードはかなり知識を蓄えており、自分で作戦の書類を作っていたようだ。

「小町ちゃんが見つけたんだけど」

と書類の束を出してくる、汚い字と下手くそな絵が書かれていたが誰が読んでもそれは各領土をどう攻め落とすか、攻め落とした後人間をどうするか、の計画書だった。

「ゴ布林が当たり前のように文字や絵を書けるようになったらもはやモンスターではないな」

それを見ると、本格的に各領土に戦争を仕掛ける為に、森にいるモンスターを限界まで集めその魔力を使えるだけ使いゴ布林を大量に量産するつもりだった模様。

しかも統率を取る為全部のゴ布林に虫を寄生させていたようだ。

「でも指示書という訳ではなくて単に自分で書いてただけみたいね、宮廷魔術師の人の真似していたみたい」

幸い他のゴブリン共の知識レベルは文字を書いたり読んだりするレベルには無かったようだ。

「それと虫の女王を使わなくてもこのコンソールで思考を操れるようにしていたみたい」

「ボタン一つで攻撃したり止めたりとかゴブリンにとつてもデストピア過ぎんだろ……」
まあ現実でも上司の一声で残業したり休日出勤したりと言うがままだけどな、あれ？なんか働いてばかりだなおかしいな？これってデストピアじゃね？

「トーテムを使いモンスターをけしかけた後、統率の取れたゴブリンの軍隊で街を制圧か……制圧後、女はゴブリンを増やすために使い、男は数を減らしてモンスターの餌と自分達の為の奴隷……遅れてたら厄介なことになっていたんだな」

葉山の顔が青くなる

「そうね、んで調べてたら面白いことが分かったんだけど」

稼働履歴を調べてたら異世界転送装置を頻繁に稼働させていたらしい、ただ細かい調整方法は分らなかつたらしく座標を間違つて入力していたので転送された人や物は全て辺境へ転送されてたようだ。

「これが僕たちが辺境の地に転送されてきた理由か……」

吉原さん達もあつけにとられている、ゴブリンが装置を間違つて使つてたので転送さ

れたとか、とぼっちりもいいところだろう

「でも間違つててよかつたともいえるわね、なにも分らないうちにゴブリンの群れの中に転送されてたら私たちは・・・」

と雪乃は青い顔になる、女性陣も暗い顔だ。

「ま、まあそれより私たちこれで帰れるんじゃない?」

「そうだね陽乃さん、装置はまだ動きそう?」

と葉山

「うーん調整が必要かなあ? 時間かかりそうだけど・・・」

とマニユアルを見ながら首をひねる陽乃さん

「つてかこの逃げた宮廷魔術師? つてのどつ捕まえれば早くね? あ! こんなことに気が付くなんて俺やべーわすげーわ!」

「戸部うるさい、大体記憶消されたとか書いてあるだろ? 見つけても分からないんじゃないか?」

「そこは一発頭をバーンと殴つて見ればひよつとするとひよつとしね?」

「あはは、とべつちらしいや」

結衣も海老名さんもこれには苦笑い

「兎に角一旦みんな戻りましょう? 姉さん、この設備にこれ以上ゴブリンなんかのモン

スターを侵入させないようにできるかしら？」

「まっかせてー、これをこうして・・・」

とコンソールをいじる陽乃さん、しばらくすると何処からからガコンという音となにかが切り替わる音が聞こえてくる

「これでオツケー！外の石像は人には反応しないようにしたし、隔壁閉鎖とかつてのやったから誰も侵入できないと思うよ」

「それじゃみんな一旦ベースに帰るぞ」

と葉山が言うのと俺達はアダムさん達が待つ森の入口へと戻ることにした。

アダムさんの所へ戻り施設内でのことを話すと当然ながら驚いていた。

それより今まで転送されてきた人たちは帰れるということを知ると事の顛末を国王へ報告する為王都にもどることとなった。

王都へ向かう馬車にて

「そういえばアダムさんって森の近くの村で記憶失って倒れてたって言っていましたね」

「・・・うむ・・・」

「もしかしてこの逃げ出した宮廷魔術師って・・・」

アダムさんは強力な魔法を使えるそうだが、本当だったらその可能性はかなり高い。

「・・・そうかもしれん・・・でもそうになると一連の事件は私がゴブリンに知識を与えた

のが原因ということになるな……」

アダムさんは暗い顔になる。

記憶が全くないのだ、この記憶を消去する装置とやらを探してみたが結局それらしいのは見つからなかった。

仮に見つけても記憶を戻せるかどうかもわからない、なにしろ相当時間は経っているわけだし。

しかしそれつきりずっとアダムさんは黙ってしまった。

王都へ入るとそのまま国王に謁見することとなる。

今回は内部で起きたことをそのまま話すことにした。

隠すようなことはないしな。

「葉山殿、比企谷殿、ご苦労であった。しかしそんな施設が森の中にあつたとは……」
え？ 国王もしらんとか引継ぎとかなんもしてなかったのか？

「何しろ先代の国王、まあ私の父だが、亡くなったのは突然でな、私は父と違って戦争を止めたかったから葬儀が終わった後、すぐに戦争終結の為に大がかりな城の人員整理したのだよ、故に軍事施設の処分なんかは下に任せつきりだったのでこういった極秘の計画までは目が行き届かなかつたんだよ、これは私の失敗だ」

「陛下……それでその逃走した宮廷魔術師というのは……」

「うむ、まあ記憶を消されてそのまま逃走したのか、ゴブリンにやられたのかどうなのかわからないが、今更見つけても仕方あるまい、仮にアダム殿だったとして、記憶も何もないのに責任を追及できんし、それに本当にそうだったとしても辺境で異世界人の面倒を見てもらってるから十分責任ははたしていると考える」

「はーありがたきお言葉ー」

恐縮するアダムさん

「そんな恐縮するでない、ところで葉山殿達はこれからどうするね？元の世界に帰るつもりか？」

「はい、その為に生き残ってきました」

葉山は即答だ。

「俺達は・・・まあそうですね・・・」

「ふむ、まあ家に帰ってじっくり考えて見たほうがいいだろ、施設に関しては内部は瘴気の汚染されてないとのことなのでこちらで調査隊を送り込む、すまんが誰か調査の手伝いをしてくれぬか？」

と視線を陽乃さんへ送る。

「ご指名ね、まあ仕方ないっか・・・静ちゃんも手伝ってよ、帰って旦那とイチヤイチヤしたいだろうけど」

「陽乃！お前という奴は・・・仕方がない」

というわけで陽乃さんと平塚先生は施設への案内をするために王都へ残り俺達は千葉亭へと帰ることにした。

第五十六話

千葉亭につくと本牧と藤沢さんが出迎えてくれた。

「おかえり、どうだった？」

「どうもこうも」

俺達はあつたことを説明すると

「・・・そつか、とうとう帰る方法見つけたんだな、んで本当に比企谷はどうするんだ？」

「おれは・・・」

ちらつと雪乃、結衣、いろは、沙希を見る、みなうこちらにうなずいてくれた。

「帰るつもりだ」

「そつか、んじゃ帰る前に式をあげないとな」

「え？」

「俺達の結婚式はまだだからな、これで最後だ、一緒に挙げよう、材木座も一緒に挙式だ」

「お、おいだって俺達は・・・」

「先輩！最後の思い出作りですよ！」

「そうだよハッチー！」

「あんとと思ひ出作らせてよ」

「八幡？逃げないでね？」

「お前ら・・・」

「比企谷はモテモテだな」

葉山がからかつてくる

「お前ほどじゃねえよ」

すかさず突つ込みだ。

結婚式を挙げる旨をワイバーン便で陽乃さんと平塚先生へ知らせると、参加できないのを悔しがっていた。

平塚先生は

『うむ！悔いのないようにやれ！私は落ちついたら挙げるつもりだ』

陽乃さんは

『三日で戻るから待ちなさい！』

いやそれ無理じゃないですかね・・・

拳式は辺境の街を上げて行われることになった。

なんか通りを馬車に乗ってパレードとか完全に見世物だろうこれ。

「こんな猛烈に恥ずかしんだが、死にたくなる」

「何んで？君たちは英雄みたいなもんだからな、このぐらいは当然だろ？」

となにいつてんのこいつ？みたいな顔をしているアダムさん

「八幡！腹をくくれ！」

とやる気まんまんの材木座

結局馬車三台に本牧と藤沢さん、材木座とマリアさん、あと俺達とそれぞれ載せられ市中を引きまわされる。

「超恥ずかしい」

「ダメよ、ほら手を振りなさい」

「あたしだって恥ずかしいんだ、あんたもやりな」

雪乃と沙希がめっちゃ怖い、結衣はまるで気にせず両手をブンブン振り回してる。

そのまま教会の前に到着し中に入ろうとしたのだが

「おい！ワイバーンがこっちに飛んでくるぞ！」

回りの人が騒ぎ始める、本来ワイバーン専用の発着場に着陸するはずだがこっちにむかって飛んできたのだ。

「なあ、なんか物凄く嫌な予感がするのだが」

「あら奇遇ね、私もそう思っていたわ・・・」

「あははは・・・」

ワイバーンはそのまま教会の前へ着陸すると

「ひゃっはろー！間に合った！」

「やっぱり……」

ワイバーンに乗っていたのは陽乃さんと平塚先生

「特別に乗せてもらったんだ！いいでしょー、それより式はこれからなのよね！良かった！雪乃ちゃんの晴れ姿見れるなんて！」

陽乃さん大はしやぎである。

「悪いな比企谷、陽乃を止められなかった……」

困った顔の平塚先生

「まあ仕方ないっすよ」

俺は諦め半分で教会へと入る。

式は滞りなくという訳にもいかなかった。

何しろ同時に3組で俺は嫁が4人である。

色々無茶苦茶だが流されるまますべてを終わらせた。

第五十七話

3日後、千葉亭にて

「戸塚殿、八幡はまだなのか？」

材木座が食料を買いに来ていた。

現在千葉亭は休業状態でお客は誰も入ってない

「う、うん、八幡はたまにこつちに来てご飯持っていったり僕に回復魔法かけてと言いに来るぐらいいかな」

「一緒に混ざらないかなんて言ってきたね！戸塚君？私は別にいいんだけど？」

とめぐり先輩

「お主ら・・・」

材木座は額に手を当てため息をつく、それも当然だろう、比企谷達の新婚初夜がまだ継続しているからだ。

「いやー姉が一時的にとはいえ4人も！小町的には嬉しいんですがちよつと頑張り過ぎかなって」

「流石お兄さんです！凄いです！」

「いや大概にしろと言うべきであろう、しかも何故か陽乃殿まで……」

大体静かにしているとアレの音が微妙に聞こえるのだ。

「元の世界に帰ったこと考えてちゃんと避妊はしているんだろうな」

元の世界に帰るための転送装置は調整がまだ終わってないとかでしばらく暇なのである。

その為こんな事になっている訳なのだ。

「性欲を持って余すか、全く度し難いな、この世界に残る者達と話し合いしないといかん大事な時だろう」

材木座は呆れ顔、それもそのはず、葉山達は街の人に挨拶をしたり、吉原さん達にこれからの事について話し合いに言ったりと忙しそうにしているからだ。

「まあお兄ちゃんは近いうちそれについても話し合うとか言ってから大丈夫だと思いますよ……」

と小町がフォローをする

「まあそれなら良いが……あれ？戸塚殿は」

いつの間にか戸塚とめぐりがいなくなってる

「それは察してあげたほうがいいッス！師匠！」

「ちよつとお兄ちゃん達の声が大き過ぎるからねー、さつき戸塚さんの腕引いて奥に

行っちゃいましたよ。めぐり先輩って結構好きモノですよね」

「本当に度し難い」

材木座はやれやれといった表情で帰っていった。

数日後話し合いが行われる。

「八幡、ようやく満足したようだな」

ため息混じりの材木座

「いや、俺は早々に満足してたんだが、その、な？」

比企谷は自分の両脇をチラチラと見る。

両脇は嫁4人にガツチリ固められているのである。

「そ、それより今回の話し合いはあれだろ、アレ、なあ葉山」

「君が進めたほうがいいと思うんだが」

ヤレヤレといった表情で葉山は話し始めた。

「もう少しで帰れる目処がつく、それに伴って誰がこの世界に残って誰が帰るのかハッキリさせておこうと思う、出来れば俺はみんなで帰りたいと思んだがそうでもない人もいるようだしね」

と葉山が言う。

「私は残る」

手を挙げたのは平塚先生

「静ちゃんは旦那様見つけちゃったからねー、この数日私達に負けず劣らずすごかったそうじゃない?」近所の噂になってたよ?」

「は、陽乃!」

「まあまあ先生、確か学校も作りたいたいか」

「うむ!教育は大事だからな!友情努力勝利!この三本柱は人生において大変重要だ!
これらを広めたい!」

それ某ジャ○プのスローガンじゃ無いですかね

「俺達も残る」

本牧と藤沢だ

「子供も生まれるしな」

そう言つて藤沢の肩を抱く本牧

「我は言わずとも分かるであろう」

「もちろん私もですわ」

材木座とマリアさん

「八幡、あたしも残るよ」

と沙希も手を挙げる

「え！おい、沙希！」

「姉ちゃん！一緒に帰ろうよ！」

「ゴメン大志、やっぱしあたしがいたら駄目だよ。京華のことお願いね」

「姉ちゃん！」

沙希に抱きつく大志

「それにあたしだけ避妊しなかったんだ、だから多分一人じゃなくなると思う……」

「おいまじか！お前らもしかして知ってた？」

と雪乃達へ振り返る比企谷

「ええ、私達も説得したのだけど沙希さんの決意は固かったの、だから……」

啞然となる比企谷

「平塚先生、本牧、藤沢さん、材木座、川崎さん、以上だね。あと吉原さんたちに聞いたらこの世界に愛着湧いてるし、今更元の世界に戻っても誰も知り合いがないから残るそうだ」

確かに吉原さん達は親がいなかったりと家族がそもそもいない人ばかりである、そもそも転送される条件が周囲の人と繋がりが薄く孤独な人だ、仲間や知り合いがいるこの世界に残りたいと思うのは当然だろう。

「そういえばなんで俺達はこの世界に転送されたんだ？俺は条件に当てはまるが葉山が

来るのはおかしいだろ」

葉山はリア充の化身のような奴だ、孤独とは縁が遠いはずだが

「君は俺が孤独に感じる事が無いと思っっている様だな」

「違うのか？」

孤独が嫌だからみんなといるとかそう言う事か？

「比企谷、人は誰もが孤独に思う瞬間があるもんだ、気のしれた仲間といってもその瞬間は必ずある」

と平塚先生がしみじみと語る

「そんなもんですかね、俺はずっとポッチだから分かりませんが」

「ハッチーらしい答えだね」

とにこやかに言う結衣、こいつもそんなことを思う瞬間があつたのだろうか？

そういう一瞬が重なって全員転送されたのか？

「まあ原因はいいんじゃない？帰れるみたいだし？ところで、調査隊からの連絡は？」

と陽乃さん

「先日届いた連絡では稼働させる事に成功したらしい、ただゴブリンロードが結構無茶な使い方をしてたとかできちんと転送させるには調整が必要らしくてまだかかるとか、仮に調整がうまくいっても転送は一度ぐらいしか無理らしいな」

「んじや居残り組とは本当にこれでお別れってことね・・・」
材木座ともこれで見納めなのか。

「八幡、約束は忘れてないよな？ パソコンとベッドの下の木箱、燃やしておいくのだぞ？」

「俺のパソコンと本棚の奴も忘れんなよ」

「忘れねえって」

ホントこいつ等何隠してんだ？

ともかく調整が終わるまですることがなく、ニート生活かと思っていたら、町の人から最後にまた美味しい飯を！という要望がかなり上がっていたため、千葉亭の営業を再開することにしたのだった。

第五十八話

一ヶ月程経ち、ようやく転送装置の調整が終わったと連絡が入る。

千葉亭の営業は終了だ、あとは沙希達に任せることとなる。

「でもよ、戻るのはいいいが俺達どのぐらい居なくなつたことになつてつてるんだ？いきなり戻つたら面倒なことにならないか？」

元の世界がどうなつてるのか分からないが教室ごと校舎から引つ剥がされるように転送されてきたわけだ、校舎は半壊しているだろうし俺達は死んでいる扱いをされていくことは想像に難くない。

「そうだよ！受験とかどうなつたし！あたし達全員留年？」

結衣の心配も笑えない話だ、もとの世界で生きるには、留年は相当なハンデだ。

「それなんだけど、戻るのが結局俺達だけらしいから転送装置も俺達に合わせてくれていたらしい、そのせいで時間がかかつたとか」

「つまりどういうことだ？」

「俺達がこちらの世界に来た日に転送してくれるんだそうだ」

おーといった声上がる。

確かにそれは嬉しい、でも実際勉強しなくなつてどんだけ経つたんだろう。

「戻つたら受験勉強頑張らないと、八幡？結衣さん？覚悟はいい？」

マジかよ、帰つたら雪乃のスパルタ教育が待つてんのか、それはそれで地獄だな。

そんな俺の悩みをよそに、陽乃さんと葉山が話し合っている。

「それはそうと隼人、例の話本気？」

「よく考えた結果だよ、俺達のグループの連中も協力してくれる、陽乃さんも手伝つてくれるんだろ？」

「まあね、でもこの件は・・・」

「ああ、現実になるまで内緒だ」

二人でボソボソと話し合いをしているのが見える。

「あいつら何話してんだ？」

「さあ？それよりハッチー帰つたら今度こそはつきりしてね？」

「そうね、もう私達は一度結婚までしてるのだし貴方と何度も一つになつたんですもの、悔いはないわ」

「先輩？逃げるのは無しですよ？」

「八幡、ちゃんと選んでね、あたしはこの世界であんたの子供と一緒に生きるからさ、ア
ンタが作った千葉亭もあたしが守っていくからね」

沙希からも強く言われてしまう。

「すまん……」

「八幡？何謝つてるの？これからだよね？」

戸塚も厳しめに言ってくる。

「そうだと、貴様はもつと我のように素直になれ！」

と材木座

なんかこいつ等も大分変わったな。

「みんな！道具とかの整理をしといてくれ！武器防具は勿論持つて帰れないからな、残ったものは材木座君が管理してくれるそうだ」

葉山が指揮を取り皆で武器防具や道具の整理をする。

この千葉亭ともこれでお別れだ。

整理が終わり、皆に挨拶を終えると俺達は転送装置が待つあの森へと行くことになった。

馬車に揺られ数日後、森の入り口へと到着する。

「久しぶりだな、つてかちゃんとした道作つたんだな」

木は伐採され施設までの道ができていた。

全員大事に取っていた制服に着替えると施設へと向かう、施設内では転送装置が既に

稼動状態になっていた。

「これでこの世界ともお別れだな」

「そうだな」

葉山も感慨深げだ

「千葉亭は貴様らが残したレシピで沙希殿と我らで何とかしておくワイ！安心召されい
！」

材木座は相変わらずだ

「向こうの世界に行っても元気でな、この世界に美味しい飯を広めてくれてありがとう」
アダムさんも見送りに来てくれていた。

俺達は全員魔法陣の上に立つ

「では転送を開始します。転送後は記憶はそのままですが、魔力とここの言語知識は消滅するように設定しますのでご注意ください」

操作担当の人から注意点を言われる。

「魔法が使えないのは寂しいっすね」

「まあ本当は使えるのがおかししいし、もつとも小町とお兄ちゃんは大して変わらないんだけどね！」

うーんステルス能力は正直残ってほしかつたな、だって目立ちたくないし、と余計な

ことを考えていると。

「では転送を開始します」

合図とともに周囲が光に包まれる、体から何かが抜けていくような感覚が襲ってきて頭がボーツとしてくる。

そのまま俺達は気絶した。

誰かが大騒ぎしている声で目が覚める

「んあ?どうなった?」

体を起こすと瓦礫の山の中に倒れていたようだ、他に雪乃やら葉山やらが倒れている。

周囲を見渡すと確かに戻ってきたらしい、目の前には教室が丸ごと抜き取られて半分倒壊して残りも崩れかかっている総武高校の校舎が見え、他の生徒たちや先生が大騒ぎしているのが聞こえる。

「おい起きろ!早く!なんかヤバイぞ!」

せつかく戻ってこれたのに崩れた校舎の下敷きとか洒落にならん

「ん、んー?八幡?まだ足りないのかしら?」

と寝ぼけている雪乃

「おい!目を覚ませ!葉山!お前も起きろ!」

葉山はその声で目を覚ますとすぐに状況を把握したようだ。

「全員起きろ！」

倒れている奴ら全員を起こすとその場から逃げ出そうとするが間に合わなかった。

校舎がバラバラと崩れながらこちらに倒れてきたのだ。

「えーい！ウインドショット！」

「障壁展開！」

結衣とめぐり先輩が叫ぶと瓦礫の半分はふっ飛ばされ、残った半分も障壁のおかげで跳ね返されていた。

「まだ魔法が使えるのかよ」

驚いてると

「ううん、これで本当に終わりみたい、体に魔力感じないもん」

「障壁消えちやったし私もこれで打ち止め」

二人はちよつと残念そうだったが助かった。

でもこれで剣と魔法の世界からは完全におさらばしたということか。

その後は大騒ぎになった。

突然教室が消滅し校舎が倒壊したのだ、幸い魔法については見ていた人もよくわからなかったらしく俺達もしらを切りとおしたので単純に運がよかったという話になって

追求されることはなかった。

今回の件は爆発事故として扱われたらしい、何が爆発したことになったのかはわからんが、てんやわんやの大騒ぎになっていた。

ただやはり平塚先生、材木座、沙希、本牧、藤沢は行方不明となり死亡扱いにされる。葬式が執り行われ、俺は二人から言われていた物を処分することにした。

生前から言われていたと二人の両親に伝えパソコンの破棄の許可を貰うとそのままHDDを破壊し処分。

材木座の木箱と本牧の本棚の奥のものは河原で燃やすことにする。

燃やしているとき材木座の箱が崩れて中身がちよつと見えた、雪乃や結衣や他の女子達が写っている写真が見えた、やけにローアングルだったり服を着ていないように見えたが火がすぐに燃え移ってしまったので詳しくは分からなかった、でも大体予想が付く、あいつの活躍に免じて黙っておこう。

その後はやはり俺達は受験生の本分を全うせねばならず受験勉強に取り組む。

普通の予備校に行ってもブランクが長い為追いつくのは難しいので陽乃さんや葉山と雪乃による特別塾が開かれ俺達は連日勉強漬け。

そのせいで部活動は必然的に無くなり全員ひたすら勉強に取り組む事になる。

その結果何とか全員受験をクリアすることに成功したのだった。

第五十九話

卒業式の日、俺は結衣に奉仕部部室に来るように言われる。

「答えを出せということか」

受験勉強の為高校3年の時間はあつという間に過ぎていった。

部活も中止し受験勉強を送ってきたからである。

その間勉強が忙しいからとやはりずると今までやってきていた、異世界では肉体関係までになった癖に受験を言い訳に答えを出さなかった、そのツケが今である。

部室の扉を開けると

「ハッチーやつはろー！部室で会うの久しぶりだね」

「さつきも廊下であつただろうが・・・」

と言いながら部室を見渡すと葉山以下全員集合状態だ。

陽乃さんやめぐり先輩もニヤニヤしながら椅子に座っている。

雪乃もいるが困惑している模様、どうやらこいつも俺と同じらしいな

「なんだよ、何が始まるんだ？」

「ハッチーとゆきのんに重大なお知らせがあります！」

と胸を張る由比ヶ浜

「あたしたちは将来外国に行つて現地の人たちに奉仕活動をすることにしました！」

「おまえ何言つてるんだ？」

「言つている意味が分からないのだけど……」

疑問符を浮かべる俺達に葉山がまあまあと解説してくる

「比企谷と雪乃さんには秘密にしていたんだけど、俺達はNPO法人を設立して大学卒業後に発展途上国や紛争地域に行つてボランティアをすることにしたんだよ」

「そう、雪乃ちゃんとは比企谷くんには内緒だね、設立のめどが付いたしこれから進路が別れちゃうからね、お別れの意味もあるかな？」

と陽乃さんも続けて言ってくる。

「お別れつてどういうことだ！小町！もしかしてお前も？」

「うん、良く考えた結果だよ、総武高校を卒業したら陽乃さんのついで大志君と留学するつもり、お金は助成金とかで都合付くらいから心配ご無用！いろいろ勉強したら葉山さん達と合流するつもりだよ」

「姉さん、結衣さん……本当なの？」

「あたしは本気だよ！外国でゆきのんが言つていた奉仕部の理念で活動するんだ！魚を与えるんじゃないなくて採り方を教えるの！だから団体名も『新生奉仕部』つて名前にする

んだ！そしてあたしが部長！」

ムフーと鼻息を荒くする結衣

「なんでそんなことを・・・」

啞然とする俺と雪乃に葉山が言ってくる

「俺達は異世界に行つてきた、これは貴重な経験だ。でも今の日本で異世界でつちかつた経験が生かせる場所なんてほとんどない、だから俺は陽乃さんに相談した。そしてこの案を思いついたのさ」

「なんで俺と雪乃だけハブってるんだよ・・・ボツチはいらないってか？それに俺はまだ・・・」

俺はまだ答えを出していない。

異世界での関係をズブズブと引きずってしまっているのだ。

「うーん、やっぱさ、いろはちゃんとも話し合っただけどやっぱゆきのんの側にはハッチーが必要だよ、それにハッチーってゆきのんのことこの部室に来た時からずっと好きだよね？」

「え？」

「ゆきのんもハッチーの事初めっから好きだよね？」

「い、いえ、そんなことは・・・」

「好きでもない人のことを心から信頼も信用もしないよ、テニス対決の時の事覚えてる？ ゆきののんはハッチーのこと思いっきり信頼してたじゃん」

「いえ、あれは……」

「さつきも言っただけどやっぱりこの世界じゃゆきののんの夢を実現するには側にハッチーが必要だよ」

「結衣さん……」

「それに異世界でハッチーといっぱいしたし、している間ヒツキーから愛してるっていっぱいささやいてもらったから思い残すことはないかな？」

真つ赤になつて照れる結衣

「そうですね先輩、私も思い残すことはないです。雪乃先輩のことお願いしますね」

「そうだよ八幡！ 雪乃さんのこと守ってあげてね」

「うん！ 比企谷くんならできるよ！ がんばろー！ おー！」

「っべーわ、はじつめっから相思相愛とかやべーわ」

「それな」

「だな」

「ヒキオ！ 雪乃さんのことちゃんと見てやるんだよ！ 泣かせたらあーしがぶっ飛ばすからね」

「私としてはちはやが見れなくなるのは寂しいかな?」

「お兄さん!小町さんのことは任せて下さいっす!」

「お兄ちゃん?雪乃さんのことちゃんと見てあげてね?やらかしたらすぐ謝るんだよ?」

「雪乃ちゃん、お父さんとお母さんには話はしてあるわ、一応一年は日本にいるけどあつちこつち飛び回って忙しいから多分明日からほとんど会えなくなると思う、比企谷くん?雪乃ちゃんをよろしくね?あんまり甘やかさないようにね?」

「ハッチー!ちゃんとゆきのんの夢を実現させてあげてね!んであたしたちの帰ってるところ作っておいて!将来のみんなの為にね!約束だよ!」

高校生活最後の日、俺達はこうやって袂を別れたのだった。

大学卒業後、数年が経ち、テレビや雑誌でちよくちよく結衣達の活躍を見ることが増えることとなる。

新進気鋭のNPO法人『新生奉仕部』若い人のみで構成され、どんな危険地帯であってもものともせず現地の人に物資を届けたりボランティア活動をしたりと国際的な評判はかなりのものだった。

「あいつメガネかければ頭が良くなると思ってるんじゃないだろうな」

テレビには新生奉仕部の代表であるメガネ姿の由比ヶ浜結衣が現地の子供たちに勉

強を教えている様子が映っている。

「とつても似合っているじゃない、結衣さん頑張ってるみたいね」

子供たちは笑顔で授業を受けているようだ。

画面が切り替わり医療施設が映し出される

「戸塚もめぐりさんも頑張ってるみたいだな」

二人は医療班なのか包帯を巻いたり注射をしたりと忙しくしているようだ。

またもカメラが切り替わり工事現場が映される

「日本の建築技術を現地に伝えているところですよ。現在橋を造っています」

と図面片手にヘルメット姿の陽乃さんが映し出される。

「辛いことやきついこともありますがみんなと一緒にならそれも乗り越えられます。私たち全員にその能力があると信じています」

葉山がインタビューに答えている

「無難な事しか言ってるねえねえ」

「異世界に比べたら平気とか言えるわけじゃないでしょう」

背後では小町や大志が荷物をもって忙しそうに走り回っていた。

「結衣さん達の為にも帰ってくる所を作らないといけないわね」

俺と雪乃は結婚前提で付き合っており一緒に住んでいる。

雪乃は夢の実現の為、親父さんのところで修行をしていた、俺も当然一緒だ。毎日が忙しく大変であるし、こいつらに会えないのは寂しい。

しかし皆命を賭けて頑張っている。

「・・・俺達も頑張らないとな・・・」

テレビを見ながらそう思うのだった。

第六十話（最終話）

数年後

「雪乃、すごくうれしそうだな」

「当然じゃない、結衣さん達が返ってくるのよ？ ホームパーティーにしない？ 私、腕によりをかけるわ」

海外でボランティア活動をしていた皆はチャーター便で帰国する予定だ。

だが、その楽しいな雰囲気も終わってしまった

「臨時ニュースです！ 某国にて復興に尽力してくれた日本人の一団、通称『新生奉仕部』のメンバーが乗った飛行機がクーデター軍に撃墜されました！ 詳細は……」

ガチャン

テレビを見ていた俺の背後で食器の割れる音がする。

放送を聞いた雪乃が皿を落としてしまった。

「嘘よ……そんな……」

「雪乃！ なにかの間違いかもしれない、大使館に問い合わせるから、落ち着け」

「八幡……私……どうしたら……」

「いいから、落ち着け？」

大使館に問い合わせた結果は・・・黒だった。

某国が用意してくれた日本直行のチャーター便、結衣達の為にわざわざ用意してくれたもので間違いないと大使館からの回答が来た。

飛行機は海に落ちたらしく捜索はしているが機体は見つかってないとのこと。

「嘘よ・・・嘘よ!!!」

その知らせを聞いて暴れる雪乃

「落ち着け、落ち着けよ！暴れても何にもならんだろ！」

「嘘よ・・・結衣さん、姉さん、いろはさん、みんな・・・ああああああああ」

子供のように大泣きをしてその場に泣き崩れる雪乃

俺にできることは何もなかった。

留美と京華がニュースを見て心配して家にお見舞いに来てくれた。

泣いている雪乃を見て慰めてくれる。

でももう雪乃は限界のようだった。

俺達は休職することにした。

そして街中においてはマスコミがうるさいので山奥の別荘に移った。

「結衣さん達の為、みんなの生まれてくる子供達の為に世の中を良くしよう」と頑張って

たのに・・・私どうしたら・・・」

「雪乃、しばらく仕事のことから離れよう・・・ほら釣りにでもいかないか？」

家に閉じこもってばかりでは良くないと、別荘の側の湖まで出るよう雪乃を促す

「雪乃さん、家事は私と京華でやっておくから・・・」

留美と京華も一緒に連れてきた、二人だけだと気分が落ち込んでいく一方だと思つたからだ。

でも雪乃は毎日落ち込んでいた。

一か月が経った。

相変わらず留美も京華も山奥だというのに通つてきてくれる、雪乃の精神も少しは安定してきていた。

ある日、俺はベランダの椅子に座り湖を見ながらぼーつとしていた。

「八幡？お昼ご飯はラーメンでいいかしら？」

少しだけ体調が戻つた雪乃が珍しく台所に立つてくれるみたいだ。

「ん？ああ、すまん」

ふと材木座のことを思い出す。

あいつは異世界でまだ楽しくやっているだろうか？

マリアさんと喧嘩せずにやっているだろうか？

沙希は？平塚先生は？本牧は？藤沢は？

会いたい・・・

あいつはいつも俺のことを八幡八幡とうるさかったなあ、あいつは俺の事最後まで相棒呼ばわりだったけど、あいつの方が格が上だよな・・・

「八幡！」

そうそうこんな風にうざったい声でしつこくて

「おい八幡聞いているのか？」

「材木座あ、おまえ今何してるんだ？俺達もあつちの世界にずっといればこんなことは・・・」

「おい八幡！八幡！聞いておるのか？我はここにおるぞ！おい！」

誰かから肩を揺らされる

後ろを振り返るとそこには

材 木 座

「うわ！なんでお前ここにいるんだ!!」

「ゆきのん！ハッチー！やつはろー!!」

「ゆ、結衣さん！どうして！」

騒ぎを聞きつけて奥から出て来た雪乃は驚愕している。

「でへへー中二が助けてくれたんだ！」

「一体何が……？」

全く理解が追い付かない

「説明しよう！、我は新しい魔法を模索するべく葉山殿が置いていった剣をいろいろいじくつてたらな？次元の扉を開くことが出来るようになったのだ！某幽遊白書の次元刀的な？んで例の施設の資料とかを見たりして色々やってみると会いたい人や物を念じて空間を切るとその人や物の近くに出られることが出来るようになったのだ！ただ膨大な魔力を消費するので乱用は出来ぬのだがな」

「それで……結衣達を？」

「うむ！実は結構前からこつちの世界にはちよくちよく来れたのだ、その件は葉山殿達には知らせていたのだよ。でもお主らの立場を考えると下手な接触は辞めおこうと思つてな？」

「そんな……お前だったらいつでも大歓迎だ……」

「まあそんな調子だったのだが、一度マリア殿を飛行機に乗せたくてな、葉山殿にお願いしたら乗せることが出来ると言われたんで乗ったら撃墜されてな？これはやばいと空

間切って、飛行機を丸ごと異世界転送よ！吉原殿らはエンジンやジュラルミンが大量に手に入ったと大喜びよ」

「良かった・・・本当に良かった・・・」

安堵しそのまま座り込む雪乃

「それが良かったというだけでもないのだよ、我がなぜこちらの世界にちよくちよく来てたと思う？」

「お前のことだからアニメかゲームかラノベだろう？」

「違うわ！まあそれも少しは持つて帰ったが・・・いやそうではなくてだな、物資調達の為なのだよ、今我らの世界では大変なことになっておつてな！」

「物資調達って、金はどうしたんだよ」

「ん？そりや金塊持つていけば取引なんぞいくらでもできるワイ、ブラックマーケットならそれで何とか出来るしな」

「ブラックマーケット？」

「葉山殿らはその手の連中がうろついている所で活動していたからのう、利用させてもらったのよ、そうせざる得なくてな」

「こいつは何を言っているんだ？」

異世界にこの世界の武器を持ち込んだのか？

「そういえば結衣さん？その手に持っているのは・・・？」

「あーこれ？『はるこんねん』って色々改造して魔力で使えるようにした鉄砲！これでゴーレムを吹っ飛ばすんだ！」

とごく長いライフルと見せる結衣

「ハルコンネン？ゴーレム？一体・・・」

「貴様らが帰った後、こちらの科学は飛躍的にアップしたのだよ！物理の教科書と科学の教科書のおかげでな、あとスマホもとりあえず電源が入るようにできたのでな、中に入ってる辞書アプリだの計算ツールだので色々テクノロジー情報を活用出来るようになってだな」

「まあ吉原さんたちはその手の仕事してたから詳しいだろうしな」

「うむ、んで魔法もあるんだからゴーレムの技術を応用して巨大ロボが実現できるだろうと誰かが言い出して、手始めに1/1ガンダムを作ってたな？次にザクやらジムやらを作り出して、他のも作ってみようぜとバルキリーやらスコープドックやらゾイドやらを作ってみてな」

「なんか夢のような話だな」

「うむ！皆趣味全開で造りまくったのう、魔法を応用して原作同様の能力も付与して、そしたら各国の国王や領主が防衛や大規模な作業なんぞに使わせてくれと注文が殺到し

でもう凄いことになったのよ！」

「それでブラックマーケットなのか？バルカンやらミサイルとかつけたのか？なんつうことやってんだよ……」

「仕方なからう、いかに原作に近づけるか、それがモデラーとしての意地よ！それに魔法のおかげで改造や複製は簡単であつたしな」

「もはやプラモデルとかそういう次元じゃないだろ……1／1で動くんだつたらもはや本物だろうが、んでなんで頭吹っ飛ばさないといけなくなつてんだ？戦争でも始まつたのか？」

「逆だ、戦争の代わりに争い事は最強ロボ対決で決めたらいいんじゃない話になつたのだよ、各国の国王も諸手を上げて大賛成でう」

「ガンダムファイトかよ……」

「それで済めばよかったのだが、調子に乗りすぎてゴレムなんだから自立できるはずと仕事も戦いも人を乗せず全部やらせようぜという話になつてだな、こつちの世界で言うA Iを手当たり次第に搭載してみたのだよ、そしたらだな……」

「おいなんだそのB級映画みたいな話は……」

「作用、些細なミスで自我を持ち始めしまったが故に今現在異世界v s ロボット大戦の真つ最中である」

「やっぱりかよー！」

「まあおかげで各国一丸となって協力するようになったのでな、いがみあいや面倒な垣根は取っ払われて統一国家を作って対抗しようという話になっておるわ」

共通の敵を作ったからか？

しかしスケールが段違いだな

「そしてまたも陽乃殿が独断先行してしまつてだなあ」

「おい勘弁してくれ、同じ事になつているんじゃないだろうな・・・」

「原作同様の能力を有したデビルガンダムに取り込まれちゃって現在平塚先生と葉山殿が鹵獲したマスターガンダムとゴッドガンダムに乗って救出に向かつておるのだが苦戦していてな」

なんつー余計なもの作つてるんだこいつらは

「ちよつと！姉さんは無事なの？」

雪乃が材木座に詰め寄る

「わからぬ、それともう一つ大変なことが起きてな」

「んだよこれ以上大変な事つて」

「・・・マリア殿がさらわれてしまったのだ・・・」

さつきまでの勢いはどこへやら意気消沈する材木座

「おい、無事なのかよ……」

「それを調べる人材がいらない！だが我にはお主ぐらいしか知らぬのだ！気配を消して敵の懐へ潜り込める人材を！この通りだ頼む！我に協力してくれ」

床に這いつくばり土下座する材木座

「……材木座、俺とお前は相棒だろう？相方のピンチに駆けつけない相棒はいないだろ」

「八幡が行くならパートナーである私も行かないといけないわね」

「八幡！スマヌ！本当にスマヌ！」

泣きじやくり感謝言葉を叫びながら材木座が抱き着いてくる

「わかった、わかった、大丈夫だから、な？落ち着け？」

涙と鼻水でべとべとになっている材木座は一旦落ち着くと背中の中のバッグからコートのようなものを取り出す。

「これを八幡に差し上げる」

渡されたものを着ると

「これ光学迷彩か？」

「うむ、雪乃殿はこれを渡しておこう」

と何かのグリップのようなものを渡す

「魔力をちよつとチャージしているからここでも数秒は使える、念じてみよ」

雪乃がグリッブを握り念じると

「……これ映画で見たライトセーバーというものかしら？」

振り回すとブオンという音がするがチャージしていた魔力が無くなったのかすぐ消えてしまう。

「それでお主等にはスニーキングミッションを敢行してもらいたいのだ……貴殿ら忙しいと聞かぬが今長期休暇中なのであろう？」

「……いやお前がすぐ俺達に話に来れば休暇なんて取らずに済んだんだが」

「雪乃殿の親父殿のような議員の身内に得体のしれない奴が接触したなんてどこぞのマスコミにでも嗅ぎつけられたらワイドショーのいいネタであろう？でも済まなかった、お主等にはあまり触れぬようにしていたからな、結衣殿がどうしても話さないと、と言ったのでちよつと調べたら……スマヌ」

「いいのよ、今は再会を喜びましょう？」

結衣と抱き合う雪乃

「まあ実際時間が無いのだ、八幡？最後の確認だ、本当に協力してくれるのか？」

「返事なんて決まってるだろ」

俺はそう言うのと材木座が出てきた空間をのぞき込む

空には巨大な戦艦や戦闘機が浮いている

「ファンタジーの次はSFかよ・・・」

「決まりであるな！」

材木座は腰に付けた無線機のようなもので何事か話していると車のようなものが迎えに来た。

「よし！到着したな！八幡！運転手が挨拶したいそうだな！」

到着した車の運転手が降りてくる。

「八幡、久しぶり」

運転していたのは沙希。

「沙希！お前無事だったか！元気にしてたか！」

「・・・うん、あんたの子供も元気だよ・・・」

「八幡、雪乃さん？これはいつたい・・・？」

「もしかしてさーちゃん？さーちゃん！生きてたんだ！」

買い出しにいっていた留美と京華が戻ってくる、京華は沙希を見ると飛びついていった。

「あーちようどいいや、お前ら旅行に行きたくないか？少々命がけだが」

「え？」

「良ければ親に電話しろ、しばらく俺達と旅に出るつてな」

「え？本当！私絶対行く！さーちゃんとはーちゃんと一緒に行く！」

「なんだか状況がよくわかんないんだけど八幡と一緒になら・・・」

「八幡？また戦いましょうか？」

嬉しそうな雪乃と結衣

不安そうな留美

ニコニコ顔の沙希と京華

無線機に怒鳴っている材木座

それを見て思う

やっぱり俺たちの異世界召喚は間違っていると。